
マッコ

平成飛脚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マッコ

【Nコード】

N5024D

【作者名】

平成飛脚

【あらすじ】

日系3世であるジョアキンは殺伐とした家庭内と不景気によりジヤパニーズドリームを掴むべく日本へと旅立つ。初めは静岡の工場勤務で真面目に働くも、訳あって大阪へと転がり込む。そこはジョアキンが求めていた華やかな世界と同時に欲望が渦巻く危険な狼たちの戦場でもあった。

第1章 Sa o P a u l o

大阪 ミナミの街。

ここは無限の欲望がうごめくアジアの歓楽街。

ミナミと呼ばれる範囲が東西南北、何処から何処までなのか

正確に説明出来る大阪人が果たして何人居るか？

心齋橋、難波駅周辺だと言う者も居れば船場地区から大国町辺りまでを

指すという者まで答えは人により様々である。

舞台は東心齋橋の宗右衛門町の一角に位置する雑居ビルから始まる。

2

この双龍会館ビル内のテナントは1階から喫茶店。

2階から4階まで風俗店。

5階には2件のラウンジ。最上階の屋上にはプレハブが一軒構えていた。

プレハブとはいえ頑丈な鉄筋で拵えてあり約30平米長方形型の間取りである。

室内には粗末なシングルベッド。

ボロボロの小型冷蔵庫。木製の二人用ほどのテーブル。

21インチのブラウン管テレビに最近では珍しい型のCDラジカセ。

日当たり良好とは言えぬ窓の位置。

ジョアキンがこのボロ家に転がり込んだのは4日前の事である。

日系3世。祖父が太平洋戦争終結後、貧困の理由から親戚を頼りブラジルへ移住。

父がまだ生まれていない昭和22年の頃だった。

戦前に新聞記者だった祖父は終戦後に会社のコスト削減の為にリストラを通知された。

妻、2歳の娘を抱えた祖父は悩んだ挙句にブラジル、サンパウロに十数年前に移住した叔父の清へ一筆送った。

戦後の日本の動乱は現在からは考えられない貧困に喘いでいた。

この事実を知らない訳がない叔父の清は祖父の移住を快諾。

仕事も住居も全て面倒を見るとの事で家族3人はサンパウロへと向かった。

家族3人を待っていたのは過酷な現実である。

明治の頃から多くの移民がブラジルへと渡った。

当然、現地の者は日系人への理解は深いものの（あくまで他の外国と比べてだが）、

いつの時代も移民や難民は現地民には嫌われる存在なのは確かだった。

ありつける職は僅かしかない。ブラジル人がやりたくないような仕事でも外国人は

喜んでやるしかない。だが幸い叔父の清がサトウキビ畑の職を紹介してくれた。

清はサンパウロ郊外の小学校の教師であった為にサトウキビ畑のオーナーも信用してくれた。

オーナーの娘が清の元教え子だった。

労働は過酷だった。

朝は早く仕事が終わるのは日が暮れる頃だった。

日本人で言葉も分からない為に祖父はよく仕事仲間から苛められた。

家族を養っていく為には我慢するしかなかった。

週1日の休みには清の自宅でポルトガル語を教えてもらう。

さすが教師らしく簡単なポルトガル語のテキストを作ってくれた。

半年も経つ頃には言葉も多少は理解出来るようになり回りの仕事仲間からも一人また一人と

信頼されるようになっていった。

第2章 誕生（前書き）

・ 一家4人の幸せな生活が続くはずだったが歯車は徐々に狂いだし・
・
・

第2章 誕生

祖父の名前は勇。

量の多い毛髪と厳つい眉毛。

九州人らしい二重瞼に適度に筋の通った鼻。

暑い唇に少し面長の顔。鼻下には戦国武将のような髭。

数年前に日本から移住してきて随分ポルトガル語の生活にも慣れた。

真面目な性格がさとうきび畑の連中にも気に入られ今では戦友のよ
うな付き合いをしている。

サンパウロに住んでから翌年に長男が生まれた。

長女の和子にそっくりな輪郭と鼻。どちらかといえば妻の千代子に
似ている。

唯一自分に似ていると言えば毛髪の量くらいか。

名前は隼人と名づけた。自分のルーツでもある薩摩隼人にちなんで。

子供達は瞬く間に成長した。

生活は豊かではなかったが4人家族の仲は良かった。

しかし隼人が高校に上がった頃に勇が倒れた。

心筋梗塞であった。過酷な長年の労働と慣れない土地での生活に無理があったのだ。

元々心臓が丈夫ではなかった勇は稀に仕事中に倒れる事があった。

当時の医学は今に比べ粗末な物であったし生活が豊かではない為に入院すら出来ない。

幸い姉の和子は叔父の推薦で小学校の教員試験に受け合格。

来年の春から教師であった。少なくともあったが千代子も内職により蓄えもあり何とか

残された家族3人が食べていくには事足りた。

勇が死んでから隼人は少し変わった。いや、かなり変わった。

素直で優しくかった子供時代に比べ母にきつくあたったり姉とは口を利かなくなったり。

父、勇とは約束があった。

将来、自分のさとうきび畑を持って今よりもっと広い家を持つと。

そこには思い存分サッカーが出来る施設を作り友達もみんな呼べる

と。
移民の日系人には夢物語だったかもしれないが隼人は勇とこの夢物語を語るのが好きだった。

お父さん子だったのである。生まれつき頑固で一本気な性格は父そっくりであり

父の事が好きだった。二人でよくサッカーボールを蹴ったものだ。

高校を中退した隼人は父の働いていた職場に住み込みで働きたいと申し出た。

何故、家からの通いじゃ駄目なのかオーナーが聞くと頑なにあの家は呪われていると

言い出した。

勇の妻の千代子や長女の和子はオーナーもよく知っている。

「隼人。何の申し分もない母と姉じゃないか。」

「女ばかりの家には居づらいんです。」

「世の中には家族の居ない人間もたくさん居るんだぞ?」

「ええ。嫌いな訳じゃないんです。父が長年働いた職場の空気を少しでも長く感じたいだけの事です。」

週末には帰るという条件付きでオーナーの家に居候させてもらった。

オーナーの家は畑から車で10分ほどの小さな町にあり家は隼人の家の5倍はあった。

オーナーには娘が2人。長女のアナ、次女のアンジェラ。

次女のアンジェラとは歳が一つ違いですぐ仲良くなった。

男女の仲になるのはそう時間はかからなかった。

オーナーには二人の仲の事は伏せていた。

発覚したのはアンジェラに子供が宿ってからである。

最初は激怒したオーナーも隼人の真面目な仕事ぶりとアンジェラの懇願で結婚を許した。

二人は家から数百メートル離れた場所に家を構え最初の2年間は幸せであった。

幸せは長く続かない。妻のアンジェラは結核が原因で無くなった。

高齢者でもない理不尽なアンジェラの死に隼人は狂った。

残った幼い息子が、そう、俺、ジョアキンである。

稲田 ジョアキン 勇。

父から祖父の名前を貰った。

母が死んでからの父は廃人に近かったらしい。

俺は幼かった為に覚えているはずもなく後年、母の姉のアナから聞いた話である。

父は酒に狂いドラッグに手を出しサンパウロ市内の繁華街でつまらないギャングの

トラブルで蜂の巣にされた。

俺は叔母アナの家に預けられ家ではいい子にいい子に徹したつもりだが、

アナ夫婦には3人の子供がおり長男カルロス、次男ルシアノ、長女マリアである。

日本人とのハーフで性格も暗かった俺はよく苛められた。

アナ夫婦が居る間は3人はとても良い子だ。

子供たちだけの時間が来ると俺は憂鬱だった。

カルロス、ルシアノは俺より年上で体格も大きかった。

喧嘩で勝てるわけもなくいつもサンドバッグ状態であった。

彼等は巧妙で決して顔には傷つけない。

マリアは俺より一つ下であった。可愛らしい容姿をしているが中身は悪魔だった。

わざと二人きりになった所で兄二人の悪口を俺に言ってきた。

用心深い俺は黙っていたが彼女は涙目で兄二人に性虐待を受けてい

ると相談された。

当時、純粹だった俺はまんまと騙されカルロス、ルシアノに向かっていった。

今考えるともしかしたらマリアに気に入られたい一心で負けると分かっていたて向かっていったの

かもしれない。

性虐待の話は真っ赤な嘘で兄弟3人で仕組んだ罠だった。

ただ俺を馬鹿にしたいだけだった。だが、俺は用心深かった。

どれだけボコボコに打ちのめされどれだけ馬鹿にされようとチャンスを覗った。

何の？もちろん復讐である。

兄弟3人から虐待を受けていないかと義父、義母から聞かれたことはあるが一度も言わなかった。

3人の仕返しを恐れてではない。せつかくの俺の復讐を知られたいなかったのだ。

機会を待った。

そして運命の日がやってきた。1990年代初頭の夏の頃である。

第3章 macaco

ジヨアキンは二十歳になった。

アナ夫婦がリオの親戚の家へ10日間のバカンスへ出た。

子供はルシアノが同行したのみでカルロス、マリアは地元に残った。

カルロスは草サッカーチームのメンバー達と毎夜のパーティーでお忙しい。

マリアは彼氏を家へ連れ込んで毎晩お盛んである。

ある朝方、マリアの彼氏がいつものように部屋から堂々と玄関を出て悠々と帰っていく。

これも両親が不在である為である。

当然、同じ住居に住む俺はよくこの男と家の敷地内で出くわした。

男の名はブルノ。ブロンドヘアにガッチリとした体格。背丈は180センチくらいか。

間違いなく美男子であるが彼は裏の顔を持つ。

彼は街のギャングチーム「マカッコ」の幹部であり俺の親友でもある。

この事実を知らないマリアは完全にブルノに気を許していた。

元々ハンサムな上に立派な体格に明るく頭も良い。お洒落でもあったので

町中の女が彼の噂に熱心だったのも当然だった。

俺がブルノと再会したのは高校の頃だった。

アナ夫婦には出来るだけ良い子に思われようと必死で勉強した。

特に出来るほうではなかったがカルロス、ルシアノの出来が悪過ぎたので

両親からの印象は良かった。まあそれも義兄達から目をつけられた原因なのだが

市内でもトップクラスの高校へ合格する事が出来た俺は高校2年の頃、

学校で最も仲の良かったデイエゴに街のクラブへ連れて行ってもらった。

クラブ ボニト (Club bonito)

市内でも1、2を争う大規模なナイトクラブである。

クラブは様々な出会いが交差している。

女、元クラスメイト、先輩、後輩、ご近所さんに、顔馴染み。

ブルノと会ったのはちょっとしたトラブルからである。

親友のデイエゴが目をつけていた女がブルノと仲良くしていたのが
気に入らなかつたらしく

因縁をつけにいった。

彼がギャングのメンバーだとは知らなかつたとは言え、ギャングの
リーダーは舐められた時点で

おしまいである。これは世界中の悪党に言えることであろう。

デイエゴが彼の胸倉を掴んだ瞬間に鼻の骨を折られていた。

喧嘩慣れしている人間に不要に胸倉を掴むのは自殺行為だとジョア
キンは思った。

だがデイエゴが親友とはいえ先に手を出したのは彼で、

何より彼があのマカツコのメンバー、しかも幹部だと分かっていた。

俺は誰よりも冷静なところがあった。

昔からである。両親を幼い頃に亡くし叔母の家庭に入ってからには常
に人の顔色を覗くような

そんな暗い生活から得た武器だった。

言い訳も上手い。顔色一つ変えずに平気で嘘をつける。

この冷静さと演技力だけが俺を今まで守ってきたのではない。

両親が死んだ時点で一人ぼっちなのを自覚した俺は（親父の姉貴はブラジリアへ嫁いだ）、

己の身を守れるのは己だけだと中学に上がる頃に空手の道場へ通った。

日系人の多いサンパウロは空手や柔術の道場が数多くあり、

俺の体の中には半分日本人の血が流れている。

周りの友達は圧倒的に非日系人であったから自分が日本人などとは一度も思ったことはない。

ただ容姿に至っては確かに日本人の血が濃い。

親父との思い出は無いに等しいが写真から俺が親父似なのは分かる。

通っていた空手の道場には裕福な家庭の子からファベラ（スラム）の子達まで様々であった。

ブルノとの出会いの場所だった。

彼が初めて道場へ入門してきた時、同じ年だからと組手をやらされた。

経験者の俺は難なく退けたが負けず嫌いな彼は何度となく俺に向か
つてきた。

2ヶ月も過ぎた頃には俺が負けることになっていた。

しよつちゆう組手を交わせば仲も良くなる。

初めは一緒に帰るようになり、やがて彼の仲間を紹介されるに至る。

「こいつはジョアキンだ。同じ空手道場で俺と張り合えるのはこい
つしかいねえ。」

「よろしくな、ジョアキン。」「ベレーザ」 皆握手を求めてくる
者、軽く挨拶してくる者。

厳つい連中だったがブルノの地位はチームでも高いらしく俺は皆に
どこか一目置かれていた。

ちなみにベレーザとはポルトガル語で美人の意味を表す。

スラングで元気か？という感じで会話の口頭で使われたりする。

2人の空手の強さには共通する理由があった。目的があったからで
ある。

空手に限らず武道やスポーツには古今東西、心身を鍛えるものであ
る。

極めていくと必ず最後に立ちはだかるものは「己」である。

己に勝つ為には心技体が調和した時に初めて可能なのだが、人間は「感情」という物を持ち合わせる生き物なのである。

怒り、悲しみ、喜び 特に怒りの感情は人を時として狂わせ強くしてしまふ。

俺が強くなりたかった目的は義兄弟3人を殺すことであり親の居なかつた俺が

この先の人生で生き残る為。

特に陽気な性格で知られるブラジルだがその裏側には光を目立たせる為の

大きな闇スラムが必要になってくる。

このスラムは南米、いや世界の中でも大きな規模であり南半球では最大クラスのこの都市の

スラムは今日を生きるのに命をかける少年達がわんさか居る。

ファベラスラムには警察でもうかつに立ち寄れない場所が多々ある。

実際にファベラは常に銃撃戦の戦場になる。住人達は慣れたもので台風や災害が来た

かのように窓を閉めて低い姿勢を保つ。

(銃が飛び交う中で突っ立っているのは自殺行為である)

ブルノはファベラ内における王になりたかった。

歯向かう者は女であろうと子供だろうと容赦しなかった。

2人に共通するのは「壊す」「破壊」という目的で空手を学んでいたのである。

その昔剣豪と言われた江戸時代における日本の宮本武蔵は人を斬るための物ではなく

人を「活かす」為の活人剣の境地へと入っていくのだが、

この2人にとっては力とは邪魔な存在を消す為の物。

俺にとってはチームとは自分を守ってくれる物。身の危険から守ってもらえるのは当然で、

自分が自分で居る為のオアシスのような存在だった。

だが高校に上がってからは進学校に通う優秀な環境の居る俺にはチームやブルノと交流する時間

が徐々に減ってきてしばらく会わなくなっていた。(連絡はたまに取っていたが)

デイエゴをぶちのめしたブルノに近寄り「ベレーザ」「ガラ！」（友達の意味）

抱擁を交わした後、デイエゴが親友である事を告げると病院までブルノは送ってくれた。

この日は気の毒にデイエゴは鼻を折られる事になった（自業自得だが）、

後日にはブルノはデイエゴに飯やクスリ、女を与えた。

「もう仲間だ。」デイエゴはギャングという存在に対して環境の良いい白人社会で育った為に

畏怖のような感情はあった。だがブルノの器の大きさには感服し時折ではあるがチーム内に

顔を出すようになった。それに人を笑わせる才能を持つデイエゴはすぐにメンバー達から

気に入られた。こうやってチームは徐々に拡大していき「macaco」はサンパウロ内でも

5本の指に入る勢力になっていく。

兄弟3人を殺す計画をブルノに打ち明けたのは二十歳の頃である。

大学へ進学した俺は高校の頃と違いマカッコのメンバーと会う時間が増えた。

手始めにマリアを落とす作戦をブルノに授けた。

街一番の伊達男だ。マリアが落ちるのはすぐだった。

家族がバカンスへ出かけて4日目の事。

いつものようにカルロスが出かけると俺は迷わずマリアの部屋に入っていた。

この日が生まれて初めてである。あの女からはウイルス扱いされていた為に

部屋の入室を拒否されていた。もっとも入りたいとも思わなかったが。

部屋に入った瞬間にマリアは叫んだ。

「あんた、何で勝手に入ってきてるのよ!」「脱げ」

「頭おかしくなったんじゃないの?警察呼ぶわ……」

話し終える前に腹を蹴ってやった。

すぐにうずくまったマリアを押し倒して犯した。何回も何回も。

3回目には死骸のようになっていた。

「あんた……絶対に殺してやるからね……」

「やってみるよ、ブルノにでも言うかい? 言えないよなあ」

自分の顔は鏡を見なければ分からないが、この時の俺の表情は悪魔のようだっただろう。

「ブルノがギャングチームの一員なのは分かってるな？あいつは俺のダチだ。」

一瞬信じられないような表情をしていたマリアに一枚の写真を見せてやった。

写真には空手の大会で記念に撮った全体写真が写っていた。

俺の隣に爽やかな笑顔で笑いかけているブルノが居た。

マリアは気絶した。気絶しているマリアを犯し続けた。

気がつくとき絶している間に撮ったヌード写真を見せてやった。

「……………あ、ああ……………」マリアは小さく震えていた。

「兄貴たちに相談しろよ、俺に犯されたって。親にも言え。」

「……………」「どうした？言えないなら俺から伝えてやるつか」

「写真をネタに強請ってるの？」「なあマリア。プレイボーイのブルノが中途半端なお前に

近寄ってきた時に不自然に思わなかったのか？えらく自信過剰なんだな、ふふ。」

「悪魔……」「光栄だね」「望みは……」「俺を崇拜しろ。」

この日を境にマリアは俺のことをお兄ちゃんと呼ぶようになった。

第4章 リベンジ

バカンス中の件から数週間が経った。

家ではマリアを除いて何も変わることはなかった。

ただ母親のアナだけがマリアの異変に気付いていた。

あんなに明るかった娘が食事中を始め一切口を利かなくなった事だ。

そんな事には全く気付かないアホの兄貴たちは相変わらず俺の機嫌を損ねてくれる。

顔を合わすたびに頭を叩かれるのは序の口である。普通の神経をした人間なら兄貴二人をすでに殺しているだろう。

例え敵わなくても親に相談したり反抗の意思を示すのはたやすいはずだ。

だが俺は黙って笑っていた。

ずっと幼い頃から機会を覗ってきたんだ。

こんな楽しい事、そうそうあるもんじゃない。

後の2人をどうやって料理してやろうか考えただけで体が震える。

その計画は着々と進んでいた。

次はルシアノの番である。

歳は俺より2つ上だった。進学はせず運送会社に就職した。運送会社の経理を担当する女性が居る。

名をパトリシアといい歳は20代の半ばを過ぎたくらい。

浅黒い肌に真っ黒のロングヘア。

豊満な胸に男の性欲を掻き立てるボディラインだった。

ルシアノも例外なく彼女に夢中だった。

彼女を落とす為にはどんな事だつてした。

「パトリシア、映画のチケットを手に入れたんだが今度の休みに行かないか？」

「次の休みは先約があるのよ。ごめんね、ルシアノ。」

「誰だ？男か？そんな奴ほっとけよ。その後のディナーは最高のフレンチだぞ。」

「そうねえ。私も一度断つただけど相手がどうしてもって言うから……」

「どんな奴だ？」「まだ大学生なんだけどね。可愛い坊やなのよ、ウブだね。」

「俺も進学してりゃ今頃大学生くらいなんだけどな。」

「デートしてくれなきゃストーキングするって……」

「俺がぶちのめしてやるうか?」「でも……相手は有名なギャングの一員らしいわよ。」

「ほう。俺もガキの頃からそれなりに修羅場をくぐってきているんだ。どこのチームだ?」

「確かモエマ地区ガイヴオタ通りのギャングだって……」

「あんな腰抜けエリアのギャング?新興勢力か?」「多分……みんな若いみたい。」

「俺一人で潰してやる。俺はサントアマロ地区の ヴェルメーリオ vermelho の連れも居るしな。」「何て名前の奴なんだ?」「ジヨアキンよ。」「何?うちの腐った弟と同じ名前だな」

ルシアノのサディスティックな炎がメラメラ燃え出した。

「ふふふ。そうか、いい名前だ。この名前の奴は碌な奴がいねえ。」
パトリシアから聞いたガイヴオタ通りのスーパーマーケットの駐車場付近まで来た。

ルシアノはヴェルメーリオのメンバー2人を連れ全員銃を手早く抜けるように確認した。

深夜にこの付近でたむろしているのだと言う。

「ガキが・・・大人の怖さを教えてやる。」

ルシアノも唯の男ではない。パトリシアに強がってみせているだけの事はある男である。

ほぼ喧嘩には負けたことがない。その強さを買われてヴェルメーリヨの一員に誘われた。

だが一生ギャングをしていく勇気が無かったのも確かだった。

いつ死ぬか分からない。明日の保障なんてないのだ。

派手な色のバンを中心に少年たちが5、6人ほど溜まっていた。

「やあ、坊や達。この辺りで名前を売ってるギャングチームが居るって聞いてね。」

ルシアノが優しい口調で語りかけた。

「君たちのメンバーにジョアキンっていう少年が居たら教えて欲しいんだが。」

「俺たちがマカツコの一員だって知って舐めた口聞いてんのか？」

一人の少年が言うとルシアノは眉をひそめた。

「マカツコ・・・」当然サンパウロの、しかも学生時代は不良で知られたルシアノだから

その名前はもちろん耳にしていたしそれどころか関わってはいけな
いギャングチームのワースト3には入るだろう。

しかしここはマカツコのテリトリーではなく、どう見てもこの華奢
なガキ達がマカツコのメンバーとは考えにくい。

「冗談はそれまでにしておけ。俺達はヴェルメーリオの幹部だ、今
なら遊びで許してやるぞ。」

閉まっていたバンから3人ほどの男が降りてきた。

一人は黒人で背丈は190近くはある巨漢。もう一人は誰が見ても
美男子だと認識出来るほどの男。もう一人はパーカーのフードを深
くかぶっていてよく見えない。

美男子の男が口を開いた。

「お前等ヴェルメーリオか？サントアマロにださいチームがあるっ
て聞いたが本当に芋臭い連中だな。」

「口に気をつけるよ、坊や。」ヴェルメーリオの一人が言った。

美男子が続けて喋る。

「なあ、銃持ってきたんだろ？見せてみる。それともこけ齧しか？」
ルシアノと残りの2人のメンバーがほぼ同時といってもいいくらい
に銃を構えた。

巨漢の男が上着のジャケットを脱いだ。

おびただしい数の刺青にダイナマイトを巻きつけていた。

ルシアノ達は一瞬ひるんだ。その瞬間を美男子とパーカー男は見逃さなかった。

ルシアノ以外の2人の腹に拳をめり込ませた。2人がうずくまろうとする瞬間に

ルシアノの後頭部に1人が銃を突きつけた。

「おい、今回は俺等の負けだ。ここで俺等を殺してもチーム同士の抗争が起きるだけだ。誰も得しねえ、なあ？悪いことは言わねえ。3人とも無事に帰してくれないか？」

美男子はニヤニヤ笑ってるだけだった。

「お、おい。銃も置いていくからよ。頼むよ。」

パーカーの男が呟いた。

「臭い息を吐くな、カスが。」マカツコのメンバー全員が笑う。

「な、なあ。悪かったって！ヴェルメーリオのマテウスは知ってるよな？俺とあいつは親友なんだよ。あいつの怖さは知ってるだろう？面倒な事になる前に帰してくれないか？」

「マテウスならばちばち殺してやろうかと思ってたんだ。」美男子が言う。

「俺はブルノ。マカツコのリーダーだ。相手が悪かったな。」

「ブ、ブルノって・・・あっお前！そっいえば妹のマリアと仲の良かったブルノじゃねえか！」

ブルノはニヤニヤ笑っている。

「暗くてよく分からなかったが・・・てめえ・・・マカツコのボスか！」

その瞬間にパーカー男がルシアノの鼻を殴った。思いつきりである。

「うがあー！」 「うがあじゃねえんだよ。」 次は足に思いつきりローを入れた。

男はフードを取った。

「てめえ！ ジョアキンじゃねえか！」

「だから俺を探しに来たんだろ？ここまで。」

「お前こんな事してただで済むと思ってるのか？」

「状況を分かってるのか？ルシアノちゃんよ。」

「何だその口の聞き方は・・・」ルシアノが言う前にジョアキンはもう一度殴った。

ジョアキンは顔を抑えてうずくまった。

「おい、お前今日ここから帰れると思ってるのか？長年よく可愛がってくれたよなあ。」

「う……う……」残りの2人のメンバーは声も出なくなっている。

「なあ、ルシァノ。最近マリアの様子がおかしくねえか？」

「知らねえ……」もう一度ルシァノを殴った。

「こら、妹の事だろ？真剣に考える。」「そ……そういえば最近大人しいな……」

「それで？」「……いや、あいつも大人になったんだって……」

「おい、ジョアキン。てめえが絡んでるのか？マリアの様子がおかしいのは……」

「俺が聞くまでマリアの様子がおかしい事に気付いてなかったじゃないか。お前も、カルロスも。」「マリアに何かしたのか？」「いや、1回レイプしただけだ。」

「……！?……お前……本気か？」

「たったの1回だって！」メンバー全員爆笑した。

「てめえ……!!」ドスン!!

ルシアノが倒れた。

頭がグチャグチャだった。

ジョアキンがためらいもなく発砲した。

「さすがだな、ジョアキン。初めて殺す相手が実の兄貴だなんて・・・
クク。」

「ブルノ、血は繋がってないし第一こんなのゴミだろ？」

「さすが俺の相棒だ。死体をバンに入れろ！」

他のメンバーが指示に従う。

残りの2人のメンバーは全裸にされ後頭部から打ち抜かれた。

死体は当然バンへ。

3体の死体を載せたバンはゴミ焼却炉へと向かう。

このルートはブルノが焼却炉のスタッフに賄賂を贈ることで黙認される。

スタッフ側もどうせ死体はくだらないギャングであるし黙ってれば金が貰えるから気にしない。

ルシアノの会社で働く經理のパトリシアもブルノのハーレム要員の一人であった。

ジョアキンが言った。

「あと、一人。」

ブルノが「マリアはどうするんだ？」と聞くと「いや、いい。」

「優しいんだな」「いや、一生俺に犯されたことを背負って生きていくんだ。」

「そうか、そっちの方が辛いかな」

夜が明けようとしていた。ジョアキンは急いで自宅へと戻った。

第5章 カルロス

ルシアノが消息を絶つてから4日目で警察が動いた。

もちろん見つかりっこない。奴は手下二人と一緒にゴミくずになったのだから……

それに警察の中にもブルノは賄賂を出している。

ブラジル、いや、こんな事は世界中で見られるような光景だろう。

役人という生き物は賄賂が無ければ干からびてしまふのだろう。

賄賂を受け取ってる警察官はそれなりに地位の高い人間である為にルシアノの捜索は間もなく打ち切られるだろう。

両親は青い顔して落ち着かない。当然だろう。息子の一大事だ。

マリアは？ 変わらない。もしかしたら俺が関わってるのも気付いているのかもしれない。

肝心のカルロスはというとどうにも気に入らない。済ました顔をしてやがる。

俺は晩飯後にカルロスの部屋を訪ねた。

「蛆虫が気安く入ってくるんじゃないよ。」「なあ兄さん。ルシアノが心配じゃないのか？」

「どうせ女のところにでも入り浸ってるんだろ？会社の女で気になる奴がいるって言ってたしな。」

「俺にはどうも嫌な予感がするんだ。その女がルシアノの行方不明に一枚噛んでそうなんだ。」

「なんで蛆虫のお前がそんな事知ってるんだ？」いちいち癪に障る事を言う兄だ。

カルロスはルシアノと違って直接は俺に暴力を振るうことはあまりなかった。

精神的にいびられる事が多かった。忘れもしない。中学2年の頃だ。

俺は近所で一人の女を気に入った。初恋だった。

歳は俺より1つ上で色気のある女だった。名前をジュリアと言った。

ルシアノと同じ学年で実は奴も密かに気に入ってたらしいんだが嫌われていたようだ。

ルシアノは札付きのワルだったからまともな少女からは敬遠されて当たり前なのである。

ところが俺は多少勉強も出来たし何より両親、近所の大人にも愛想良く振舞っていたから評判が良かった。

ある時、ジュリアから声をかけられたのである。

「ねえ、ジョアキンって名前よね。確かルシアノの弟の。」

「血は繋がってないんだ。」「それはラッキーね。あんな出来損ないと同じ血なんて。」

「ははは。」「愛想笑いだ俺にジュリアが」「ジョアキン、ルシアノのもう一つ上のお兄さん居るでしょう?」

「カルロスの事かい?」「そうそう、あいつがしつこく私をデートに誘うのよ。」

「はあ、嫌なの?」「ええ嫌ね。ルシアノの兄貴ってだけで吐き気がするけどそれ以上にあのイヤラシイ視線が我慢できない。」

「確かにオカマみたいな目をしてるね。」「言った瞬間に2人で大笑いした。」

「ああ、ジョアキン。あなたと話せて良かったわ。また話しましょうね。」

「うん。」 俺の心は舞い上がった。この家に来てからというものの兄弟に苛められるわ、妹にバイキン扱いされるわ散々だった。

だが今日でその辛い日々も終わったようだ。ルシアノ、カルロス。あいつ等が惚れた女が俺に気があるって知ったらあいつ等はどんな顔をするんだろう?」

数日経ってから学校帰りにジュリアと出会った。

「ねえジョアキン。丁度良かった。今日親がおばあちゃんの家に行っちゃって留守なのよ。」

「うん、それが？」「1人じゃ怖いだよ。鈍感ねえ。貴方なら信用出来るし何より頼りになりそうだから泊まりに来ない？」

「あ、ああ！」二つ返事だった。

ダッシュで帰って泊まりの支度をした俺はジュリアの家に向かった。

「いらっしやい。部屋はこっちよ。」「綺麗な家だね。」

「ここに座って。飲み物でも持ってくるわ。」俺にベッドに座るよう指示した。

ジュリアの部屋は悪く言えば殺風景だが無駄なものが無く、女の子にしては硬派な部屋なのがむしろ気に入った。

「お待たせ。」盆の上にジュースを二つ乗せて帰ってきた。

よく見るとジュリアは薄着になっていた。「寒くないの？」「ふふ。」

俺の横に座るなり太ももをさすってきた。

「!？」「何をそんなに硬くなってるの？」「い、いや別に・・・」

「貴方って本当に可愛い顔してるわね。」言ってから俺の髪を撫でてきた。

直後には彼女を押し倒してキスをした。

ガン！とドアが開いた。

信じられない事にカルロスが立っていた。カメラを持ってである。

一瞬何がなんだか分からない俺はカルロスに言った。

「何でここに・・・」 「ふふ、強引な人好きよ。」 マリアが笑ったのを見て俺ははめられたんだと知った。

プライドはズタズタだった。初恋の女に、騙されて、大嫌いな兄が、俺の破廉恥な写真を収めた。

後日、ルシアノやマリアに事件を知られてボロカスに罵られた。

ルシアノには腹を蹴られて「お前みたいなのが100年早いんだよ」

マリアには「イヤラシイ・・・あたしの部屋に少しでも近づいたら警察呼ぶからね！」

死のうかとも思った。だがこのまま死んだら犬死である。

カルロスから「なあ俺の視線がオカマみたいだっけ？言うじゃねえか。なあルシアノ。ちよつと教育してやれ。」

自分では直接は手をくださないのである。

その日、俺は身も心もズタズタにされた。あの糞カルロスに。

今、奴は俺の目の前に居る。マリアは完全に死人も同然。ルシアノは仏さんになった。

「おい、何でお前がルシアノの気に入ってる女を知ってるのかと聞いているんだ。」

「俺の連れのハーレム要員の1人だからだ。」「なにい?」

「お前の連れなんてダサ坊ばかりじゃねえか。」「お前よりはマシだろう、ははは。」

「おい。いつからそんな口が聞けるようになったんだ? 蛆虫よ?」

「ジュリアの件からお前を殺してやるうとずっと思ってたよ。今でもその気持ちは変わらねえ。」

「ほう。じゃあやってみろや? 俺を殺すんだろ? ほら。」

カルロスは両手を挙げて無防備な姿勢をとった。

「お前みたいな雑魚はいつでも殺れた。でも最後まで取っておいたんだよ。」

「お前ヤクでもやってんのか?」「シラフだよ。蛆虫さん。」「!」

突然カルロスから殺気を感じた。

「おい、ルシアノの行方不明とお前は関係してるのか？」

「誰に口聞いてんだ？関係してるんですか？だろ。」「死にたいのか？」

「俺はとっくにジュリアの時にお前に殺されてるよ。お前ジュリアとはまだ付き合ってるのか？」

「だったら何だ？蛆虫君？てめえには高嶺の花だろうがよ。」

「あいつ、昨日クラブに来てやがって違う男と盛り上がったぜ。」

「だから何だ？俺がその程度で動揺すると思ってるのか？ジュリアは数多く居る女の一人だ。あいつが何処でどんな男と居ようが関係ねえ。」

「つまり、その・・・何だ。セックスフレンドって奴か。」

「何だ？興奮してきたのか？変態野郎。」カルロスがこれ以上とない下品な笑みを浮かべた。

「いや、兄貴が可愛そうと思ってよ。その男をぶちのめしてやったんだ。」

「ほう、兄貴思いじゃねえか。」「その後きつちり犯してやったからよ。」

「あ？」「いや、その何？泣いて喜んでたぜ？あいつガバガバだな？兄貴のでか過ぎだろ？」

「こら。冗談でも言っている事と悪いことがあるんだぞ。」

「今のは言っている事だよな！それに事実だし。」その瞬間カルロスは俺に殴りかかってきた。

空手2段の俺には軽くさばいて部屋を出ようとした。

「待て！何処に行くんだ？戻って来い！！」「明日の深夜0時。」
「ああ？」

「0時にパウリスタ通りの銀行の跡地になってたところあんだろ？あそこに来い。」

「誰に指図してんだ？」「いや、別にジュリアがどうでもいいんなら来なくてもいいけどな。」

「こら。本気で言ってるのか？」「仲間も連れてきていいぞ。お前弱いからな。」

笑いながら言っちゃった。「あ、そうそう。銃も居るな。なんなら銃手に入るところ、紹介してやってもいいぜ？」

「2時だな。パウリスタ通りの銀行の跡地って言うとオフィス街らへんだな。」

「そうだ。2時にそこだ。人数連れてきたほうがいいぞ。」「まあ待ってる。」

1人になってからカルロスは考えた。

(俺に噛み付いてきたのは初めてだな。ルシアノの件は十中八九あの野郎が関わってるな。マリアだが本当か？確かに最近おとなしいが……)

深夜、カルロスはマリアの部屋を訪ねた。

「！？カ、カルロスか……びつくりした……」「そんなに驚くなよ。最近元気がないんじゃないか？悩みでもあるのか？」

「い、いや無いわ。どうして？そんな事心配するような兄さんじゃなかったのに……」

「ルシアノの件といいどうも胸騒ぎがしてな。」「………死んで……るわ……」

「あ？何て言った？」小さすぎてマリアの言ったことが聞こえなかった。

「多分……ルシアノは生きてないわ……」「何故だ？」「あいつに……」

「ジョアキンか？」「！！」「その顔だとビンゴだな。」「確証はないわ。でもあの化け物ならやりかねない。」「

「以前なら奴に向かってお兄ちゃんと呼んだりしなかったはずだ。何か奴との間にあったのか？」「出てっつてよ！関係ないわ！」「

お、おい……」

カルロスは無理やり部屋を追い出された。

（何かあったのは間違いないな。両親にはまだ伏せておいた方がいい。）

カルロスは知り合いのアントニオのアパートへ向かった。

「どうした？珍しいな。よく俺が今日非番だって分かったな、カルロス。」

「高校以来か？さつき署に電話したら非番だって言うからな。アパートの場所もお前の上司に聞いたよ。」

アントニオはカルロスの高校時代の旧友であったが仲はそこまで良かった訳じゃない。

アントニオは勉強の成績が良かったのでカルロスとは全く違うタイプの人間であった。

ただ体格が良く喧嘩も強かった為にカルロスのグループとは少々交流があった。

他校との喧嘩にもアントニオはたまに呼ばれた。進学して卒業後は警察官になった。

昔にルシアノが窃盗で捕まった時もカルロスの弟ということが多めに見てもらったらしい。

その時は電話で謝礼した程度だった。

「弟がいつぞや世話になったな。この場を借りて改めて礼を言う。」

「しかし彼が行方不明なんだろう？まだ見つからないらしい。その事で来たんじゃないのか？」

「いや、それもあるんだがさすがにお前の管轄じゃないし手がかりも今のところ無いんだろ？」

「そうなんだ。目撃者が皆無なんだよ。お手上げた。彼の友人達から聞いた立ち寄りそうな場所は全て探したんだが……」

「弟がサンパウロ市内でも有名なヴェルメーリオと繋がりがあったのは知ってるんだが。」

「うん。その線も当たったんだがどうやら別の2人のメンバーも行方不明らしいんだ。」

「何？」「これは表向きは情報を公開していない。お前は身内だし言うんだけどな。」

「メンバー達も何も知らないのか？行方不明の当日に誰にも行き先を教えてなかったのか？」

「いや、知っていると睨んでいる。」「だったら何故……」

「カルロス、俺はな。ギャング同士の抗争だと思う。」「まあそれが一番妥当な線だな。」

「リベンジするのに警察に言ったんじゃない身動きも取れないし何より面子に関わるからな。」

「ならヴェルメーリオを張り込みすれば……」「もちろん10人

以上の職員を割いて張り込ませてるが……一向に動きは無い。警戒してるのか……難しいんだ。」

「そうか。しかしヴェルメーリオと言えばここらでは最強のギャングだと聞いたがそこに真つ向から喧嘩売れるチームなんてあるのか？」

「無いことはない。まずトレゼ (treze) の連中だ。ボン・レチーロ地区を縄張りになっているやつ等だが現在はヴェルメーリオとは休戦協定を結んでいるはずだ。」

「当てになるのか？ そんな協定が。」なる。コカイン流通で今は手を組んでいるからな。」

「利害が一致している間は確かにそうかもな。」ああ。」

「他は？」規模でいうとその2チームが2強だから他は似たり寄ったりなんだが……」

「どうした？」「うん、マカツコという新興勢力が最近目だってな。」マカツコ……」

「数年前に出現したギャングチームなんだがまだ上の奴等も若い。せいぜい20歳前後だ。」

「ヴェルメーリオ辺りに潰されないのか？」「マカツコは縄張りがないんだ。「何？」「つまり普通は抗争になると互いの縄張りが戦場と化すんだが、マカツコは神出鬼没なんだ。」

「ゲリラ戦か。」「そうだ。メンバーも精鋭揃いらしくてな、チー

ムに入るのにテストがあるんだとよ。」

「悪のエリートか。そこが関わっている可能性は？」「十分ある。むしろマカッコだと思ってる。」

「だが証拠がないと。」「うん。その証拠を掴むのが現在の急務だな。」

「たむろって居る場所もないのかい？」「最近クラブ・ボニトに幹部が立ち入ってるらしい。」

「ダウンタウンの？ありがとう。行ってみる。」「気をつける。奴等は半端じゃないぞ。銃は？」

「ああ、持ってる。死にたくねえからな。」「危険だと思ったらガキ相手でも無茶すんなよ。」

「ありがとう。何か分かったら教えてくれ。ポケベルの番号を教えてください。」

アントニオのアパートを出ると大通りまで歩きそこからタクシーを拾った。

ダウンタウンまで行くとボニトのある通りで降りた。

週末ではないから大盛況とは言えないがさすがに市内最大のナイトクラブだ。

異性を求めて大軍のアホ達が集ってくる。

入場料を払いフロアを横切って2階から見下ろしてみた。

フロアにはギャングらしき若者たちは居なかった。フードコートやボックス席にもそれらしき奴等は居なかった。

酒を注文するついでにバーテンに聞いてみた。

「マカツコの連中は今日は来てるかい？」「あんた誰だ？」警戒したような視線でカルロスを見た。

「いや、ヴェルメーリオの連中に睨まれていてな。マカツコの連中なら相談すればと思ったんだが。」

「へえ、手ぶらなら連中は相手にしてくれないぜ。」

「金なんてねえからヴェルメーリオの溜まり場などの情報を提供しようかと思うんだが。」

「それなら幹部のブルノと話せばいい。今日はこっちに来ないみたいだから自宅の方に行ってみたらどうだ？」

バーテンは親切に場所を教えてくれた。どうやらマカツコのメンバーではないが鼻屑にでもらってるみたいで子分みたいなものだ。

自分の鼻屑にしてくれているチームを頼ってきているから自分が偉くなっただつもりになったんだろう。どこかカルロスに対しても尊大な態度だった。

カルロスは教えてくれた場所を聞いて愕然とした。

有名なファベラなのは分かったが確かブルノという青年がマリアの彼氏だったはずだ。

たまに自宅に来ていた彼に住んでる場所を聞いたことがある。まさにここじゃないか。

「段々分かってきたぞ。」

カルロスはルシアノと違い多少冷静な面がある。つまり臆病なのだ。

同時刻、バーテンから連絡を受けたブルノは豪華なチェアに座り考えていた。

（そうか。最後の一人、カルロスは俺まで辿り着いたのか。マリアの件で何回も会ってるし予想はしてたがルシアノほどに簡単には行かないようだな）

第6章 日本

ブルノの自宅周辺に辿り着いたカルロスはアントニオを含める5人の警官達と同行していた。

「カルロス、お手柄だな。マカツコの幹部のアジトを割り出すとは大金星だぞ！」

「まあ、安堵するのは早いと思うがな。」「心配するな。こいつ等は銃撃戦を多数経験してきている精鋭達だ。」

バーテンに教えてもらった住所のすぐ近くまで来た。

「情報ではこの辺りだと思っただがな。」「4件ほど平屋が並んでるがどれだ？」

「確か入り口のポストにマカツコの名前がペイントしてあるって・・・」

4件の平屋の中で右端の家のポストにそれらしきペイントがあるので確認した。

「ここか・・・」「なあ、アントニオ。何の容疑で捕まえるんだ？」

「証拠なんてなくなっただけいいんだ。ただ捕まえればいい。」

「悪党相手だけに容赦なしか・・・ふふふ。」

「よし、いいかカルロス？お前は警察じゃないから危ない橋は渡らせねえ。外で見張りを頼む。」

「ああ、すでに銃で応戦しようとしてるかも知れんからな。」

アントニオを先頭に2人の警官が正面玄関に近づいていく。同時に残り2人の警官が裏口を回る。

コンコン。

アントニオがノックする。

無反応である。

コンコン。

後方に居る2人の警官に目で合図を送り直後ドアを蹴破った。

一斉にアントニオ達は家の中へ入っていった。

中には誰も居なかった。間もなく裏口から2人の警官も入ってくる。

「誰も居ないのか？とにかく家中を調べる。そんなに大きい家じゃない。」

5人の男達は家中を調べた。

同時刻、カルロスは信じられない光景を見た。

家から数十メートル離れた所に閉まっていた雑貨店があった。

そのシャッター脇から隠れて家を見ていると2件隣の平屋から武装した10人ほどのギャングらしき男たちがアントニオ達の入って行った家に向かってマシンガンを乱射した。

その瞬間にカルロスは嵌められた事を理解した。

同時に逆方向に向かって走り出した。死や危険に対する察知能力はさすがであった。全速力で駆けた。

もうアントニオ達は無事ではないだろう。

そこまで仲の良かった友達ではないが心が痛んだ。原因は自分なのだ。

わき腹が痛くなるまで駆けた。止めれば殺される。

フェンスを乗り越え大通りまで出た。時刻は朝方4時を回っていた。車は疎らであったがここまで来ればひとまず安心だろう。

ジャケットの内ポケットに銃を忍ばせていた事が多少カルロスを強気にさせた。

とはいえ、ここからファベラは目と鼻の先である。

急いで自宅へいや、警察だ！

タクシーを急いで捜したがファベラ付近でタクシーを走らせるの

は自殺行為であった。

(やはりもう少し離れないとな。)

100メートルほど小走りで北へ向かうと黒のバンが急カーブしてこちらへ向かってきた。

胸騒ぎがしたカルロスはとっさに小道へ折れた。

走った。とにかく息が切れるまで小道を走った！

両側にボロボロの住居が立ち並び、袋小路に突き当たったのは200メートルほど駆けてからである。

突き当たりには小さな公園があった。

ボロいブランコとベンチしかない汚い公園であった。

ベンチの横に街灯があり真下に誰か座っている。

その誰かがジョアキンだと気付くのは数秒経ってからであった。

「・・・ジョアキン！」 「よう、大したスタントだったな。」 「
てめえ、計算通りってか？」

「いや、正直ポリ共と一緒に地獄へ送ってやろうかと思ったがここまで粘るとはな。」

「さっきの黒のバンもお前の仲間だな。」 「ああ。」 「俺は終わって事だな。」

「まだ諦めるな。長男だろ？銃も持つてるんだし諦めるな。」俺はニヤニヤしていた。

「ジョアキン、見逃す気はないよな？」「ああ。このチャンスを長年夢見てた……」

俺が喋り終わる前にカルロスは発砲してきた。

幸運だったのはあいつが銃を撃ちなれていなかった事。

もう一つはブルノの弾がその前にカルロスの背中を貫いた事。

カルロスは静かに倒れた。

「まだ息があった。」……うつ。仲間……がいやがったか……」

「楽しいなあ？カルロス。ルシアノの死に様は一瞬だったんで実は面白くなかったんだよ。」

「お前はまだ生きてるもんなあ。カルロス、何とか言ってくれよ。」

「……俺が死んだら……さすがにお前も警察からは逃れられないだろう……？」

「これからゴミ焼却炉に遠足に行くんだ。最もお前は片道遠足だけだな。」

「……ルシアノも……」「ああ、お先に逝っちゃったよ。ふふ。」

「ジャップのハーフに殺られるなんてよ……恥だぜ。」

グシヤ!

無意識にカルロスの頭を思いっきり踏んづけてた。

何回も、そう、何回も。

気付いた時には奴の頭は原型がなかった。

「ジョアキン、さすがの俺もそこまでは出来ないぜ。余程憎かったんだな?」

「さあ? 目的を果たした今となっては何だかなあ。」

「ゴミを運ぶぞ。」「ああ。」流れ作業のように遺体となったカルロス運び遠足へ向かった。

自宅へ戻る気はなかった。次第に俺の犯行説が明るみになる可能性もあった。

朝方、俺とブルノは日本へ向かっていた。

日本の静岡という所にマカツコのメンバー数人が留学生という形で前もって忍ばせていたのである。

ブルノはここ数年でサンパウロのギャング達を数十人消していた。

焼却炉だつていつまでも賄賂のみで通用するはずもなかった。

2人分の偽造パスポートも作成出来ていた。

日本の税関は90年代初頭では驚くほど甘かったのである。

世界中からスパイ天国と言われるほど管理が甘かったのである。

しかもこの時期は中国人マフィアや不良イラン人などが幅を利かせており、比較的ブラジル人へのマークは甘かった。

名前も偽造で入った。まずは成田で降り、電車を使い静岡まで向かった。

先に潜らせていたマカッコのメンバーの一人、ガブリエルが駅まで迎えに来てくれた。

ガブリエルは日本語学校へ通いながら工場勤務をしている。

彼の場合はパスポート及びビザを正式に取得してあり安全であった。

「ガブリエル、遅しくなったな。もう日本は何年だ？」

「3年だな。仕事を紹介したいが目立つ仕事は無理だな。正式なルートで入国してないのだから。」

「何でもいい、俺たちはアウエーだから何でもやるぜ。」

「クラブの用心棒してもらおう。」「簡単だ。」ブルノは二つ返事をした。

「いや、クラブというのはナイトクラブではなくブラジリアンパブの事だ。」

「男性客に女が付くんだよな？」俺が質問した。

「そつだ。お前は日系か？なら話は早い。」「日系だがハーフだ。」

「お前は見た目も日本人に近いからすぐ日本には慣れるだろう、ブルノはハンサムだからモテるぞ。」

「お前いつの間にお世辞が言えるようになったんだ？」車内に笑いが生まれた。

ガブリエルのマンションに到着した。

「そこまで広くはないがお前等2人を囲うには十分だ。」

「感謝するぜ、ガブリエル。」「ありがとうよ。」俺等はいつに頼るしかなかった。

「日本はな、ブラジルのようなラテン気質からはかけ離れた国だ。不自由を感じることは多々あるだろう。しかし短気を起こしちゃいかん。ここは外国だからな。」

「分かってる。日本の治安は先進国でも飛びぬけていいみたいだからな。警察も優秀なんだろ。自粛するよ。」ブルノも日本へ来る前に一通りは勉強してみたんだ。

ブラジリアンパブのウェイターは俺の仕事となった。

まず容姿が日本人とさほど変わらない事、そして日本語が使えるからである。

父隼人から幼い頃に日本語を徹底的に叩き込まれていた。

「侍はな。地球の裏側に居ようが侍なんだよ。」「侍？侍って何？」

「心の中に剣を持っている人の事だ。」「剣？銃じゃ駄目なの？銃のほうが強いよ。」

「人を傷つけては駄目だ。日本の男はな、強くて優しくなくては駄目なんだ。」

「よく分からないよ。」「はっはっはっ。いつか分かる時がくる。」

何故あのクソ親父の事を思い出したんだろう。偉そうなこと言ってるギャングに蜂の巣にされてちゃ笑えない。

だがあんたから貰った日本語は今役にたちそうだ。

ブルノはラテン人の集るナイトクラブの用心棒に回された。言葉もポルトガル語で通用する。

1ヶ月もすると俺「外人クラブ」という仕事にも慣れてきた。

酒を運んで灰皿替えてスケベな日本人にお世辞を言い掃除もしてトランプになれば得意の空手を使って楽勝だった。

ブルノが傷害事件を起こしたと聞いたのはそれから数週間後だった。

第7章 岐路

俺達の居る静岡は愛知と並び国内でも最も在日ブラジル人が多い場所だ。

真面目に勉強しにくる奴等も当然多いが一攫千金を狙う為なら何でもする奴、俺等みたいに逃亡の身になってる者も少なくない。

この辺りじゃブラジル人の悪事により治安の崩壊が問題になっている。

幸い俺は見た目も日本人に近く流暢な日本語も喋れる。

そして大学まで出ているから最低限の教養もあるつもりだ。

ブルノ……ガブリエルからの連絡によるといつも通り用心棒の仕事をこなしていたらしい。

このクラブの客の内訳は8割がラテン人である。なので日本語を使う必要があまりない。

ブルノにはぴったりだった。喧嘩も強いし度胸もあるからだ。

このクラブの広さは60平米くらい。大きくも無く狭くもなくといった感じだ。

ポニトから比べると小屋みたいなところだが東京のような都会へ出れば大きいところもあるのだろう。

フロアから悲鳴が聞こえてきた。

久々の仕事だと張り切ってブルノは悲鳴の方向へ駆けた。

くだらない、日本人のヤクザ達がブラジル人の女2人にナンパを断られ1人の女の頬をひっぱたいていた。

「こら、ビッチ。この国じゃ俺等がルールだ。痛い目見たくなかつたらついてこい。」

「Morra! Um yakuzaa!!」死ねとポルトガル語でひっぱたかれたブラジル人の女が言った。

言葉が分からなくてもニュアンスでヤクザは悪口だと理解した。

女に容赦なく腹を蹴った。

直後にブルノが止めに入った。「ぼつりよく・・・は・・・だめです。」

下手糞だが必死で覚えた日本語でブルノは仲裁に入った。

ガッ!!

言い終わる前にもう1人居たヤクザに殴られた。

「何だお前は?ここの店員か?ああ用心棒かい?」

殴られたブルノから殺気が芽生えた。

「何だそのツラ?俺等は街の用心棒だ。格が違うんだよ?失せる・・・」

」

ガン！！！！

ブルノは下段蹴りをもう1人のヤクザが喋り終わる前に喰らわせた。

ヤクザの姿勢が自然と低くなりそのまま膝で鼻を蹴った。

「ぐわあ！！」「！？」最初に女をひっぱいたもう1人のヤクザが身構える。

ブルノはもう1人のヤクザに向かって堂々と前進した。

ヤクザが左ジヤブを出してきたが簡単にさばいて鼻に正拳突きをお見舞いした。

「うつつ！！」もう1人がうづくまる。

1人目に鼻を蹴ったヤクザが立ち上がりナイフを出してきた。

「何だそりゃ？俺の国じゃクソの役にも立たないぜ。」ポルトガル語で言ったからヤクザは理解していないだろう。

「クソ外人がつ！死ねや！！」その瞬間に警察がなだれ込んできた。

誰かが通報したのだろう。当然ヤクザはお縄頂戴だったがブルノまで参考人として連行されそうになった。

普通なら正当防衛でもあるし問題ないがブルノや俺は不法入国である。当然偽造のパスポートもあるがこの国の警察は優秀だから油断

できない。

ガブリエルから警察には来ないように施された。俺もブルノと同じ立場であるからヤブヘビである。

「俺はビザもパスポートも本物だ。日本語学校に通ってる証拠もあるから俺が身元引受人として行って来るよ。なあに、正当防衛だし相手はヤクザだ。問題ねえ。」

そう言うとガブリエルは電話を切った。

俺は嫌な予感がした。こんな予感はガキの頃に内緒でルシアノのお菓子を食べて犯人探しをされた時以来だ。

最もその時は見つかって体中に痣が出来るほどやられたが。顔は両親にバレるから避けたのである。

今思い出すとムカムカするがあのカスはもうこの世には居ない。

深夜1時頃を回ってから俺は仕事をあがった。週末は多少遅くなるが平日はいつもこんなもんだ。

心配だが警察まで行く訳にもいかずコンビニでシャバ祝いの酒をブルノとガブリエルの為に買った。

ガブリエル宅に着くと既に2人は帰っていた。

「よう。」ブルノはご機嫌だった。それを見て一安心した俺は奴にビールを一本投げた。

「俺にか？ありがとよ、ジョアキン。」「ガブリエル、お前の分だ。」

「・・・ああ。悪い。」そう言っつてビールを取った。

「どうした？ブルノは無事だったんだろ？何かあったのか？」俺が聞いた。

「うん・・・警察は問題ねえ。ブルノは演技派だし良質な外国人を演じていた。問題は・・・」

「相手のヤクザだとよ。」ウィンクしながらブルノは俺に言った。

「そのヤクザは大物なのか？」「いや、そいつ等自体は雑魚なんだが・・・」

「バックか？」「ああ。どうやら東京の有名な組らしい。お忍びで静岡まで来てたんだとよ。」

ガブリエルが力なく言った。

「ガブリエル！びびんじゃねえよ！俺等は天下のマカッコだぞ！ヤクザが何だ？東京？サンパウロの方がすげえよ！！はっはっはっ！！」ブルノはご機嫌だ。

「ブルノ。よく聞け。俺もこの辺りのヤクザならそこまで問題にしない。実際に俺はお前等より何年も先に日本へ来て、この辺りのヤクザとも面識がある。だから昨日のような場合でも正当防衛だ。話せば分かるんだが。」

「だから東京がどうした？ここまでやってくるのか？」ブルノはまだ笑ってる。

「関東広域のヤクザだ。面子がある。しかも外国人にいいようにされたんじや面白くないだろうな。奴等も。」

「正義はこつちにあるぜ！なんせ国の女を救ったんだからな！！」

「ここは日本だ。日本ではヤクザは絶対らしい。政界、芸能、風俗、企業、至るところにヤクザが権力を握っているんだ！マカツコでも勝ち目はねえ！！」

ここで俺が口を挟んだ。

「そのヤクザ達がこの家に辿り着くのはどれくらいの時間がかかる？」

「明日中には。」ガブリエルが言った。

「返り討ちだ、なあ！ブルノ。俺等はそうやって生きてきたんだ。」

静岡中の在日ブラジル人や他のラテン人も集めりゃチヨロイぜ！！」

「ブルノ。俺等はブラジルからのお尋ね者だ。派手に踊るのはまずいぜ。」

「お前までそんな事言うのか？ジョアキン。この国に来て腑抜けになっただか？」

「不利なんだよ。サンパウロじゃ警察に賄賂を贈って見逃してもらったし、死体もゴミ焼却炉があった。今はどうだ？俺等に何が出

来る？」

「ジョアキンの言うとおりだ。確かに今回ブルノがヤクザから女達を守ったのは評価していい。勇敢で男だった。だが相手が悪いのに加えここはアウエーだ。」

「……ちっ……仕方ない。じゃどうすりゃいい？」

「地元のヤクザに間に入ってもらおう。多少包まないといけないがヤクを売りさばいたり、南米からのネタのルートを紹介してやってんだ。言うなれば俺等は仕事上ではパートナーだからな。何とか助けしてくれると思う。」

「俺は？」ブルノが尋ねた。

「お前はしばらくどこかへ飛べ。仕事は気にするな。クラブじゃお前はヒーローだ。話がついたら戻って来い。」

「飛べって言われてもよお。何処へ？俺は静岡から出たこともないんだぜ。あっ1度名古屋には出たか。」

「ブラジル人が多いところが紛れ易いんだが名古屋はここからは近すぎるし……待てよ。」

ガブリエルは何処かに電話しだした。

ガブリエルが誰かと喋ってる間に俺はヤクザをぶちのめした武勇伝を聞いた。

別に興味はなかったんだがおだてりゃブルノは上機嫌だ。こいつが

へそを曲げた時はやっかいだ。サンパウロ時代にはメンバーの足を撃ちやがった時がある。

その内に電話が終わった。

「よし、喜べブルノ。大阪到北京マフィアの知り合いが居る。」

「ほう、何時の間にそんなVIPなお友達が出来たんだ？ガブリエル。」

「茶化すな、大阪にも南米産のネタを流すことがあつてな。中国人はまとめて買ってくれるんだ。」

「大阪ならヤクザのメツカだから日本のヤクザがうるさくねえのか？」

「奴等よりいいレートで買ってくれるんだ。その半分を地元静岡や愛知の組に上納。残りが俺等の生活費になつてるんだぜ。」

「なるほどな、お前がメンバーで本当によかつたぜ、恩に着る。ガブリエル。」

ガブリエルはブラジル時代からチームの経理担当だったと言ってもいい。

経理以外にもヤクのルート作り、武器の調達、地元の情報屋の確保といった重要な任務をこなしていた。

「ブルノ。大阪は東京ほどじゃねえが大きい街らしいぜ。マカッコ日本進出の先陣を切ってくれよな。」俺は軽い気持ちで言った。

「ジョアキン、任せとけ。チャイニーズに世話になる代わりにそいつ等のビジネスにおける邪魔者達を俺が消してやる。」

「待て待て。お前はお尋ね者で匿ってもらった。頼むぞ。」ガブリエルは心配そうだ。

「ただで匿ってもらったほど俺はヤワじゃねえぜ。」「ま、好きにする。」ガブリエルも諦めたみたいだ。

ブルノが大阪へ向かったのは翌日の昼過ぎだった。

後日に予想通り東京からブルノに対しての刺客が来たらしい。

ガブリエルは冷静に地元のヤクザ達に介入してもらい事を収めた。

最も地元のヤクザに対してのバックは予想以上でしばらくの生活費に響くと言つ。

それに比べてブルノは気楽だ。いくら幹部とはいえ日本じゃガブリエルの方が力を持つてる。

いつガブリエルが気まぐれを起こすか分かったものではない。

俺は臆病で計算高かった。常に力のあるものには媚びた。

クソ兄弟達やブルノに対してがそうだったかのように。今日本じゃガブリエルに付くのが一番得策なのである。

俺はガブリエルに対してのリスペクトを怠らなかつた。

例えば給料の8割を彼に渡していた。家賃、食費に使ってもまだ余るだろう。

最初に渡した時にガブリエルに尋ねられた。

「ジョアキン、これは多すぎるだろう。お前も1ヶ月しっかり働いたんだ。半分でいい。」

「いや、お前がいなけりゃ俺やブルノは野垂れ死にするしかなかった。」

「大げさだな。同じマカツコのメンバーだろ?」「親しき仲にも礼儀あり。」

「は?」「いや、そういう諺がこの国にはあってな。」「ほう、どう意味だ?」

「つまりいくら親しい友達でも常にリスペクトしろってこった。」

「それはいい諺だ。ギャングの世界では鉄則だからな。そういえばお前は半分日本人だもんな。」

「しかも親父方だから濃いな、血が。日本語も喋れる。」「数年住んでる俺より上手いもんな。」

俺はガブリエルから信頼を得ていた。

いや、サンパウロでもブルノは恐怖政治でチームをまとめたが俺は色んな知識を部下に与えてやることによりメンバーから信頼を得ていた。

例えばヤクの輸送などブルノにすれば「命がけでやれ」の一言であった。

俺は部下に自作の地図を渡し安全なルートを書ペンでなぞってやった。しかも同じルートではなく月が替わることにより新しいのを作った。

高校の頃にピザの宅配のバイトをしていた為に道には明るかった。

ある日、些細な事でルーキーがブルノに反論した事があった。ブルノの交通違反で身代わりに行かされそうになったルーキーの口答えであった。

「お前、誰に口聞いているのか分かってるのか？」「いくらボスでもそりゃあんまりだ！」

ブルノが右ポケットに手をつつこんだ時点で俺がルーキーを殴った。

「いてえ！何しやがる！！」「ちよつと表に出ろ。」「うるせえ！俺はボスと話してんだ！」

ガン！ゴツ！ 2発追加で殴った。

これでも空手ならブルノと張れる実力だからルーキーは半分のびていた。

力づくで外に連れて行くように他のメンバーに指示した。

「ブルノ、気にするな。奴は入ったばかりだ。お前の若い頃にそつ

くりじゃないか。」

「ふん。あんな雑魚と一緒にするとは言うじゃねえか、え？ ジョアキン。」

「噛み付くな。その雑魚ごときにお前が手をくだす必要はないんだ。」

「……そうだな。ありがとよ……俺はすぐカツとなるんだ……」

「イケイケのボスも魅力だがやはりドンと構えてないとな！」ポーンと右手を奴の方に乗せた。

「ちよつとルーキーに教育してくる。」そう言って外に出た。

外では俺を殺すとかでルーキーが暴れていた。

「てめえ……こんなチームに誰が入るかよ！ぶつ殺してやるよ！」

「やってみろ？ガキが。」メンバーの1人がルーキーに銃を向ける。

「銃をしまえ。」俺が言うとメンバーはそれに従った。

「おい、ルーキー。あのままならお前は蜂の巣だ。」「あ？」

「ブルノは躊躇なく人を撃てる。既に数十人はあの世へ行ってる。何回かは俺もこの目で見たしな。」「俺だって銃がありや……」

「黙れ。」俺はすぐ彼を遮った。

「銃があればと言うがな。実際に銃を持って人に向ける。これがどういう事か分かるか？その場になると手が震えてなかなか撃てない。」

「お、俺をなめてるのか？」「誰でもそうだからだ。しかしブルノは悪のエリートだ。お前両親は？」「母親だけ。親父は警察に殺された。」

「そうか・・・ブルノは4歳の頃に警察に両親を目の前で殺される。理由もくだらん。」

ルーキーは少しブルノに対して共感に近いものを感じたみたいだ。

「いいか、交通違反の身代わり。確かに馬鹿らしい。お前は何一つ悪いことをしてないんだもんな。」

「そうだろう？だから俺は・・・」「待て。罰金はこれで払え。点数は諦める。その代わりに罰金代を多めに渡してるはずだ。」

金を数えだしたルーキーが「お、おい。これじゃ罰金の3倍はあるぜ。」

「残りは好きに使い。メンバーらしくピシッとした服でも買って来い！」

「すまねえ。あんた話せるな。実はボスと構えた時はちびりそうだったんだ。」

大抵はどんだけいきがってもこのルーキーと同様に胆の据わった人

間は少ない。

それにルーキーに渡した金は契約金として含まれてる。最も彼は知らないが。知らぬが仏。

マカツコは少年ギャングだが契約金という制度がある。中にはこれだけもらってドロンする輩も少なくないが例外なくゴミ焼却炉行きである。

この制度の理由はプロ意識である。結果を出せば優遇してきたからこそマカツコは短期間で拡大できた。

こういう臨機応変な下の者に対してのやりとりで俺はブルノより密かに尊敬されていた。

自尊心の強いブルノはこの事を知らなかった。誰も伝えない。伝えられなかったのである。

静岡にはマカツコのメンバーがガブリエルを含め4人居る。

残りの3人は共同生活をしながらバイトに明け暮れている。この3人の役目は日本においてマカツコ進出の兵隊を集めることである。

彼等曰く使えそうな者が30人は集ったという。もちろん正式にはない。目立つことは許されない。主に南米系の人間で集められた。

この兵隊集めをしている3人もブルノには少なからず不満を持っていた。

口には出さなかったが態度で明らかに分かった。

どうせ理由は俺等がこんなに頑張つてバイトして兵隊集めに明け暮れている中、あの野郎はクラブの簡単な仕事を適当にヘラヘラやってるだけじゃないか。とまあこんな所だろう。

今回の騒動だつて女を助ける為とは言え勝手に目立つた事をしてという気持ちはあつただろう。

だがしばらく大阪に行つてくれるという嬉しい気持ちもあつたみたいだ。

正直俺はブルノに対して部下の気持ちが離れていつてるのを静観した。

ガキの頃からずっと一緒にやってきた者同士だが俺に横暴な態度を取る事も時折あつた。

ざまあ見るとまではいかないが一度いい薬になるだろうと思つてた。

……今思えばこの時期くらいから歯車が少しずつおかしくなつていったんだ。

第8章 ブルノ

12時14分発の新大阪行きのひかり409号にブルノは乗った。

駅弁を買って旅行にでも行くかのように呑気にビールを飲んでいた。

(新幹線か、ブラジルにはねえな。便利なもんだ……)

駅弁を食べた後に少しだけ仮眠した。午後2時頃には新大阪に着いた。

ガブリエルに聞いた電話番号にかけた。

男が出た。「もしもし。」「ブルノというんだがガブリエルの紹介で……」

日本語は得意じゃないがガブリエルによく使う単語や文章をノートに書き出してもらっていた。

「聞いている。そこからタクシーを拾って御堂筋線の大国町という駅までと伝える。」

「分かった。」タクシーを拾い運転手に伝えるた。慣れない地名などで上手く発音出来なかったが何とか伝わったようだ。

道も空いていたので15分ほどで目的地に着いた。

さすがに静岡とは違い高層ビルの多さやタクシーの中からでも外国人の多さにも驚いた。

（なるほど。名古屋もすごかったが大阪も大きいな。）

90年代初頭の頃の日本は東京を中心に大阪、名古屋、福岡と町が発展していった。

目的地に着くと公衆電話を探してもう一度電話した。

すぐに白色のクラウンで迎えに来てくれた。

車で迎えに来てくれたのは陳という男だった。

少し小太りだがなかなか愛嬌のある男で事務所に着くまでに自己紹介やファミリーの事を簡単に説明してくれた。大国町から5分ほど車で走ったところに彼等のビルがあった。

お世辞にも綺麗だとは言えないビル。それどころか町の雰囲気もどこか汚らしい。

日本というのはインフラがアジアでも一番整備されていて衛生に関して言えば世界でもトップクラスだと聞いた。

事実、静岡に初めて来た時はその清潔さに感動すらしたものである。

日本にもこういうファベラが存在するのかと驚いた。

事務所に入ると5、6人の男達がこちらを見てきた。

一番奥の一番大きいチェアに腰掛けているのがボスだと分かった。

そのボスに向かってブルノがガブリエルから教えてもらった日本語を披露した。

「本日からここでお世話になりますブルノと言います。どうぞよろしくお願いします。」

昨日の夜から新幹線の中でも練習したから上手く言えた。

「随分と謙虚な男だな。」ニコつと一瞬口を緩め元の無表情な顔に戻った。

「私は大阪における北京マフィアの幹部、王だ。不自由があれば何でもいいなさい。」

「あ・・ありがとうございます。」これほどオーラのある悪党を見たのは久しぶりだ。

恐らくサンパウロで敵対していたヴェルメーリオのリーダー、グスターボ以来だ。

「お前サンパウロで派手にやったらしいな。」手下の1人が口を開いた。

名前は李。長細い体に細い目、薄い唇。死神という生き物が居たらこつという男なんだなとブルノは思った。

「派手にとっても・・・メンバーの兄弟を2人殺しただけです。」

「おいおい、身内の兄弟を殺したのか?」「頼まれたからです。本人から。」

ジョアキンの育ってきた環境や兄弟たちから受けた虐待を簡単に説明した。

慣れない日本語なので話し終える頃にはドツと疲れが来た。

話を聞いたメンバー達はサンパウロでの武勇伝をもっと聞きたがったが王がそれを制止し彼を部屋に案内するように陳に言った。

「疲れているだろうから少し休みなさい。夜には歓迎会も兼ねて街に出よう。ミナミという街だが静岡やブラジルとは違った独特な街だ。」

「はい。ありがとうございます。」

陳に部屋を案内され荷物を降ろした。

殺風景だが最低の家具は揃っており掃除も行き届いていた。客間だろつ。

ベッドに横たわり目を閉じた。

昨日の夜も、そして新幹線の中でも少し寝たので別に眠くはない。

ただ先ほどボスにジョアキンの兄弟殺しの話をして慣れない日本語に疲れたただけだ。

幼い頃に小物の警察官の賄賂を目撃した母親を警察官は殺した。

それに激怒した親父にも銃を向け俺の目の前で殺した。

周りの住人たちが一斉に集りだすと警官たちは逃げるようにパトカーに乗り立ち去った。

もしあのまま住人達が集らなかつたら俺まで殺られてただろう……

ガキの頃は周りの住人たちに育ててもらった。みんな貧乏だったが優しかった。

そこのガキ達とも仲良くなった。これがマカツコの原型になる。

少し大きくなるとジョアキンとの出会い……。俺を初めて打ちのめした奴。

すぐに追い抜いたが頭が良く誰からも慕われていて俺に無いものを全て持つてる奴だった。

正直、嫉妬していた部分は多分にあった。八つ当たりでジョアキンを殴ったこともある。

だがいつも奴は俺の味方だった……。もし、奴が俺なら俺を殺してる。

何故あいつはあんなに謙虚で人に優しいんだ？あいつだって両親が幼い頃死んで義兄弟達から虐待を受けて、何故？俺とどう違うんだ？環境？確かに奴が育った周りは高級住宅街の類で大学まで奴は出た。

しかしそれは奴が賢かつただけの話だ。性格とは違う。血か？日本

の血を半分受ける血か？

確かに日系人の進学率は異常だ。ブラジル人、特に黒人などは出世するチャンスが白人系ブラジル人に比べると皆無と言って良かった。フアベーラ出身なら尚更である。

俺は白人とインディオの混血だ。ブラジルでは今の時代では比較的珍しい。

歴史から言うと先住民のインディオ、後に来たポルトガル中心のヨーロッパからの多数の白人、サハラ砂漠の西から来た黒人。この3種族からブラジル人は構成されている。

今では日系人社会も立派なマイノリティに成長している。

容姿は両親のいいところを貰ったという感じだ。

お洒落でハンサムなポルトガル系の親父。

母親はムンドウルク族の末裔。俺の祖母がムンドウルク族だったことだ。

この種族はブラジルアマゾンの数多くあるインディオの中でも一番戦争好きな種族だったらしい。

どっちの血でも激しいから俺はこんなに争いが好きなのだろうか？

19時を過ぎるとボスの王が自ら声をかけてくれた。

陳の運転するクラウンと劉の運転するプレジデントに別れた。

俺は陳のクラウンへ、王は劉のプレジデントに。まあ当然の成り行きだった。

夜は平日にも関わらず少し混んでいたので歓楽街まで30分少々かかってしまった。

車を降りるように陳に言われてから降りると小奇麗なビルの前だった。

劉を先頭に（この劉は運転手の劉と兄弟でありボスを守っているのが兄貴である。）

ボスを囲むように李と黄が続く。俺はその後続くように陳から指示されていたのでそれに従う。

エレベーターで3階へ。

降りると先にあつたのは超高級中国人クラブだった。

「これは王様、いらっしやいませ。」流暢な北京語でスレンダーの美人な女が現れた。

王は簡単に挨拶をすると店の一番奥のボックスへと向かった。

普段はここは日本でもこいつ等は中国人だ。中国語で喋られるとさっぱり分からない。日本語でさえ怪しいのであるから尚更だ。

「こちらのハンサムな方はどちら様かしら？初めてお見えになりま

すわね、王様。」

「うん、こいつはサンパウロから出張で静岡に来ているんだが訳有りでしばらく預かることになったブルノだ。」

「日本語はお分かりになりますか？」美人な女が話しかけてきた。

歳は30前後。恐らくこのママだろう。こつこつ店には来ないがガブリエルから噂は聞いていた。

「はい、少しだけ喋れます。」「まあ可愛い。王様、今日は彼についてよろしいでしょうか？」

「ああ、若い奴の方がお前も喜ぶと思って連れてきたんだ。粗相のないようにな、姫華。」

「初めましてブルノ様。私はこつこつ者です。」「一枚の名刺を渡された。」

汪 姫華 と書いてあった。「ヒメって呼ぶの。」「ヒ・・・メ。」「そう。」

よく見ると驚くほどの美人だった。美人といえばブラジルは美人の宝庫だ。

血の交わり具合は世界でも一番ではないだろうか？だけどアジア人の女はまたラテン人とは違う。

日系人はサンパウロでもよく見たが日本人とはまた違う。

この女は中国人だろうが世界は広いと感じた。女を見て世界を語っているのが自分でもおかしかった。

「こちらにはどのくらいいらっしゃるの?」「ええ・・・まだ分かりません。」

「まあ、ゆっくりしてってください。大阪は良い街ですよ。」「はい。」

「お酒は何を飲まれます?」「ビールで。」「かしこまりました。」なるほど、これがクラブか。高級なソファにテーブル。照明、床、グラス、女。全てが一流だった。

客層も金を持ってそんな奴ばかりだ。

「ブルノ。今日は君の歓迎会だ。大いに楽しんでくれていい。」「はい。」

「それにガブリエルには世話になってる。これは些細な恩返しだと思ってくれればいい。」

「ありがとうございます。しかし俺は役に立てる男だと思ってます。」

ガブリエルにこれは伝えたいという文章や単語などはアンダーラインを引いてもらったから練習した。

練習した日本語はすらすら言えるんだ。

「それは頼もしいな、ブルノ。君はサンパウロでは街の顔役だったらしいな？」

「唯の少年ギャングです。」「内容を聞いたが立派な・・・そうだな、プロのいわゆるマフィアと変わらんぞ？ブルノ。」

連れていたファミリーの連中は全員俺を見て笑った。

俺は「いや、俺たちが稼いでいた金は日本に比べると子供みたいなものです。」

「それは仕方ない。今の日本は飛ぶ鳥を落とす勢いで経済が動いている。世界の半分以上はアメリカと日本で回っていると言っても過言ではない。いずれ中国もそうなるだろう。」

「はい。」「君は金のなる木がある国に来たんだ。これはチャンスだと思わないとな。」

「頑張ります。」「食事も用意しました。」テーブルには10種類以上の北京料理が並ぶ。

21時頃まで店で飲んだら事務所に戻った。

帰りは王の乗るプレジデントに乗せてもらった。代わりに李がクラウンへと乗った。

帰りの車内で王が「もう少し飲んでいたかったが明日昼から会議があつてな。」

「俺も行きます。」「はっはっはっ。うん、もちろん見張りで来て

もらう。最初から取引の場に立つのは無理だぞ。」

「はい。」素直にそう言うのと助手席に乗っていた劉兄が「すぐに活躍してもらう。明日の取引は友好ファミリーとの会食だからお前はうちの弟と陳の3人で待機してもらう。」

「はい。」大阪では俺たちは絶対の存在ではない。サンパウロでもそうかも知れんがこの街は今や群雄割拠の時代に入った。東京の歌舞伎町もすごいらしい。」

「チャイニーズマフィアは今日日本の裏社会では大勢力だと聞きましたが。」

「同じチャイニーズでも上海や広東、四川のグループなど様々だ。それに台湾マフィア、韓国、ベトナムギャング、イラン系の不良外国人、きりがいいんだ。」

「しかし大阪はヤクザが多いと聞きました。」「そうだ。隣の神戸を中心とする日本最大勢力の山内ファミリーが存在する。今言っただけのうちを含む全外国勢力を足しても山内には潰される。」

「そ、そんなに大きいのですか?」「東にも進出しだしているという噂だからね。」

「まあ今は我等も力をつけなければいけないんだ。」「なるほど。」

「では山内以外の外国人ファミリーとうちのファミリーとの関係は?」

「何故そんなに興味があるんだ？」「これから消すのに友好ファミリー相手だとまずいから先に知りたいんです。」

車内が爆笑に包まれた。

俺は理解出来なかった。

「ふふふ、やる気十分だな、ブルノ。」劉兄が言った。

「最近では一番のギャグだったぜ。」劉弟が続いた。

「焦るな。時が来れば全部消す。」王の口元が少しだけ緩んだ。

俺は王という男の腹の底が読めなかった。ジョアキン以来だ。

王は年齢にして48歳。まだまだ若い。身長は170センチあるかないかの大柄ではなかったものの、その目は狼か野獣かというようなギラギラした光を放っていた。

普段は無表情なのだが時折見せる不敵な笑みが見たものに威圧を与える。

グスターボ、ジョアキン・・・他にも強い奴はたくさん見てきた。

だがこの王という男は今までに見たこともないようなオーラがあった。

1週間、1ヶ月と彼の付き人を続けていくうちに静岡に居るマカッコとの連絡は次第に少なくなっていくた・・・

第9章 安らぎ

ブルノが大阪へ行ってから2ヶ月は経つただろうか。

俺がバイトで入っているブラジリアンパブが移店となった。

店の業績が良く店の規模を大きくする為の移店であった。

以前は雑居ビルの1テナント程度の規模だったが次は1フロアまるまるの規模だからボックスも20席は置ける。

接客の女も3倍には増やさなければならぬし俺だけで回っていたウェイターも2人追加となった。

内装業者やカラオケ業者、酒屋など毎日目まぐるしく店を出入りしている。

オーナーは木田という日本人でケツ持ちに地元のヤクザが付いている。当然シヨバ代を払う代わりにトラブルを引き受けてもらう。

ブルノが心配ではあったが俺も店が忙しくなり構ってられなくなつた。

オープン前日の日に木田が話しかけてきた。

「勇、南米系の女の子が足りないんだよな。何とかならないか？」

俺の名前は 稲田 ジョアキン 勇。 日本では日本人に対しては

稲田 勇で通してる。

その方が分かりやすいし何より本名だ。

「はあ、名古屋の栄に南米人が集るでかいクラブがあるんですが一度スカウトに行ってみますよ。」

「悪いな。お前には新しく入ったウェイターの教育もしてもらってるしな。スタッフのスカウトが上手くいけばお前の時給を200円あげてやる。」

「せこい奴だ。」 「はい、ありがとうございます。頑張ってみます。」

明日からオープンだがしばらくは現行のスタッフの数で頑張るしかない。

今は日本人の女の子達にヘルプで入ってもらってるがこの店の売りは南米系女性専門の店だからいつまでという訳にもいかない。

善は急げという諺もある。

早速この日の開店準備を簡単に手伝つとオーナーに言って早引きさせてもらった。

理由は名古屋に入りスカウトするためである。

まだ午後20時である。

普段なら仕事の時間なので気分が良い。

近くの牛丼屋で腹ごしらえを済ますと新幹線で名古屋へ向かった。

名古屋駅に着いた頃には21時半を過ぎていた。

タクシーに乗り栄の繁華街まで向かった。

予定通り目的の店に入ると丁度DJが交代したところで店内は盛り上がりを見せていた。

カウンターで溜まっていた2人の女たちに酒を奢ると今の職を聞いた。

1人はペルー人でこの辺りのパブで働いているらしいが待遇は大したことはないらしい。

もう1人はウルグアイ人で男のところ転がり込んでいるらしい。彼女は無職だ。

2人に名刺を渡し営業時間内なら店へ電話を。それ以外はポケットベルを鳴らすように伝えた。

この時代は携帯電話を持っているのは企業の幹部や一部のビジネスマンなどで通話料は今とは比べ物にならないほど高く持ち歩くには重過ぎるほど大きかった。

大概は車に備え付けてあったが実用性は今と比べると低い。この時代では重宝したが。

そんな調子で深夜2時くらいまでスカウトを続けた。

完璧とまではいかないが20枚くらいは名刺を渡した。

3分の1くらいは連絡してくるだろう。

店を出ると始発まで時間つぶしにテレクラに転がり込んだ。漫画喫茶という便利な店はこの時代にはない。

部屋は異常に狭いが時間つぶしと興味本位で入ってみた。

フロントで店員に簡単な説明を受けてAVビデオを2本ほど借りて部屋に行った。

電話が繋がる前までビデオ鑑賞に浸っていた。

何回か鳴ったが早い者勝ちらしい。なかなか要領を得ず電話を取れなかったが1時間ほど経った頃にやっと繋がった。

「もしもし。」「……もしもし……貴方……何歳？」「21
だけど。」

「ああ良かった、若いのね。さっきからおっさんばっかでうんざり
してたのよ。」

「名古屋の人？」「違う、浜松よ。」「へえ、俺も今は名古屋なん
だけど住んでるのは静岡。」

「そうなんだ？名古屋か……今から会う？初回で会うとかした事

ないけど声から悪い人じゃなさそうって分かる・・・そういうのすぐ分かるよ。」

「以前にこれで何回か会った事ある?」「うん、2回ね。1回目は気持ち悪いオタク野郎。2回目はおじさん。」

「会ってからエッチとかしたの?」「する訳ないじゃん。食事だけでバイバイ。ま、でも気をつけないと変な奴もいるしね。」

「俺はあいにく車じゃないから動けないんだよね。始発出てからならいいけど。」

「私は持つてるわよ。迎えに行こうか?連絡先教えてよ。」

俺はポケベルの番号を教えた。確認の為に向こうが電話番号を送ってきた。

俺は外出許可をもらい外で公衆電話からその番号にかけた。

女が出た。「ああ。電話くれたんだ?嬉しい。今から行くからね。」

「それはいいが待ち合わせはどうする?」「赤の軽で行くから。ジーンズに黒の無地のTシャツを着ていくわ。貴方の服装は?」

「俺もジーンズに白のポロシャツだ。」「じゃテレビ塔の近くに居てて。今から1時間後に。」

別にすっぱかしても良かったがどうもこの女に惹かれた。

この女というより男を虜にってしまうような妖しい色気のあるその

声にやられた。

1時間ほどすると赤色の軽自動車が目の前に現れた。

中からは20代前半と思われる黒いTシャツを着た女が出てきて近づいてきた。

「あなたね？思ったよりハンサムで良かった。」「お世辞か？ま、こついう時はありがとつって言うのかな？」

「普通は男性から言うものなんだけどね。」クスツと笑うと車に乗るように施された。

声からは想像も出来ないような幼い顔とスタイルにギャップを感じた。

だが美人だった、というより可愛らしさが前面に出た顔立ちをしていた。

「私は麗子。あなたは？」「勇だ。国籍はブラジル人だな。」「日系？」「ああ。」

簡単な自己紹介の後はいよいよ沈黙が続いた。

「ねえ、普段からそんなに無口なの？」「そうだな・・・あまり喋らないかな。」

「男が会話をリードしないとモテないよ。」ニコツとこちらを向いて笑ってから運転に集中しだした。

笑顔が可愛い女だと思った。高速で静岡まで向かった。

着いた頃にはすっかり朝だった。

「貴方の家に行ってもいい？それとも別の女が居るからまずい？」

「そついうのは居ないんだがルームメイトが1人。といつても俺が居候してるんだ。」

「そうなんだ。だったらホテルに行こうか？」「お前、麗子だったな。麗子は初対面の男といきなりホテルに行つて抵抗はないのか？」

「あなたはハンサムなもの。それに男と別れて間もないから溜まってるのかもね。」

「正直なんだな。」俺は少し笑った。

「行きたくないの？」「行きたい。お前が好きだ。」「会つて間もないのに？全然会話もしてないのに？」

「それなら会話も全然してないのにホテルに誘うのもどうかと思うぞ？俺は恋愛とか駆け引きとか大嫌いなんだ。好きなら好き。SE Xしたけりややる。それだけだ。」

「嫌いじゃないよ、そついうの。」

高速道路の出口には大抵妖しげな光を放つたホテルがある。

休憩でチェックインしてから部屋に入ると急激に疲れが出た。

ベッドに倒れこむようにうつ伏せになった。

「疲れてる？私は平気よ。寝たいなら寝てもいいよ。」

「疲れてるときほどやりたくなくなるもんなんだよ。」そう言って彼女の腕を引き寄せて押し倒した。

立て続けに2回やった。

この女は今まで経験してきた女とはどこか違う。

ブラジル人と日本人の違いではなく上手く言えないが安心できるのである。

「ねえ、あなた疲れてる割りにはタフなね、ふふふ。」

「くだらない女なら2回も出来ないな。」「あ、初めてお世辞言った！」「お世辞じゃねえよ。」

数時間ほど眠ってから目を覚ますと麗子は昼の笑っていいともを鑑賞していた。

「あ、起きた？イビキすごく寝れなかったよ、ふふ。」「悪い。」

「今日の予定は？」「夜から店がオープンするんだ。」「何の？」

「ブラジリアンパブだ。店舗が多少大きくなったから最近はその準備で忙しかったんだ。」

「それだったら今日は大事な日じゃない。こんな所でゆっくりして大丈夫？家には戻らなくていいの？」

俺はこのでしゃばらない麗子の性格が大好きになった。

「いや、お前ともう少し一緒に居たい。麗子こそ大丈夫なのか？」

「私は仕事はあつてないようなもの。」「はあ？」「うふふ、いいの。ねえ・・・」

麗子が俺の物を触ってきた。

それから充分に愛し合った後は2人でシャワーを浴びて部屋を出た。彼女に名刺を渡して自宅か店、緊急はポケベルに連絡するように言った。

「よし。これでお互いの連絡先は交換出来たね。次はいつ会えるの？」

「いつでもいいぜ。」「じゃ、来週の今日。」「何だ？少し期間が空くんだな。」「

「寂しい？」「ああ。」「驚くほど素直な人なのね。男の人ってそういうの嫌いでしょ？」「

「俺は中途半端に女とは付き合わない。極端なんだよ。」「好きよ。」「そう言っつてキスすると俺をガブリエル宅まで送って帰って行った。

仕事まで多少時間があった。冷蔵庫にあるビールを飲み煙草に火を付けた。

麗子の仕事が気になった。

(仕事はあってないようなもの)

風俗嬢？ いや、何だろうと俺はあいつが好きだ。こういう感情は
ジュリア以来だ。

ジュリアを思い出すと同時にクソ兄弟、果ては義理の両親の事を思
い出した。

息子2人を亡くし俺は逃亡。俺の事を恨んでいるのだろうと考える
と少し憂鬱になった。

優しい両親だったのである。義理の息子である俺を可愛がってくれ
た。兄弟達からの虐待を見抜けなかったのは親失格かも分からない
が、大学まで行かせてくれた。

卒業するまでに日本に逃亡してる訳だが。

ブルノの事を思い出した。早速ガブリエルから聞いていた奴の居候
先に連絡したが応答はなかった。

ずっと連絡がつかない訳じゃなかった。電話番号の陳という男が応対
してくれたがいつも外出しているらしい。嘘をつくメリットもなか
ったし疑う気にもなれなかった。

なんでもボスから離れようとしならしい。

行方不明ではなかったので心配もさほどしてなかった。

むしろ忙しいこの時期にトラブルメーカーが近くに居ないのは彼には悪いが助かった。

ガブリエルや他のメンバーも心なしか嬉しそうだ。良い傾向ではないが今は、今だけは居なくても俺は気にならなかった。

店に入ると大忙しだった。ウェイターの教育に次から次へと入る注文をこなし閉店時には朝方になっていた。

木田は満足気に帰っていった。

店の後片付けをしているとポケベルが鳴ったので確認した。麗子の番号だった。

俺の嬉しそうな表情に気付いたのか店の女の1人、ロザンジェラが近寄ってきた。

「珍しい。いつもむすつとしてるのに誰からの連絡かしら？」

「そんなにむすつとしてるか？俺は。」「昨日まではね。何だか今日はジョアキンの顔が穏やかなのよね。」

「気のせいだろ？」「いや、あんた恋してるね。私には分かるよ。」

「そうか、分かるか。」

「ああ！やっぱり！！」「早く支度して帰れ。明日、いや今日だな。今夜も店入ってるんだろ？」

「誤魔化しても駄目。どんな子？あんたが惚れる女って興味あるわ。だって女に全く興味示した所見た事ないもの。」「俺だって人を好

きになる事はあるさ。」

「だからどんな女よ。」「天使だな。」ロザンジェラが爆笑した。

「笑うな、これでも本気だ。」そう言いながら俺もどうかしていると苦笑して言った。

「いいえ、でもあんたが人間らしい事が分かって私は嬉しいわ。また紹介してね。」

「ああ、近いうちにな。」

店を閉めると最寄の公衆電話から麗子の自宅へ掛けた。

「随分遅いじゃない？嫉妬しそうだった。」「店を閉めてたんだ。今日はオープンだったからな。それより期間空けるような事言ってたのにどうしたんだ？」

「それは会う時の話であって電話は毎日でもしたいわよ。」「電話するくらいなら会おう。」

「じゃ、今から浜松に来てくれる？」「ああ。」「ふふ、冗談。でも嬉しい。」

「何で冗談なんだ？」「怒らないで。私ね、今日は朝からバイトなの。スーパーのレジ係なんだけど終わるのが夕方なんだ。それからでもいいなら会えるわよ。」

「その時間だと俺も店があって中途半端だな。」「でしょ？バイトを2つ掛け持ちしてんだけど今日はスーパーの日。もう1つは名古屋

屋のクラブでバイトしてるの。妬いちゃう？」

「少しな。だが俺だって似たような業種じゃないか。その程度で妬くくらいなら付き合おうとは思わない。」「あっ！私の事を彼女だっと思ってってくれてるの？」「ああ。大好きだ。」「

「本当に愛情表現がストレートなのね。さすがは外人、ふふ。」「ふふ。これ、麗子の口癖な。」「

あまり似てなかったが麗子は笑った。「じゃ、今から少しだけ仮眠とって仕事に行くわ。勇と話したいから無理に起きたんだよ。」「ありがとう。早く会おうな。」「うん。」「

電話を切ってからニヤニヤしてる俺に気付いたのは数秒経ってからだった。

季節は秋になろうとしていた。この国には四季がある。その同時期・
・大阪ミナミでは縄張り争いというゲームが始まろうとしていた。

もちろん、そのゲームの主人公はブルノである。

第10章 上海の暗殺者

王が専用の携帯番号をブルノに教えたのはブルノが大阪に来て1ヶ月ほど経った頃である。

ブルノは精力的に働いた。

取立て、用心棒、大阪でのラテン人コミュニティの拡大。

王は最初にブルノを見た時は無鉄砲な喧嘩自慢としか見てなかった。

まだまだ大阪ではラテン人の数がこの当時は少なかった。

それだけに強力な中国マフィアのバックを持つブルノは疎らだった大阪でのラテン人グループのリーダーになっていた。

最初の頃は信用できそうな者を5人選んでシマの集金時同行させた。

シマ内の集金先はほとんどが北京系の中国スナック、ラウンジ、クラブで占める。

この界隈の北京系列の飲食店はほぼ王のファミリー絡みである。

ただし闇組織とは関わらないという北京出身の者も居る。他系列の中国マフィアやヤクザ、などに寝返らない限りは大目に見た。

中国、ブラジルとは違い日本の治安の良さは異常である。これも四方八方を海で囲まれている上に国民性として几帳面、真面目である

から管理も徹底している。

その治安大国も90年代に入り外国人が大量に日本に入ってきてからは怪しいものとなってきている。

ブルノが来る前はシマ内の集金回収率は60パーセント程度であった。

あまり暴力に訴えて追い込むと警察沙汰になる。そうなると外国人である自分等にとって不利になるのは自明の理であった。

シヨバ代とは用心棒料金であるから払いの悪い店からすると、別に店を荒らしに来る人が来ないのに何故払わなければいけないんだという意見が出る。

当然回収側はそういう店に対して嫌がらせをしたいが通報されて強制送還にでもなったら厄介だ。

しかしそれが本当の理由ではなかった。バックには日本のヤクザが付いていた。

地元のヤクザは構成員の数も豊富だし武器も調達は簡単だ。何より東の歌舞伎町内では中国人の台頭ぶりは東京のヤクザでもうかつに文句が言えない状況らしいのだが、大阪のヤクザは武闘派であるから警察関係無しに抗争になりやすい。

日本最大勢力のマフィアグループと言われる山内組も武闘派で売り続けここまでの地位を確立したのである。

ブルノに話を戻すが彼のパスポートやビザは正規のものでは無い。

パスポート内ではマテウスという名前であったから警察、行政などの前ではブルノはマテウスなのである。

日本の滞在先はガブリエル宅になっているから大阪には籍がない。

移民局からのチェックも現在はガブリエルが上手くやってくれてるみたいだから心配ない。

この頃の日本は中国人による大量の流入でブラジル人はそこまでマ
ークが厳しくなかった。

ヤクザと仲の良い店は後回しにしてそれ以外の店に入り浸り客にち
よっかいをかけるように仕向けた。

当然店側は警察を呼ぶとの事で電話するが電話そのものをブルノは
潰した。

スナック、北京の中華飯店などで店主の住所、家族の情報を押さえ
てあったので安全を保障するにはシヨバ代を黙って出すことだと勧
めた。

3割はこれで回収できたが残りの者たちは警察に通報した。

ブルノは週に1回ほどしか集金に出なかった。警察の目から逃れる
為であったから事務所にもるか外国人が集るクラブなどで他のラ
テン人の者に回収業務を代行させた。

電話を潰したメンバーでは同じ店には行かない。最初の頃は5人ほ
どであったスタッフも徐々に増やし今では12、3人は居る。

警察に通報した店には違うメンバーで店に行く。お仕置きとして店を破壊した。

店主も腕の一本を折ってやった。暴れては隠れて警察とのイタチごっこをしばらくやりながらミナミ界隈の回収業務に力を入れた。

ここまですると堅気の店はほとんど文句を言う事無く集金に応じるようになった。

ただヤクザをバックに付けている北京人達にはまだ手を出せなかった。

武力、財力、人数。どれをとっても抗争すればファミリーごと消し去る力を山内組は持っていた。

ただシマの集金の回収率が上がるにつれブルノのファミリー内での存在感は高まった。

金の羽振りも良くなったブルノは自分の息のかかったラテン人軍団を拡大させていった。ある日、王から呼び出しのベルが入ったので携帯に連絡すると北新地の北京料理屋に来るよう指示された。

北新地は大阪の代表的な歓楽街でありミナミとは対称にキタと呼ばれるエリアであり、北新地はキタエリア内では高級歓楽街として親しまれていた。

ブルノは堅苦しい上品が売りのキタの街よりミナミに馴染んでいた。が命令とあれば仕方ない。店に着くと奥まで店員に案内されテーブルに着いた。

テーブルには王、李、劉兄、汪 姫華が付いていた。

「忙しいところ呼び出して悪かったな、ブルノ。」「いえ、回収業務も落ち着いてきましたので最近は時間も作れるようになりました。」

「お前の仕事振りは評価している。最初は1ヶ月ほど匿って静岡に帰そうかと思ってたが今ではなくてはならない存在になったな。」

「ありがとうございます。」

「王様にそこまで言われるなんてブルノ様はお仕事ができるんですね。日本語もかなり上達されましたし。」

「いえ、回収業務は簡単な仕事です。ちょっとやり方を変えればすぐに結果が出せます。日本語は陳さんに教えてもらってるので随分理解出来るようになってきました。」

「奴の日本語なんて怪しいものだけだな。」ニヤリとして劉兄が言った。

「だからいいんです。反面教師というんですか？」一同が笑いに包まれた。

「今日呼び出したのは頼まれて欲しいことがあるんだ。」料理が出揃うと王が切り出した。

同時に李が2枚の写真を出してきたので俺は手に取った。

「中年の方が大阪における上海系のボス、楊だ。若い方はボディガ

「ドの趙。」

「この2人が邪魔だと？」俺は踏み込んだことを聞いた。

「さすがに理解が早いな。だが消すのがなかなか厄介だ。というのもモボスの楊もまだ40過ぎのバリバリの現役だからな。趙の方は大陸時代から通算して100以上の人間をあの世に送ってるらしい。」

汪 姫華の居る前でここまで踏み込んだ話をするという事は彼女がファミリー内でも完全に信用されているのが分かる。恐らくボスの愛人だろうと俺は読んだ。

「殺し屋としての評価に関しては俺はビビりません。何故ならその趙とかいう奴より恐ろしい殺人マシン達がサンパウロには少なくとも100人は居ます。」

「そうだろう、だから君に頼みたい。」王は表情を変えずに言った。

「上海の連中のシマや金の規模はどの程度ですか？」

「全面戦争すれば短期戦ならこちらが不利だ。人数、質において向こうの方が力がある。うちが勝っているのは経済力だな。だがそれがあるからこそ大阪内では上海と力が均等に保てる。」

そして李が初めて口を開いた。

「いいか、ここ半年間、上海側にスパイを1人潜らせていた。スパイからの伝言で2年ほど結んでいた共存協定を破棄する案が浮上しているらしい。」

「最近シマ内の飲食店で何件か店が荒らされた事を聞きましたがそれが関係してるんでしょうか？」

「多分な。上海側も所帯を保つ為には今の収入だけではキャパオーバーという事だろうな。」

李がいつになく多弁だった。

李 雷洸。この王ファミリー内においてはナンバー2に君臨する男だが曲者ぞろいのファミリー内で誰もこの男には逆らえなかった。

ボスがこの男に絶対の信頼を置いているのは冷静さであった。彼は決してびびらない。

ボスのボディガードである劉兄や喧嘩自慢の黄も李の視線に5秒も耐えない。

噂では両親を昔殺したことがあるらしい。ブルノは両親が殺された経験があるが殺すというのはどういう心境だったのか李に聞きたかったが聞けなかった。

早速ラテン人コミュニティ内で上海ファミリーの情報を集めるように指示した。

実際に指示するのは13人のメンバーのみだったが彼等の下の枝まで換算すると数百人は居る。

このコミュニティで調べさせれば楊と趙の事はある程度は分かるだろう。1週間もあれば充分だ。

その間に武器の調達を急いだ。これは香港から大阪ルートを確保し

ているうちのファミリーでも良質な銃が手に入りそうだったが、どうしてもデザートイーグルが欲しかった。

李は「それは今のうちの財政では高すぎて変えない。もっと安くいい銃もあるぞ。」

「いや、向こうも武装してますから少しでも有利に立ちたいんです。今コミュニケーションを総動員させてデザートイーグルを流してくれるイスラエル人を探しています。」

「そんな簡単に見つかるか？見つかったとしても高くて手が出せないと思う。」

「香港ルートとは違い直輸入なら間の手数料が省ける。それでも高けりゃ現地で直接買います。」

「お前が行くのか？」「行きたい所ですがマテウスとしては派手に動きたくありません。そこで現地に買い付けに行ける奴も同時に探してるんです。」

大阪で元軍隊出身のイスラエル人を見つけ出した。中古だが50A Eを3挺ほど確保出来るらしい。

値段も香港ルートの3分の1だ。李から購入の許可を貰い自分以外に腕の立つ2人にそれぞれ持たせた。

決行は3人でやる事になった。防弾チョッキもある。

コミュニケーションからの情報を受け取ったのはそれから5日後である。

どうやら上海のボスは週2回ほどスポーツジムに通っているという。曜日が不規則な為に1、2週間ほどパターンを測る為に様子を見させた。

趙に関しては当然専属のボディガードである為にスポーツジムでも目を光らせているだろう。

この2人を同時に消す必要がある。別々だと厄介な事になる。

楊は確かにその器量でファミリーを拡大させてきた。だが趙というパワーがあつてこそである。

どちらを逃してもややこしい事になる。作戦は必ず成功しなければならぬ。

ブルノは趙 双堅の情報を集めた。上海の郊外で生まれ育つた趙は早くに両親を亡くした。

兄と姉が居たが貧しかった為に兄は炭鉱へ、姉は身を売った。

スラムの子供達のリーダー格になった趙は窃盗、傷害を重ね中学生になる頃には100の不良を束ねる大物になっていた。

元々体格も良く腕っ節が強かった彼はスラムの4割ほどを根城にしていた。

当然年上のグループとも利害が重なってくる訳だが、趙のチームが発展途上する当時にスラムの覇権を握っていた神蛇というチームの幹部を1人残らず殺した。

ある者はデート中に刺され、ある者は深夜に自宅で首を切られた。幹部を殺られた残りのメンバー達は報復を計画したが頭の切れる者が皆無で尻尾を掴めずにいた。

その間に勢力拡大しながら趙は神蛇の残党をジワジワと追い詰めていった。

15歳になる頃には上海でも有名な不良ギャングに成り上がっていた。

悪のエリートでありマフィアからも散々スカウトされたが頑なに断った。

ある日、趙の兄が炭鉱で事故にあった。死の心配は無かったものの歩行に多少不自由してしまう後遺症が残ってしまった。

生活していく為に姉は堅気になる事を趙に勧めるが裏社会で生きていく旨を告げる。

兄の生活費に関しては自分が請け負うと姉をなだめて上海2大ファミリーの1つである九龍界へ加入する。

ギャングのメンバー達に関してはリーダーを一番身近な者に譲り今後は同盟関係を築いて行く事になった。

当時幹部の1人であった楊はまだ30代に差し掛かってきている油の乗った時期だった。

楊の仕事は正にプロフェッショナルと言う言葉がふさわしかった。

奴隷は活かさず殺さずを徹底した男であったから搾り取る事はしても殺しはしない。

ある程度の情けをかける事によって一定の信頼を下の者や顧客から得ていた。

趙は自然と楊に惹かれ下に付くようになる。

若かった趙は楊の気に入らない人間は全て消した。それが身内の者であつても。

この頃から上海界限で最凶の殺し屋に成長していく事になる。

やばい橋も何回も渡つた。一度敵のファミリーに捕まり拷問にあつた。

その時に左目をくりぬかれた。今現在は水晶の義眼を入れている。

趙の狂気はやがて上海中のギャングたちに知られていく事になる。

楊と趙は兄弟、親子、それ以上の感情を互いに持っていた。一蓮托生という言葉が一番近いのではないだろうか。

1980年代後半になるともう一つのファミリー双虎会が抗争をしかけてきた。

同盟を信じていた九龍界の幹部達は上海郊外の高級レストランで会合の席に着いたのだが、そこに待っていたのは双虎会の裏切りであつた。

マシンガン6挺を相手にどうしようもなかった。この襲撃で生き残ったのが楊再公である。

報復に趙はスラムの主だったメンバーからファミリーの残党を率いて敵ファミリーの幹部、家族を全て皆殺しにした。

これにより中国当局が動き趙は国外へ逃亡する。

最初に台湾の親戚を頼り2年後に蛇頭からパスポートを取得する。

偽造のパスポート及びIDは九龍界が払ってくれた。そこから日本へと逃れてきた。

ブルノは趙が一筋縄ではいかない事を確認した。

第11章 店長

木田の新しい店は「エキゾチック」と命名された。

俺は真剣にセンスを疑い反論したが聞いてはもらえなかった。

木田は自分で命名しているから気分がいいだろうが俺は気に入っていない上にこの店の名刺まで持たなければいけない。

何がエキゾチックだ、木田の野郎。

唯一の悩みはそれくらいで店は順調にスタッフも客も増えていった。

麗子との関係も充実しているし給料が増えた事も嬉しかった。

スタッフ集めのほとんどは俺の手柄でありスタッフが集るまでの間も前店舗時代のスタッフをうまく調整してやりくりした。

客からも受けが良かった。日系ブラジル人であり日本語も流暢に喋れたしどうやら俺は自分自身でも気付いていなかったが、接客業という仕事にいくらか魅力を感じ始めていた。

最初の頃はとにかく客の嫌味が苦しかった。

が、嫌味な客には逆にもっと近づいて接するようになった。

中にはチンピラも居た。俺は一般の日本人よりも背丈、体格ともに恵まれていた。

それを理由に絡んでくるチンピラが稀に居る。もちろん俺以外の純日本人スタッフが間に入ってくれるがそれでも暴れるクソが居る。

そんな客にも俺は結果、気に入られた。

ブルノなら殺していたかもしれない。俺は逃亡者の身だ。騒ぎを起こしたくなかった。

クレームもうまくこなして俺は木田というより上の組織に認められて店長に昇格した。

上の組織とは木田を操るヤクザ屋さんである。木田は雇われオーナーでありそれを初めて知ったのはエキゾチックオープンの話が出た頃である。

山内組系列の金松組がこの店の真のオーナーであり、組の幹部が手下3人を連れて前の店に来た時に俺は木田に連中を紹介された。

店長になるとウェイター、スタッフの女達の教育で忙殺された。売り上げも以前とは違い厳しく責任を問われた。

木田を通してだが確実に組は俺の手腕を認めていたので要求してくるのもハイレベルになっていった。

だがそれに忙殺されるのが嫌な気分ではなかった。

俺は働くという事になかなか魅力を感じていたのかもしれない。

父から聞いた話では祖父も働き者だったらしい。

願わくば店が俺のものになればどれだけ嬉しいだろう。

だが警沢は言ってもらえなかった。ブラジルからお尋ね者として日本に入国してきているのである。

兄と呼んだ従兄弟を2人殺しているのである。義妹も犯してしまった。

立派な犯罪者であるが日本では働き者の日系人でしかない。

俺が悪かったのだろうか？最近になって兄2人を殺した事、義妹を犯してしまった事に対して罪悪感に近いものを感じるようになった。

恐らく麗子と付き合うようになってからだろうか？俺は以前に比べて丸くなった。周囲の人間からも顔つきが変わったという。

新しい店がオープンしてから3ヶ月が経とうとしていた。

その間にブルノからの連絡はガブリエルへ数回あったほどだという。内容も不自由してないだの知り合いも増えたという程度でこっちへ戻ってくる気配はない。

ガブリエルや周りのマカツコの連中は態度ではつきりとは見せないが嬉しそうだったのは間違いない。

ブルノは喧嘩が強く頭も切れた。ただ、カツとなってしまう部分がある為にやはり頭が切れるのとはまた違うのかも知れない。

酒に酔うとガブリエルは「あいつは馬鹿だ。」と繰り返す。ブルノが去ってからだ。

やはり友人や下の者に慕われない人間はリーダーとしては不十分だった。

どうしても下の者に対する態度に思いやりがない。気に入らなければ暴力も当たり前だったし責任を転換する事も多々あった。

ブルノが大阪へ去った頃はこのような周りの心離れが気になっていたのだが、自分の仕事、プライベートが充実してくるとそんな事も忘れた。

忘れたというのは大げさだが金松組から木田をスルーして俺に直接接してくるようになった。

信頼され始めたのだろう。木田は以前に比べてどこか俺に対して遠慮がちな態度をとるようになった。

金松の経理係で山本という男が居た。この店の売り上げが良くなるにつれて俺に接近してくるようになった。

面長の顔に薄い眉毛、細い目に筋の通った鼻。薄い唇に白い肌。背丈は180ほどあるが細い。

だが金の管理は組長である金松からの信頼は絶大であった。

付き添いはいつも青木という20代半ばの血気盛んな青年が居る。

山本は40代の後半と言ったところか。年齢は聞いたことがないし

興味もない。

俺は忠実に奴へバックを支払っていた。静岡周辺では俺に因縁をつけてくるヤクザは居ない。

周辺の名古屋でも金松の名前は轟いておりそこそこいい顔が出来る。突然の山本の来訪に仕事前だった俺は慌てて従業員の控え室へ通した。

いつも通りに青木を連れて口を開いた。

「勇。この店の売り上げも安定してきた事だし次を考えていこうと思うんだが。」

「はあ。ですがこの店だけで精一杯です。従業員の教育はある程度落ち着いてきたんですが、俺が居ないとスケジュール管理も無茶苦茶で店を任せれる人材は育ってないですね。」

「三浦とかどうだ？若いが独立志向もあつて頑張れると思うがな。」

「確かにあいつは若いのにやる気もあるし飲み込みも早いので期待はしてますがまだまだですね。」

「お前も十分若いんだけどな？ふふ、まあいい。三浦はやれると思うぞ。ポジションが人を育てるんだ。お前からすれば甘いところはあるだろうが慣れていくもんだと思ってる。」

そう言われると俺なんて数ヶ月前に日本に来たにも関わらず今では店の店長。日本人の三浦からすれば確かに店長は任せても大丈夫か

もしなかった。

「で、仮に次の店舗を出すとすると業種はどういったもので？」

「せっかくこのブラジリアンパブが流行ってるんだ。今ではペルー、ウルグアイ、スペインなど多国籍のスタッフで充実してきている。これを名古屋で出せないか？」

「名古屋はまだうちのような店はないですね。俺の彼女も名古屋のクラブで働いているんですが小規模なブラジリアンパブやナイトクラブ、ライブハウスはあっても、ここまでの大規模なクラブは見たことがないと言ってました。」

「静岡と違い家賃は張るが客の多さは桁違いだ。無いものを何処よりも早く消費者に提供するのが賢い商売人だぞ。」

「名古屋には倉本組の力が強いと聞いたことがあります。」

意外に日本のヤクザの事を知ってるジョアキンに山本は感心した。

「確かにシマを借りる形になるが親父が向こうさんと10パーセントのバックを支払うことによって話がまとまった。」

「オープンの予定は？」 「再来月の頭。場所は俺が探すから決まり次第連絡を入れる。」

「分かりました。現地でのスタッフ集めを始めていかないと駄目ですね。三浦に店を任せてそちらに専念します。」

その夜に麗子に新規店のオープンを伝えた。

「すごいじゃない！今度は名古屋なんですよ？どンドン出世して
くわね？」

「俺は雇われ店長だ。次の店だって俺の店って訳じゃないんだ、素
直に喜べないなあ。」

「ここで頑張ってるのが認められたらもっと待遇が良くなって独立
出来るわよ！」

「そうかな？」「そうよ！あつごめんね、お店からベルだから切る
ね。好きよ。」

「おい、俺の稼ぎが良くなってきたら一緒に暮らそう。店も辞める。
」

「妬いてる？店で働いてること。」「まあいい気分じゃないな。だ
けど次の店は名古屋だからな。ちよくちよく会えそうだ。」「そう
よ。お店はもう少し居たいの？駄目？」

「俺は強制されるのが大嫌いだ。だからお前にも強制はしない。お
前が自分の意思で辞めたいと思ったときに辞めればいい。」「あり
がとう。理解力のある彼氏で良かったわ。」

「また電話する。」「切った後に少し苛立っているのが分かった。

口でそうは言っても自分の女が夜の街で働いている現実はあまり面
白くない。

スタッフ集めで名古屋に出る事が多くなった。山本からもテナント

探しの時に同行するように言われている。

山本から気に入られたのは間違いない、が青木からの嫉妬とも取れる視線が辛い。

本当に山本は男色なのかと勘繰るほど青木との行動が多い。

一度テナント探しの時にビルの管理人と山本が話し合っている間に青木から言われた。

「兄貴がお前のことをどう思ってるかは興味がねえ。ただ兄貴の足を引っ張ったり俺の気分を逆撫でするような真似したら殺すぞ、お前。」

「青木さん、待ってください。俺は……」「うるせえ。2度言わせるなよ。」

「俺はただ仕事に徹します。」「それでいい。」「青木がその後になんか文句を言ってくることはなかった。」

次の店のオープンが12月の5日に決まった。

この国に来て初めての冬だ。

店名は「beijingo ベイジヨ」に決まった。

スタッフの不足は初めは仕方がない。無事にオープンしてから2週

間ほどは休む暇も無くあつという間に時間が過ぎた。

麗子と最後に会ったのもオープンして翌日だったのでしばらく会ってない。

「もうすぐクリスマスね。少しくらいは時間空ける？店が終わってからでいいんだけど。」

「ああ、俺は女とクリスマスは過ごしたことがない。いいもんなのか？」

「さあ？楽しみね、ふふ。」「23日の営業が終わった時はイブだな。その時でいいか？」

「うん。私のほうが早く終わるだろうから喫茶店で待ってる。」「分かった。」

23日の営業が終わったのは午前3時。店の戸締りをして店へと向かうと麗子がカフェオレを飲みながら待っていた。

「お疲れ様。そしてはい、メリークリスマス。」「あつ、俺・・・何も用意してない。」

「ふふ。いいの、開けて！ほらっ。」「悪いな、明日にいいの買ってやる。」

「そんな事言っているの？私の要求するものは何でも買ってくれるの？」

「稼ぎの中からなら何でも買ってやる。」「冗談、ていつか早く開

けて。」

ピンク色のリボンを解きピンクの包装を開けると小箱が入っていた。小箱を開けるとシルバーのリングが入っていた。

「ほう、これはかっこいいな。」「でしょ？あんまり高級な物でもないんだけどね。」

クロスの形をしていて交差している部分にJのイニシャルがあった。

「これはジョアキンのJ?」「正解！この部分だけオーダーメイド。」

「こんな心のこもったプレゼントを貰うのは生まれて初めてだ。ありがとう麗子。」

俺は気が付くと彼女を抱きしめていた。

「ちよつと・・・苦しい。」「あ、すまん。」「ふふ、それに家じやないのよここは。」

気が付くと喫茶店の全ての客がニヤニヤしながらこちらを見ていた。店を出て麗子の自宅へ2人で戻り2人きりのクリスマスイブを過ごした。

本来なら24日の夜に過ごすのだろうが夜の仕事をしている2人にとっては夢の話だ。

すぐに日本に来て初めての年越しがやってきた。麗子は富山にある実家へ帰り俺はマカツコの連中とガブリエル宅で過ごすこととなった。

「結局、年内にブルノは戻ってこなかったな。」ガブリエルが切り出すと俺以外の3人のメンバー達はそれがどうしたと言わんばかりの表情をしていた。

「それとジョアキン。お前の稼ぎが良くなってこの家も生活がかなり楽になった。感謝する。」

メンバーの1人が「ブルノと違いお前は優秀で助かった。あの野郎は問題は起こすわ、癩癩持ちで気難しいからたまったものじゃねえ。」

「だけど仲間だろ？あいつはリーダーなんだ。」俺はすかさずフォローした。

「リーダー？はん、一度でもリーダーらしい事したか？確かに強い。けど強いのと人の上に立つのは全く違うんだよ。俺からすりゃジョアキン、ガブリエル。お前等が俺たちのリーダーだぜ。」

残りの2人も同意見らしく反論はないようだ。

それを聞いたガブリエルもまんざらではない表情だ。

「3日まで休みがある訳だが家に引きこもっても仕方がない。どこか行かないか？」俺が提案すると、

「温泉ってのはどうだ？ジョアキン、お前この国に来て温泉には行

った事がないだろう？」

「そうだな。噂には聞いたことがあるがでかくて気持ちいいんだろ
う？」

「今からホテルの予約しても遅いから日帰りで行かないか？静岡に
も温泉はたくさんある。」

レンタカーでバンを借りて御殿場へ向かった。静岡市内から日帰り
ならドライブも兼ねていい距離だ。

久しぶりにマカッコの連中と時間が過ごせたような気がした。

仕事、麗子……日本へ来てからマカッコというカテゴリーを忘
れてたような気がする。

御殿場へ向かう車内でもブルノの話題は一度も出なかった。

元旦の夜中に自宅へ戻ってくると全員が疲れ果てて寝た。

俺は妙に胸騒ぎがして寝れなかった。

翌日、ブルノが滞在している王の事務所へ電話したが陳といういつ
もの電話番が応対してブルノは外出していると言われた。

戻り次第に連絡してほしいとの旨を伝えポケットベルの番号を教え
た。

ブルノから連絡が返ってくる事はなかった……

第12章 プレゼント

年が明け楊と趙の2人を暗殺する計画は着々と進んでいた。

武器が揃うとブルノは実行部隊2人を汪のクラブへ連れて行った。

この店には最近よく通う。

ボスの愛人である汪 姫華もこの話には加わっており元々大陸で両親から身売りされてきたのを王が引き取った。

当然愛人の関係にはなつたが姫華も次第に王の持つ魅力に惹かれていった。

ブルノはこの店の女、いやスタッフ全てから気に入られていた。元々モデルと言っても遜色ない容姿にボスに対する忠実な姿勢からオーナーである姫華一同に好かれていた。

同行した2人の実行部隊はグアテマラ人のカルロス、ペルー人のレイモンド。

両者とも祖国では札付きの悪であったがブルノの強烈なカリスマに魅せられて今に至る。

ブルノがスペイン語で語る。

「お前等が思っている以上に今回の計画は簡単ではない。相手が超一級の暗殺者と大物マフィアだ。趙1人でも厄介なのに楊のボディガードは多い時には7、8人は付く。」

「俺たちはいつでも準備が出来てるからブルノがその気なら今から

でも動ける。」

カルロスが言うと、「国に帰れない事情がある俺たちにとっちゃ、チャイニーズマフィアぐらい屁でもねえよ。」とレイモンドが続く。

「確かに俺もサンパウロでは地獄を見てきたからチャイニーズくらいという意識が今まであった。だが今回の相手は世界の裏社会でも名前が売れている連中だ。楊が死ぬとビジネスで困る連中は山ほど居る。」

「かと言っていつまでも奴等の怖さを嘆いていても仕事にはならんぜ、ブルノ？」

レイモンドが言うとブルノがそれを諭すように「うちのコミュニティーの女1人に楊の通うジムへ潜り込ませている。」

「趙以外にボディガードは何人付いてる？」カルロスが問うと、「多くて2、3人。公共の場所だから大勢とはいかな。ただでさえ人相も悪いんだ。」

「趙以外のメンバーも腕が立つと思って良さそうだな。用心に越したことはない。」レイモンドはいけいけのカルロスに対して冷静な男であつたから実行部隊に入れた。

「さ、小難しい話は止めてたまには日本語で会話してよブルノ。」
姫華が同席していることを忘れていた。

「例の計画なんだけど確かに楊と趙の2人は恐ろしい噂が絶えないわね。彼等に人生を狂わされた中国人は100人じゃ効かないわ。それだけに私達に協力する者も多い。」

「私達つて姫華はこのママなんだから危険な事には関わらないほうがいい。」

ブルノは真剣に言っていた。この姫華にも少しは気が傾いた時期があったがそれ以上にボスである王をリスペクトしていた為にどうでも良かった。

「私を心配してくれてるの？でも私も王とは13年間もの年月を供にしてきたわ。覚悟はいつでも出来てる。」

ふとブルノは死ぬ覚悟なのかと思ったが基本的に女を信用したことはない。

土壇場で女は強い男に寝返る生き物だと信じ込んでいたしそれは今でもそうである。

何よりブルノはそれが女の正しい生き方だとも思っていた。

「それよりブルノ、あなた静岡に居るお友達とは連絡を取っているの？」

「いや・・・年が明けて一度も。」
「駄目よ。心配してるわよ、きつと。」

「・・・最近、奴等とは生きる道が違うんではないかと思うんだ。」

「友達なんでしょ？ブラジルの頃からの。」
「そうなんだが・・・俺を日本へ来てから匿ってくれたガブリエルはすっかり日本社会に溶け込んでいる。もうチームの事も忘れちゃってる。電話で話して

りや自然と分かった。」

「チームの事って？」「暴力という力を使って日本の裏社会でのし上がる。その力を持ってブラジルに凱旋帰国するんだ。」「暴力だけでは上には立てないわよ。」姫華がブルノの膝に手を乗せてきた。

「人はね、力だけで押さえつけても必ず反発するわ。」「反発出来ないくらいに押さえつけりゃいい。」「そうしてもいずれ遺恨が残るわ。私はブルノのような男たちをたくさん見てきたけど生き残ったものは居ない。」「俺は違う。」「みんなそう言うの。」

「ボスが何で皆に慕われているか分かる？」姫華は珍しく真剣な表情が続いている。

「皆を養っていく器の大きさだ。」「その器って何だと思う？力だけかな？」

「言葉には出来ないが俺に持ってないものを持つてるんだと思う。」

「ブルノ、あなたは静岡に居る仲間たちが自分から勝手に離れていったと思ってるんじゃない？」

自分の心の中を見透かされたようでブルノは少し苛立った。

「怒ってる。」と言うと姫華はいたずらっ子のように笑った。

「俺には1人親友と呼べる男が居た。」「居た？居るじゃないの？」

「いや、奴もまた・・・この国に来て腑抜けになった1人だ。ジヨアキン・・・あいつだけは・・・。」

「そう、良かった。」「は？何が？」「ブルノ、あなたはクール過ぎるのよ。人間ってそんな簡単に割り切って生きていける生き物じゃないのよ。どんなに強がってもね。そのジョアキンという人は貴方にとって大切な人なんだって分かった。」「なんで？」「嫉妬の顔をしてたから。」

「男相手に嫉妬するかよ。」「その彼も日本に来て変わったのは仕方ないのよ。人間は常に変わっていくのよ。」「俺は変わらない。両親が殺された瞬間から・・・いや、ボスと会って少し変わったかもな。裏社会でプロとして生きていこうと思えた。」自然に笑っていた。

その笑いは姫華を売った両親に似ていてあまり良いものではなかった。

初めてブルノという男に恐怖した瞬間だったかも知れない。楊がここ最近木曜日の夕方にジムへ来ることがパターン化してきたとの情報が入った。

とは言っても保障はない。

ブルノは次の木曜に照準を合わせることを決めた。

カルロスとレイモンドにはその旨を伝えて久しぶりに事務所へ戻った。

去年の暮れ辺りから難波付近の1ルームマンションを借りた。名義は外国人だと厳しいが王は何人か不動産の知り合いが居て簡単に手続きが済んだ。

初めて大阪に来てから4ヶ月近くが経とうとしている。事務所に入ると陳が笑顔で迎えてくれた。

「よう！久しぶりだな。お前宛の電話がたまにあっただが・・・
連絡してやれよ。」

「ああ、仕事が落ち着いたらな。」ブルノは今では陳とは同等の立場になっていた。

陳も最初はブルノが新人だと言う事で舐めていた部分はあったが、仕事ぶりを見て次第に頼ってくるようになり今ではブルノのほうが実質格上のように扱われている。

王の居る部屋へ行くと来週の木曜日に決行すると伝えた。

「なるほど、遂に来たな。」しかし木曜日に来ない可能性もありますので仮という事にしておいてください。」武器はジム内に持ち込むのは難しいな。前もって仕込むのか？」

「それも考えたんですがカルロスを1人車内で待たせて銃も車内に置いていきます。」

「別の方法でやるということかな？」「ええ、銃はあくまで保険です。この国では極力使わない方がいい事も学びました。」「それが利口だな。」

「私の知り合いの女が通っていますので紹介されて体験入会という形で潜ろうと思ってます。」

「頼む。」と短く言うと言書を読書を読書を読書と下がれという合図なのだ。

部屋から出ると劉弟が話しかけてきた。背は低いが睨まれると大概の人間は目をそらしたくなる様な眼光を持っている男だ。兄と違って血気盛ん過ぎて運転手に回された。

「ブルノ、今回の件で成功すりやお前は幹部に昇格出来ると思う。」

「そんな大げさな・・・」少し苦笑したが真面目な顔して劉弟は「俺は馬鹿だし喧嘩しか取り柄がなかった。兄がいなけりや大陸でチンピラして人生終了だったろうな。しかし人を見る目は確かだ。お前は悪の中でも別格の雰囲気を持つてる。」

「そんなに褒めても何も出ないぞ。」ブルノは劉弟に笑いかけて肩にポンと手を乗せると事務所を出て行った。

事務所の外に出ると李が近づいてきた。

「いよいよ上海の奴等とドンパチだな。」「はい。」「駅まで行くんだろ?」「ええ。」

「一緒に行こう、駅前の銀行に寄りたいたんだ。」「この男がこういう風に誘ってくるのは珍しかった。」

常にボスと一緒に行動しファミリーではボスに次ぐNO2の地位に居る。

他所のファミリーからは死神、殺し屋、悪魔などと比喻される事が多い。それだけ修羅場をくぐってきたのだらうし上海の趙なども一目置いてある男なのである。

歩きながら李が話してくる。

「ファミリーにすっかり馴染んだようだな。お前は何を考えている？」

「え？」「いや、ボスへの忠誠は本物だしファミリーへの貢献は皆が認めている所だ。だが、お前の頭にはもつと大きい事を企んでいるのだろうか？別に悪い意味で取るな。」

「……………李さん。俺はファミリーを裏切るような真似は……………」

最後まで言い終わる前に李がまた喋ってきた。

「気にするな、俺はただお前が唯のファミリーの構成員で終わるとは思っていないだけだ。今回のお前のターゲットである楊と趙はうちからすると宿敵というのかな？それを消せばファミリーでのお前の地位は俺と同等、いやそれ以上かもな。」

「待つてください。俺は李さんに逆らうなんて事は……………」

「だから俺はお前を責めてる訳じゃない。趙はな、言ってみればライバルみたいなもんなんだ。お前はブラジル人だからピンとこないだろうが、中国というのは広い。同じ国なのに北京と上海では言葉も人間も違う。同じ国である事が異常なのだ。」「分かります。」

「北京人と上海人は妙なライバル意識があつてな。」「サンパウロとリオみたいなものでしょうか？」「さあな。俺はブラジルは知らない。だが、裏社会では俺と趙はスーパースターのようなものだ。最も日本ではそこまで知られてないがな。」

「ミナミ界限で李さんの事を知らない裏家業の者はいないでしょう。」

「ブルノ、趙を甘くみるなよ。奴は地獄というものを知っている数少ない人間だ。もし、楊を殺りそこねたら厄介だろう。だが趙を殺りそこねたらお前の命は無いに等しい。殺るなら一度で仕留める。優先的に消すのは趙からだ!」「はい!」

いつの間にか駅周辺に着いていた。

「これを持っていけ。」ポンと李が投げたのは鍵だった。

右手で掴むとどうやらコインロッカーのキーらしい。

「李さん、これは?」「先週辺りに心斎橋駅で使ったコインロッカー覚えてるか?ほら、ボスのスーツケースを買った日に食事に行くのに預けたらう?」「はい、覚えてます。」

「そのキーだから開けてみる。損はない。」「ありがとうございませす。」

ニヤツと笑うと李は銀行へと消えていった。

ブルノは自宅に寄る前に例のコインロッカーへ向かった。

目的のロッカーの前に着くと鍵を差込み扉を開けた。中には長方形の包みが入ってあった。

多少重量を感じたが人通りの多いここで開けるのはまずいと思いきのまま自宅へと向かった。

心齋橋から難波までは電車で一駅の所だが歩いててもそう遠くはない。自宅へと徒歩で向かいながら色々考えていた。

ジョアキン、ガブリエル、メンバー達、サンパウロ………

今の生活から彼等の元に戻る事が考えれない。

何故だ？何時からこうなった？考えてみれば静岡でのくだらないヤクザからの逃亡で大阪に来た。だが、この街には何だか分からない俺を魅惑する何かがある。

数々の悪党を見てきた。しかし王ほどの悪党は見たことがない。ライバルの楊も相当だったが何というかスケールが違うのである。

個人的に趙より李の方が悪党としてはピュアだと思った。趙を知ってる訳ではないが写真で見たり仲間を使って奴を調べていく内に趙が唯の悪党ではないことに気付いた。

だが趙が李に唯一勝てないものがある。

李はファミリー全員から慕われているのに対し趙はファミリーから恐れられている。

つまり仲間ですら近寄りがたい悪党なのである。ブルノとどこか似ていた。

覚悟を決めるという意味では趙やブルノは簡単だろう。恐れるものがない怖いもの知らずで、仲間との友情やわだかまりがない。

だけど李がピンチに陥れば多くの人間が動くだろう。

俺や趙はどうか？むしろ喜ぶ人間が多いんじゃないか？俺を本気で心配する人間など・・・

ジヨアキン！

確かに俺の留守の間に何回も連絡があるらしいがガブリエルから聞くと奴に女が出来たらしい。

それも日本人の。

そしてヤクザから店を任せいい子ちゃんに成り下がったらしい。

俺は違う！誰にも媚は売らない。王という枠の中に入ってるから回りが一目置くのではなく、ブルノという人間を大阪、いや日本中に轟かせてやる！

自宅に着くとさっそく例の包みを開けてみた。

中には防弾チョッキが入っていた。簡単に手に入るチャチなもんじやなかった。

問題の木曜日が近づいていた。

必ず仕留める。

ブルノは考えながら眠りに落ちた。

第13章 暗雲

新店舗のベイジヨが閉店するのは朝方の6時だった。

今まで名古屋にこの類の店が無かった為に大盛況である。

家は栄の近くで借りた。それも山本が全て手配してくれた。

店からは徒歩でいける為に通勤は楽になった。麗子も帰るのが面倒な時は泊まりに来る。

自宅に戻ると留守番電話が2件入っていた。

1件目は麗子だった。

「今日そっちに寄ろうと思ったんだけど歯医者予約を入れてたのを忘れてたわ。昨日泊まった時に手鏡を忘れていったと思うけど捨てないでね。」

2件目、

「ガブリエルだ。少し気になることがあってな。時間が空いた時に連絡をくれないか？」

（なんだろう？珍しい。今の時間なら仕事から帰ってきて起きているはずだ。）

すぐガブリエル宅に電話すると案の定、彼は出た。

「よう、ガブリエル。留守電を今聞いてかけたんだが。」「仕事で疲れてるだろうに悪いな。」

「お前も仕事だったろ?」「ああ、それよりブルノの件なんだが。」
「どうした?何か行方は分かったか?」「以前同様に王のファミリ―内には居るらしいんだが、次回の取引の件で電話番号の陳と話したんだ。」
「それで?」「取引の方はいつも通りで時間と場所だけ決めただけだ。ついでにブルノの事を聞いたんだが、しばらくは大阪で過ごすみたいだ。家も別に借りたらしい。」

「それで連絡がつきにくかったんだな。しかしそれなら俺たちに何で連絡してこないんだろう?」「それなんだがな、ジョアキン。あいつの目指している場所と俺等が目指している場所。それが段々違うものだと気付いてきたんじゃないか?」「目指している場所?なんだそりゃ?」

「うん、俺は黄金の国ジパングに出稼ぎに来たんだ。一攫千金を狙ってな。ヤクザと関わってバックを払ってはいるがこの国じゃ仕方ないことだ。ましてや立場の弱い外国人だ。」

「それは分かっている。山本達と絡んでいなかったら今の俺等の生活は成り立たない。」

「ヤクザと絡みながらもそれなりに俺たちは収入を得ている。俺はこの3年で2千万の貯金をした。他の奴等には内緒だぞ、お前だから言ってるんだ。」
「ほう、そんなにもか。」

「サンパウロに居た頃では考えられない。日本だからここまで稼げたんだ。それはおそらくこれからだ。俺はブラジルに帰って豪遊できりゃいい。」
「俺もある程度稼いだらサンパウロに戻りたいもんだ。ただ俺は指名手配されてるだろうな。」

「そこでジヨアキン。サンパウロに戻るのには難しいかもしれないが、前は日系人だ。見た目も日本人とそう変わらねえ。金さえ積みゃお前は日本の国籍を取れんでもない。どうだ？お前次第なんだが。」
「ブラジルでお尋ね者だからこっちの人間になるのは悪くないな。だけどブラジルの捜査が日本に及ばないか心配になる事がある。」
俺は苦笑した。

「心配ねえ。ブラジルの警察如きの捜査で日本まで及ぶ事はねえし国籍も名前も金さえあれば手に入れることが出来る。例えば名前を売っちまった日本人も腐るほど居るし消えて失踪した奴等も居るしそれは何とかなる。」
「考えておく。それでブルノの目指してる場所とは？」

「あいつお前と日本に到着した頃に日本の裏社会を牛耳るような事を言ってる？覚えてないか？」

「ああ、あれは日本の在日ブラジル人の世界で頂点に立つという意味だろうか？」

「いや、あれはヤクザ、他の外国人マフィアを差し置いて自分がトップになるという意味だ。」

「それは日本の頂点？そんなのは無茶だ。」俺は笑った。「だってそうだろうか？日本で一番立場が強いのは日本人だ。当たり前の話だろう。」
「普通はな。でもあいつは普通じゃねえんだ。前に陳と話した時にブルノのことを聞いたんだが・・・どうも今上海の奴等と抗争間近らしいんだ。」

「・・・それにブルノが参加するのか？」
「多分な。陳とはもう一年以上以上の付き合いになるし俺にはこっそり教えてくれたんだが、ど

うやら近々何かが起きるらしい。もちろん公ではなく闇でな。陳がブルノは大物になる。遠い未来の事じゃない、すぐにだ。ってえらく興奮しててよ。」

「陳とは普段どんな奴なんだ？」「軽いな。いや、プロのマフィアだ。当然度胸もあつて怖いもの知らずなんだが、運転手、電話番号などがメインの男だ。ファミリー内でも下っ端で東洋人にしては感情豊かなとぼけた奴なんだよ。普段はな。だがブルノの話になると人が変わったみたいに奴を賛美しやがる。」「俺等はブルノの大阪でのその後を詳しく知らない。俺の勘だがあいつは静岡には戻ってこないのかもしれないな。」

「俺もそう思つたんだ。だけど何か不気味なんだよ。」「何故だ？」「いくら大阪で出世街道に乗ってきたとはいえ、簡単にマカツコを捨てる事が出来るか？奴はリーダーなんだぜ？」「ガブリエル、今ではお前がリーダーなんじゃないのか？」「茶化すな、ジョアキン。真面目な話だ。」「いや真剣だ。リーダーとはお前のような慎重で頭のいい奴がなるもんだ。下や仲間からの信頼も厚いし。」「それならお前の方がよっぽど・・・。」「いや、俺は母国で指名手配の身だ。ボスは身が綺麗に限る。」「俺が・・・ボス・・・？」「そうだ。普通の奴に貯金が2千万も貯めれるはずがないし、お前には俺にはない日本でのノウハウがある。自信を持って。」

「お、お前と喋つてすつきりしたよ。お前がそう言つてくれるなら俺はマカツコを俺の手で変えようと思う。もう喧嘩だけでのしているのは時代遅れだと思つてたんだ。俺はマカツコのメンバーで真つ当なビジネスがしたいんだ。」

「やれよ。ガブリエル。お前なら出来るし俺も協力する。一緒にブラジルへは帰れないが前向きに考えるとこっちで商売が上手くいけ

「ば俺は日本で、お前はブラジルでそれぞれの代表になるんだ。」
「そ・・・そいつはすげえ！お前となら出来る自信がある。お前は頭
がいいしな。」

「しかし、いいか？ブルノに対しては帰る席をちゃんと残してやる
んだ。たとえ戻ってこない可能性が高いとはいえどもだ。」
「なんで？あんな奴・・・」
「ガブリエル。お前や他のメンバーがあいつ
を良く思っていないのは分かった。でも奴は初代マカッコのリー
ダー、奴がいなければ俺たちは出会ってもいないし。ただ席を用意
してやるだけでいい。帰ってこなかったらそれまでだし帰ってきて
横暴な真似をするならその時に考えよう。」
「何を？」
「奴の処分
だ。」

「くつくつくつ。奴に処分か。いいな、それ。」
「おい、あくまで俺たちのビジネスを横取りしようとしてきた時のみだ。ま、それに
バックには金松組が付いているんだ。心配ないだろう。」

「もう俺はあいつの事は忘れるぜ。ジョアキン、お前もそうしろ。
今日はお前と話せて良かった。分かっていたんだが話さないと分か
らないこともあるし、良かったよ。今日は。」

「うん。俺も少し眠くなってきた。もう1時間も話し込んでいたん
だな。また連絡する。名古屋に寄った時は連絡くれ。」
「分かった。長電話で悪かったな。またな。」

電話を切ってから煙草に火を点けた。

普段はそんなに吸わないのだが疲れている時に吸いたいと思うこと
がある。

（ブルノの事は忘れるか・・・どうせあのまま静岡に居ていたと

してもメンバーとの溝は深くなっていたんだろうな。そう考えると大阪に行ったのは俺、ガブリエル、ブルノ、メンバー達。全員にとって良かったのだろうな。)

サンパウロには現在数十名ほどマカッコのメンバーが居る。

全て命知らずの強者達である。ガブリエルは頻繁に彼等と連絡を取りながら指示を出していた。

今サンパウロで代理のリーダーをやっているのが俺やブルノ、ガブリエルよりも3つ下の弟分、チアゴだった。

チアゴは喧嘩の強さは折り紙つきで俺たちには忠誠を誓っている。特にブルノと俺へのリスペクトは異常だったかもしれない。しかし今ガブリエルから指示されているのは全てブルノの意向だと思っているのだろう。いつかはチアゴにもブルノが離れていった事を伝えなければならぬ。いっそ死んでしまったと言うのも手かも知れない。

煙草を消してからミルクティを作った。これは麗子の影響だ。彼女はミルクティ中毒と言っても過言ではないほどよく飲む。

テレビをつけた。

今はもう朝の7時半頃、ニュースばかりだ。

俺は寝る前はテレビをつけっぱなしにして寝る。

少し明かりがないと安心して寝ることが出来ない体質になっているのだ。

くだらない………シーズンオフのプロ野球選手の特集だと？
サツカーをやれ、サツカーを。そういえば来年から日本のプロサツ
カーが開幕するらしい。

芸能ニュース……くだらない。色々チャンネルを替えてみたが似
たり寄ったりだ。

ミルクティを飲み干しソファで横になりながらウトウトしてきた。

いきなりポケベルが鳴った。

「くそつ、誰だこんな時間に。麗子だな？」とポケベルを見ると知
らない番号だった。

「見たことない番号だ。ここにかけろってか？市外局番が……
06、大阪？」

気になった俺はこの番号にかけた。

「ジョアキン。」「！！ブルノか！？」「久しぶりだな。声だけ聞
いたら元気そうで何よりだ。」「お前、今まで何回も王の事務所に
連絡したのに何してたんだ！？」

「そう大きい声を出すな。だからこうやって連絡したろ？それとボ
スの名前を呼び捨てにする事は許さねえ。お前であろうともだ。」「
ブルノ、こつちには帰ってこないのか？」

「別に帰ってきて欲しいって訳でもないんだろ？無理するなよ、ふ
ふ。」「何だ？その言い草は？俺はお前を心配……」「いいんだ
よ、ジョアキン。お前に心配されるほど俺は弱くはねえし、俺は今

までお前を守ってきてやっただろ？俺はこれからもお前を、いやお前たちマカツコを守ってやるうって思ってるんだ。」

「何の連絡も無しでいきなり何を言うかと思ったら・・・大阪でどういふ生活してるかも知らないし別に興味はねえ。はつきり言ってる。ブルノ。俺たちはお前の助けなんか要らないし何の連絡もなしに勝手なことを言うリーダーは必要ない。」

「言うじゃないか。それなら良かった。もうそっちに戻ることは考えてなかったんだ。お前等との馴れ合いも飽きたし、俺は本物の男の世界をやつと味わうことが出来るんだ。お前はいつまでもお子様でいい子にしてるんだな。」

「中国人ファミリーに入って飼いならされてるだけなんだろ？強がるな。」

「おい、お前さつきから生意気な口聞いているが元親友だからって舐めてると殺すぞ？」

「元親友か。お前に仲間は存在しない。ただ俺やガブリエルやマカツコの連中もお前にとったら手足に過ぎなかったんだな。」

「よく分かってるじゃないか。所詮、俺とお前等では人間の格が違うんだ。」

「それでお別れの連絡をくれたってか。泣けるな。」

「まあそういうことだからマカツコはお前が引き継ぐなり好きにする。」

「丁度良かった。お前の帰る場所が無くて困ってたんだ。」

俺は本当はそんな事思ってたが売り言葉に買い言葉だった。何よりブルノの言ってるのが気に食わなかった。

「ふふふ。ま、偶然道でバッタリ会わないように気をつける。いきなり殴ってやるからよ。」

「上等だ！」俺は勢いよく電話を切った。

「くそ……あの野郎、どういつつもりだ？」

ベッドに倒れこむと目を閉じて考えた。

何故こうなった？いつから？奴が大阪に行つてからは間違いない。いや、そもそも最初からこうなる事をあいつは望んでいたのか？ブラジルの頃から？分からない……もうどうでもいい。

「……………馬鹿野郎……………」

明日は山本から22時に事務所に来るように言われていた。

最近は何事無く店に貢献してきたので久しぶりに休みを貰った。明日は店に出ず事務所に直接来るように言われていたのだ。

金松組の事務所の場所は知っていたが呼ばれるのは初めてだ。

せっかく静岡の金松組の事務所に行くならガブリエルにも会えるし今日のブルノの電話の件も話したかった。

呼ばれているのが22時だったのでゆっくりできる。それまでに麗子と飯を食いに行こう。

深い眠りに落ちた。

テレビの音で目覚めたのは夕方の18時過ぎだった。

やけにテレビの音が騒がしい。

ニュースが相変わらずやっていた。

寝る前には朝のニュース。

起きたら夜のニュースか。俺は苦笑しながら身を起こした。

煙草を一本点ける。22時までは時間がある。麗子に電話をしようとした時・・・

「速報です！先ほど17時過ぎに大阪市内のスポーツジムで銃撃戦が行われた模様です！死者は3名。まだ詳しいニュースは入ってきていません。入り次第続報をお届けします。」

「たくつ、朝から物騒な事件だ。」

結局麗子との都合が合わずに家から直接事務所に行くことにした。

シャワーを浴びて外に出た。

ブルノが死んだのを知ったのは山本の事務所に着いてからである。

第14章 スポーツジムにて

木曜日。

午後1時に阪急梅田駅構内にある喫茶店に集合した。

「一応予定通りであれば今日の夕方に楊達がジムに来る。」ブルノがカルロスとレイモンドに流暢なスペイン語で切り出した。

ブルノは母国語のポルトガル語以外にスペイン語、イタリア語を操る。この2人はスペイン語圏の人間でありポルトガル語だと十分な意思疎通が出来ない。

「ブルノ、予定通り楊は午後4時ごろに梅田のスポーツジムに現れるんだな？」カルロスが問うと「そうだ。ジムには客の出入り口が1つだけで単純だからありがたい。予定通りカルロスはジムの入り口真向かいにあるベンチで待機。」

「ブルノとレイモンドがしくじった時の最後の保険が俺なんだよな？」「それだけじゃない。入り口付近には奴の手下たちがウヨウヨ居るから命がいくつあっても足りないんだぞ。」「そういうスリルはグアテマラ時代以来だから1年ぶり以上だな。」「カルロスは心底嬉しそうだった。」

「世の中には居るんだな。生と死の境界に居ること快感を覚える変態が。」「レイモンドが皮肉な笑いを浮かべると「おい、レイモンド。言ってくれるじゃないか。俺みたいな変態が居るからお前たちが安心して仕事出来るのによお。」

カルロスがグアテマラで向こうの麻薬組織を敵に回してしまった。麻薬組織のナンバー3を喧嘩で殺してしまったのである。カルロスは危険察知能力が半端ではない。怖いもの知らずで無鉄砲に見えても死が近づくと頭の中で警報が鳴る。子供の頃からである。

その能力がありながらスリルを求める。死が自分に近づいてくると体が疼くのである。

ナンバー3を殺した後に車でメキシコ国境へ急いだ。

ジワジワと自分に対して死が近づいてくるのが快感だった。メキシコ国境では堂々とカルロスのIDで入国した。殺したのは酒場である。目撃者は少なく見積もっても20名は居たであろう。当然カルロスを知ってる者も少なくはない。

追跡する組織の連中はその時間に酒場に居た連中を全て集めさせた。脅す必要も無く全員カルロスがメキシコ国境へ向かったのを証言した。カルロスが究極のマゾである事を全員が知っていたので口止めすらされていない。むしろカルロスからすれば変な気を使って庇うんじゃないねえと言うのを皆分かっているからである。

組織は国境へ急いだ。10分ほど前にカルロスが国境を通過したのを職員が教えてくれた。信じられない事に職員に行き先を告げていた住所を、カルロスは組織が追ってきたらその住所を伝えて欲しいと依頼した。

ちゃんとした住所まで教えてくれるのは誰が考えても罠だと思うだろう。組織はこの場所にカルロスの息の掛かった連中がウヨウヨ居ると感じて応援を依頼した。組織のリーダーはメキシコ国内に居る友好組織に自分の追跡部隊を援護するように頼んだ。

カルロスは問題の住所の位置まで辿り着くと理髪店に入っていた。髪を坊主に変えて髭も剃ってもらった。ナンバー3を殺した時に財布を丸々頂戴していたからカット料に加えチップをカット料の5倍払った。

理髪店の服を髪をカットする前に売ってもらった。誰がどう見てもこの店の店員にしか見えなかった。自分の着ていた服はカットする前に処分させた。この親父にも迷惑がかからぬように。

服を処分しに行った店員にもチップをやった。この無意味な行動は全てカルロスが快感を感じる為だけに行っている。カット代やチップは逃げるのに無駄な経費である。住所を告げなければまず捕まることはない。職員を組織が脅して行き先を知った所で時間はもっと稼げたはずだ。

案の定、外では組織の追跡部隊にメキシコの応援部隊が到着していた。

告げていた住所は理髪店の真隣にあるアパートである。このアパートは昔カルロスがメキシコで2年ほど住んで居た。その住所を覚えていた理由だけでこの場所に決めた。

カルロスは堂々と店を出た。アパート入り口にたむろしていた組織の連中が全てカルロスに視線を向けた。

理髪店の服を纏った坊主頭のカルロスに誰も気付くことはなかった。

カルロスの乗ってきた車がアパート前に止められていたが組織の連

中の1人が窓ガラスを叩き割り中を調べている。

何人かはアパート内を探している。残りがたむろしている連中だ。そのままタクシーを拾って空港へ向かった。

（あれだけの人数が居ながら俺に気付きもしなかった。）タクシーの車内、それを考えただけでニヤニヤするカルロス。そのまま空港からアメリカへと向かった。

アメリカに住む従兄弟を頼り1年ほど暮らしてから日系人の中古車屋で働く。

そこで日系人の同僚やボスから日本の事を教えてもらおうと日本に行きたいことを伝える。理由はヤクザである。マフィアとは違う異質な存在。こいつ等なら俺にもっと快感を与えてくれると。

チャイニーズマフィアの存在も聞いた。アメリカ国内では様々な都市にチャイニーズマフィアが存在する。その凶暴さはロシアンマフィアやイタリアンマフィアに勝るとも劣らない。特にサンフランシスコやカナダではチャイニーズマフィアの勢力が日々拡大していた。

ヤクザの居る日本にも大量の大陸人が押し寄せているらしい。カルロスは刺激を求めていた。死ぬことなんか怖くはない。死にたいのかも知れない。だが未だに死んでいない。

アメリカではカラーギャングの抗争が激化していた。カルロスが住んでいたロスでは毎日のようにギャングたちが命を落としていった。カルロスはチカーノ（アメリカで生まれ育ったメキシコ系アメリカ人）のチームに入り暗殺業を手がけるようになっていた。

中古車屋の顔は表向き。裏では数々のカラーギャングを葬り去る殺し屋になっていた。

そろそろ敵チーム達に自分の存在を知られてきた気がした。前回同様、そのスリルを味わいながらカナダ国境へと向かいアラスカ、日本へと流れた。

観光ビザしか持っていないカルロスは東京で暗殺業の仕事に就いた。バックは東京のヤクザである。何人ものチャイニーズマフィアを地獄へ送ってきた。

足がつきそうになったので大阪へ逃亡するように勧めてきた。ほとぼりが冷めるまで大阪で家を借りてくれたのである。ヤクザからすれば厄介なチャイニーズ達を大多数葬ってくれたカルロスの家を借りることくらい安かった。

ヤクザ達から偽造のビザを手配してもらっていたので滞在も自由である。日本はまだまだ危機管理には甘く多くの不良外国人を入国させた。安全神話と呼ばれた日本も90年代を境に治安が悪化していった。その最大の原因が不良外国人の台頭である。

レイモンドと知り合ったのは大阪である。ペルーから大阪の大学に通っていたレイモンドはブルノのコミュニティを知り加わってきた人間であるから比較的最近に仲間になった。

ブルノがレイモンドを気に入ったのはその冷静沈着であると同時に度胸もあるからである。

元々ペルーでは貧民街に育った為に犯罪と共に育ってきた。ただ彼は出来が良かった為に裕福な親戚が大学へのチャンスをくれた。賢

易業を営む叔父は日本への留学を勧めてきた。

カルロスはコミュニティ内で大阪に伝説のグアテマラ人の殺し屋が居るということでブルノが誘った。

最凶の3人であった。

そして必ず成功するはずだった……

予定通り午後4時ごろにジムへ現れた楊は趙だけを連れていつも通り中へ入って行った。

ブルノとレイモンドは5分ほど間を置いてジム内へ入った。予定通りカルロスのみ向かいのベンチで待機していた。

レイモンドはロッカーから浴室へブルノはトレーニングルームへと向かった。

あらかじめ2人は偽造のIDで会員となり2週間前からジムへ通っていた。名前も住所もデタラメであったがまだまだこの時代はチェックも甘かった。

レイモンドは浴用タオルにデザートイーグルを包んで浴室で待機していた。

ブルノがトレーニングルームに入るとベンチプレスの一隅に2人はいた。

趙が楊のトレーニングをサポートしている。

(今襲えば普通なら楽勝だな。無論、他の客にジムのスタッフに顔を割れる事を恐れなければ……)

ブルノはリスクを恐れない。
ウィンドブレイカーの右のポケットにはデザートイーグルがある。

（問題は横に居る趙1人のみ。こいつが厄介だ。）

ベンチプレスから斜め向かいに位置する太ももを強化する器具に腰掛け様子を覗った。

（今のところ全く隙がない。これが趙か。長年、楊のボディガードをこなしてきてどれほど修羅場をくぐったかは分からないが・・・サンパウロ時代に敵対していたギャングチーム、ヴェルメーリヨ。ここは俺が出てくるまでは街のナンバー1のチームだった。そのリーダーがグスターボ。）

トレーニングに夢中になっている楊と一瞬たりとも隙を与えない趙を横目でマークしながらかつてのライバルを思い出していた。

（奴は未だにチームの頭か？もう死んだか？それなら俺のところに必ず情報が入ってくる。奴の右腕でベネジッタが居たな。あの野郎には手こずった。何しろうちのメンバー10人は奴に葬られたからな。趙は・・・ベネジッタよりも手強い。）

ブルノは昔から危険察知能力、人を見る目。こういったものが他人より優れていた。

何より悪の匂いを嗅ぐ嗅覚は異常である。王に対して感じたオーラ。趙に対して感じた殺気。

1セットを終えた楊は何やら趙と話している。耳を澄ますとフォームがどうだとか・・・そうやって油断してたらいいとブルノは機会を待った。

チャンスは一瞬だろう。最大の山場は浴室だ。

トレーニングの後は必ず浴室で汗を流す。当然趙も同行する訳だが彼等は丸腰になる。

つまり今回の作戦はレイモンドによる働きが重要である。

趙が居る限りトレーニングルームでの襲撃は難しい。

趙は必ず銃を携帯している。趙を殺つてしまえば楊は死んだも同然であるがこのトレーニングルームに別の部下が入り込んでいる可能性は否定できない。

何と言っても上海の大物である。

楊の兄が上海では市長すらも取り込んでいるという大物マフィアである。

ブルノの危険の警報がどこかで大きくなっていた。

(嫌な感じがする・・・)

コミュニティの女の1人を2ヶ月前からジムに潜り込ませていた。趙以外にトレーニングルームでメンバーらしき者は1人も見たことがないという。ブルノは用心深い。そのおかげで今まで生き残つてこれた。周りから見れば無鉄砲で何も考えていないように見えるのだらう。ブルノはマカッコの下の人間に良くない事を言われているのを知っていた。というより感じていたというほうが近い。

唯一、自分に対して同等に、いや、友達で居れたのはジョアキンだけだったのかも知れない。

（あいつは俺に対して嘘を言ったことが無かった唯一の人間だったな。いやまてよ、一度だけあったな。）

学生の頃仲間内で特定の彼女を作るとダサイという風潮が一時期だけ流行った。ジョアキンはこっそり居ただけど尻尾が遂につかめなかった。

（今でも奴はその話題を振れば否定するだろうが俺は知ってる。）

気付いたら太ももがパンパンになっていた。

（疲れているのか俺は？こんな大事な時に。目の前に尊敬する自分のボスが目の敵にしている男が居る。）

今度は休憩用のベンチに座った。彼等は鉄アレイで鏡を見ながらナルシストの世界に入ってる。

（空手の帰り道。俺は本屋で大量の本を盗んだ。大学生くらいに売れば結構な額になった。ジョアキンは見張り役。俺がいつもどおりカバンに詰めて出ようとした時に親父に肩を掴まれた。ジョアキンは親父の足を払って俺の腕を引っ張ってくれたんだな。）

（正直、俺の肩を掴んだ親父の力が強くて一瞬腰が引けそうになった・・・あいつ落ちて着いてやがったな。その後も見張りの役やって初めて活躍出来るチャンスだとか言いやがって。絶対に威張るやつじゃなかったな。）

（結局・・・強がってみても俺はあいつに依存してたんだ。何一つ俺が勝てたものなんてなかったのかもな。下の奴は皆あいつを慕っ

てた。それが・・・妬ましかったのか・・・羨ましかったんだな・・・)

(きつと・・・何一つ勝てない俺がこの日本で、裏の世界で誰よりも大物になって・・・あいつに自慢したかっただけなのかもな・・・)

ブルノは胸の筋肉を鍛える器具に腰掛けてゆっくりとトレーニングした。

(楊と趙だって親子以上の関係だろう。見えない絆があるような気がする。俺は親を失って唯一の家族がマカツコだったんだろうな。だけど全員俺の目を見ないで顔色だけを見ていた。唯一の例外がジョアキンだった。)

(俺は何であいつ等から離れたんだ。まだ俺が心を入れ替えれば巧くやれただろう。結局ジョアキン以外の者は俺の負けん気な性格と自分勝手な行動に嫌気がさしていたんだろう。だけど居た！1人だけ・・・)

(李の兄貴。俺に防弾チョッキをくれた。これは俺に生き延びろというメッセージなんだろう。兄貴は趙の恐ろしさを誰よりも知っていた。一対一なら負けるかもしれないも。この趙を消すのは李の兄貴を越える意味でも大事な事なんだ。)

楊達がトレーニングルームから離れようとした。

ロッカールームから浴室に行くだろう。数分ほどしてからブルノ

はロッカールームへと向かった。ロッカールーム内にはトイレがある。そこに入って鍵を閉めた。予定通りにいけばレイモンドが始末するはずだ。騒ぎになるだろう。そこで俺が出て確認に行く。万一外に出てもカルロスが居る。必ず殺る。成功する。絶対に。

銃声がした。

一度だけ？

浴室へと向かった。もう関係ない。服を着ていたが銃声がした以上急がなければならない。

可能性は2つ。

レイモンドが殺られたか2人のうち1人を殺ったか。

男が1人倒れている。レイモンド……

趙が俺に発砲してきた。姿勢を低くして銃を構えた。

弾は俺の頭の左斜め上を通った。

趙へ発砲した。趙は王を守るように後ろへ下がった。距離は12、3メートル。一気に駆けて趙のドタマにお見舞いしてやる。

駆けた瞬間後ろから衝撃を受けた。

俺の背中にとてつもない衝撃。

後ろに手下が居た。手下は裸に銃を持っていた。他の客にまぎれて

いた。俺の予感はずだった。誰かが裏切った。そうとしか思えなかった。だが幸い防弾チョッキがあった。大丈夫なはずだった。何か体の中にメスが入ったような感覚がした。

楊と趙が笑ってるのが見えた。懸命に銃を奴等に向けようと思うのだがどうにも動かない。2度目の衝撃が背中を襲った。次は前に倒れた。

（あっけなかったな・・・ジョアキン。すまん。）

もうブルノが考えることはなかった。

ブルノが放った弾が他の客に命中して死者は3人となった。

楊達はこの場から消えた。警察が来れば被害者でも銃刀法違反に正当防衛とはいえ殺人罪に問われる。

外国人2人に一般の日本人1人が銃弾の犠牲になるショッキングな事件としてニュースで流れた。

浴室に居た他の客達の証言からアジア系の外国人らしき集団が被害者のラテン人達を殺したらしい。先に手を出したのがラテン人。マフィアの抗争として取り扱われた。

アジア系のマフィアたちの行方はまだ分かっていない。

「勇。うちと友好を結んでいる大阪の王んところの若い奴が死んだ。お前の連れだろう。」

「ブルノが？冗談でしょう？」「これを見る。」青木がテレビの電源を入れる。

大阪 スポーツジムでの惨劇と生々しいテロップが写っていた。南米系の男性2人と日本人客1人が死亡。何れも銃での被弾が原因。犯罪専門の評論家がニュースキャスターと話している。

「まさか？」

俺はその場で崩れた。

第15章 ヒーロー

―午後 18時過ぎ 大阪―

「ブルノがしくじったって?」「はい。梅田駅周辺ではマスコミが大騒ぎです。」

王と劉兄が帝国ホテルのラウンジにて北京語で話していた。

「しかし奴ほどの男が2人の護衛を連れてしくじるなんて……」
「裏社会では上には上が居ます。楊や趙がブルノよりも上回っていたということでしょう。」「一般人も1人巻き込んだらいいな。」
「ええ。今回の件で大阪府警はカンカンですよ。しばらくは目立つた事は出来ません。それどころか楊のファミリーとはこれまで以上に敵対が激しくなっていくでしょう。」

王は右手に持った空のワイングラスをじっと見つめていた。

―午後 17時過ぎ 梅田 スポーツジム―

小柄の、背は160センチほどの年配の男が鑑識の男と話していた。

「死者は全員が銃で被弾。2人は南米系ラテン人と思われませんが身元の確認を急いでいます。もう1人は大阪市内で自営業を営む経営者です。恐らくヤクザ同士の抗争に巻き込まれたとは思えません。」
「気の毒やな……」年配の男の目は鋭い。府警では蠅と^{サンリ}呼ばれるベテラン刑事である。ノンキャリアだがヤクザ方面に顔は広く数

百を超える事件を解決してきた。ただ容疑者への尋問時に暴力をふるったり上司に手をあげたりと、およそ出世には程遠い刑事生活を送ってきた。

名前を山岸と言う。「ラテン人達とドンパチしてたんは中国人で間違いないんやな?」「はい。他の一般客への聞き込みでアジア系の外国人達だったと。」

山岸は3人の死体の写真を後ほど自分のデスクの方へ届けるように頼んだ。それから聞き込みを開始した。

「すみません。たまたまその場に居ただけで残ってもらって。」「ほんまに困るで。わしもな、長い事大阪で生きてきたから少々の喧嘩やトラブルは慣れっこや。しゃーけどジムの風呂場でドンパチ始まるなんて誰が予想できまっか?」「目撃者の1人である60過ぎと思われる男性が勢いよく話し出した。

「刑事さん、これ・・・大事件ですやる?」「心なしか男性の目はワクワクしているらしい。不謹慎だが確かに平和な日本において目の前で3人も人間が死ぬなんてまず有り得ない。

「名前は下川さんでしたな?先ほども同じ質問されたやろうけどもう一回聞かせてもらえますか?」「もう3回目なんやで・・・」とまんざらでもなさげに話し始めた。

「わしがサウナに入ってたんや。」「すみません、話の途中で。その時は浴室には何人の人間が居ましたか?」「割と広い浴室やから正確には保障出来んけど7、8人くらいやったと思うわ。さっきも言うたけどわしが入ったときは外人さんは1人だけやったね。」「なるほど。」「サウナに入って10分くらい経った頃に一発目の銃

声や。そらびつくりしたわ。」「サウナ内には下川さん1人だけや
ったんですか?」「ああ、そうや。平日の夕方やしそないに人はお
りまへんで。」「

(2人のラテン人は仲間やと見て間違いないな。)

「わし怖くてなあ。サウナのドアの窓口覗いたんや。湯気で曇って
たけどタオルで拭いてな。」「賢明です。サウナから出たら撃たれ
てた可能性は高かったでしょう。しかし窓も覗かずにそういう場合
は体を出るだけ低い位置に持つていつて下さい、次からいいん
で。」「アホ!2度とごめんやわ。まあ今考えると無茶な行動した
な。」「しかし我々にとつては貴重な情報になりますから助かりま
す。」「ほうか?」「下川は嬉しそうだった。

「窓から覗いたら違う外人さんが入ってきたんや。サウナルームは
入り口から近いから。」「なるほど。それがもう1人の死体である
外国人に間違いないですね?」「間違いない。この浴室には外人さ
んは2人だけやった。いや外人さんを撃つたのが言葉は喋らん
かったけど黒ずくめの男でえらい髪の毛が長かったんや。」「他に
特徴は?」「背は普通で痩せ型やったな。顔は。狐のような目
をしていた。」「髪の毛はどれくらい長かったですか?」「肩くら
いまであったわ。」「何発撃ちましたか?」「2発や。間違いない。
背中からドスンと。」「

「その位置は。」「山岸が入り口付近まで歩いていき」「この辺り
ですね?」「下川に確認した。

「そうや。丁度その辺やな。」「確かにサウナルームの窓口からこ
こなら十分に見えますな。」「何や刑事はん。わしの言うてる事疑
つてまんのか?」「今言うてることは信じてます。ただ何でも闇雲

に信じてたら刑事は出来ませんなあ？下川さん。」「そらそうや。」「下川が苦笑してから」「それから怖くて急いでサウナルームの奥へ隠れたんや。」「そりゃ怖いでもんなあ。わしも非番やったらそうするかもしれない。冗談ですけど。」「ほんま税金分くらいは働いてもらわな困るで、刑事さん。」「

後は下川から有益な情報は得られなかった。

2人目の目撃者は佐野という40代前半のサラリーマンであった。

「外回りの営業職をやってるんですが今日はよ終わりました直帰する言うてジムに来たんです。」「営業職やりながら立派ですなあ。体が資本ですからね。私も見習わないといけませんねえ。」「まあいつも通りトレーニングを終えてから浴室へ行きました。頭を洗ってる時に一発目の銃の音がしたんです。怖いというより銃の音とは分からなかったですね。最初は。」「

「その時に貴方の居た場所を教えてください。」「佐野が左奥にある体を洗う一角へ指を指した。」「銃声を聞いてからどうしましたか？」「銃やとは思わんでマイペースにシャンプーを洗い落としていました。もちろん何の音かは知りたかったから音の方へ視線をやったら人が血を出して倒れてたんです。」「銃を撃った人間を見ましたか？」「それが・・・他にも体洗ってたりシャンプーしてた人何人居たんやけど誰も見てないんです。」「しかし2人組のアジア系外国人が居たと聞いてますが？」「

「せやけど銃は持ってなかつたんですよ。2人とも裸やったし。」「それから1人外国人が浴室へ入ってきたと思いますが倒れている男性を見てからどれくらい時間がありましたか？」「すぐですね。数秒くらいでガラガラと入り口が開いたから。」「その直後に2発

目の発砲ですね?」「そう、間もなく3発目も。長髪の男が表情1つ変えずに。」「ほかに気付いたことはありませんか?」「そうですねえ、特にこれと言っていないんですけど、2人の外国人は多分中国語を喋ってたと思います。こう見えても海外出張もたまにあるので中国語なのは間違いないと思います。」「いや有益な情報ありがとうございます。」「

決定的な情報などなかったが店のスタッフにも聞き込みをしなければならなかった。何より大事な事は2人の中国人の行方が分からない事。そして黒ずくめの長髪男。

制服を着た一人の若い警察官が近寄ってきた。「山岸刑事。スタッフへの聞き込みを一通り終えたので報告よろしいでしょうか?」「おう。」「消えた2人の外国人の顧客情報から調べた記録によると名前が中国系で林 卓吾と鄭 世民。どちらも偽名でした。住所などはホテルになってましてホテル側にも連絡は取りましたがそのような中国人が泊まった記録はないとの事です。」「つまりスポーツジム側が入会する時にちゃんと調べてなかったと。」「はい。1年間分の月会費を前払いしてたそうで信用してしまつたとの事です。」「困るなあ。そういう事では。まあ今更ジム側を責めても消えてしまつてからでは遅いわな。」「

もう一度現場を確認してから山岸はジムを後にした。

(一番分からののが2人目の外人が羽織つてた防弾チョッキ。錘で細工した紛い物。着けてた本人は気付いていなかったと思うのが自然やわな。」「

午後21時過ぎ 東京 歌舞伎町1

歌舞伎町。欲望と喧騒が渦巻く東洋随一の大都会である。

この1つの歌舞伎町という限られたエリアの中で1000人近くのヤクザの構成員。その拠点は大小合わせて100箇所を超える。加えて外国人マフィアの台頭である。台湾系、北京、上海が地盤を大きくする中で最近では福建や東北の人間も増えつつある。韓国、マレーシアなどのマフィアも存在する。

ープリンスホテル 1104号室ー

「まずはお疲れ様。今回は本当によくやってくれた。」楊 再公が話を切り出した。

「ありがとうございます。お役に立てて良かった。」眼光の鋭い長髪男がお辞儀を楊に対し頭を下げた。「お前がこの話をもちかけてきたのは意外だったけどな。」趙 双堅が口を開いた。

「正直、楊氏やお前は俺にとっては目の上の人だ。たんこぶだったがそれ以上に脅威なのはブルノだった。」

「王もまさか右腕のお前とボディガードの劉が寝返ったとは思ってもないだろうな。」勘違いしないでくれよ、趙。今回はブルノを消す為の同盟だったんだ。「それは分かるがブルノの件もただの過程であってその先は……いや止めておこう。」趙の口元が緩んだ。

「……何が言いたんだ？」眼光の鋭い男の声が凄んだ。

「止めておけ、趙、李。しかし李よ。銃を携帯してきたのは予想外だったな?」「私もそれは意外でした。劉によるとボスへの報告時に銃は車内に置いて行くと。1人を車内に残すと言ってたみたいで

す。「その1人がベンチの男だな？行方が分からんらしいじゃないか。変なことを口走らない内に消した方がいいな。」「手配はしますが今のところ行方が分かりません。」「しかしお前の防弾チョッキであの狂犬も少しは信用したんじゃないのか？」「決行時に車は使わずに銃も持ち込んだのが気になります。もし防弾チョッキが手に入り気が変わったのならいいのですが。」「どちらにしても奴は死んだ。満足な結果に終わってよかった。お前の報告がなければ俺は殺られていたかも知れん。」「あのブルノの相棒を殺った小僧は何者ですか？」

「奴はうちのルーキーで周 燕祥。まだ15歳だ。」「あの若さで大したものです。人を殺す時の躊躇の無さが趙以上だと思えます。」「おいおい、李。お前俺が誰を何人殺したとか見たことあるかのように話してくれるじゃないか。」「見てなくても大体分かる。」「ほう、立派な分析能力だなあ？李。俺があの小僧に劣つてるとも言いたいのか？」「だから思うと言った。断定はしていない。」「お前等は今後は顔を合わせないほうがいいな。」「楊が苦笑した。

午後21時20分 大阪 ミナミ

王が汪 姫華の店に入ってから小一時間が経とうとしていた。

「今日は随分難しい顔をされてますが何か良くないことでもありましたか？」「ブルノが死んだ。背中から2発。ニユースを見ていないのか？」「！！あの人か？だって……つい最近もお友達を連れてここに飲みにいらしていたのに……」「そうか。お前の出勤時間からするとニユースのタイミングが合わなかったんだな。今日の夕方の話だ。」「やはり上海の連に……」

「おい、劉。李は行方をくりました3人の内の生き残り、カルロス

だったか？奴を探しているんだな？」「はい。事件の真相を聞く必要がありますし変に警察やメディアにうちのファミリーの事を話されても厄介です。」「李のポケットベルに先ほどこの店の番号を入れたんだが掛かってこないな。こんな事は初めてだ。何か知ってるか？」「いえ、ただ・・・神戸の女のところかも知れません。長い間会っていないと愚痴ってましたから・・・。」「このような状況でか？それに1人の女に入れ込むような男ではないはずだ。劉、まさかとは思うが私に隠し事などしていないだろうな？」「誓ってありません。」「それならいい。」王の表情は全く変わらない。

「ブルノさんのお友達には連絡しておいた方がいいんじゃないやありませんか？」姫華が切り出した。

「陳から静岡の金松組の方に連絡してるはずだ。ブルノの一番の親友が金松のところに出入りしてるらしい。」「俺も何度かブルノから聞いたことがあります。確かジョアキンとか。」「うむ。ブルノは感情というか何か心が壊れている印象を受けた。だがジョアキンという若者の話をするときだけは笑顔だったな。」「仲の良いお友達だったのですね。」

― ほぼ同時刻 大阪 王ファミリー事務所 ―

事務所の一階にある薄暗い小部屋で陳と黄が向かい合っていた。

「黄の兄貴。俺はブルノがしくじるなんて絶対に信じれません。」
「信じられない事が当たり前のように起こるのが俺たちの生きている世界なんだ。受け入れるしかあるまい。」「劉弟とも言っていた事なんですが・・・。」「何だ、言ってみろ。」「ここ最近、李の兄貴の様子がおかしいと思いませんか？」「・・・何故そう思ったんだ？」「何ていうか・・・ブルノが来る前とその後では明らか

に李の兄貴は違った。「お前等も感じてたのか？それなら劉兄もどこかおかしいんだ。2人とも以前に比べてお互いお喋りになった気がする。あくまで心なし程度だが。」「何か隠してますね。劉弟はボスと自分の兄貴を連れてミナミへ行ってますが奴が帰ってきたら3人で話が見たいんです。」「待て。俺等の思い過ごしもあるしもう少し様子を見たほうがいい。」「ええ、だけど気になります。ブルノは無愛想で最初はすかした奴だと思ってましたが、ボスに対する忠誠はファミリーの誰よりも強かったし仕事も出来た。きつと・・・自分の保身に李の兄貴が先走ったなんてこと・・・」「やめとけ。」「黄が途中で制した。

「今日話した件は俺とお前と劉弟の心の中に閉まっておく。俺は俺なりに探ってみるからお前は無茶するな。むしろ自然の方がお前の場合は警戒されない。用心して李と劉兄の裏を探ってみる。」「分かりました。黄の兄貴に相談して良かった。他のメンバー達には伏せておきます。」「今のところはな・・・・」

王のファミリーの構成員は全員で20名ほど居る。抗争時や何かの記念日には全員集るが普段は大阪市内で散らばっている。

―深夜 1時 静岡―

国道のファミリーストランでガブリエルと落ち合った。

「今回の件、どう思う?」「正直言って自業自得だ。だが腐ってもマカツコの元リーダーである事は間違いないし俺たちは売られた喧嘩は全て買って来た。」「俺は口ではこう言いつつもガブリエルがブルノの件で怒っているのが何故か嬉しかった。

「ニューヨークでは一般人客を除くともう1人南米人が居たらしいな。それがブルノの相棒だったんだろうな、ジョアキン。」「多分な。あいつ・・・外国に来てまでマカツコからの武闘派スタイルを貫いて・・・死んだな・・・」俺は山本からこの件を聞かされニユーアを見た直後に体が崩れた・・・何と言っても事件の直前にブルノと電話で会話している。あいつが景気のいい事言ってたのは今回のスポーツジムの事だったんだな。

「やはり後味悪いよな・・・殺られたんなら報復をしてもいいんだぜ?」「待て、せつかく日本で基盤を築いて、やっと俺たちも軌道に乗ってきたのに安易に復讐なんて馬鹿げてる。」「このままブルノは犬死するのか?俺たちは元の仲間を見捨てるようなチームだったのか?ジョアキン、いつからヤワになったんだ?」「そんな威勢のいい姿をブルノが生きている内に見せてやりたかったな?ガブリエル。」「ガブリエルはうつむいてただ黙った。」

ホットコーヒーを少し飲んでから俺は一枚の便箋をガブリエルに出した。「これは?」「俺が山本の兄貴に頼んで楊ファミリーの主要な人物を書いてもらった。もちろん、知ってる範囲でだが。」「そうか、さすがジョアキンだな。こいつ等を皆殺しにしてやるうぜ。」「無論。だがすぐには殺さない。俺は何かそんな単純な事ではないような気がする。俺は大阪に行こうと思う。今回の件はじっくり時間をかけて調べた方がいい。」「ぬるいぜ。メンバーなら静岡内の外人連中だけで10人以上の荒くれが集る!」

知らぬ間に大声で怒鳴っていた俺等のテーブルに客からの視線が集った。

「落ち着くんだ、ガブリエル。お前らしくないぞ。いいか?よく聞け。お前が今日から2代目のマカツコのリーダーだ。」「!?!?」「」

なんで？って顔してるな。日本ではお前が絶対だ。お前が俺等よりも日本で基盤を築き今では多くのヤクザや外国人達がお前のことを知ってるしリスペクトしている。」俺はガブリエルに嘘は言ってなかった。事実、彼は俺たちが日本に来た頃にはすでに中部地方の外国人コミュニティでは名前が売れていた。

「あのなあ、ジョアキン。俺はお前の方がふさわしいと思ってたんだ。」「違うな。俺は常にナンバー2でないと駄目なんだ。2番目だから生きる。そんな人間だつて居るんだ。」「ジョアキン、俺はどうしたらいい？」「ドンと構えてもらつてたらいい。今までどおりでいい。もちろん他のメンバーには通達する。俺は大阪に飛んで上海のファミリーに入る。」「中に入って食い散らかすんだな？俺が出来ることは？」「出来るだけ関西でのヤクザ、マフィアなどの情報を調べて随時俺に連絡してほしい。それと時期がくればチアゴを呼ぶ。」「あいつはブルノ2世と言っても過言ではないからな分かった。それと危ないと思つたら無茶はしないでくれ。」「お前はボスなんだからドンと構えている。ナンバー2の俺を信じる。俺はしくじつたことがない。」

「上海のファミリーに入るのなら王のところへは接触しないほうがいいな。お前の名前は知られているが幸い顔は知られていないし、お前は日本人だと言えばそれで通じるから何とかなるだろう。」「稲田 勇。これが俺の名前だ。」「分かった。俺のコミュニティ内に大阪のラテン人コミュニティに通じている奴が居る。そいつを通して俺から連絡しといてやるからそこを頼れ。お前はとにかく荷造りしておけ。コミュニティに連絡が行き次第お前に大阪へのGOサインを出してやる。」「必ず・・・殺る。」俺は右拳を胸に当てた。ガブリエルもそれに習った。

レストランを出てガブリエルと別れると自宅へタクシーで戻った。

麗子の声が聞きたかったが彼女の幼馴染が結婚して3次会に出席中なのだ。幸せな時間を壊してやりたくない。

俺は大阪への荷造りをしながら1つのアルバムを開いた。

俺は幼少の頃から叔母の家で育ったが写真なんて写りたくなかった。写真はその時の心理を的確に映す。どの写真も俺の顔はロボットだった。だが、マカッコの皆で撮った写真では俺の顔は笑顔が多かった。中学時代の空手の稽古の帰りの事……

「おい、今日あそこに行こうぜ。」「あの本屋はまずい。あの本屋の主人はな、俺のクラスメートの親父なんだよ、ブルノ。」「関係ねえ。お前は見張りでいい。入り口付近でポリシアが来ないか見てるだけでいい。」

結局入り口で左右の確認をしているとブルノが血相抱えてダツシユしてきた。俺も釣られて走った。全力で走りかけたその時に後ろからブルノの声が聞こえてきた。「離せ！このクソ親父！！」後ろを振り返るとブルノの肘が親父の頬にヒットしていた。

駆けた。

内臓や心臓が口から出てくるんじゃないかと思うほど駆けた。

ブルノとははぐれたがマカッコのアジトに行けば大量の本を床に置き並べていた。「よう、遅かったなジョアキン。見てくれよ、この本の数。参考書とファッション雑誌をメインにパクって来た。半額で売れば学生に大人気だ。その金で皆で映画を観に行こう！」

夕暮れ。

高校に入ってから初めての夏、バス停で知り合ったとびつきり可愛い女の子と俺はある場所で再会する約束をしたんだ。

彼女は学校が同じ方面にある女子高に通っていた。ジュリア以来の恋だったかも知れない。

「笑わせるなよ？ ジョアキン。」ブルノが苦しそうに俯いて震えて笑ってる。「何がおかしい？ もしお前がその女を見たらおっ立つんだろうなあ？ お前スケベだから。」「俺がスケベなのは認めるがお前の知り合った女が不細工なものも認める、ジョアキン。」その場に居たマカツコのメンバーが全員笑った。ガブリエルも居た。まだ中学生の頃のチアゴだった。

「不細工じゃなかったら次の空手の稽古に全裸で来て貰おうか、ブルノ君。」

この頃辺りがブルノ達と絡んだ最後の時期だった。高校の連れのデイエゴがブルノにぶん殴られるまで疎遠になっていた。特に喧嘩をした訳でもなくデイエゴと絡んでるのがその時期は面白かったんだ。ブルノはブルノでナイトクラブ内での喧嘩三昧に興味津々だった。

「こらジョアキン。何時まで待たせる気だ？ そのビッチは。」「待て。もうすぐ来る。今日、この時間に約束したんだ。」

「もう1時間になる。帰るぞ。お前はおちよくられたんだよ。」「待て。もう少し。」「心配するな。そのビッチの通ってる高校を教えろ。さらってきてお前の目の前に裸にして連れてきてやる。」

待て。止めてくれ。必ず来る。」「お前のプライドをスタスタにしたそのビッチを必ず殺してやる。」「

「・・・泣くな。ジョアキン。」俺は何故だか涙がこの時止まらなかつた。

ずっと・・・随分長い間、俺は泣いていたような気がする。

荷造りするだけだったのに涙が何時までも止まらない。悲しみが後から徐々に伝わってくる事なんてあるのだろうか？違う。ブルノが死んだ事を意識的に受け入れてなかつただけなのだ。アルバムを通して数々のフラッシュバックが俺の中で行き交う内に奴の死が、現実、初めて受け入れて涙がドツと流れる。止まらない。

20歳以降のアルバムを開いていた。

この頃の写真の俺の眼はいくらか曇っていた。丁度マリアの件の数週間前くらいに撮った奴だ。俺は泣き疲れてココアを飲んだ。ガキの頃に叔母が作ってくれたホットココア。2人の義兄達と1人の義妹のおかげで何もいい思い出がなかつた家で唯一叔母が作ってくれるホットココアは好きだった。これを飲むと落ち着くのである。ガキの頃はよく泣いた。泣く度に叔母がこれを作ってくれたから意識的に泣いてた、その内。

ブルノがマカツコのアジト前でメンバー全員で撮った唯一の写真。総勢27名。全員が銃で武装してカメラに突きつけてる写真。真ん中に居るブルノが着ている服はお洒落だ。あいつはお洒落だった。

何を着けていても似合う上にお洒落だ。

必ず

楊と趙の息の根を止める。

俺の逆鱗に触れた。

踏んでは鳴らない物を踏んだ。

ヒーローだったんだ。

ブルノが！

俺はまた泣いていた・・・・・・・・

第16章 大阪

ガブリエルと別れてから数日後に俺は大阪へと舞い降りた。

名古屋よりも人が多いんじゃないだろうか？ブルノの目にはこの街はどう写っていたんだろう？

麗子へは大阪の出店の為に市場調査で来ていると嘘をついている。あいつは俺がブラジルでギャング行為をやっていたのを知らない。知る必要もない。俺のわがままなんだろうが知られたくない。

金松組にも了承を得ている。俺が急に抜けて名古屋の新店舗が頼りなくなると言われたが、俺が短期間とはいえ育てていた下のスタッフがようやく潮らしくなってきた。それに金松組も同盟している王のファミリーがピンチなのだ。俺が上海の組織を潰すのにデメリツトはない。むしろ金松組の親団体である関西、いや日本の極道の頂点に立つ山内組が楊率いる上海マフィアを快く思っ居なかった。北京側の王は日本の裏社会の主は山内組だと認めていた。その上で筋を通し細々と利益を得ていた。もちろん王も満足いく利益ではなかったが外国人として日本で生きていくのにはコンクリートジャングルの力関係を知り尽くしていなければならなかった。

ガブリエルから毎月マカツコとして経費を出すと言ってくれたが俺はこの国に来て150万ほど貯金するのに成功した。大阪市内でも場所を選ばなければ安い賃貸は山ほどある。だが狙いの上海系の楊の事務所はキタ（梅田、北新地、兔我野町、東通、お初天神など色んな顔を持つ大阪の繁華街）に構えており俺はなるべく安い賃貸を探したがどうにも見つからない。裏社会を知るには歓楽街に居ればそれっぽい人間たちと接触出来るのである。

場所はミナミなのだが東心斎橋の宗右衛門町付近で俺の希望する家賃で住めるところがあるらしい。俺はまず大阪に長期間滞在する事を仮定して出来るだけ家賃は抑えたかった。元々ファベラの連中とつるんで生きている。衛生的に俺は汚くても気にならないし知らない街だ。関係ない。それに繁華街のど真ん中だからブルノの事を知ってる奴も近くに居るだろうし交通の便もいい。生活するのにも困らない。

俺の今日からの城は双龍会館であり6階は屋上になっておりプレハブが一件。シャワーは付いていないが安い銭湯が近所にあるからいい。飯もそこらで食べる。とにかく歓楽街で寝泊りできるスペースがあればいいのだ。

最低限の生活用品と家具を揃え買い物に出かけた。今日の買い物は服である。大阪に来てから4日ほどになるが心斎橋付近の地理は少しずつ分かってきた。デパートの紳士服のフロアに行くと一度は名前を聞いたことがあるブランド店が並んでいた。上下黒のシングルのスーツ、靴、ネクタイ、シャツ、ベルト、靴下。一通り買つと家に戻ってシングルベッドに腰掛けた。

煙草に火をつける。こつちに来る日に麗子からZIPPOライターをくれた。いい女だ。しばらく会えないかと思うと辛いような気がするが今回はブルノを殺した楊の息の根を止めなければいけない。その為に楊のファミリー入りをしなければならぬが組織に入る前に組織の外の繋がりを作っておかなければならなかった。ガブリエルからブルノがまとめていたラテン人の集いを紹介してくれた。もうそいつ等にはガブリエルから連絡が届いていることだろう。

5件ほど電話番号を聞いていた。リストには名前、電話番号、住所

が書かれていた。その中で住所が心齋橋である店名らしき名前が載っていた。手始めにここから行ってみよう。クラブ 恋^{れん}。

住所に従って目的地に辿り着くと美竹ビルという巨大で美しい雑居ビルがあった。

中に入りエレベーターに乗る。3階へ降りるとクラブ 恋と書かれた看板を発見した。クラブ、種類は少し違うが俺も風俗店の店長が元の仕事だ。いや、現役と言っても良い。だが客として行くのは初めてかも知れない。店に入ると廊下から見ると意外に店舗が大きいことに驚いた。

ママらしき女がこちらへ寄ってくる。「お一人様ですか?」「ああ。

「見たところ・・・日本人の方かと存じますが一見様でしょうか?」「ブルノっていう男を知ってるかい?」「・・・! 貴方はジョアキンさんですか?」勘のいい姫華はすぐに理解した。

「あいつから俺の事聞いてたの?」「そりゃもう・・・どうぞ、こちらへ。」随分ブルノはこの店からは気に入られていたらしい。この店主の女が俺に向けた視線が一気に変わった。さつきまではむしろ警戒の目をしていたから。中国人と日本人が仲が悪いと聞いたことはあるが・・・俺はブラジル人だからあまり分らない。

奥のボックス席に案内してもらおうとグラスのビールを頼んだ。姫華が俺の向かいに座り名刺をくれた。いい女だった。スタイル、声、ルックス、男なら一度はこういう女と一夜を過ごしてみたいと思うのだろう。特に中年受けする顔だ。俺はあまり興味がない。タイプではないという事だろう。

「ブルノさんはよくこのお店を使ってくれていました。出来ればこの店のオーナーの王老師にも会っていただきたいのですが。」「そ

れは願ったり適ったりです。出来るだけブルノが接触していた人間とは会っておきたいんです。いや、事件をメディアを通してでしか情報を得てないのです。」

「親友ですから当然でしょう。貴方は日系ブラジル人でしたね？ですから日本語が上手なんですネ。」ブルノは下手だったでしょう。あいつはまともに喋れなかったはずだ。「でも王老師が彼に日本語を教えたんですよ。私も。最後の方はほぼ問題なく扱ってましたから。」

「汪 姫華さんでしたよね？」姫華がかまいません。「まず楊再公とはどんな男なんですか？」私も話したことはないんですが中国人コミュニテイ内では裏社会のカリスマのように語られています。老師も同様ですが。「その2人が大阪の中国人社会のトップでしょうか？」他にも勢力をつけてきているようですが今のところはそうです。私よりも老師や他のファミリーの方たちとも話せばもっと分かりますと思います。ずっと一緒に居たんですから。」「そうだね。」

酒を適量で飲みながら姫華にブルノとの思い出話を話していると出入り口のドアが開いた。40代くらいの紳士が先頭に。後ろから背の高い眼光の鋭い男と体格のいい男。そしてオールバックの男が最後についてきた。

紳士は俺の目を見るなり「私が王と申します。ブルノは可愛そうな事をしました。」「いえ、奴が決めた事なので仕方ありません。」それを聞いてニコツと笑うと王は「山本さんから連絡を頂いております。かなり優秀な男なのでよろしくと。信頼されているのですね。」「いえ、しがない風俗店の店長をしていました。それ以上でも以下でもない男です。」「貴方は日系ブラジル人としてこちらに来た

のでしょう。数ヶ月しか経ってないのに店の店長を任されるのは大したものですよ。」

隣の眼光の鋭い男が話しかけてきた。「李だ。ブルノとは親しくさせてもらっていた。楊のファミリーの事で聞きたいことがある。何でも言ってくれ。」俺は頷くと次にオールバックの男が「俺は劉。弟が下で車の番をしてやがるが俺もブルノの件は残念だと思っている。出来る限り協力させてもらうぜ。」「黄だ。」体格のいかつい男が握手してきた。

俺の分析は既に始まっていた。このメンバーが王のファミリーの首脳陣だ。ブルノと同じ所属らしいが味方とは限らない。俺には持つて生まれた才能がある。人の顔色を覗ってきた俺にはその人間が本音で言っているか建前だけなのか、そういうものが何となく分かる能力を持っていた。

目や態度、動作、話し方。そういうもので判断する。この女は怪しい。いや、確証たるものは当然ないが心の底から信用してはいけない警報がなっている。

眼光の鋭い男。こいつも何か裏がありそうだ。オールバック、こいつは分かりやすい。調子の良い男は俺は好きじゃないけどこか信用できない。この中でまともそうなのは黄と名乗った巨漢くらいだ。王に関しては読めない。たまにこういう人間が居る。ブルノ、グスタボ辺りが俺の中では腹の底が見えない奴等だった。王も同じ匂いがする。カリスマ・・・分かるような気がする。この男は巨漢でもなく優男という印象の容姿をしているがその目の奥には何か大きな物を隠している気がする。

楊のファミリーに関しては首脳陣達の事を聞いた。右腕の趙などは

上海で伝説の殺し屋でありブルノ達を殺したのは他のメンバーらしい。一緒に殺されたレイモンド、行方が分からないカルロスの事も聞いた。だが、俺が聞いた中で興味があったのは消えたカルロスくらいだ。後は当たり前障りのない情報に聞こえた。

住んでいる所はあえて明かさなかった。今はホテルを転々としていると答えておいた。そのうちにはばれるだろうが腹を割って話せる人間でなければ家は教えない方がいい。双龍会館のビルに入るのもいつも裏口から入ってる。誰が見てるかも分からないし場合によっては隣のビルにも飛び移れるのがこの物件の気に入ってる要素のひとつでもある。

俺は積極的に動いた。大阪じゅうに広がっているラテン人コミュニティには出来るだけ顔を出した。7割以上の人間がブルノの事を知っていたのでほぼ協力してくれた。カルロスの今住んでいる場所も教えてもらった。中国人たちには教えていないらしい。やはりラテン語を喋る人間でなければ王のファミリーとして正確な情報は教えないのだ。利害が違えば外国人同士なのである。コミュニティはカルロスを守る方向らしい。俺も同感だ。

ガブリエルが逐一俺に的確な指示を出してくれる。大阪で会っていた方がいいラテン人は全て教えてくれたし山内組の人間とも会っておいた方がいいと教えてくれた。そちの人間は山本の兄貴に手配してもらった。山本の兄貴は関西でもそこそこ名前は知られているらしく上海の組織を潰すのは協力してくれると言ってくれた。何しろ俺が危険な目に遭うだけなのだ。山内の人間からすれば敵でもあるし好都合な人間だった。俺は。

上海の組織に入り込みたいことも山内系列の人間たちや王のファミリーにも相談したかったが、誰が味方で敵か分からない。最初は上

海の組織に入り込もうと思っていたのだが諦めざるをえなかった。どうやらコミュニテイから得た情報では王のファミリーの李と劉兄は楊の組織と内通しているらしい。この情報の元はカルロスである。信憑性が高い。近いうちにカルロスと会う必要がある。

黄は信用できそうだったが今のところは様子を見よう。ガブリエル曰く電話番の陳も協力的だという。

俺はコミュニテイからカルロスに連絡を伝えてもらい俺と会うことを了承してくれたらしい。すぐに俺はカルロスの居る横浜へと向かった。

第17章 兄

新横浜の駅に着くと早速カルロスが滞在しているという平塚のマンションへ向かった。

平塚駅から南下し教会を過ぎていくとコミュニティから教えてもらった住所の辺りまで来た。比較的分かりやすい位置にあったマンションへ入り4階までエレベーターで昇る。

インターホンを押すと日本語が流暢なラテン人と思われる者が応答したのでポルトガル語でカルロスに会いに来たことを伝えるとすぐに開けてくれた。

名前をルツカスといいブラジルから1年前に日本に来て車の修理工場に勤務しているらしい。奥の部屋からカルロスと思われる人物がゆっくり出てきた。

「カルロスか？俺はブルノのブラジルからの親友でジョアキンだ。見た目は日本人だが中身はブラジル人だしスペイン語も理解できるから色々聞かせて欲しいことがあるんだ。」ブルノという固有名詞を出すと無表情のカルロスの顔が微妙に変化したようだ。

「こいつは大阪に居る従兄弟から面倒を見てやって欲しいと頼まれて匿ってるんだ。何でもやばい中国マフィアに追われてるんだろ？勘弁して欲しいぜ。」「まあここなら見つかることはそうそうないとは思うが出来るだけ早いうちにもっと安全な場所に移動した方がいいな。」

「また・・・逃げないといけないのか？」カルロスが初めて口を利

いた。

「え・・・？いや、お前は追われてる身なんだ。まずは事件の日の事を出来るだけ細かく知りたいんだ。必ずブルノの敵は消す。」「お前は人を殺した経験は？」「兄貴2人だけだな。といつても本当の兄貴達じゃないが・・・。」「自分の兄弟に手を出したのか？危ない奴だ。ブルノもどこか切れてたな・・・よし、ブルノの敵を討つぞ。」「カルロス、事件当日はブルノとお前、レイモンドというペルー人と3人でジムへ向かったんだな？」「間違いない。前日までは仕入れておいた銃を車内に置いていくという予定だったんだが、当日になって急に持ち込むなんて言い出しやがって・・・。」「ブルノがか？」「そうだ。まあ俺は見張り役だったからどっちにしても銃は携帯していたし関係はなかったんだが車を少し離れたところに駐車したんだ。

「お前が待機していたのは向かいのベンチだよな？北京の連中から聞いた。」「ああ、万一上海のポケどもがブルノ達を振り切って出てきたところを俺様が蜂の巣にしてやろうと思ってたんだが・・・遂に楊達が出口を出てくることはなかった。」「恐らく従業員出口を使ったはずだ。俺は体験で一度ジムの中を見てきたが逃げるとしたらそこしかねえ。」「そうか・・・まあ、あまりにもブルノたちが遅いんで何かあったと思ってベンチから少し離れたところにゲームセンターがあつてな。そこへ移動したんだ。」「外に居た見張りの者たちは？」「すぐに近くに停めてあつたバンに乗って移動したんだ。」「お前は？」「停めてた車を急いで駐車場から出した。幸い例のバンを簡単に発見することが出来た。そのまま尾行した。」「

「お前の顔は割れてなかったのか？」「多分、だが用心に越した事はないからニットを深くかぶってた。」「バンは？」「後をつけていくと国道沿いにあるファミリーレストランの駐車場に入った。し

ばらくしてから一台のタクシーが来て男が4人出てきた。」

「4人。そこでバンに乗ってる手下達と合流しようとしてたんだな。」
「多分な。だけど一番気にいらねえのは4人の中に王の右腕の李が居た事。」
「それは聞いたが間違いないな？俺は李と話したが確かに胡散臭い奴だったよ。」
「あの野郎のほかには楊と趙、もう1人はしらねえガキが居たな。」
「テレビによるとレイモンドを殺した奴が他に居た可能性があるって言ってたからそのガキがやったのかもな。」

「とにかく俺は受けた仕事は必ずやり遂げる。ジヨアキンだっけな？頼む。力を貸してくれ。」
「それは俺のほうが頼もうと思っただけ。一緒にやるう。だがお前は顔が割れてるし派手に動くことが出来ない。」
「俺はな、どちらかというで見張りとか向いてないんだ。いつも死と隣りあわせて生きてきたし、そんな生活が気に入ってたんだ。それを・・・李の野郎がチンコロしやがったんだらう？俺は楊や趙より李の野郎をぶち殺したい。」

「コミュニテイの連中からも聞いていたがカルロスはかなり癩癩持ちらしい。母国のグアテマラでは札付きのワルで大阪のラテン人社会でも一目置かれていたらしい。金や女よりも危険を好む一種の悪のエリートだ。」

「カルロス、気持ちは分かるが死んだら元も子もない。俺が楊のファミリーを潰す為に準備をする。俺には静岡の方にブラジル時代の仲間達が居る。マカツコといってサンパウロではちょっとした顔役だったんだぞ。」

「おう、その名前はブルノからチラツと聞いたな。随分派手にやってきたんだってな？」

「まあ、日本の生活からは考えられなかったな。とにかく準備に時間が多少かかる。李や楊達の事なら少しでも情報が欲しい。ここは横浜だ。奴等を知る中国人の多いと思うがお前の身に何かあるといかんから俺が聞き込みする。」「俺は？」「しばらく待機だ。しばらくの我慢だ。いざ襲撃を開始する時は今度はお前が先頭に立つてやるんだ。」「先頭か。いいな。」「その為にも今は我慢して隠れててくれ。上海の組織を潰したい奴等が多いし李や他に劉という王のボディガードも怪しいらしい。」

俺のポケベルをカルロスに伝えルツカスに御礼を言うと5万ほど彼に渡した。「え？これは？」「気持ちだ。カルロスをしばらく頼む。少ないが俺も苦しい。出来るだけ早くカルロスを迎えに来る。」「あ、ああ。悪いな。なんか気をつかわせちまって。」「カルロス、次に会う時は外で会おう。俺は横浜の中華街で上海の連中の情報を集める。大阪へ戻る前にもう一度会おう。」「分かった。」

俺はマンションを後にすると横浜へ向かった。

山下町にある古びた喫茶店。

中に入るとセバスチオンが左奥の席から手を上げた。

この男はマカツコの横浜、いや、関東支部のリーダーと言っても過言ではない。

日本のバブルの絶頂期が80年代。世界中の人間は日本の富に憧れて次々と入国してきた。

ガブリエルとほぼ同時期に日本へ来た。ブラジル人からすると静岡や名古屋の方がこの時期は数が多かった。この時期の関東は中国人、台湾人一色で（実際はイラン人なども多かったが）ブラジル人など

は小さなマイノリティに過ぎなかった。

ガブリエルは俺と同じ年だがセバスチオンは2つ上だ。俺やブルノを弟のように可愛がってくれた。

「瘦せたんじゃないか？ ジョアキン。ブルノの件は残念だった。必ず上海のクソ達の息の根を止めてやろうな。」 「ああ。」

俺はミルクティを注文してから煙草に火を点けた。日本へ来てから煙草の量が増えた。元々そんなに吸わなかったのにこの国は何処にでも自動販売機という物があり考えられないほどの安値で煙草を手に入れることが出来る。外国ではこんな便利なものはすぐ潰されて盗まれるのがオチだ。しかしこの国のモラルの高さは異常だ。

「一応横浜の華僑の連中に楊のファミリーの事は聞いておいた。そうそう、念の為に王のファミリーもな。横浜は日本では最大の中華街だ。日本国内の華僑のトップに等しい男が横浜中華街に君臨する。」 「その親玉の名前は？」 「孫 邸景。この男に逆らったら下手なヤクザなら一瞬で行方不明になるだろうな。」 「この男とコンタクトがとれたのか？」 「いくらブラジル人の中でこの国の古株の俺でも無理だ。」 セバスチオンは笑っている。

「孫の一声で日本中の華僑が動く。」 「ということは大阪の楊だつて絡んでいるんだろう？」 「ところが面白いことに王などは世渡りの上手い男だ。というよりもこの国のパワーバランスを知り尽くしている。楊は駄目だ。筋を通さずにやりたい放題で勢力を拡大している。」 「孫がそれを許しているのか？」 「今のところはな。孫から見れば今の楊のファミリーは子供のお遊びみたいな物だ。だが、去年の年末に孫のファミリーの下っ端が神戸で惨殺された。」

「犯人は楊の一味か？」「趙という男らしい。神戸に趙の愛人が居てたまたま中国人クラブで出くわしたらしい。その中国人クラブのママが趙の愛人だ。」「なるほど、どうせその下っ端がママを口説くなり店への迷惑行為を働いた。」「いい読みだ、ジヨアキン。その場は趙は丸く治めた。変わりに若い中国人の女を紹介した。気を良くした孫の手下は翌日、六甲山で死体として発見された。酷い殺られ方だったらしい。」

「しかしどうやって趙の仕業だと？」「神戸の華僑社会にも孫の息の掛かった人間が大勢居る。情報は筒抜けだ。孫は執念深い男だ。恨みは絶対に忘れない。趙を殺すなら放っておけば先を越されるぜ。」「まあ、殺してくれるなら願ったり適ったりだ。俺は楊を殺すことが目的だ。」「ほう、俺は趙もマカツコの手で殺りたいな。」「もちろんだ。だがここは孫を味方につけておいたほうがいいんじゃないか？」「お前はその辺がしたたかだよな。ブルノなら俺に賛同しただろう。だが、奴が死んでお前が生き残ってる。」「セバスチオン、俺を否定してるのか？」「いや、お前が正しいんだ。この国ではいくら外国人同士でも中国人のほうが日本に精通しているし勢力も大きい。敵に回すのは賢くないな。」「どうやれば奴に近づける？」

ミルクティを飲み干した俺はもう一杯注文した。

「俺は孫のファミリィ内で飼われている情報屋に接近した。この男からほとんどの情報を得ている。彼も孫には会うことどころか見たことがないという。」「神のような存在だな。」「しかし孫の直属の部下に3人の怪物が居る。」「怪物？」「殺し屋だ、平たく言えばな。こいつらなら会えるチャンスはある。ただしリスクも大きい。利用されるだけされてпойされる可能性も高い。」「上等だ。こんなところでつまずいているようじゃブルノに笑われる。会いたい、今

すぐにも。」

俺は明らかにブルノが殺られていつもの冷静さが欠如していたかもしれない。孫に近づくのは悪魔と取引するに等しい。王や楊は彼に比べれば子供と変わらないのだ。

「ジョアキン、3日ほど待つて欲しい。情報屋によれば孫と1人の怪物は来週に香港へ里帰りするらしい。」「ああ、正月が日本と違うんだつたな。」「ああ、だが2人の怪物達はこっちへ残るからそれからなら会いやすい。運が良ければ2人同時に会えるかも。」「3日かかるのは仕方ないな、よろしく頼むよ。セバスチオン。」「

予定が狂い3日ほど滞在するはめになった俺は麗子の声が聞きたくなかった。

「長い間会えなくて悪いな。」「調査の方はどう?」「うん、東京や名古屋と違って人間、文化まで全てが異質に感じるな、この街は」「私は大阪は一度も行った事がないけど仕事が落ち着いたら観光案内してね。」「ああ、京都巡りも良さそうだ。」「

当たり障りのない会話でほどほどに切った。やはり彼女の声を聞くだけで落ち着く。改めて麗子に惚れてる事を自覚した。

その日はカプセルホテルで過ごしてから翌日にルツカスの所へ向かった。ルツカスは仕事へ出かけていてカルロスまで留守だ。俺は小一時間ほど待たされる破目になった。」「

カルロスが帰ってくる頃には正午を過ぎていた。

「昨日別れたのにもう帰ってきやがった。」「」「どうやら少しの間こ

「うちへ滞在する事になった。と言つても2、3日だろうが。ちよつと外に出ないか？」「ああ、荷物を家に入れたら戻る。」カルロスは本を買いに行つてたらしい。

「スペイン語の本を探そうと思つたらこの辺じゃ見つからなくてな。ずつと家の中に居るのも飽きてきたんで横浜で本を買つてきた。」

「本は読まなさそうだが意外だな。」「いや、今まで全然読まなかつたよ。大阪に居る頃までは本なんて触りたくもなかつた。が、暇には勝てない。」

他愛もない会話をしながらファーストフード店に入った。考えてみれば今日起きてから何も口にしてなかつたのでチーズバーガーにポテト、ナゲツトも頼んだ。カルロスはアイスコーヒーのみだった。

「腹が減つてないのか？」「ああ、朝に少し食べたからな。それで情報集めは順調かい？」「ブラジル時代の仲間が横浜に居てな、そいつにこつちの華僑の大物に接近出来るよう動いてもらつてる。」

「楊より大物なのか？」「ボスはな。ただボスに会うのは難しい。その3人居るボディガード達の誰かと会わなければいけない。1人はボスに付いて香港に行くらしい。」「ボスが動いてから下の人間と接近するんだな。それが2、3日はかかる。」「まあ、そうだな。」

「ジョアキン、俺はデザートイーグルを1挺持つてるがお前はいざと言う時にどうする？」「その時は知り合いのヤクザに頼む。」「そうか、出来ればライフルが欲しいな。頭ごとぶつ飛ばしてやりてえ。」「ライフルだと目立つから難しいけどな。」

他愛もない話が続いた。ただ何もしないでセバスチオンを待つには時間が無駄に思えて仕方なかつた。こうやってカルロスと無駄に見

える時間を過ごしているが、カルロスは楊のファミリーと一緒に潰す大事なパートナーだ。こういう時間を一緒に過ごすのも悪くない。

「グアテマラ時代は何回死にそうになった事があるんだ？」「3回だな。どれも際どかった。特に3回目なんてわき腹刺されて出血が酷かったにも関わらず仲間が瀕死のところで救われた。」「悪運が強いんだな。」「まあ俺は死ぬ事に対してあまり抵抗はないんだ。」

「どうして？」「生まれつきだ。」「そんな事はないだろう。」「何故だか分からないが自分より強大な敵に追われたり狙われたりするのが快感なんだ。よく変態と言われるがそうなんだだろうな。クスリ、女、なあにも興味がねえ。唯一スリルが一番楽しい。」「例えば彼女が居るのに二股かけて同じ日にデートの約束でもしてみろ。もつとスリルが味わえるかもよ？」「カルロスが苦笑して「確かに女は感情的で刺してくるかもなあ。」」

俺達は店を出て海まで歩いた。

「なあ、大阪とこの街はどっちが好きだ？」「大阪の方が知り合いかも多いし退屈しねえ。聞くまでもねえよ。」「まあな。お前は逃亡の身だから働けねえし迂闊に歩くことも不自由するもんな。」「そうそう、逃亡と言えば楊達もよく考えたら府警から追われてるんじゃないのか？偽造のIDで入会したからって通ってたんだから簡単な似顔絵くらいはスタッフの中に描ける奴も居るんじゃないのか？」「鋭いな、カルロス。あいつ等は恐らく関西から出て東京か香港、上海、台湾、いずれも海外に居る可能性が高いな。」「そうするとしばらく楊達は・・・ってか日本へ戻ってこない可能性もあるんじゃないのか？わざわざ府警に追われてる身で舞い戻ってくるか？」「来るだろう。生活の基盤はこちらなんだ。大陸に帰ったって居場所はあるまい。」

気付くと湘南大橋が見えてきた。

「歩きすぎた。戻るぞジョアキン。」カルロスはそう言って逆へ歩き出した。

俺は日本では気の許せる人間は限られている。麗子、ガブリエル。実はこの2人のみである。他のマッコのメンバー達も居るには居るがどこか腹を割って話せる人間は居なかった。

そう考えるとブルノという存在は俺には大きすぎたかも知れない。今まで義妹のマリアをレイプした時から夢中で突っ走ってきたような気がする。ルシアノ・・・カルロス・・・カルロス？

そう俺の隣に歩いている男の名もカルロスという。ラテンの名前には有り触れた名前だから珍しくもないがこの隣に歩いてるカルロスは何か不思議な感じがした。俺は気の許せる人間ではなかったら無駄な時間は他人と一緒に居れない。この男には不思議とそんな気持ちにならない。

「カルロス、お前何歳？」「24だ。」俺より2つ上。セバスチオンなんかと同じ歳か。俺は段々分かって来た。この不思議な感情はカルロスに対して殺しのパートナー以上の感情がある。変な意味ではなく何か、兄貴のような。違う、こんな兄貴だったらという俺の理想像がカルロスだったのかも知れない。セバスチオンなんかには感じない感情だ。

俺の知ってる、あの糞カルロスは最低な男だった。はつきり言ってるルシアノとカルロスを殺した俺は全く罪悪感を感じなかった。まるで虫を殺すように無感情で殺した。隣に居るカルロスは俺をいじめない。当たり前だ。パートナーだから。

俺がカルロスに感じた不思議な感情は結局はつきりとした理由は分からなかった。もしかしたらブルノが居なくなっただけ俺自身が考えるよりもナーバスになってたか・・・戻りながら俺はそのまま駅に向かいカルロスとその日は別れた。

電車に乗ってる間に子供時代に義兄のカルロスやルシアノにいじめられた記憶が蘇った。俺は優しい兄貴が欲しかった。ブルノに対しては友達、親友、戦友、そして兄貴に近い感情を感じていたかもしれない。俺より何でも優れていた。ただ、限度というものをブルノは知らなかった。限度だけ俺が奴にないものを持っていた物かもしれない。

不思議とグアテマラ人のカルロスは俺をどこか安心させる何かを持っている。ブルノと一緒に居た時は何も怖くなかった。今日カルロスと一緒に居た時間、楊達の事が怖くなかった。正直、ブルノの敵とは言えブラジルでは大学生をやった俺が日本で、上海のマフィア達とドンパチしようってんだから人生は分からない。楊という男、趙というボディガードを敵に回すのは恐ろしかった。しかしカルロスならあるいは趙に勝てるんじゃないか？楊を一撃の下に沈める事が出来るんじゃないか？そんな気になった。

横浜に着いた頃には夕焼けが沈もうとしていた。

第18章 徐 明法

孫の3人居る腹心の1人、徐 明法が俺と会ってもいいという連絡を受けたのはカルロスと会った翌日だった。

午後7時に徐の自宅から近い関内にある中華レストランへ来いとの事だった。夕食も兼ねてということだろう。

セバスチオンと午後6時半に関内駅の北口で待ち合わせている。今は午後2時。時間に余裕もあったので横浜観光をする事に決めた。考えてみればこの数週間は碌に気の休まる時間がなかった。仕事、ブルノの事件、大阪、横浜。

中華街でチャイナドレスを麗子のために買った。俺自身がコスプレ目的で麗子に着せたいのが最大の理由だが彼女は喜んでくれるだろう。

その後は適当に散歩しながら関内の駅周辺まで向かった。カルロスの為にスペイン語の本などを何冊か買ってやった。

あつという間に時間は過ぎ関内駅の北口でセバスチオンと合流した。セバスチオンの隣に居たのは孫のファミリーの情報屋の1人、李祥英が居た。冴えない顔に安そうな衣服を身につけていたが情報屋というのはこんなものなのかも知れない。

「初めまして、ジオアキンさん。私は孫様の所で情報屋をやらせてもらっています李と言います。よろしく。」簡単な挨拶を終えるとすぐに目的の中華レストランへと向かった。

煌びやかな外観とは対照的に地味ではあるが歴史のありそうなレストランの内装は芸術とは程遠い俺の目でも綺麗に映った。

レストランのスタッフが徐の席まで誘導してくれた。

「よく来てくれた。私が徐 明法だ。」俺とセバスチオンに握手をすると席に着くように施された。

見た目は普通の中国人と何も変わらない。ただ小奇麗なスーツと口レックスの腕時計が羽振りの良さそうな中国人にしか見えない。

「先日、大阪のスポーツジムで死亡した3人の内の1人が君の知り合いなんだね？えっと、名前は・・・」「ジョアキンさんです。」情報屋の李 祥英が代わりに応えた。

「相手は上海、九龍界の場で間違いないね？」徐の声は小さいが静かな強さがある。今までに会った中国マフィアには（もっとも大阪で短期間に王のファミリー達としか会ってないが）無い雰囲気は徐は持っている。こういう男を下に置いている孫という最長老はどんな人間なのか興味があつた。

「私は雲南省の出身で成人してから香港へ出た。と言つても雲南省では札付きのワルであつたからその噂が裏社会へと洩れていたらしくスカウトされたような物なんだ。叔父がその世界の人間でね、私を是非香港で今の長老様の下で仕えるように推挙してくださいさつたんだ。」「その長老とは孫氏の事ですね？」「そうだ。私は長老の下に居ることを神に感謝する。」

料理は素晴らしいものだった。俺が生まれて食べた事のない超高級の広東料理が次から次へと出てきた。セバスチオンなどはこれとな

いチャンスと俺達をそっちのけでガツついてやがった。

「率直に申します。楊 再公と趙 双堅を殺したいのです。」「敵討ちか?」「はい。」「何故我々に話を通そうかと思っただね?」「日本国内の華僑の頂点に立つのが孫老師と覗ったからです。」「事実だが君達はブラジル人だ。何故死んだ君の友人は北京の王の下で働いていたんだ?」「静岡にある金松組傘下の店で我々は働いていました。場所は別々でしたが友人のブルノはそこで客のヤクザに怪我を負わせてしまいました。そこで金松組の取引先でもある大阪の王の所で匿ってもらうことにしたんです。」「君の友人はそれ以来静岡に戻らなかつたんだな?」「その通りです。」「

食後のお茶が出てきた。

「よろしい。楊のファミリーである九龍会は以前から目障りであつたし孫老師も応援してくださるだろう。私のほうから伝えておく。」「ありがとうございます。何か楊の弱みなど知ってるなら教えてくれませんか?」「それを知ってたら私が奴を殺っている。」「無表情でさり気なく言ったが多分本気だろう。」「

「ただし華僑のネットワークで我々の組織の上をいく所はない。楊の暗殺は全面的に協力する。去年にうちの若いのが神戸で惨殺されたんだ。実行犯は趙だがな。」「趙の女とのトラブルですね?趙の弱みはその女という事になります。」「お前は鋭いな、ジョアキン。頭の切れる男は嫌いではない。そう、趙の泣き所はその愛人だ。名前は張 美玲。スレンダーのいい女らしい。」「場所は分かりますか?」「そこに居る李 祥英が教えてくれるだろう。」「李の方を見ると静かに頷いた。」「

「また会おう。君の連絡先は？」「ポケットベルの方にお願ひします。」「神戸に行くのか？」「いえ、まず静岡に寄り大阪へ戻ります。神戸は落ち着いてからにします。」「分かった、名刺を渡しておこう。徐の知り合いだと言えば損はしない。」「ありがとうございます。」

レストランを出ると22時を回っていた。

「いやあ、ジョアキンお前すげえよ。華僑のトップに近い男とタメで話してるんだからよう。」「セバスチオン、奴は只者じゃない。俺とタメとか冗談じゃない。楊や趙があいつよりおっかない奴だったらナーバスだ。」「2代目マカツコのナンバー2とは思えない言葉だな。」

2代目マカツコ……俺はもうセバスチオンや他のマカツコのメンバー達がブルノの事を過去へ追いやっていくのが嫌だった。それに俺がナンバー2？確かにブルノの相棒でナンバー1のガブリエルとは昔からの戦友だ。皆そうやって俺の事を見ているのかと初めて気付いた。

ホテルに戻りルツカスの家に電話しカルロスと話した。

「なあ、今日華僑のボスである孫 邸景のボディガードと会った。」
「それで？」「楊達を殺るのを応援してくれるらしい。」「応援とは？」「ま、情報提供くらいの物だが馬鹿には出来ない。」「そうだな、日本国内のチャイニーズマフィアの事だったら何でも知ってそうだもんな。」

「俺は神戸に行って趙の愛人らしい女とコンタクトする。そいつは奴の泣き所らしい。趙さえ消せば楊のファミリーはそう怖くないだ

るう。「まあ、やつは厄介だわな。」「なんにしろ、悪いがもうしばらく退屈してくれ。俺のこっちのダチでセバスチオンってブラジル人が居る。そいつにお前用の本を何冊か買って渡してあるからその内家を訪ねると思う。」「悪いな、ジョアキン。」「いいって。セバスチオンは俺やブルノなんか居たギャングチームの1人だ。会っておいで損はないだろう。」「

静岡に一度戻り金松の山本と会った。

「どうだ？勇。敵は討てそうか？」「はい、横浜で孫 邸景のボディガードと知り合いました。」「華僑のトップの？」「はい。」「まあ、楊のことは敵対だろうし協力もしてくれるだろうが孫は恐ろしい男だぞ。」「会ったことはあるのですか？」「ない。俺みたいな下っ端が会えるわけがない。」「下っ端って・・・」「俺は笑うと山本が真面目な顔をして「いいか、勇。楊や王とは訳が違うぞ、孫と言う男は。あまり深入りするなよ。」「

俺は日本の裏社会で頂点に立ってるのはヤクザだと思ってる。その頂点が金松組の在籍する山内組なのである。それでも孫のファミリーは特別なのか。

麗子とは久しぶりに会った。麗子の家で再会した。名古屋の家は引き払ってから大阪へ行ったからガブリエルの家しかない。それだったら女の家のほうがいい。

いつもより麗子は積極的に俺を求めてきた。俺の体の隅々まで舐め回した。俺も麗子の乳を吸い、局部に顔を押し付けた。何回も何回も放つては俺も麗子を求めた。

その日は一日中麗子の家で絡み合っていた。

「ねえ、こつちへはいつ戻れそう?」「まだまだ時間がかかるな。」
「ただの調査なの?」「大阪のどのエリアで、どのような業種の店が求められているかなかなか難しいんだよ。」俺は大阪での雑居ビル屋上にある俺の家の事やたこ焼き、大阪弁、色々麗子に教えてやった。

楽しい時間が経つのは光より早い。

名残惜しくも俺はガブリエルに横浜での収穫を伝えると大阪へ戻った。

1週間近く離れただけなのに長期間大阪を離れているような気がした。家に戻ると風呂がない為に近くの銭湯へ向かった。

ブラジル時代は湯船に浸かるという行為はほぼなかった。親父が生きてた頃に一緒に湯船に浸かっていたらしいが俺には幼すぎた為に記憶がない。

頭と体を洗ってから湯船に浸かった。今までの疲れが見事に取れていくようだ。浸かりながら自分自身で手足の筋肉が硬くなっている部分を揉み解していった。あまりにも気持ちよくて長風呂してしまった。

銭湯を出るともう夜の8時を回っていた。

家に戻るとポケットベルが鳴っていたらしい。番号を見ると市外局番が東京だった。家に電話も置いていない為に常に公衆電話に頼らなければいけない。おかげで予備のテレホンカードが6枚もある。

電話をかけると声の主は徐 明法だった。

「すみません、ベルを自宅に置いて銭湯へ行つてまして。」「家に風呂がないのか？どんな所に住んでるんだ？」徐が少し電話の向こうで笑っていた。

「はあ、雑居ビルの屋上にありましてそこまで長期間こつちへは居ないと思ひ家賃の安い適当な所を探したらここになつたつて訳です。」「ふふ、なるほど。俺の故郷も酷い家だった。銭湯に行けるだけお前は幸せだな。」「全くです。俺も故郷では嫌な思ひをたくさんしてきましたから日本は天国ですよ。」「下の暮らしを知つてこその上の暮らしだな。」

「ところで何かありましたか？」「そうだった、長老に先程お前の事を話しておいた。」「もう帰つて来られてるんですか？」「いや、電話だ。まだ香港に居る。それで楊の件は分かつたと。面倒がないように速やかに実行するようにと。」「そうですか。しかし実行とは？」「神戸に趙の愛人が居るのは分かつてるな。そいつを横浜まで拉致してもらいたい。」「うまく平和的に取り込もうかと思つていたんですが拉致ですか。」「いや、長老は最近の楊の組織が日本で暴れまわつてるのを快く思つていない。それでなくても福建の連中が台頭し始めているからだ。」

「噂でしか聞いたことありませんが福建の連中はそれほどすごいのですか？」「単に中国人と言っても50を超える民族が存在しており生まれる町が違えば言葉も違う。話が通じない場合も多いのだ。」「すごい人口ですからね。」「その中でも福建の連中は気が荒い。奴等にルールは存在しない。」「そういう連中が一番厄介ですね。とにかく楊の組織を早く潰したいのですね。」「上海の双虎会という楊の在籍する九龍界とは対立関係の組織がある。」「はい。」「

長老が最近その組織との同盟を考えているらしい。長老は香港でも絶大な権力を誇るが大陸は広い。敵も多いのだ。」「そこで大陸や日本でも対立する九龍界を潰して双虎会への手土産にしたい訳ですね。」「徐はジョアキンのこういいう何も言わないでも100理解する回転の早さを気に入っていた。」

「楊 再公は九龍界の中でも別格だ。それに趙は上海の黒社会でも最高の殺し屋だ。奴等を消したとなると上海は双虎会の天下だし長老の在籍する三武会ともいい関係が結べる。」「

三武会―香港では絶対という存在として地元の人間から認識されている。香港という街が生み出す経済力は大陸の非ではない。香港を制するものは大陸を制すると言っても過言ではない。今の時代は古今東西、金が力なのである。構成員は少年ギャング（組織からすると枝の枝）のような下部組織まで含めると10万人を超える。」

「出来るだけ早い方がいいでしょうがタイムリミットを教えてください。」「出来ればこの1週間以内に。長老がこちらへ帰ってくるのがそれくらいだからな。」「やってみます。」「見返りはお前の予想する以上だと言っておこう。」「では、早速取り掛かります。」「

電話を切ってから俺が三武会の枝の枝になっている事に気が付いた。だが、目的は中国の有力なマフィアの大物を消すことである。後ろに三武会が付いてくれるのは悪くない。今後利用されそうになればその時はその時だ。ガブリエルと相談の上、三武会を消すなりすればよい。マカツコはあくまで武闘派集団である。福建の奴等にも負ける気はしない。ただ、人数が圧倒的に足りなかった。日本に居る（関西、中部、関東が中心）マカツコのメンバー全てを合わせても20人も居ない。ブルノが築いた大阪でのラテン人コミュニティ、ガブリエルの中部のラテン人コミュニティ、セバスチヨンの関東コ

コミュニティ。全て合わせても戦闘に参加出来るのは200人くらい
だろう。もし九龍界が。もし三武会が本気を出せば日本国内でどれ
だけの人間を動員出来るのか？そんな事を考えながら寝た。

第19章 北京の虎

欲望の街 大阪 ミナミ

周防町（別名ヨーロッパ通り）の一角に位置するとあるBARに1人の男がカウンターに座っていた。歳は40代前後に見える。端正な顔立ちに程よく引き締まった体はスーツの上からでも容易に分かる。

BARにはその男の他にカップルが1組居るのみである。

男は2杯目のワイルドターキーを注文した。

店のドアが開き1人の男が入ってきた。カウンターに座っている男を凌ぐ体格に歳は30を過ぎたくらいか。

「遅くなりました。」「良い。場所と時間を急に決めたのは私だ。気にするな。」

カウンターに座る男は後から来た体格の良い男を隣の席へ座るように促した。

名を王 義承。大阪における北京マフィアのボスである。横に座るのは黄 徳穂。王の腹心の1人である。

「お前が私に相談するというのは、お前が組織に身を置いて初めての事だ。お前という人間は充分に分かっているつもりだ。だからこそお前が今から私に相談することはよっぽどの事なんだろう。」「単刀直入に申し上げます。李と劉兄は九龍界に通じています。」

王はそつと目を閉じた。

数十秒、いや数分は経っただろうか。黄は余計な口を利かない。ボスが白と言えば白と言うタイプの男であった。それだけに黄の言っている事には信憑性がある。そもそもこの男が裏切る訳がない。

「この事を知っているのは？」王が口を開いた。

「私と陳、劉弟のみです。」「劉兄弟は割れたという事か？」「いえ、兄の解奉の方は弟が真実を知っている事を知りません。」「で、解平の今後は？」「ボスに従うようです。つまり兄を殺す覚悟もあるようです。解平と陳は運転手同士で戦友のような気持ちが互いに持っています。そして陳は私の弟分として扱ってきました。解平は反りが合わない兄よりもボスと我々に付くとの事です。」「信用出来るのか？」「責任は私が。解平は兄よりも純粹です。上海の組織に寝返った事が許せないと言っておりました。」

1組のカップルが逃げるように会計を済ませてBARを出て行った。不気味な北京語でまくし立てていては雰囲気もぶち壊したようだ。

このマスターは王と店がオープンの頃からの付き合いである。名前を幸田と名乗る日本人の男である。職人気質で1人でこのBARを経営している。彼は王の北京語を理解出来なかったが客の大事な会話を邪魔するような男ではなかった為に気にもしない。彼が一番大事にしているのは客がこのBARでどれほどリラックス出来るかに神経を尖らせている。そういう職人気質な幸田を王は気に入っていた。

「幸田さん。この男にカクテルを一杯貰えるかな。黄、お前は甘口が好きだったな？ワインを好んでいたな？」「覚えてくださったっていい光栄です。」「では、カーディナルを作ってもらえるか。」「コクリと幸田が頷いた。」

「カーディナルとはどのようなお酒なのですか？」「ブルゴーニュやボジユレーの赤ワインベースにクレーム・ド・カシスを混ぜた物だ。」「クレーム・ド・カシスとは何ですか？」「黒すぐりという果実をマイナス30度で保存しアルコール中で粉々に砕けた後、マインス5度の状態で数週間をかけて浸出される。その後に砂糖を加える過すれば完成する。」「大変手間がかかっているんですね。」
「鮮度維持が一番骨の折れる作業だ。」

「さて、黄よ。私は李が私を裏切ったのは多少なりともショックを受けてはいるが、そんな日が来るかも知れないと思っていた。」黄は返事せずに黙って聞いていた。

「李の家族はな、私の母団体でもある朱雀に皆殺しにされたんだ。理由は商売上の立ち退きで李の父親が反発したことによる。その頃私は組織の最前線に居てな、李の家族が皆殺しにされる所を目の当たりにしていたんだ。」王がこんな話をするのは初めてだった。

「小さな芽でも摘まねばならんのが王道なのに私は小学生だった李を引き取ったんだ。上には最高の殺し屋にしてみせると断つてな。上は反対したよ。必ずそのガキは我々に牙を剥くと。案の定そうだった訳だ。甘いといわれればそれまでだがその頃までの私は獣そのものだった。組織で、裏社会でのし上がるにはライバルを1人でも多く消すことだった。多くの人間を殺して何か罪滅ぼしをしたかったのかも知れない。それが李を育てる事だったのかもな。今でもあの時何故李を拾ったのか覚えていないんだ。」

― 1970年代 北京―

「雷光、喧嘩はな、四の五の言わずにドスンだ。分かったな。」「はい。」「この世界ではハツタリは通用しない。舐められたら終わりなんだ。お前が死ぬ事のないように立派な殺し屋に育ててやる。俺を信じろ。」「孤児の俺を拾ってくれたばかりか生きる術を教授してくださる事、感謝しています。」「お前いくつになった?」「13です。」「若すぎるな。だが、お前は見込みがある。その若さで人間という物を悟っている感がある。常にクールでいるんだ。女子供だらうがお前に害をなす者は容赦なく殺せ。」「はい。」「

北京郊外のある倉庫に王と李少年を含む朱雀のメンバー6人が居た。

6人の前に3人の少年達が震えてこちらを覗いている。歳は15歳くらい。李少年よりも2つほど上だろう。この3人は朱雀のシマで麻薬を流した。敵対している紅蓮会の若い者だろう。

「雷光、3人の中で気に入らない2人を殺るんだ。」「王がそつと李少年の耳元でささやいた。李少年は感情も変えず時間にして2秒あったかどうかの内に2人の少年を迷わず射殺した。

メンバーの1人が李少年の頭を掴んで「この野郎！初めて人を消すのにこの余裕は何処から出てくるんだ！」と顔をくしゃくしゃにして言った。

残りの失禁している少年に向かって王が静かに「消える。そして紅蓮会の者にも言っておけ。金輪際うちのシマにちょっかいかけると皆殺しにするとな。」「

倉庫から出ると「雷光、何故あの2人を選んだ。」「考えてませんでした。一瞬の気分で決めました。」「恐ろしい奴だ。しかし気分で決めたのなら生き残ったあの1人の少年の運も大したものだな。」「月日が流れやがて李少年は北京では怖いもの知らずの殺し屋へと成長していった。

王が3杯目のワイルドターキーを注文すると「李はボスの事を恨んでいたのでしょうか?」黄が質問してきた。

「当然家族を皆殺しにされたのだからな、私は手を下さなかったが他の者がやっていなかったら私がやっていただろう。」「

黄が意を決したように言った。

「殺されるのを覚悟で言います。ブルノは本物の男でした。ボスが北京で李を殺していたなら或いはブルノも……。」「その通りだ、黄。いくらでも私を責めて良い。ただ、李は2つのミスをした。」「2つ?」「1つはブルノの親友を名乗るジョアキンという男。奴は一度しか会っていないがブルノ以上のタマかも知れん。」「私も奴は只者ではないと思います。彼をどうにか我々の方へつける事は出来ないでしょうか?」「それには及ばん。もう1つのミスがあるからな。」「……?それは……?」「黄、お前の目の前に居る男は誰だと思っているんだ?李はな、北京の虎と呼ばれた私を怒らせた。ジョアキンという小僧が出るまでもなく李、劉兄、楊、趙、九龍界のメンバーは皆殺しだ。すでに朱雀の殺し屋達が大陸から日本へと向かっているはずだ。」「……となると、段 海斗が日本へ?」「ジ エンドだ。」「王が一瞬笑った。黄の背筋に寒気が走っ

た。

第20章 A meeting

―大阪―

小柄だが相手を萎縮させてしまうような眼は生まれつきだった。

幼い頃から生意気な顔だと因縁をつけられ次第に攻撃的な性格になつていった。だが極道を選ばずに捕まえる側に入ったのは正解だった。

山岸 春。只では引き下がらない。その性格が災いしてか出世街道からは大きく外された。別に気にもしていない。妻と子は数年前に出て行つた。四国にある妻の実家に帰つたらしい。子供だけが多少気になるが元々家庭を持つガラではなかったのかも知れない。

細身の男が近づいてきた。

「山岸。相変わらずスポーツジムの発砲事件を追ってるんか？」
（嫌な奴が来た。）

この男は小松 高志。俺と同期だがいわゆるエリートだ。上に気に入られる事のみで神経を費やす。

「どうせドラゴン同士のドンパチャ。追つても無駄やと思うけどな。」
「一般人が1人巻き込まれたのと死んだ方はドラゴンではなくラテン人やけどな。」
「一緒じゃ。外国人が大量に入ってきてこの街の治安も怪しくなってきたなあ。」
「失踪しとる中国人達は見つからんのか？」
「ああ、恐らく国内にはおらんやろ。俺の予想では逃

げたのは上海の楊の一味。楊も入ってるやろな。スタッフから聞き込みしたら風貌が楊と趙の2人に間違いない。偽名なんか使いやがって。」

「なあ、山岸。あの組織には関わらんほうかええ。命がなんぼあっても足りんやろ？ ちやうか？」 「せやけど楊の一味を狙ったという事は裏におけるのは北京の王の一味と見て間違いないやろな。」 「確かに対立はしとるけど・・・山内のもんって可能性もあるのと違いか？」 「それも考えたんやけどな・・・わしはこれでも大阪の山内の組織には顔が利くんじゃ。そういう話やつたらわしの耳に届くはずやし、今の時期は3代目の引退が近いっちゅう事でドラゴンと争ってる暇は無いはずなんや。それに・・・」 「それに？」 「いや、お前に言う必要はないやろ。」 「おいおい、一応俺は上司やぞ。」 小松が苦笑したがそれ以上聞いてくる事もなかった。

デスクに戻るとコーヒーを入れて砂糖を2つほど入れた。ブラックは飲めない。

(利害関係から言うと王の差し金と見て間違いないかな。だが決定的な証拠がないし、まずは楊が日本に居るか確認するのが先やな。あのボケのおかげで大阪の治安が大きく乱れとる。)

山岸は厳つい風貌をしているが街の治安に関しては誰よりも熱心だった。中学生の頃に会社員だった父が極道の流れ弾に当たって運悪く死んだ。大した取り柄もない冴えない父だったが子供には優しい父親だった。それが山岸の警察に入る動機になったのは言うまでもない。

名古屋市内でも有数の歓楽街である。主に飲み屋中心だが1軒のスナックに1人の男がカウンターに座っていた。時間は午後5時半。普通はまだ他所の店は開けていない時間帯だ。

男の身なりは悪いものではない。上下で40万以上はするであろうグレー色のスーツを身に纏い、カルティエの時計とエルメスの靴。年齢は40代後半だろうか。店にはママらしき女性が1人居るのみであった。

「青木さん、待たせていいの？中に入ってもらえばいいのに。」30代後半と思われるシヨートカットの女が聞いた。

「いいんだ。それより家庭のほうはどうなんだ？女手だけで子供を育てて仕事もしているんだ。お前、最近少し老けたぞ？」「失礼ね。ただ年を取っただけよ・・・兄さん、兄さんこそヤクザ稼業なんて辞めなさいよ。今時でもはじめで指をつめたりするの？」「今でももちろんある。」「ニヤリと山本が笑った。「ただしうちに限つてはないな。親父は仁義や義理よりも金だ。だからこそ関西が本家の山内組内ででかい顔をしていられる。金がなけりゃ・・・女も抱けねえ、飯も食えねえ、見栄も張れねえんだぞ、聡子。」「見栄は必要ないけどね。」「アホか。ヤクザは見栄を張ってナンボじゃねえか。」

山本の妹の聡子は7年前にホスト上がりの冴えない男と結婚した。1流半ほどのルックスにお世辞にも頭が良いとは言えない、どうしようもない男を聡子は選んだ。今では聡子にしてみれば黒歴史らしいがその旦那は聡子との間に娘が出来たにも関わらず他所で女を作った。

プライドの高い聡子は離婚届を旦那に投げつけた。意外にも男は待ってましたとばかりに迷わずに判を押した。その姿を見た聡子は旦那に殴りかかっていた。男は聡子の顔面を容赦なく強打した。男は得意げに家を出て行った。赤ん坊の娘は泣きじゃくっていた。例え赤ん坊でも危険な状況では本能で危険だと分かるのだろうか？

後日、兄の竜平にこの腫れあがった顔の事を聞かれることになる。激怒した山本は元旦那である男を拉致し男の性器をナイフで切り取った。

「どうだ？もう悪さは出来ないぞ？俺の妹だって知ってるのにいい度胸してるじゃないか。お前は。」
「……殺し……て……」
「ん？何だつて？」
「や……る……」

ドン

違う組員が男の脳天を打ち抜いていた。

「カスは所詮カスか。」山本が呟くとその場から静かに去った。

「兄さん、グラス空いてるけど何か飲む？」
「ん？ああ、何かボケツとしてたな。じゃ、ヘネシーの水割りくれ。」

ある雑居ビルの3階、このビルは地元では幽霊ビルとして密かに有名なのだがマフィアの溜まり場になっているのは一部の者しか知らない。

部屋に4人の男が居た。

細身で小柄だが気品の漂った紳士と言っても差し支えない男。

背は176センチほどでガツシリとした体格の男。

細身のまだあどけなさが残る美少年と言っても良い男。

短髪でズル賢そうな顔をした男。

電気は通っておらず中央に蝋燭の灯りがあるのみである。

「全員別々で出国して今日初めて再会出来た事を神に感謝せねばなるまい。」紳士風の男は3人に向かって言った。

「趙と周は初めてだと思うがこの男は林 世季。現在上海での組織は彼が仕切っている。日本に入国する際に我々の為に新しいIDを作ってくれた。林、2人に自己紹介するんだ。」初めまして。私は林と申します。趙さんは私の事を知らないでしょうが無理もありません。趙さんが日本へ行ってから私は上海へ来ました。「それまでは何処に居たんだ?」「東北の吉林省で旅行代理店の仕事をやっていたのですが会社の業績が悪くなり潰れてしまいました。上海には親戚がおりましてそれを頼り、楊様を紹介してもらい今に至ります。」林の叔父が俺の恩師でな。私は日本に居たのだがこつちで組織を仕切っていた呉は覚えてるか?」楊 再公が話しに入っ

た。

「呉さんといえば人を人と思わずに殺しが出来るイケイケのあの呉さんですか？俺の憧れの人ですよ。」趙が懐かしそうな表情をした。周は表情が全く変わらない。

「その呉がな、双虎会の連中に殺された。散髪してる最中にな。」
「そんな事・・・初めて聞きました！なんで教えてくれなかったんです？」趙が興奮したように叫ぶと変わりに林が口を開いた。

「その時期は大阪で貴方が地盤を築く為に北京の連中と血なまぐさい毎日を送っていたでしょう？楊様も貴方に余計な心配をかけさせたくなかったのでしょうか。そこで私が長老達からリーダーに抜擢されました。」

「この林はな、腕っ節こそあまりないが組織と組織の抗争で戦略を練るのに非凡な才能を持っている。人をまとめるのも上手い。」
「なるほど。しかしあの呉さんが・・・日本へ戻る前に双虎会の連中を皆殺しにしてもよろしいですか？」
「すでに呉様を手にかけて連中は皆殺しにしました。それ以降は休戦協定を結んでいます。我々に有利な条件で。」林が笑みを浮かべた。

「林よ、もう1人紹介したい。この少年が周 燕祥。上海で私の親友だった男が居てな。小学校の同級生だったのだが商売があまり繁盛せず自殺してしまったのだ。そこで息子を私が引き取った。感情を失くしているが私にだけは心を開く。周、挨拶しなさい。」
周 燕祥です。宜しく願います。「声変わりしたばかりのあどけない声と妖しいほどまでの整った顔に林は見惚れた。女より綺麗だった。」

「ボス。それで、我々はいつ日本へ戻りますか。」
「ほとぼりが冷

めるのはもう少し先だろうから1ヶ月ほど上海を満喫しようじゃないか、趙。」「御意。」

―香港 香港島―

孫 邸景の屋敷は香港のどの実業家よりも大きく立派である。

門から邸宅まで800メートルほどの距離があり門の大きさはバスケット選手でも見上げるほどに大きい。2階の奥の一室が孫の書斎になっている。

その書斎に2人の男が入ってきた。

袁 仁羽と邸 紫燕である。孫の信頼する3人のボディガードの内
の2人である。袁は3人のリーダー格であり中肉中背の凛々しい眉
毛が特徴の美男子である。歳は30代半ばくらい。邸は誰が見ても
堅気ではない雰囲気を持つ。その瞳の奥には人間ではないような獣
の光を放っている。

袁が口を開く。

「徐からの連絡があり、1人のブラジル人が九龍界の楊を狙っているとの事です。」

「そのブラジル人は、先日大阪で起きたスポーツジムの発砲事件に関与しているのかな？」普通の人間では聞き取れないほど細かい声をしてしたが、逆にそれが一層彼の存在を際立たせている。初めて孫と対峙する人間はまともに目を合わせる事は出来ない。何か負のオーラが彼の周りを包んでいるようだ。

「はい。死んだ3人の内の1人が親友だったようです。」徐からの報告によりますとなかなかの切れ者だそうです。楊の存在はここ最近で目に余るものがあります。ここらで消しておかなければ必ず孫老師に災いをもたらします。」
「・・・もう、既に災いをもたらしている。うちの若い者が神戸で殺されたのは去年の末だったか・・・
・確かに誰が支配者なのか分からせる必要はあるようだ。よろしい。
その若者にやらせてみるといい。だが、楊の行方はつかめたのか？」
ここで初めて邸が口を開く。

「いえ、徐の報告では日本国内に居る可能性は低いとの事です。そして少なくとも香港にはそれらしき人物は発見されていません。」
「フフ、楊がいくら命知らずとは言え私のシマで隠れるような事はすまい。もつとも、灯台下暗しとも言いが。」

孫は静かに立ち上がると書斎の窓を開けた。

背中を向けたまま「明日、横浜へ帰る。その青年とも一度会っておきたい。目を見れば自ずとどのような人間かは分かる。それなりに私も人生を生きてきたのだから。」歳は60とも70とも見える。実際のところは分からない。

Ⅰ ブラジル サンパウロ パライゾ地区

その日は快晴であった。

パライゾ地区はサンパウロの中でも低所得層が住む危険な地区である。殺人など起こってもいちいちニュースには取り上げられない。これは南米全体に言える事だが。

パライゾ地区の南部に薄汚れたBARの廃墟がある。こんな場所は必ずガラの悪い連中が集う。案の定、このBARには拳銃を持った少年たちが10名以上居た。

「酒はどうした!？」「自分でかつぱらってこい!!」「トレーゼの奴等をしばしば駅まで見るんだ。」「むさくるしい野郎ばかりだぜ……」「殺っちまえよ……」

各々が本能のままに生きていた。少年たちは15歳くらいから20歳くらいまでの連中だろう。このBARにマスターは存在しない。各々が自由にドリンクやドラッグを持ち込むのである。新たに2人の少年達が入って来た。

「おい!大量だ。金持ちの家が留守してたんで入ったら宝の山だ。オラ、差し入れた!」高校生くらいの少年が菓子やドリンクをカウンターの上に置く。皆それに群がって次々と無くなっていく。宴が始まった。こうなるとブラジル人は次の朝まで止まらない。

音楽が響き渡る。この頃のブラジルはロックミュージックが最高潮に流行り始めていた。この辺りは民家が周りになく思い存分に爆音を鳴らすことが出来るのだ。

ドアが突然開いたかと思えば銃声が天井と床に響き渡った。宴が一瞬にして止まりBARに居た全ての人間が入り口に注目した。

白のポロシャツにベージュのチノパンを穿いた黒人の少年だった。

「チアゴか。驚かせやがって……」皆が安心して騒ぎ始めようと

した瞬間にもう一度チアゴは天井に発砲した。

背は184センチほどはあるだろうか。骨格も太い。逞しい筋肉に大きい掌。マカツコのサンパウロ新リーダー。ブラックタイガーと他チームや警察達から忌み嫌われる、チアゴであった。

第21章 ブラックタイガー

チアゴがマカッコに入ったのは兄の影響である。

兄は近所では逆らう者が居ないほど喧嘩が強くて有名だった。その兄が中学生の頃に顔を腫らして家に帰ってきた。チアゴ少年の中では2歳上の兄の存在は絶対であり顔を腫らした兄が口を開かなくなり3日ほど同じような状態が続いた。

兄の名前はジュリアーノ。恵まれた体格と負けん気の強さで幼い頃から負け無しだった。12歳の頃に高校生2人をぶちのめした事もある。

何度ジュリアーノに顔の傷を尋ねてもこちらをチラツと見るだけで答えてくれなかった。

チアゴは数日前に兄が出かけた繁華街を訪れた。同じ年くらいの少年達が4〜5人たむろしていたので数日前に喧嘩が無かったか尋ねてみた。有力な情報が得られなかったものの、この辺りに最近現れた中学生くらいの集団が窃盗行為で問題になっているらしく、連日のように警察から聞き込みをうける事を教えてくれた。

この辺りで窃盗を繰り返しているとすれば兄の事も何か知っているはずだと毎日学校帰りにこの繁華街を訪れた。同じクラスメイト達にも頼み数ヶ所のコーナーにそれぞれ配置させた。

噂の窃盗集団が現れたのはそれから1週間ほどしてからである。4人の集団が大量の酒を盗み大通りから小道へ折れたのをクラスメイト達が目撃した。チアゴはその小道に入り急いで4人の集団を追っ

た。

小道を抜けるとまた大通りに出てきた。辺りを見渡すと買い物袋から中身を全て落としてしまったのか、一人の老婆が野菜などを袋に入れていた。

「おばあさん、今中学生くらいの4人の集団を見かけなかったかい？」
「そいつらが私にぶつかって荷物を落としちゃったんだよ！」
「そいつらは何処へ？」
聞くと老婆が工事現場の方向を指差した。

すぐにチアゴは走った。「全く聞くだけ聞いて手伝ってくれりゃいいのに行っちゃった。ガキは本当に嫌いだよ。この辺りのガキは口くなの居ない。」
老婆は不満そうに愚痴った。

工事現場の入り口付近に辿りつくくと周りに誰も居ないのを確認して中へ入った。解体作業の途中らしく以前までは3階建てのアパートがあったみたいだ。廃墟のアパートの中へ入っていくと上の階から人の気配を感じた。2階へ上ると突然背中から何者かに取り押さえられた。

「誰だ！放しやがれ！」
「お前こそ誰だ？」
後ろを見るとそこには兄よりは少し背が低いものの体格の良いドレッドヘアの黒人がチアゴの体を掴んでいた。年は自分より少し上くらいだろうか。そのまま3階まで連行された。

連れて行かれた部屋には7人ほどの中学生くらいの集団が待っていた。

「よう、お前がこの工事現場に入ってきた時にこの部屋の窓から確認してたんだよ。」
ハンサムな浅黒い肌をした少年が話し掛けてき

た。

「なんで俺達の後を追ってきた？」坊主頭の白人の少年が質問してきた。「俺はただ・・・メインストリートで最近窃盗集団が現れたと聞いて10日ほど前に喧嘩があつたか聞いたか？」ただだ。「喧嘩？10日前つて言う・・・」ジョアキン、お前が初めて窃盗にチャレンジした日じゃなかつたか？」ハンサムな少年が東洋人と思われる少年の方へ向いた。

「俺はな、人の物を盗んだりするのが性に合わないんだ。だけどそれじゃ仲間として認めないと言うから嫌々・・・」東洋人の少年が話し出すと、「なあ！喧嘩があつたか？時間は夕方くらいだつたはずだ！」「というか・・・同じ年くらいの黒人に持つてる物をよこせと言われたから殴つたのはあつたが・・・もしかしてそれか？」「身長は170センチくらいで右目の上辺りに火傷の跡が無かつたか？」「ああ、俺が殴つたのはそいつだ。」「ジョアキンと呼ばれるその少年が言った瞬間にチアゴは飛び掛つた。

軽くチアゴの拳をかわしたジョアキンはチアゴを取り押さえると、
「あれはお前の仲間か？あいつは俺の物を奪おうとしてきたんだ。だから正当防衛なんだよ。悪いことはしたとは思つがな。」「俺の兄貴だ。殺してやる！」言った瞬間にハンサムな少年が笑つた。「お前、名前は？」チアゴはそのハンサムな少年を睨みつけたまま何も言わない。

ハンサムな少年がチアゴに向つて歩いてきた。「俺はマカツコのリーダー、ブルノだ。今度お前の兄貴もここに連れてこい。ただし溜まり場所は定期的に変更するから1週間以内に来い。仕返しがないのならいつでも歓迎するし仲間になるなら大歓迎してやる。お前も兄貴もな。」「ブルノはこの状況で兄の為にジョアキンに飛び掛つ

ていったチアゴに対して好感を持っていた。

早速翌日にチアゴはジュリアーノを連れて来た。

ジュリアーノとジョアキンはすぐに仲良くなった。チアゴはこの日からブルノに対して忠誠を誓うようになる。ブルノの圧倒的な悪としてのカリスマ。兄をぶちのめしたジョアキンでさえもブルノには勝てないと言う。

ブルノが死んだという知らせをガブリエルから聞いたのはジョアキンが徐と会っていた頃である。チアゴにとつて絶対の存在。兄のジュリアーノが宿敵であるヴェルメーリオとの抗争時にベネジッタという凄腕の殺し屋に殺された。丁度チアゴが中学3年生の頃である。それに激怒したブルノがベネジッタを白昼堂々とストリートで蜂の巣にした。

「いいか、チアゴ。ジュリアーノは死んだ。ただ犬死じゃねえ。マカッコの戦士として堂々と死んでいったんだ。お前は兄貴の為に生き続けなければいけないんだぞ。分かってるな？ 今日からは俺の事を兄と思え。お前は下の連中の中でも一番見込みがあるし、何より死を恐れねえ。ヴェルメーリオはベネジッタを失ってガタガタだ。一気に潰すぞ！」

「チアゴ！海に行くぞ。ビーチにはな、発情した女達がわんさか居るんだ。ガブリエル！マリファナは持ったか？車も調達しろよ。」

「チアゴ、今日のクラブはすごいぞ。リオの有名なDJがやってき

てサンパウロのDJとバトルだってよ。行くしかないだろ？なあ！」

「チアゴ………チアゴ………」

頭から脳みそがはみ出し、血だらけのブルノが口をパクパクさせている。

「チアゴ………チアゴ………」

ゆっくりとこちらへ近づいてくる。

「いてえんだ………頭が割れたように………」

「うわぁー！」チアゴが上半身を起こすと額から滝のような汗が流れていた。

もうこの夢は3日目である。ガブリエルからこの話を聞いてずっとである。メンバーにはブルノの事を伝えた。呑気にパーティーなんてやってるもんだから片っ端から殴ってやった。まあ、奴等に罪は無いのだが。日本へ行くことをガブリエルに伝えると時期が来たら呼ぶとの事だ。

「何が時期だ？ガブリエルの野郎………今すぐブルノの兄貴をやったチャイニーズを殺したい………俺なら………組織ごと潰せるのに………」

ブルノの下で上手く立ち回るだけのガブリエルがチアゴは昔から気に食わなかった。ただ、ガブリエルの器量でマカッコは持っていると言っても過言ではなかった。警察からのマークには常に敏感だったし武器の調達、車の調達からドラッグまで、全てガブリエルが管理していた。今ジョアキンが大阪でブルノを殺した中国人グループの行方を追っているという。

チアゴはブルノ達が日本へ向かった後にサンパウロでのリーダーとなった。残ったメンバーの中で一番度胸も腕っ節も強かった。マカッコを立ち上げた初期の頃からずっと最前線でやってきた。誰もチアゴが頭になる事に反対する者は居なかった。

リーダーになつてすぐにヴェルメーリオに抗争を仕掛けた。ブルノが居た頃は警察の目が厳しくなってきたので止められていたのだが、もう誰も止める者が居ないと分かるとすぐに開始した。だがさすがにサンパウロ最大勢力のギャングチームであるヴェルメーリオはなかなか屈しなかった。中でもリーダーのグスターボはギャング達を統率する事にかけてはチアゴよりも1枚も2枚も上手だった。タイムンなら負ける気はしないが集団戦ともなると分が悪かった。

ある日、ヴェルメーリオとトレゼの会合があるレストランで開かれる噂を掴んだ。ヴェルメーリオに息のかかった人間を送り込んでいたのである。チアゴはリーダーなのにも関わらず1人で乗り込みレストランに居た両チーム合わせて5人ほどあの世へ送った。ただし数名が武装しておりグスターボは居なかったが、トレゼのボスであるジョゼーが発砲してきてチアゴの肩にヒットさせた。

チアゴは肩を押さえながら全力で駆けた。血がジワジワと肩から落ちてくる。川に飛び込み向こう岸まで最後の力を振り絞って泳いだ。

この噂はサンパウロ中のギャング達に知れ渡り初代のブルノより凶悪で強いのではないかと囁かれた。

敵対するギャング達は揃ってマカツコのニューリーダーをブラックタイガーと呼んだ。

チアゴは喧嘩が強いだけではなく銃の扱いにも慣れていた。新米の警察官を殺した事もある。ぬけぬけと一人でファベラに入ってくるから殺してやった。

身内を殺された警察官というのはギャングからすると脅威である。マカツコの撲滅の為に血眼になってチアゴを探したが転々とアジトを替えていくために足取りが掴めない。チアゴの代になるとメンバーの数も3倍ほどに膨れた。レストランでの襲撃事件や警察とのやり取りでマカツコに入りたいという者が後を絶たなかった。メンバーの数が増えるとさすがに警察も手を出し辛くなり、外ならともかくファベラ内でマカツコを潰すのは不可能か可能でも相当の被害が出るかと判断し放置する事に決定した。

こうなるとチアゴの独壇場である。その矢先にブルノの死が飛び込んできた。

「早く・・・日本へ・・・」

第22章 ツバメ

張 美玲の店は阪急三ノ宮駅から徒歩5分ほどの場所にあった。

事前に店の場所と電話番号を李 祥英から聞いていたので張 美玲が今日店に来るか確認しておいた。李 祥英は美玲の写真を渡してくれた。確かにスレンダーの美人である。中国人の女というのは皆スタイルが良いものなのか。

ジョアキンは店の中へ入るつもりはなかった。まず拉致を成功させるまでは顔を見られなくなかったのだ。現在午後22時。店を閉めるのは0時〜2時くらいだろう。週末でもないでそこまで遅くはないはずだ。

店のある雑居ビルの入り口は1つ。シンプルな構造だったから見張るのも簡単だ。作戦としては店から出てきた張を尾行する事から始まる。自宅は店から歩いて10分ほどの場所だ。自宅の場所まで李 祥英は把握していた。さすがはプロの情報屋というところだ。

普段は徒歩で帰宅途中のコンビニエンスストアに寄り自宅へ向う。だが例外として趙が車で迎えにくる事もあるらしいが現在趙は雲隠れしていてその可能性はない。万一の為に1BOXカーを待機させてある。運転手は王の組織の運転手である陳が引き受けてくれた。車はレンタカーである。

王が俺に連絡してきたのは2日前の事である。身内の李と劉兄が裏切っている事を教えてくれた。俺もあの2人は臭いと感じていたが、あたかも驚いたように装った。まだ王だって信用する事は出来ないのである。王に横浜の孫のバックアップを受けた事を伝えると快く

運転手の陳を使うように言ってきた。王と孫の組織は密接な関係ではないが楊という共通の敵が居る為に中立以上、同盟未満の関係が続いていたらしい。それは徐にも確認を取ってあるから間違いはないだろう。徐も王がそう言うならと許可してくれた。敵の敵は味方なのである。

待っている間、陳と車の中で待機した。陳はよく喋る男であった。喋るのと食べるのを生甲斐にしているような男である。ただ悪い男ではなかったし何よりもブルノとは仲が良かったらしい。

ブルノとの思い出話をいくつか話してやると陳は顔をくしゃくしゃにして喜んだ。裏の世界に身を置いてから人を見る目が養われた。これは何処の世界に、何処の職業に居ても役に立つ事だ。

陳は俺から見ても信用出来る男であった。あまり重要な事は話せなかったし任せる事は出来なさそうだったが嘘をつくような人間でもない。人の上に立つタイプではなかったが人を裏切らないというのはトップの人間から見ればそれだけで立派な才能なのだ。

「一応念のために順序をもう一度おさらいしておこう。」「おいおい、もう4回目だぜ？俺の事を見くびっているだろう？こう見えてもな、今は王老師の運転手をしているが大陸時代は泣く子も黙る不良だったんだ。おい、ジョアキン。ブルノにも言ってたんだが一度北京へ遊びに来い。俺が案内してやる。女は綺麗だし飯も美味い。空気は悪いがな。へへへへ。」確かにおさらいをするまでもなく単純な作戦だったので間違える事はないだろう。それに陳は本気でブルノを親友だと思っていたらしくそれだけで俺は陳の事が好きになった。

0時を越えた頃に店のチーフらしき男がゴミを捨てに来た。どうやら店は閉店が近いと思われる。陳の方を見ると「分かっているって。万一車ならこのまま追跡。徒歩なら家の前まで先回りしてればいいんだろ？」それだけ確認すると俺はエレベーターの方向に集中した。

1回目にエレベーターが開くと日本人の中年と韓国人と思われる女がくつついて出てきた。これからアフターだろうか？2回目に開いたエレベーターからは4人のサラリーマンの集団が降りてきた。

「なかなかビンゴしねえな。」陳がメロンパンをむしゃぶりつきながら俺に言った。俺はエレベーターの方向を見ながら「この状況でよく食事が出来るな。」「まあ俺は大物だからよ。空腹で戦が出来るか？」女一人を拉致するのに戦と表現する感覚と、時間はたつぶりあつたのに何故今になつて食べたのか？それらを突っ込む暇もなく本人がエレベーターから出てきた。どうやらチーフと一緒にいる。

「来た！車ではないみたいだ。しかしチーフらしき若い男と2人で歩いていったぞ。予想外だな。俺は徒歩で跡をつけるから陳は予定通り先回りしておいてくれ。」「よっしゃ！」

俺は車から降りると20メートルほど離れて跡をつけた。幸いこの時間でも2人が歩いてる道には人通りが疎らだが何人か居たので俺が怪しまれることはない。後ろから見ていると手を繋いで歩いている。趙の愛人なのにもかかわらず浮気でもしているのかと考えながら数分ほどついて行った。

2人がコンビニに入った所で俺はコンビニから200メートル先にある張のマンションを確認した。計画通りに陳の車がマンション前に停車しているのを確認すると、コンビニから出てくるまで向いに

ある公衆電話ボックスに入り電話をしている振りを装って2人を待った。

予定では1人だった為にマンション手前らへんで拉致を実行しようと思つたが番狂わせである。まさか張の愛人に愛人が居るなんて情報屋の李でも知らない事だつたらう。

（趙の行方が分からない内に若い男を連れ込んでおこうという訳か。麗子も浮気をするのかな？俺はそれを知つたらどうなるんだらう？相手の男を殺してしまふか？）

俺はマンション前に停まっていた陳の乗る車に乗った。

「予定を変更するか？まさか別の男と一緒にとはな・・・へへ趙の野郎、きつちり浮気されてるじゃないか。ざまあみる。」「そんな事を行つてる場合じゃない。まあ、あの男1人くらいいたいた事はないだらうが2人いっぺんに拉致するのは厄介だな。部屋に入つてしまえばいつ出てくるか分からないし難しいところだな。」「よう、ここは部屋のある階まで移動してドアの鍵を開けている所を狙うしかないんじゃないのか？2人狙うなら俺も行けば済む事だしよ。部屋に2人を先に入れちまえば後は何とかなるだろ？」

（賢い方法ではなかったが確かに陳の言う事も一理ある。それにこのマンションはこの時間帯は人の出入りが少ない。水商売をしている夜の人間が住んでいるマンションとは違い上流の家庭が住むような高級マンションだった。人が少ないのは目撃者が居なくて助かるが高級マンションだと監視カメラが気になる。）

「陳、車をここで停めて2人で先に上がろう。」「よし！」急いで張の部屋がある7階まで上った。監視カメラは幸い入り口と駐輪場

のみで部屋の周りにはなかった。7階から下を見下ろすとくつつきながら歩いてくる2人がマンションの入り口に入ってくるのを確認した。

「陳、もうすぐ2人が上がってくる。恐らく女のほうで鍵を開けるだろう。俺は部屋と反対方向にある階段にしゃがんで待機する。鍵を開けようとしたら俺は男の方を押さえるからお前は女を押さえる。それから一気に部屋の中に入れる。」「分かった。だけど、俺は何処で待機すればいい?」「3つ隣の部屋の前で鍵を開ける振りをしている。別の鍵でもいいが何かあるか?」「車の鍵しかねえ。」「十分だ。振りをするだけでいい。俺が男を襲ったらそれが合図だ。女を頼むぞ。」「よっしゃ!」

2人が7階のエレベーターから降りてくる。部屋まで歩いていったのを確認し後ろをつけた。陳は酒に酔った振りで鍵を開けようとしている。なかなかの名演技である。

張が鍵を開けようとした隙に俺は右手で男の首根っこを固めて左手で口を塞いだ。同時に陳が女の顔面に拳を入れるとドアを開けて中に押し込んだ。続けて俺も男を中に押し込むと男を後ろからトキックで押してやった。

俺はすぐに部屋の鍵をかけて陳は銃を取り出し2人に向けた。急な事で2人はパニックに陥ってたが陳の持つ銃と俺が人差し指を自分の口の前にやると2人は意外にも大人しくなった。

俺は用意していた黒のマスクを装着していた。陳は先ほどの名演技の為にマスクを被ることが出来なかったが、2人が陳の顔を凝視する前にマスクを被ったから問題はないだろう。2人を部屋の中に入れて俺が陳の銃を借りると2人に向けた。

「死にたくなかったら大人しくする事だ。幸いお前達は今の所騒いでいないから殺すつもりはない。おい、コンビニでガムテープを買ってくるんだ。出来れば飲み物も欲しい。」陳が頷いて部屋を出て行った。素人ならとっさに陳の名前を呼んでしまいかも知れないがそんなへマはしなかった。陳も心得ている。

陳が買い物に言ってる間に銃を向けながら男に質問した。

「まずお前は誰だ？」そう聞くと男の表情がさらに恐怖した顔に変化した。

「待つてちょうだい。あなた、趙が私を監視する為に雇われた人間なの？」中国語で聞くもんだから俺は日本語で「俺は中国人ではない。日本語で喋るから日本語で答える。後、俺はこの男に質問したんだ。次に勝手な真似をすると殺すぞ。いいな。」「分かったわ。だけどこの子は日本語をあまり理解出来ないから翻訳するわ。それでいい？」「いいだろう。ただし余計な真似はするな。」

そうこうする内に陳が帰ってきた。

買ってきたガムテープで手足を縛った。陳が俺にお茶を渡してきた。それを少し口に含み改めて質問した。

「まずこの男はお前の浮気相手かな？」「本当に趙の部下じゃないのよね？もしばれたら殺されるわ。そうよ・・・浮気相手というより彼が本当の彼氏なんだけどね。」

陳は何か言いたそうなのだがジョアキンに止められていた為に黙っていた。

「趙はお前に執心だと聞いた。ここの暮らしも、店も全て趙に面倒見てもらってるんだらう？よく平気で裏切ることが出来るよな？」

俺には関係ない事だったけど少し趙に同情した。

「あいつはね、女を女と思ってない獣よ。彼はあいつと違って私に優しくしてくれるわ。」「そりゃあんたがこの甲斐性なさそうな男に援助してあげてるからだろ？ハハ、変な希望は持たない方がいい。」「キツと俺の方を張が睨んだ。

「睨んでも無駄だ。おい、この男は日本語を理解していないから口にガムテープを貼っておこう。」「陳の方へ向くと黙って頷き俺の指示通りにした。

「この子には手荒な真似はしないでちょうだいよ……」「張はこの男にイカしてるみたいだ。確かに女泣かせの面をしてる。

「まあ、あんたが いい子にしてりゃどつちの命もとらねえよ。」「……目的は何なの？金？」「いや、あんたの愛人、趙 双堅を炙り出す為にあんたに協力してもらいたいんだ。」「趙を狙ってるの？ま、あいつはいろんな人間に恨み買ってるからね。」「お前の店に東京からお客が来たはずだ。去年の年末頃に。お前にちよつかいかけて趙に消された男が居たはずだが？」「ああ、そんな奴居たわね。でも私には関係ない。あいつが勝手に切れて殺したのよ。」「あの殺された男は香港三武会の最高幹部にして日本における華僑の最長老、孫 邸景の若い者だ。」「張 美玲の顔が少し引きつったように見えた。」「そ、それがどうしたの？あいつが勝手に殺したのよ……」「……」「……だけでも孫からするとあんたも同罪だ。奴が動けば……どうなるかなんて中国人のあんたなら分かるよな？」「……趙を

おびき出せばいいんでしょ？」

「奴は今何処だ？」「上海よ。しばらく帰ってこないって連絡があったわ。」「連絡があつたのはいつだ？」「2日前。」「それで安心して自分の家に可愛いツバメを呼んだのか。やるなあ張さん。」「俺はこの女が生理的に大嫌いだった。もし俺が趙なら脳みそをぶち抜いてる所だ。」

「ねえ！私達をどうするつもりなの？」「ある場所まで来てもらう。とりあえず今すぐ移動だ。」「何処へ？」「後で説明する。今は時間がない。車をマンションの前に停めてる。1つ言っておく。俺たちは余計な面倒を起こしたくないし出来るだけ紳士的にやってるつもりだ。ただ、今から車へ行く際に少しでも余計な事をすると容赦なく撃つ。この男もだ。何も関係が無いのに気の毒だが仕方がない。」「約束するわ。絶対この子だけは・・・お願いだから。」張の目から涙が流れていた。

趙の泣き所は張、張の泣き所はこの男のようだ。

「よし、今俺が言った事をこの男に伝える。」張が間男に何か伝えられている。陳の方へ向くと俺を別室に呼んだ。

「どうした？」「あの女、お前が言った事を伝えてはいたが外に出たら余計な事を考えてるみたいだ。早口の上海語だから完璧には分からないが良からぬ事を企んでいるのは間違いない。」「なるほど。」

2人の前に戻り俺は男の顔をいきなり蹴り上げた。男が後ろに倒れる。

「何するのよ！殺してやる！！」「両手両足を縛られて何が出来る？口に気をつけるよ？お嬢さん？」俺は張を見下ろした。お嬢さんといっても俺よりもかなり年上だ。むしろ男の方が俺の年と近いだろう。「殺してやる！！」俺は女の髪の毛を掴み鼻を殴った。男に殴るのと同じ力だ。

間男は完全にびびってる。張の鼻から血が溢れてきた。「おい、女の口も塞げ。」陳がガムテープで女の口を塞ぐ。

もう一度女の前に行き「なあ、男がこれ以上傷つくのは嫌だろう？」張は力なく頷いた。「だったら俺の気分を逆撫でしないことだ。」もう一度張は頷いた。

「正直に答えたら、正直に俺の指示に従えば問題は何も無い。だが、少しでも裏切るような真似をすると今のようになる。では振り出し戻りだ。」俺は張のガムテープを一気に剥がした。「痛い！何するのよ！手荒な真似は・・・」今度は張の頬を右手で押さえつけた。

「なあ、この口がいけないのか？さつきから余計な事をベラベラ喋りすぎなんじゃないのか？」「・・・ご・・・めんな・・・さい・・・」手を離すと「さて、この部屋から車まで移動する間はとうするんだっけ？」「余計な真似は一切しない。」「それで先程はちゃんと男にそれを伝えたか？余計な事を言ったか？素直に言ってみる。」「中国語が分かるのに・・・分からない振りをしてたのね・・・卑怯よ。」「おいおい、男に囲われてる身分で違う男を囲ってるお前に卑怯なんて言われたよ、なあ、この女酷いと思わないか？」陳の方へ向くと陳がマスクの中で笑ってるようだ。

「なあ、張ちゃんよ。あまり俺たちを舐めない方がいい。取引をし

よう。お前にとつても悪い取引ではない。俺の目的は趙を殺す事。その代わりにお前は趙から離れることが出来てこの男と幸せに暮らせると言う訳だ。「だけど、あの男が居なかつたら家も仕事も・・・全て失うのよ。」「さてさて、ここからが本題だ。俺は先程も言つたように孫の組織に依頼されている。孫だけではなく大勢の人間が楊や趙を消そうとしている。もしもだ。楊の組織を潰すことが出来れば俺に報酬が入る。その2割をお前にやろう。上手くいけばだ。それが孫にお願いしてお前を関東でその男と暮らせるように交渉してやってもいい。」「そんな事が・・そんな夢のような話をどうやって信じればいいのか?」

俺は煙草に火を点けた。

「なあ、俺達は利害が一致している。孫は楊が邪魔だ。俺も楊と趙を消したい。お前は趙から逃れてこの男と暮らしたい。誰が損するんだ?」「だけど・・・孫は私を許さないわ・・・さっきあなた言つたでしょ?」「あれは嘘だ。本当の目的は趙でありお前ではない。お前は趙を炙り出す道具に過ぎない。もし楊のグループを消す為ならお前の夢は叶う可能性が高い。賭けてみないか?ここで今死ぬか?それとも俺に賭けてみるか。」「張はじつと考えていた。

「お前だけ考えても仕方が無い。男にも聞いてみる。」「張が男に上海語で話し始めた。陳の方へ向くと彼は静かに頷いた。どうやら余計なお喋りはしていないらしい。

男はそれを聞くと俺の方へ向き首を縦に振った。

「よし!決まりだ。では早速移動する。心配するな。目的地に着いて建物の中に入れば自由を約束する。ただし建物内だけだが。飯も食べるし風呂も入れる。お前等が乳くりあうのも誰も文句は言わな

い。「陳の体が震えてる。笑っているのだろう。「分かったわ。ここからどれくらいの距離なの?」「車で飛ばせば今の時間なら30分で着く。それまでの我慢だ。」張は頷いた。

「では行こう。」「この戸締りはちゃんとしておこう。」

部屋を出ると陳が張の背中に銃を当てる様にしてエレベーターまで向かった。男の方は手だけを縛っている状態で俺の前を歩く。下手な抵抗はせず大人しく車まで歩いた。

後部座席に乗せると足をもう一度縛って寝かせた。真ん中の席に女を。後部座席に男を。

予定より大幅に遅れたが拉致は成功し（男が1人増えたが。）、王の事務所まで向かった。

時間は午前3時だった。

第23章 Tiger's Legend 前編

李 雷洸がマイボール片手にプロ顔負けのフォームでボールを放った。

真っ白なボールは右端からピンのだ真ん中より右側部分に綺麗な曲線を描きながら吸い込まれていった。

ピンが全て倒れるのを確認する前に李は席へと戻った。それと交互に入れ替わるように女がレーンに立つ。歳は30過ぎくらいで細みの美女。彼女の持つボールはマイボールでは無いがフォームは素人のそれとは程遠くあまりスピードは乗っていないがピンが左端に1本だけ残して残りは倒れた。

「恩師を裏切った気持ちを聞かせて欲しいの。」唐突に女は李に尋ねた。「なあ、姫華。ずっと王の愛人をやってきたお前から裏切ったなんて言われるのは心外だ。」

兵庫県川西市。

大阪市内から車で30分ほどの兵庫県の郊外にあるボウリング場で2人の中国人が北京語でやり取りしている。その隣のレーンに1組のカップルがボーリングをまた楽しんでいた。

「歩。初めてにしたら上出来やぞ。」「どうしてもって言うから嫌々来たけどやっぱりボーリングは向いてへんわ。このままやとスコア100どころか80にも到達出来へん・・・」歩と呼ばれるショートカットの可愛らしい笑顔の少女は泣きそうな顔をしていた。

「まだまだ分からへんぞ。10フレーム目は最低スペア以上出せばもう1度投げれるからな。」そう言うと利口そうな少年は少女の方へ近づいて行き、「最後のフレームは俺の言う通りに投げたらいから。」それを聞いた少女がコクリと頷きボールを構えた。

「いいか、レーンの上に黒の三角模様があるやろっ？見えるか？」
「うん。」
「あれをスパットって言うねん。」
「何かスパットみたいやなあ」とケラケラ少女が笑った。

「……まあええわ。そのスパットみたいな三角の模様を目掛けて投げるのではなく転がしてみ。そうやなあ、右から2つ目のスパットを狙ってみようか。手は投げた後、握手した時のイメージで。」
少年は歩にゼスチャーを交えて説明した。

「うん、何かよお分からんけど……やってみる。たかがボウリングやもんな！」
「そうそう、そのくらいの気持ちでやってみよう。」
歩は言われた通りにスパット目掛けてボールを転がした。悲しいくらい球のスピードだったがボールが真ん中へ吸い込まれていく。左端2本が残ってしまった。

「ああ！惜しい！でも今の感じ良かったぞ！」
「うん！さっきと今投げた感じ……ちよつと違うかも？」
「今度は左端にボールが行くようにあのスパットを目掛けて……。」

2人の中国人がチラッとカップルを見た。「さっきから大きな声で騒がしい奴等だ。」
「ま、彼らの方が正しいボウリングの楽しみ方をしてるわね。黙々とやったって面白くも何ともないもの。」それ

はまるで李に対して皮肉を言ってるかのようだった。

歩のボールが残りの2本のピンを捉えた。

「キヤー！初めてのスペア！」カップルは定番のハイタッチをして席に着いた。

「あゝもう1ゲームやらへん？この調子のままやったら次のゲームは私の方が勝つんちゃう？」「調子に乗りやがって。しゃーない、もう1回やるか。」「やったー！せやから幸平は好きやねん。」

2人の中国人が盛り上がるカップルとは対照的にレインから離れようとしたり。「俺は事務所に戻るがお前はどつする？」「宝塚に知り合いが店を出したから寄って行くわ。せっかくだしね。それと、例の件は忘れずにね。」「静かに李は頷いた。

2人の中国人が去った後に歩が口を開いた。「なあなあ、さっきの女の人、めっちゃ美人やったなあ。うちもあんな美人になつてみたいわ。」「10回生まれ変わつても無理や。」とケラケラ幸平が笑っている最中に足の脛を歩が蹴ってきた。

―平塚市―

カルロスが午前10時頃、大好きなチョコレートを頬張りながら電話していた。

「そうか。ああ、ああ……そいつは大変だったなあ。けどその陳とか言う男もやるじゃねえか。いいコンビなんじゃないのか？ハツハツハツ！ああ、随時連絡をくれ。後退屈で死にそうだ。お前の買ってくれた本はとくに読んじまったよ。フフ。いつでも俺は戦えるからよ。ああ、またな。」カルロスが電話を切ると横に居たセバスチオンが「何て言ってた？」「ああ、ジョアキンの奴、趙の愛人を捕獲したらしい。何でもツバメが1羽くつついていたらしいが……」カルロスが肩を震わせ笑っていた。

「ツバメ？何のことだ？まあいい。まずは第1段階は無事成功だな。」
「ああ、今から趙をおびき寄せる為に工作するんだろつな。俺も早く暴れてえよ。」
「カルロス、ジョアキンも言ってただろつが焦るなよ。お前の出番は必ず来るんだから。」
「ああ……」

―横浜市―

「予定通り、例のブラジル人が趙の女を拉致するのに成功致しました。」
「徐が中華街近辺にある孫の自宅で報告した。」

「そのブラジル人の青年の名前は何と言ったかな？」「ジョアキンです。日系人で稲田 勇と言つ名前を持っています。日本語もペラペラです。」
「一度頷くと「明日にでも会いたいのだが可能かな？」
「今は大阪に居ますが後で連絡を取ってみます。」
「そう言つて部屋を出ようとする徐に袁 仁羽が話し掛けた。「あの趙の愛人にさらに愛人が居たらしいな？」
「ニヤリと袁が笑つと、「自尊心の高い趙の事だろつからその事実を知つたときの奴の顔が見てみたいもんだ。」
「と徐の口元も緩んだ。」

相変わらず邸　紫燕はニコリどころか表情が変わらない。

―大阪　王　事務所前―

1台のセダンが停まっていた。運転席に座っているのは劉弟。そこに1人の男が乗ってきた。李　雷洸である。「何処に行つてたんすか？どうせ女の所でしよう？」

「余計な口は聞くな。それより事務所に入ろうとするとボスに止められて車で待つように指示されたのだが・・・何か知っているか？」
「いや、それが俺もさつき事務所に着いた時に黄さんからここで待つように言われたんすよね。何でも大事なお客が来るとか。」「客？ナンバー2の俺を差し置いて客と会うなんて今まであつたか？」
「そついや妙ですよね。」「李が車から降りるとインターホンから陳を呼び出した。1分ほどすると玄関から陳が出てきた。

「陳、一体誰が来客しているんだ？」「いや、それが俺も会わせては貰えないんです。何でもボスの恩師がどうか・・・」「ボスの恩師？聞いたことがないな。それに何故俺と劉は中に入れないんだ？」
「そ、それはちよつと・・・俺に聞かれても・・・」「言い終わる前に李が陳の胸倉を掴んだ。

「おい、陳。お前俺が誰だか分かってるよな？」
いきなり胸倉を捕まれた陳はとっさにその手を離そうとしたが細い李の腕からは信じられないような力が陳の首元に迫ってきた。

「くつ・・・ちよ・・・と・・・やめ・・・」
異変に気付いた劉が走ってきて李を止めた。「ちよつと李さん、何してるんですか？

仲間に手を出すなんて……」「ちつ……」李は車に戻った。「陳、お前李さんに何か言ったのか?」「……いや、何も……何で俺がこんな目にあわないといけないんだ……」「そう言いながら陳はニヤリと笑っていた。それを見てすぐに劉も車に戻った。

「李さん、どういふ事ですか?イラつくのは分かりますがあんな事してボスに何言われるか分かりませんか?」李は何も答えなかった。

事務所内では張 美玲とそのツバメ、段 陽匠の尋問が終わろうとしていた。

「大体の所は分かった。君達の協力に感謝する。」王が満足気に二人に言った。

「いつになれば我々は自由になるのでしょうか?」美玲は懇願するように聞いた。「楊の組織を皆殺しにするまでだ。」黄が代わりに答えた。

「そんな……そんなのいつになるか分からないじゃないの!!」美玲が叫んだ瞬間にジョアキンが美玲の髪の毛を掴んだ。

「何度言わせれば分かるんだ?お前に選択肢があると思っっているのか?お前は俺達の言う事を聞いていればその色男と一緒にになれるんだ。」「……ごめんなさい。」「張はこれ以上反抗してもジョアキンに酷い目に遭わされるのを理解していた。

王が立ち上がると、「君達2人、特に張 美玲。今日君の発言した情報は私にとっても有益なものであった。褒美に今日は2人に部屋を与えよう。この事務所内には客間が3つある。1つはブルノという死んだ男の部屋だった部屋だ。縁起も悪いので違う部屋にしてお

いた。そこらのビジネスホテルよりは広いから思い存分使え。「王がこのように厳しい口調で喋るのは珍しいことであった。普段の王は紳士そのものである。それだけ張という女に嫌悪感を感じていた。「ジョアキン、今回は良くやってくれた。「王がジョアキンを労うと「いえ、陳という相方が居たおかげで助かりました。最初は不安だったんですが今考えると彼とはいいコンビになれそうです。「はっはっはっはっ。「王が珍しく大笑いした。

「陳はな、ブルノとも仲が良かったんだ。「ええ、陳も言っていました。「だから今回の事は陳もかなり憤慨している。それと今日は家に帰るのか？ブルノの部屋を自由に使ってもいいんだぞ。「はい。ありがとうございます。それより警察はこちらの方には？ブルノとこの関係は割れていないんですか？「ああ、大阪府警の上層部にパイプがあるし、念の為にブルノが住んでいた難波のマンションの方も引き払った。荷物は少なかったがブルノの部屋に多少置いてあるから君が引き取ってくれば助かる。「分かりました。」

「王さん。「ジョアキンが思い出したように言った。王が降り返ると「さつき横浜の徐さんから連絡がありまして孫長老が私と会いたいらしいのです。明日向こうへ行こうと思うのですが宜しいでしょうか？「ああ問題ない。孫老師とは今回の上海組織の撲滅に関しては共同戦線で行くのが決定しているから心配ない。今後趙をどう炙り出すかも相談してきてほしい。」

俺はブルノの私物を確認したかったが横浜へ向うのを優先した。

王は黄を連れて外に出た。途中で陳が李に問い詰められた事を話すと王は少し微笑んだだけで何も言わなかった。

車の方へ向うと李と劉が降りて来た。

「ボス、お客はもう良いのですか？何故私は室内に入れなかったのでしょうか？」李は早速切り出した。「まずい事になったのだ。私が困っていた愛人の1人が私を裏切ったのだ。別に男を作ったんだ。情けない事だな。」李の表情が一瞬変わったのを王は見逃さなかった。

「愛人の1人というത്？」「もちろん姫華ではなく別の女だ。私という男が居ながら別に男も作っていた。」「命知らずな女ですな。」姫華では無い事が分かると李の心は安堵していた。「実はな、李よ。最近嫌な噂が流れてきたのだ。」「噂？」「うむ。お前が私を裏切るといふ嫌な噂だ。」「まさか？」唐突に話を振られたが李は冷静を装った。「長年大陸時代から私に仕えてきたお前が俺を裏切ったのだと言う。」「誰が？」「その裏切った愛人だ。」「ほう。」「恐らく自分が助かりたいが為に訳の分からない事を言っごまかそうとしているとは思うのだが。」「誓って言いますが私はボスを裏切る行為はしていません。」「それは信じている。だが証明して見せてほしい。その女は確かにお前が私を裏切ったと吹いている。お前がその女を殺せば私は今まで通りにお前の言う事を信用できるのだ。」「お安い御用です。」「間男が1人付いているのだがそいつもついでに消してくれ。」

黄が李に銃を渡した。李は無言で頷くと建物に入って行った。その後を黄と陳が付いて行く。数分ほどすると建物から李、黄と陳が再び出てきた。

「指示通り2人を始末致しました。」黄と陳は王に向かって頷いた。それを確認すると王は李を抱き寄せた。「疑ってすまなかった。し

かしこうでもしないとお前をどうしても信用出来なかった。「ボスの為なら何でもします。信用して貰えて光栄です。」李は王に白い歯を見せて笑った。

王が頷くと「陳、2人の死体をバラバラに切断しろ。後はダンボール箱に詰めて部屋に置いておくんだ。」「はい。しかしその後は？」「後で役に立つ。今はそれだけでいい。」「李よ。今日は姫華の所で飲みたい。」「ええ、飲みに行きましょう。ただ1つだけ質問してもよろしいでしょうか？」「何だ？」「先ほど女と男を上で殺す前に女が泣きながら私は上海マフィアの趙の愛人だと叫んでいましたか？」「その通りだよ。だからお前にあの女を始末させたのだ。私を裏切っていないのならあの女も殺せるだろう？」「そういう事でしたか。」

（ちつ、俺が上海側に寝返っていたのをやはり疑っていたか。だが趙の愛人なら問題ない。俺はあいつが大嫌いだ。あいつの愛人だと分かってむしろ気持ちがいい。それに王も俺を疑う事はないだろう。それにしても趙と王ともう1人の間男を手玉に取る神戸のクラブのママか。確かにいい女だったな。）

「劉、李と黄を連れて姫華の店へ行つてくれ。」劉が頷いた。「ボス、解奉や陳は？」「解奉にはスポーツジムでの一件でしつこく嗅ぎ回っている刑事が1人居てな、そいつの相手をさせている。適当に相手をさせてから事務所に戻るように伝えているから帰ってきたら陳と共にミナミへ向う。」「なるほど、しかし大阪府警にも骨のある刑事が居るんですね。」「山岸という刑事でな。こいつがしつこいんだ。」「私が消しても良いですが。」「刑事はまずい。気持ちは嬉しいがな。」王が少し微笑んでから陳と共に事務所へ戻った。

「うまくいきましたね、ボス。」「お前、李に問い詰められた時どうだった？」「殺される勢いでしたよ。でもあの野郎、必死な顔しやがって・・・笑えましたよ。」王が肩を震わせて笑うと「段 海斗が心斎橋の日航ホテルに到着しているらしい。ここまで連れてきてくれ。」「えっ！いや、勘弁してくださいよ。僕1人で・・・？勘弁してくださいよ。ボス。」陳が泣きそうな顔をして頼んだ。

笑いながら王は「陳、心配するな。今回の事は段にすべて伝えてある。李と解奉の裏切りも。お前には手を出させない。」「い、いやあ・・・」「陳、段の例の性癖の事を心配してるんだろっ？」王がニヤリと笑った。「はい・・・奴は獣ですよ？女には全く興味が無い。あんなおつかない奴と車の中で2人きりだなんて・・・俺ならやつに替わりに虎を選びますね。」「今回は劉 解奉に生贄になつてもらおう。ふふふ。心配するな。解奉は段の好みにピツタリの男前だからな。」「李の野郎は運が良かったですね。同じ死ぬにしても殺されるのが段になんて・・・ああ、やっぱり俺が迎えに行かないといけないんですよね・・・行ってきます・・・」陳が肩を落として出かけた。

事務所から王以外の人間が居なくなつた。

椅子に座りグラスにウイスキーを注ぐと一口だけ含み目を閉じた。

王は山西省で生まれた。貧しかったが両親が共に明るかった為に不自由した生活だったとは思えなかった。まだ16にもなっていない年の頃。王少年の住んでいた農村には不吉な言い伝えがあり、山の

中に獣の面をした集団が存在し、村の娘を攫い獣達の長への生贄にするのだという。王少年が物心ついた頃から考えてみると確かに村の女が数人行方不明になったことがあった。しかし物心ついてから10数年、その長い間に数人が数回行方不明になっただけである。

山の中で自殺、賊に襲われたか、事故で死んだか、迷子になったか、可能性は色々考えられる。獣の面をした集団など王少年にとっては馬鹿らしく生まれつきロマンなどとは無縁な現実のみを考える少年だった。

ある日、愛凜という王の密かに想いを寄せていた同じ年の幼馴染が2日ほど家に帰っていないという知らせを親から聞いた。すぐに愛凜の両親の元へ行き事情を聞くと、2日前に友達の花鈴と山の麓から1里ほど行った所にある湖へ遊びに行ったらしい。その湖は王少年も幼い頃に両親に何回か連れて行ってもらった事があるが景色が素晴らしく水も澄んでいる綺麗な場所だ。両親は他の大人も含め10名ほどで湖周辺をくまなく探したらしいが2人の少女達は見つからなかった。村の者も2日前に少女達を見た者が居ないらしい。

「文宝、手軽な武器を用意しろ。」文宝とは王少年の幼馴染の1人であり幼い頃から兄弟のように育ってきた。当然彼も行方不明の愛凜の事はよく知っており、「義承、任せとけ。夜の湖は何が出るか分からない。大きな鉈を用意してある。」

鉈を右手に松明を左手に構えて王は山に入った。文宝は王よりも一回り大きな鉈を持っていた。文宝は王よりも5センチは背が大きくいい体格もしていたからである。しかし喧嘩では王にどうしても勝てなかった。昔から1度も勝った事が無い。湖への道は松明が無くても問題なく辿り着ける自信はあるが、真つ暗闇の山中を1里歩く

のは心細かった。

王少年は大人達が大勢で湖周辺を探して見つからなかったというので、湖で攫われて何処かに拉致されたか事故で溺れたか。2人同時に溺れたというのは考えにくいので、何者かに攫われたという線だと思った。村からさほど遠くない湖で迷子になるとも思えない。

湖に辿り着くと王達はそのまま湖に寄らず山の先へと進んだ。今までに自分達だけで山に入ったのは湖からさらに2里ほど進んだ辺りで限界である。その間には特に目立つ建物もなければただの山道である。黙々と進みその場所まで辿り着くと迷わず先へ進んだ。知らない風景が多少2人を不安にさせたが愛凜達の事を考えると勇気が出た。

もう1時間は歩いた。文宝が疲れたらしく少し休憩することにした。山道で何も無い。松明を除けば闇しかない。少し休憩してから再び歩いた。ただ闇雲に歩いているだけではなく道の途中に何かないかと松明を頼りに2人は探した。もうさらに2時間ほど歩いていくと数件の民家がある事に気付いた。近寄っていくと誰も住んでいる気が無かった。廃屋ではあるが休憩するにはもってこいだっただし少しパラパラと雨も降り出してきた。

中で文宝と2人が体を休めることが出来るスペースを確保していた。外は雨が強くなったらしく朝まで待つ事にした。少し眠ると雨が止んだ。後、少し待てば外も明るくなりそうだったので待つ事にした。

「なあ、義承。愛凜達、本当に見つかるのかなあ？」「分からん。だけど探すしかない。湖から行方が分からないという事は村では見た人が居ない。となると先に進んだとしか思えないな。進んだのか拉致されたのかは分からんが自分達で進もうとは思わないよな。普

通に考えると。「くそつ、誰が拉致しやがったんだ。」「そろそろ外が明るんできた。行くぞ、文宝。」
廃屋から1里進んだ所に脇に上つていく階段を見つけた。しよつちゆう人が通っている跡があり進んでいくと2件の大きな建物があつた。建物の前には何人かの人間も居た。

「まだ俺達の存在は知られてない。文宝、俺の鉈も持ってあの茂みに隠れているんだ。」「鉈を持っていかないのか？危ないぞ。」「持っているほうが怪しまれて危険だ。そこから見てもし危なかつたら鉈を持ってきてくれ。」「分かった。」

恐る恐る建物に近づいていくとその前に居た数人の男達が王に話しかけてきた。

「おう、随分若い兄ちゃんだなあ。お前も客か？」「客？いえ、麓の村から旅をしましてここで宿がないかと流れ着きました。」

「宿か。ある意味、ここは宿だけだよ。」と下品に笑った。「麓から来たのか？ここから2里先に行くと大きな町がある。麓の村より10倍はでかい町がな。」「そういえば両親から山を越えた所に1つ大きな町があると聞いたことがあるが、荒くれ者の多い町で治安があまり良くない事を言っていた。」

「ここは宿は無いんですか？何の建物なんですか？」王少年が聞くと「お前みたいなガキはまだ知らなくてもいい場所なんだよ。へっへっへっ。」「これ以上とない下品な笑顔だと思った。「それに営業は深夜までだ。もう朝だからよ。何の店か知りたきゃ今日、日が暮れた頃に来な。もちろん金を持ってな。」

文宝の元へ戻り事情を説明して廃屋へ戻った。日が暮れるまで待機する事にした。

「なあ、あそこの建物。恐らく俺の勘では売春宿だ。噂では聞いた事があるが……」「ま、まさか愛凜達があそこへ……」「可能性はある。いや、高い。だって事故で死んだ死体もなく迷子ならここまで歩いてきたんだから途中で居るはずだ。もし、いやもう手遅れかもしれないが愛凜を慰み物として扱った野郎全てをこの鉦でぶつた切つてやる。」「待て。だったら一度村へ戻って大人達を連れてきた方が……」「無理だ。どうせあの売春宿を経営しているのは町の者だ。どうせ堅気の間人ではないはずだ。そうなると村の大人は動いてくれない。それどころか俺達も村から出してもらえなくなる。今やらないと。」「分かったよ。こうなったらやけくそだ。俺は力には自信があるんだ。」

日が暮れた頃に2人は動き出した。もちろん金など無い。それどころか飯をまともに食べていないせいかわらわらしてきた。鉦を文室に預けて再度建物の入り口に行くと受付の場所に1人女が居た。

「もう営業してるのかい?」「王が尋ねると女が王少年を厭らしい目で眺めてきた。「あんた、いくつだい?それに美味しそうな可愛い顔してるじゃないか。あたしは現役を引退したけど特別にあんたになら今日働いてもいいよ、半額でいい。どうだい?」「一瞬で売春宿だと悟った王は「俺はここは初めてなんだ。反対側の建物は何だい?」「向こうは女達の寮さ。あんたいくつなんだい?」「19だ。金はある。それより最近いい子は入ったかい?若い子がいいんだよ俺は。」「ふん!ガキ相手がいいのかい?分かつちやいなねえ。それなら2日前ほどに2人ほど入ったよ。男が好きそうな顔をしていたよ。」「何歳くらい?」「そうだねえ、15、6と言ったところじゃないかい?」「見た目は?」「1人は背が高く肩より長い長髪の子だ。もう1人は小太りだが可愛い顔をしていたよ。さあ、兄さんどうする?」

(愛凜と花鈴だ！)

「よし。連れもいるんだ今日は。その2人今夜買おう。今から外に待たせてある連れを1人連れてくるから一度その2人を入り口まで連れてきてくれよ。いいだろ？」「ああ、いいよ。実際の顔を見たいてんだね。あんた若いの慣れてるねんだねえ。」女が厭らしい顔で2人を呼びに行った。

王はすぐ文宝の元へ戻った。「最悪だ。嫌な予感的中したらしい。今女が愛凜と花鈴を呼びに行った。2人を確認したらすぐ逃げるぞ。幸い外には人がほとんど居ない。」「ちくしょう、愛凜と花鈴はこんな所に……皆殺しにしてやる。」文宝は王に小さな鉈を渡した。「お前は俺の後について来い。鉈は後ろに隠しておくんだぞ。」王を先頭に再度店に入った。

「ああ戻って来たね。この子達だよ。」案の定、愛凜達であった。愛凜は死んだような覇気の無い目をしていた。花鈴は王達に気付き表情が変わった。「よし、行くぞ。」王は2人の手を引っ張った。外に出ようとすると店の女が「ちよっと！お勘定。前払いだよ。連れ出しは別料金だからね。」女がそう言ってる内に文宝は大きな鉈を振り上げ女の頭上に叩き落した。

愛凜の顔が少し怯えたような表情をしたが声は出さなかった。花鈴は絶叫した。それを見た王は愛凜の手を引いた。愛凜は外に出ようとしなかった。完全に毀れた顔をしていた。「愛凜！村へ帰るんだ！」強引に王は外へ連れ出すと4人で走った。後ろからは店の男達が追ってくる。

7人居た。全て堅気の者には見えない。王少年は愛凜の手を離すと

鉦を構え文宝に背を向けながら「文宝！愛凜も連れて行け！2人を頼む！」「お前は？」「こいつらを皆殺しにしてから行く！」「1人じゃ無理だ！」「惚れた女1人も守れずに俺は情けない・・・」
「お前のせいじゃないし仕方無かつた事だ。まずは逃げるんだ！」
「行けえ！！！」

叫んだ瞬間に王は先頭の男の首に目掛けて横から鉦を叩き付けた。小さいが切れ味の良い鉦で男の首が転がった。瞬間、残りの者達に動揺を与えた。そのまま王は2人目の男の右肩から左斜めに切り落とした。返り血を大量に浴びたが王は3人目に飛びかかっていた。返り血のせいで鬼にしか見えなかった。見ていられなくなった文宝は残りの集団に襲い掛かった。王より大きく鉦も巨大であった為に全員反転し逃げた。

その後ろから文宝は1人の男の右腕を切り落とした。走りながら次の男に切りかかって行った。いや、叩きつけていたと言った方が正しい。無事に建物の方へ逃げたのは2人だけであった。3人は即死。1人は片腕が無くなりもう1人は腹を切られて腸が出ていた。王と文宝は2人の手を引つ張り山へと駆けた。休まなかった。2人が走れなくなると背中におぶりまた駆けた。遂に倒れそうになると2人を背中から降ろし手を引つ張ってさらに歩いた。だが幸い追手はなかった。恐らくまさか襲撃されるとは思わず用心棒達も少なかったのだらう。この後は仕返ししてくるだらうが後は大人に任せればいい。

何とか夜明け前には村へ着いた。

第24章 Tiger's Legend 後編

村の騒ぎは2つの理由で尋常ではなかった。

1つは愛凜と花鈴が売春宿で数日間、客たちの慰み物になっていた事。もう1つは義承と文宝がプロのマフィアに喧嘩を売った事。

売春宿の使用人達は全て筋者である。山向こうには大きな街があり街を仕切る組織の構成員の数は200を超えと言う。村の者のほとんども2人の少年達に非難を浴びせた。助けられた2人の娘の両親と少年達の身内は除いて。

花鈴の父は幸い牧場を経営していたので多少裕福であった。大金を叩き用心棒たちを30人ほど雇った。先に敵のボスを消せばいい。

だが敵側のボスは花鈴の父より一枚上手だった。村の中に潜ませていたスパイが用心棒達の情報を掴んでおり襲撃した時には組織のアジトは蛻の殻だった。花鈴の父及び家族は全て皆殺しにされた。愛凜は両親と再会してから気が狂った。慰み物になってしまった現実を認識すると同時に気が狂い叫び続けた。その叫びは数時間止まる事は無かった。

王少年と文宝は村を出て逃げた。王と文宝の家族は全て皆殺しにされた。2人の居場所を教えなかった為である。2人は北京へ逃げた。大きな組織に入り村を食い物にしたあの組織を壊滅させると誓った。

2人の少年は朱雀という北京でも3本の指に入る組織に入った。ただ田舎から出てきた2人の若造が任せられる仕事など大した物はなかった。

「おい、義承。いつになったら村へ戻つてあのクソ野郎達を殺すことが出来るんだ？」直である先輩達の衣類を洗いながら文宝は言った。「今は我慢して待つしかないだろう。組織の中で勝手出来る身分じゃないからな。」「もう1年近くになるが俺たちのやる事と言えばあの偉そうな奴等の使い走り程度で永遠に出世できる訳がねえ！」「焦るな、文宝。小僧の俺達が最初に舐められるのは仕方がない。今は我慢して時を待つしかない。」「ぬるいぜ。俺はもう組織を抜ける。あれからまた背が伸びたし大人にも負けねえよ。」「確かに大きくはなつたが多勢に無勢だぞ。うまく組織を利用するんだ、文宝。」「うまく利用されてるのは俺達の方なんだよ、義承。」

文宝は1度決めると考えを曲げなかった。結局そのまま組織を抜けた文宝は戻つて来ることは無かった。組織の者達に行方を聞かれたが正直に話した。自分までとばちりを喰らいたくなかつたし、もしかしたらそれを聞いて組織が動いてくれるのを期待したが笑つて済まされた。1人の小僧の復讐劇に組織が動いていたらキリがない。正直、正論だつた。

文宝が組織を飛び出して2年が経つた。王は敵対する組織である紅蓮会との大きな抗争に参加するよう言われた。紅蓮会とは北京でも老舗の大組織でありこの頃では孔雀よりもはるかに大きな集団であった。事あるごとに小競り合いがあつたのだが孔雀の幹部格である2人が殺害された。これをきっかけに孔雀の報復が始まつた。4つのグループに分けられ、王の入つたグループには甘という男がリーダーを務めていた。「いいか、義承。お前はまだ若いがここで手柄をあげてみる。お前は大出世が出来るぜ。幹部2人も殺られたんだ。」「はい。」

王の居るグループが狙うのは紅蓮会の幹部の1人、崔という男だつ

た。この崔は紅蓮会が大きくなった原動力の1人でありこの男に消された人間は100はくだらない。警察などもこの男には手が出せないという噂らしい。孔雀のメンバーもこの男にかなり殺られてる。今回の報復は4つのグループ全てが成功しなければならぬ。初めから数では不利なので最初の先制攻撃が肝心となる。若造の王は銃を持つことが出来ず1本の青龍刀のみで戦わなければいけなかった。崔という男は用心深く常に5人以上の手下を従えていた。

襲撃の日に崔は手下12名を連れて繁華街の食堂で夕食を食べていた。週末はこの食堂を使う事が崔の習慣になっていた。甘は予想以上の人数に襲撃をためらった。「こっちは5人。奇襲をかけても難しいな。」「俺にやらせてください。崔の首を取りますので援護をお願いします。」「王が言った。

「おい、気持ちは分かるがあの野郎1人でも厄介なのに手下が12人も居るんだぞ。こっちが全滅してしまう。」「かといって報復を止めるのですか？他のグループはもう始めてるかもしれない。俺は幸い向こうに顔も割れてませんし小僧だから警戒されません。」「言われればお前が奇襲をかけるのが一番いいかもな。」「甘は40を超えるベテランだがこれといって目だった才覚があった訳ではなかった。ただし下からの信頼は厚く面倒見も良かったので人気があった。

王も人の良い甘は嫌いではなかったが喧嘩には向いていない。このグループの中で自分が1番強い自信があった。それを証明するには今が大きなチャンスだった。

「では俺が崔に切りかかった時が合図だと思ってください。援護をお願いします。」「そう言うと全員が頷いた。

広い食堂だった。食堂の左端に崔達は陣取っていた。ちょうど崔のテーブルの斜め向かいの席に付いた。実はこの食堂の従業員である少女は王の恋人であった。今回の襲撃がこの食堂だと見越して少女に近づいた。鞘に収めた青龍刀を店の裏口から少女に渡した。この事は店の主人も了解している。紅蓮会のシヨバ代が異常に高く孔雀に代われれば半額で良いと王は交渉した。もちろん王にそんな権限などないが戦果を挙げれば文句を言わさない自信があった。崔は紅蓮会でも1、2を争う男だし12人の構成員を仕留めれば発言力もあがるだろう。

王は酒を注文すると崔に届けた。

「小僧、何だこれは？」「はい。俺は崔さんに憧れています。どうか組織に入れてもらえるように口を利用してはもらえませんか？」「俺はあまり酒を飲まないんだ。出来れば女のほうがいいなあ。」「崔は厭らしい笑いを浮かべると周りの構成員達も笑った。「はい。もし入れてもらえるなら女も用意します。それもとびつきり若いのです。酒を飲まれないんだったらどうぞ他の方たちで召し上がってください。」「見所のあるガキだなあ。」と1人の男が酒を飲みだした。それなら俺もと次々に飲みだしたが崔は口をつけなかった。こういう所はさすがに百戦錬磨と言われるだけあり乗ってこない。ただ他の者達に酒を飲ませる事が出来たので良しとした。

「小僧、お前何でうちに入りたい？」「力があり余ってるんです。学がある訳でもなく、崔さんの下に付けば今よりマシな人生になると思ったからです。」「じゃあ俺の酒を飲めるか？」「明らかに王の事を疑っていた。他の者達は気付いていないみたいだ。「はい、頂きます。」王は即答した。「俺が注文してきましようか？」と尋ねると崔は頷いた。

(これでお前は終わりだ。この瞬間に王は勝ったと思った。少女に酒の追加を注文する時に目で合図を送った。間もなく少女が酒を持ってくると崔は王に酒を注いでやった。

一口で飲み干すと構成員達から歓声があがった。「いける口じゃねえか。もう1杯飲め。」「俺はそこまで強くないんですが崔さんが言うなら断れません。」と再度注がれた酒を飲み干した。王の顔はすぐ赤くなってきた。段々、崔は王を信用し始めた。王が酒に弱いのも分かったし素直に飲む所を見ると自分を狙っている人間ではないと思つた。酒はある程度水で薄めてもらっていた。結局それからさらに2杯も飲んだ。

「べ、便所に行つていいですか？」と千鳥足で便所のほうに向かった。背中からは崔達の笑い声が聞こえた。便所に入ると少女に預けていた青龍刀が入った布が置いてあったのでそれを取った。崔の居る席から便所は人込みで死角になっており布から中身を取り出し後ろに隠して崔達の居るテーブルへ近づいた。その瞬間、食堂内で大きな音が聞こえた。少女が客のテーブルから回収した皿をわざと床へぶちまけたのである。

崔達は数秒ほどその音の元へ視線をやった。瞬間に鞘を抜いた王は真つ直ぐに崔の方へ走り崔の頭から青龍刀を振り下ろした。即死だった。直後に4人の男が他の構成員達へ射撃を開始した。いきなりの奇襲に酒も入ってる事もあり損害を出さずに最大の戦果をあげた。

この戦果により王は若くして幹部に上り詰めた。

その後、文宝を組織に戻そうと故郷を訪ねると村の様子が一変していた。世帯が以前の半分近くにまで減っていた。村の者に事情を聞

くと以前に故郷を出た文宝が突然戻ってきて街の組織を潰すと言出し勇士を募った。

だが下手に組織に逆らえば今度こそ村ごと潰される破目になる。村からすればたった数人の娘の生贄で村が救われるのである。気持ちは分からないでもなかった。大人になった王からすればだ。

だが意気揚々と戻ってきた文宝は勇士が全く集らないのに腹を立て村ごと焼き払うと言い出した。自分の両親は殺され、今までに多くの娘が犠牲になってるのにお前等はただ自分が助かりたいが為に見て見ぬ振りかと。反発した村人数名の首を文宝は刎ねた。その後山向こうの街へ出て次々と組織の間を血祭りにあげていった。ただ相手はプロの殺し屋集団である。その内に文宝は捕らえられ一般市民が大勢居る前で見せしめに皮を全て剥がされた。

王は孔雀の気の荒い人間を数十名、北京から呼び寄せた。紅蓮会の主力を叩き、勢いに乗る北京最大勢力の孔雀の前に田舎の組織などは一溜まりもなかった。泣いて媚びる組織のボスを全裸にして両手両足を切り落として見世物にした。

山中にある売春宿が主な収入源になっていたらしくそれごと王は乗っ取った。宿に居た売春婦を全て整列させると中に愛凜が居た。あの事件以来、自分の方から売春宿に戻ってきたのだという。

「愛凜、俺を覚えているか？」愛凜の目に心無しか光が宿ったように感じた。「・・・義承・・・」「そうだ。幼馴染の義承だよ。どうだ？立派になっただろう。悪い奴等は全てやっつけた。お前もこんな所で働かなくていいんだよ。」そう言うと愛凜は笑い始めた。その笑いは10秒、20秒、ずっと途切れることがなかった。

「何がおかしい?」「文宝がね。ずっと前にここに寄つたの。お前等を助けてやるつて。結局死んじゃつたらしいの。犬死よね、フフ。弱いくせにプロに突つ張るから皮を剥がされちゃつたみたい。フフフ。義承、あんたもよ。変に突つ張らないで悪いことは言わないからここから消えた方がいいわ。悪い奴等はやつつけた?馬鹿じゃないの?そんな事出来る訳がないでしょ・・・」言い終わる前に脳天に銃を叩き込んでいた。

こんなクソ女の為に自分は、文宝は必死になつていたのかと思うと情けなくなつた。宿を出ると下の人間にこの宿の女全てを北京に移し商売させるように手配させた。従業員の中に子供が1人居るのだと言う。客との間に出来てしまつた子で母親は客と子供を放つて逃げてしまつたらしい。まだ5歳になつていてるかどうかの歳だつた。

「お嬢ちゃん、名前は?」「姫華。」「お兄さんと一緒に都会へ出よう。こんな教育に悪いところに居ては駄目だ。」「お父さんとお母さんには会えるの?」「いや、君の両親はもう居ない。だけど俺が面倒を見てやる。さ、おいで。」「王は少女を抱っこすると北京へ戻つた。

第25章 妖艶 前編

御堂筋の側道に車を寄せ陳は日航ホテルの中へと向かった。ロビーには肩まで伸びた長髪の男が陳に微笑みかけた。

「お久しぶりね。ちょっと太ったんじゃないの？」「ほっとけ。それよりすぐに仕事だぞ。いや、お前にとつたらお楽しみの時間だ。」
「それが楽しみで来たんじゃないの。早く案内しなさい。」

段 海斗。細身で色白で、美男子であった。彼が自身でゲイだと気付いたのは10歳の頃である。無性に仲の良かった男友達の体を見ているとムズムズするのである。最初はそれでも理性を保っていた。それがいけない事だと自分自身で言い聞かせていたのだ。

13歳の頃、彼は近所の年下の男の子を川へ誘った。男の子が脱ぐと異常に興奮してきた。そして遂には男の子の股間へ触れた。当然、男の子は拒否反応を示すものの力づくで触り、それを自分の口に含んだ。

その事を少年は自分の親に言った。少年の親は激怒し海斗の家まで乗り込んできた。海斗の両親は謝るしか出来ず二度と息子には近づかないように警告した。

その後、海斗の親は叱り付けるよりいつから同姓に興味が沸いたか聞いてやった。もう数年も前からそのような兆候があったのだと言う。海斗には2人の兄が居た。親は近所や知り合いの男には手を出してはならない条件でこの事件については目を瞑る事にした。2人の兄が居たので海斗がホモだとしてもたいして気にしなかったのである。2人の兄には当然この事は伏せておいた。

美男子であったので周りの女達は騒いだ。騒ぐ女達を見て海斗は吐き気がした。昔から女に対して抵抗があった。女のふくよかな肉体を見ても自分の股間は全く反応を示さない。が、男の引き締まった体を見ると無茶苦茶にしてみたい衝動に駆られるのである。あの一件で何故父が自分に対して怒らなかつたのか海斗は分かつていた。自分が父に対する視線を父は知っていたのである。つまり息子がゲイだと言うことを以前から気付いていたらしい。

決定的だったのは今回の事件だが、以前にも家族で海へ行った写真の中に父の引き締まった体が写った写真があった。その写真を見て事もあろうに海斗は自慰行為をした。父は実はそれを見てしまったらしい。その件以来、父が自分を避けているような気がした。自分がどこも悪くないのに医者に連れて行かれたのはその為である。

17歳の頃、ますます海斗は美しく育った。モデルや俳優かと思われる容姿に女は騒いだ。ある日、下の兄が海斗のゲイ疑惑を何処からか聞いてきた。両親は必死に隠し通してきたが無理があった。兄は海斗にその事を問い詰めるとあっさり海斗はそれを認めた。それどころか兄に対しても特別な感情を持った事があると告白され、兄は力いっぱい弟を殴りつけた。

殴られた海斗はすぐに起き上がりもつと殴ってくれと懇願した。寒気がした兄はその場から飛び出すように逃げた。その一件が家族全体に伝わり父から1人で暮らしていくように説得された。つまり家を追い出されたのである。生活費は毎月支払われた。家が裕福であったからだろう。地元から車で1時間ほどの距離に北京があった。休日に女装して北京へ出かけた。すれ違ふ男も女も海斗を振り返った。絶世の美女であったからである。

そこへ1人の男が目をつけた。

「君、モデルかい？」「いえ・・・」海斗は声変わりをしていたが元々低い方ではなかったので少し声を作って返事した。

「素人？世の中にはすごい奇跡があるもんだ。君ならトップスターになれるよ。どうだい？そんな仕事に興味がある？」「・・・はい。」「じゃ、ここから事務所が近いんだが来るかい？行こう！」半ば強制的に連れて行かれたが海斗は抵抗しなかった。事務所と呼ぶにはお粗末なビルだった。この男がモデルや芸能関係者なのかどうかも怪しかったが、そこに居た事務所の社長が海斗を見て再び絶句した。それほど海斗は美しかったのである。

「どうだい、君。スターなんて、私の意向でどうにでもなるんだ。ただし一晩私に付き合ってもらわないといけないんだがこの意味分かるかい？お嬢ちゃん。」「よく分かります。お願いします。」信じられないという表情で社長は海斗を自分の別荘へ連れて行った。本宅では嫁が居るのだろう。何人ものモデル、女優の卵がこの別荘で社長の物を銜えていたのかと思うとおかしかった。

海斗は別荘に着くなり社長のズボンを下ろし社長の性器を自分の口に含んだ。舌を使ってあらゆる角度から舐め回した。

「き、君はどこでこんな技を・・・ああ・・・君は明日から大スターだなあ。」満足そうな間抜けな社長の顔を見て海斗は社長の両手を紐で縛った。「そんな事もやるのか？けしからん娘だ。」とニヤリとした。

「ちよっと目を閉じていてください。」海斗が言っていると社長は素直に従った。しばらくすると社長の尻に何か突起物が入ってくるような

感覚がした。目をやるとニヤけた顔をした海斗が自分の尻に性器を突っ込んでいたのだ。激痛が走った。「う、うわあ！男じゃないか！！！」

この日、海斗は社長を5回も犯した。これにより社長は仲の良い紅蓮会の幹部の1人である胡に海斗の抹殺を依頼した。

「社長、随分派手にやられたんだって？」胡の口元は明らかに笑っていた。「何を言われようが反論はせん。ただあのガキは警察ごときに引き渡すつもりはない！まずは捕らえてくれ！それからわしを怒らせた事を後悔させてやってくれ！頼む！金ははずむぞ！」「興奮するな。金さえ貰えばうちは派手に躍るよ。」「やつの言いなりになって住所を聞きだした。ここに人をやってくれ。」住所が書かれたメモ帳を受け取ると胡は車に乗って住所の場所まで向かった。

（これは美味しい仕事だな。ボーナスみたいなもんだ。誰がこんな美味しい仕事を他人に言うかよ。俺自身が行って捕らえてきてやる。）

胡は10代の少年を1人捕らえるのにプロのマフィアが何人も必要ないと思っただし、何より報酬は多い方がいい。胡はまだ30と若い腕っ節1つで成り上がった男だから確かに喧嘩は強いし度胸もある。

メモ帳に書かれた住所まで行くと古いアパートが何件も連なっていた。メモに従い目的の部屋の前まで辿り着いた。呼び鈴は無くドアをノックすると1人の美少年がドアを開けた。いきなり美少年の鼻を殴った。そのまま両膝をついた海斗の髪の毛を掴みながら部屋の中に押し込んだ。

「坊主、そんなに男の味が知りたいなら何故相談してこなかった？お前ほどの容姿なら男好きのスケベ親父が高い金出して買ってくれるぞ？」そう言いながら胡は、「ああ、そつだ。ハゲ社長のポーナスよりそつち系の親父に売る方が儲かるな。我ながらいい判断だ。お前も嬉しいだろう。今から俺に拉致されてお前が犯したハゲの前で陵辱を受けながら死んでいくか、金持ちに貰われて幸せに暮らするか、考えるまでもないよな？え？」「・・・が・・・し・・・い・・・」鼻を押さえながら海斗は胡に向かって呟いた。鼻血も止まっていな

い。
「あ？何て言った？」言った瞬間に胡の足に何かが入り込んだ感触があった。「うがぁ！！」胡の右足にナイフを突き立てた海斗は鼻血を出しながら言った。「お前が欲しいって言ったのよ。」そのままナイフを右足から抜いた。右足を押さえながら胡は海斗を睨みつけた。

（しくじった！車に銃を置いてきた。ガキ1人だと思って侮った。まともに鼻を殴ったのにタフなガキだ。このままでは殺られる・・・）右足の患部を右手で押さえながら外に出ようとしたが海斗のナイフが左足のアキレス腱に突き刺さった。「い、いてえ！！てめえ！！」叫びながら部屋を転がりまわった。「せつかく来たのにすぐ帰るってレデイに対して失礼じゃないの。部屋に鍵をかけながらニヤツと笑った。胡は恐怖を感じた。このままガキに犯されるくらいなら死んだ方がマシだ。だが両足をやられたとなると勝ち目は無い。「誰かぁ！助けてくれえ！！」思いつきり叫んだがむなしかった。この辺りには人が住んでいる気配があまりない。

両足から出血は続いている。「傷が酷いわね。手当てしなくちゃ！」ズボンを脱がそうとすると胡が両手で抵抗した。胡の右足患部を蹴るとさらに転げまわった。「こら！大人しくしないと駄目だぞ！悪

い子ね。」どうにかズボンと下着ををずり下ろすと悪魔の儀式が行われた。

海斗が腰を振るたびに胡の顔が苦痛で歪む。「や・・・やめてくれえ！！」「足が痛いでしょ？そういう時は快感で中和させるのが一番よ、ふふ。」数分後、胡は気絶した。気絶した胡の両手を縛り放置した。気絶から目を覚ますとまた海斗は胡を犯し続けたのである。数時間後に5人の警察官に捕らえられるまで海斗は儀式を行っていた。どうやら胡の悲鳴を聞きつけ近くの住人が警察に通報した為と思われる。両足をナイフでえぐられガキに犯されるという失態を犯した胡は後日、病院の個室で拳銃自殺を図った。

海斗は留置所に入れられたが両親は裁判は参加せず弁護士も雇わないと言う。法を犯したのだから刑事的責任を息子に与えて欲しいと願った。それを聞くと海斗は見捨てられたのだと理解した。だが幹部をやられた組織は黙っていられない。

組織は警察に賄賂を贈ると少年の即釈放を求めた。

第26章 妖艶 後編

何処の世界でも役人というのは金に弱い。賄賂という魔法で人の命が左右したり心を買ったことも出来る。

海斗は釈放された。身元引受人は紅蓮会の者である。

薄暗い高層マンションの一室にて凄惨なランチが繰り広げられていた。もつとも組織の枝の1つである芸能プロダクションの社長が暴行され、幹部が1人自殺した。ガキ1人をランチするくらいでは割が合わなかった。

胡の損失は紅蓮会にとって大きかった。新興勢力の孔雀が紅蓮会を叩き北京では最大規模の組織になっていたが、まだまだ紅蓮会の影響力は小さくなかった。その中でも胡という男はこの紅蓮会の再興に大きく貢献した男である。

「楽しかったかい？兄ちゃん。全く何て世の中だ、警察に聞いたらまだ17だつてよ。」横たわっている海斗の腹に蹴りを入れて若い組員が呟いた。この高層マンションのほとんどは廃墟に近い。ここに住んでいるのは組織の者が売春婦くらいのものである。この部屋は仮事務所として使っているが今回のような拷問に使われるケースがほとんどである。

部屋には4人の男達が居た。1番最年長らしき男が呟いた。「このガキを調べたが親は堅気。兄弟も兄貴が2人。これも優秀。こいつも裏の社会に通じていないとの事だ。」「てことは胡の兄貴は何でもないただのホモ野郎にやられちまったって事ですか？」信じられないというような表情で若い組員は海斗をもう一度蹴った。

半分意識を失っていたがその度に水をかけられては拷問が始まる。顔面はボクサーのように腫れあがっていたし、右手の指を3本折られた。腹を数え切れないほど蹴られた。

最年長の男は宣という名だった。宣には気になっていた事が2つあった。1つはこのガキをどれだけ痛めつけて殺した所で胡の損失は埋まらないし、出来るだけ利用価値を探したのだがその1つとして若い男を求めている変態客に高値で売却しようか考えた。金になるのはいいがこのガキにしたらまんざらでもないかと思うと気が進まなかった。とにかくこのガキに後悔という2文字を与えたかった。

もう1つはリンチに対して一度も音をあげない事であった。うめき声や殴られた時に出す声はともかく一度も恐怖を感じていない。ナイフで左頬を数ミリほどえぐった。その時も声すら出さなかった。もう数十分は暴行している。口元が少し笑っているかのようにも見えた。

「おい、小僧。お前はどうかやったらこの状況で笑っていられるんだ？お前みたいな男は見た事がない。」
「・・・セクシーな男達に寄つてたかつて暴行されるなんてそうそうあるもんじゃないでしょ・・・？」
「意外な返答に4人一同が寒気を感じた。」

大柄の男が海斗の首を絞めた。力を入れると海斗の顔色が蒼くなっていた。宣が制止した。

「待て。やはりただで殺しても利がない。ここは組織の為に男色の気がある客の慰み物になつてもらおう。それが1番だ。こいつも喜ぶだろうしな。」
3人はほぼ同時に笑った。

宣は部屋を出ようとした。出る前に「後の制裁はお前たちが死なない程度にやれ。くれぐれも商品だからこれ以上顔を傷つけるのは駄目だ。その後は手当てしてやれ。」そう言って通路に出ると最上階にある自分の部屋へと戻っていった。

部屋に戻った宣はベッドに腰掛けると何か異変がある事に気付いた。この部屋は休憩室として使っている。普段は自宅に戻るのだがこうやって野暮用がある時はこの部屋を使うようにしている。最後にこの部屋を使ったのは4日前である。部屋は10畳ほどの1ルームであり簡単なベッドとテレビが置いてあるだけの質素な部屋であった。

ベッド脇にドレッサーが置いてあるのだが見慣れない封筒があった。宣の注意深さというのは人並みはずれたものがあつた。若い頃から同土と呼び合つた仲間は何死んだ。北京の裏社会の頂点に立つには常に孔雀という壁が立ちはだかつてきた。15年ほど前までは紅蓮会の方が勢力は大きかつたがある時期から形勢は一気に逆転した。北京の虎と呼ばれる王という男が出現した。主だつた組織の幹部は王に全て殺された。

昔からのメンバーで生き残っているのは自分だけなのである。この注意深さが自分を守つてきた。どんな些細な変化も見逃さなかつた。封筒の中にサイコロが2つ入つていた。右手にサイコロを2つ出してみた。同時にこめかみがヒヤリとした。銃を押し付けられた。

「誰だ？」「お前に発言権は無い。」即座に銃の主が返答した。入り口が開くと1人の紳士が部屋に入つてきた。

「王 義承だな？」宣は落ち着いて紳士に尋ねた。直後に頭に衝撃が来た。銃で後ろから殴られたみたいである。「言つたはずだ。お前に発言権はない。次は殺すぞ。」後ろから銃の主が呟いた。王が

笑みを浮かべ口を開いた。「痛い思いをしたくないなら大人しく質問に答えたほうがいい。君に銃を向けているのはうちのエース、李雷光だ。聞いたことはあるだろう？」宣はもう殴られるのは嫌だったので黙って頷いた。

「君は宣　公斉だね。唯一初期の紅蓮会の生き残りだ。初めまして、私が貴方の言った通り王　義承だ。」宣は北京の虎と呼ばれたこの男を以前に一度見かけたことがある。車内から繁華街の交差点に差し掛かる時にこの男は部下数名を連れて歩いていた。呼び名に相應しくオーラのあるいい面構えをしていた。

「さて、宣さん。私がここに来たのは貴方が捕らえたゲイの少年の父親に頼まれたからなんだ。」宣は意外な表情をした。「私は駆け出しの頃、彼の父親に借りがあつた。まあそのお返しと言つては何だが彼の救出に来たのだよ。派手にやつたらしいね。何でも貴方の所の胡という男が散々な目にあつたらしいじゃないか。17だつてね。未恐ろしい少年だ。」王の口元は笑つていた。「そこで貴方の命と引き換えに彼を引き渡してもらおう。拒否権はない。」

宣は頭の中で計算した。断れば後ろの男に殺されるだろう。応じても組織の面子は丸潰れであり自分の組織における立場も危うくなるに違いない。「分かつた。」短く答えた。「よろしい。では案内してもらおうか。君の組員もいるのだろうか何人の人間がこの館には居るんだね?」「ここは下っ端の組員や売春婦達の寢床になっていゝる。それらを合わせれば40人は居るんじゃないかな。」「この部屋から少年が居る部屋までの間に他の人間と接触する可能性は?」「ほぼ無いだろう。今の時間帯は売春婦達は外へ稼ぎに行つてゐるし、他の組員たちもほとんど出払つてゐる。ただし捕らえている部屋には俺の部下が居る。」宣は正直に答えた。この男を騙し通す自信がなかつた。

嘘を言っている風には見えなかった。王は笑顔を浮かべ、「正直に答えてくれて嬉しいよ。何階のどの部屋に行けばいいのかな？」「7階の1番西側の部屋だ。」「部屋にお前の部下は何人居るんだ？」李が質問した。「3人。今もガキを痛めつけているのかも知れん。」「手に持ったサイコロを振りなさい。」王が指示してきた。言われたとおりに2つのサイコロを床に転がした。2と5が出た。

直後に宣の頭から血が吹いた。李が発砲したのである。

「何故私の指示無しで殺した？」「もう用済みだからです。ゾロ目以外は殺していいはずなのでは？」「次に勝手な真似をしたら俺がお前を殺すぞ。2と5の組み合わせはもう一度振るだ。」「出すぎた真似をしてすみませんでした。私はただ・・・」「もう一度言う。勝手な真似をするとお前であろうと殺す。」「はっ。」

2人は7階に向かった。

宣の言った部屋の扉が少し開いていた。誰かの手らしき物が廊下にはみ出ていた。李が銃を構えて先に近づいていった。王も銃を構えて後方から様子を覗っている。確かに人間の手であった。思い切つて李はドアを開けた。

後日、王と李はこの時の部屋の様子を地獄絵図だつたと述べている。ハゲの男が扉に向かって横たわっていた。はみ出ていた手はこの男の物であった。背中にはナイフが突き刺さっていた。大柄な男の性器が切り取られ絶命していた。もう1人の男が海斗少年に犯されている最中だつた。驚く事に犯されている男も絶命していた。つまり死姦である。

海斗は王達の方へ振り返った。悪魔の顔をした少年は「こいつ等の仲間？お楽しみ一时间なのに・・・」「君の父親から息子を救出するよう頼まれた者だ。ま、必要は無かったみたいだが。」さすがの李も吐くのを必死で堪えた。

これが段　海斗との出会いである。王はこの少年を匿う事にした。飼いならせば対孔雀会の殺し屋として使えると思った事。それ以上に敵に回したくなかった。

海斗もこれだけプロの殺し屋達を敵に回して無事に済むとは思って居なかったし、警察にも目をつけられている。王というバックを当てにするのは悪くなかった。いざ王という人間を知ると海斗は次第にその魅力に惹かれていった。ゲイという枠を超えて王という人間は今までの人生で会った事のない男であった。強く賢くそして、優しかった。誰もがゲイという自分自身を嫌った。親や兄弟でさえも王だけは自分を差別しなかった。自分の何も恐れぬ度胸を認めてくれたし、何があっても自分を庇ってくれた。

この男にだけは逆らわないと決めた。男が男に惚れたのである。

第27章 制裁

段 海斗が王の事務所に着いた頃には夕暮れになろうとしていた。

王の居る部屋に着くと海斗は直立のまま、「お久しぶりです。お元気そうで何よりです。」王に対してのみ、海斗は男口調になる。唯一彼が畏敬の念を持つ相手が王なのである。

「お前も元気そうだな。少し痩せたんじゃないのか？」「減量中なんです。最近脂っこい物を摂り過ぎて脂肪が付きすぎてしまったので・・・」ニコリと王が笑うと本題へ入った。

「ある程度は陳の方からここに来るまでに聞いているかな？」「はい。裏切り者への制裁の為に私が呼ばれたと伺っております。しかし劉 解奉はともかく李 雷光が裏切ったのは意外でした。」「奴には人一倍愛情を注いだつもりだが何処から狂ってしまったのか分からない。」「私が死を持って償わせます。」「あ、いや、お前は劉の方を始末してもらいたい。李は私が、そう・・・私が自身で始末するべきなのだ。」「

「分かりました。で、弟の解平はどうしてますか？奴とは歳も近いし仲が良かったので気に掛かりますが、兄を私が始末して大丈夫なのですか？」「裏切り者は死を持って償わなければならないと割り切っていた。元々あそこの兄弟は仲が良くなかったからな。兄弟とは言え、近親憎悪がすごいだろう。」「やり方は手荒に、いえ、私流のやり方はご存知でしょうが・・・それで構わないでしょうか？」「だから呼んだ。私に刃向かえばどうなるかを教えてやって欲しい。」「王が言うと初めて海斗は笑った。

人を殺す時の快感は何にも代え難い。相手が美男子であれば尚更だ。

「海斗、劉の野郎はそろそろ事務所に戻ってくるはずだ。今は刑事の相手をしている。私は陳の運転で李の所へ向かう。ミナミの姫華の店に行くよう指示してある。お前はこの事務所が好きないように解奉と過ごしていい。」「はっ。」陳が笑いながら「なあ、客間に男女2人のバラバラ死体がダンボールに詰め込んであるんだが気にしないでくれよ。」「ふふ、ロマンチックじゃない。死んでからもダンボールで一緒だなんて。」「くれぐれも劉 解奉という男を舐めてはいかんぞ。あれでもうちの構成員として体を張ってきた男だからな。」2人は事務所を後にした。

汪 姫華の店には重苦しい雰囲気に含まれていた。奥のボックス席には李、黄、劉弟に汪 姫華が座っていた。

「他の従業員はどうしたんだ？もう出勤していてもいい時刻だろう？」「ええ・・・それが今日に限って誰も連絡に出ないの。何かあったのかしら・・・」黄、劉は眉一つ動かさずに酒を飲んでいる。李は何か嫌な予感がした。長年この店に通っているが従業員が1人も出勤しない日など休日を除いてなかった。ドアが開くと王を先頭に陳、それと見知らぬ青年が入ってきた。

「お疲れ様です。解奉はどうされました？それと、その青年は？」李は立ち上がって王を迎えた。「うん、解奉が刑事に手こずっているらしくてな、ここに居ることは伝えておいたから後で合流してくるだろう。そしてこの青年は私の友人の息子で堤 幸平君だ。今後も長い付き合いになるだろうから皆も粗相のないようにな。」

孫 邸景に会う為、新横浜を目指し新幹線のぞみにジョアキンは乗っていた。今年から登場したのぞみはそれまで東海道新幹線で最速であったひかりを超えた。

（便利な国だ。数百キロ離れた土地に3時間もかからないんだからな。）缶ビールを飲みながら大阪に来てから出会った青年の事を思い出していた。堤 幸平。彼は大阪大学の経済学部に通う3年生だ。ブルノのコミュニテイによく顔を出していたこの青年はブラジル、サンパウロのギャングの顔役であるブルノと親しかった。平和な日本からは考えられない経験をしてきたブルノに幸平は興味を持っていた。

ブルノの死後、コミュニテイの連中から幸平を紹介された。ブルノが死ぬ直前はカルロス、レイモンドを除いて幸平とよく会っていたらしい。ブルノの周辺には血気盛んな男達が多いがジョアキンのような頭のいい仲間が居なかった。元々語学が堪能で国立大学に通う幸平がコミュニテイ内に頻繁に通っていたのを知ってから急速に仲良くなった。生まれた時から何時死ぬか分からない場所で育ったブルノと、裕福な家に生まれ国立の大学に通う完璧なレールに乗っている幸平とは何から何まで違った。

堤 幸平は母国語である日本語の他に英語、スペイン語、広東語を操る。ブルノとはスペイン語で会話が可能な為に仲良くなるのは時間がかからなかった。ブルノは不慣れな大阪という土地で幸平に色々案内をもらった。

バーでよく将来について語った。今は中国マフィア達とヤクザな仕事をしているが母国でナイトクラブを経営して日本と行き来したい

とブルノが語っていたのに対し、幸平は得意な語学を使って世界から来る留学生達の斡旋業者をやりたいと考えていた。それを国内で外国人達向けにやるのか国外で居を構え、日本人達の学生を相手に商売するか悩んでいた。

「まあ、どちらにしても需要は増えそうなんだよな。ブルノならどっちにする？」「そりゃ俺なら断然日本だな。いや、お前が日本人だからな。地元でやった方が安心だし日本に来る学生も多いだろう？ラテン系の学生なら俺が紹介してやるしよ。」「だけど日本人もこれからどんどん世界へ出て行くぞ。アメリカの大都市でやってみたい気もするんだよな。」「じゃそうしろ。お前の悪いところは才能があるのに優柔不断なんだ。やりたい事があるんなら大学を卒業する前でもやりやいいんだ。俺はそう思うぜ。」常に本能で生き抜いてきたブルノにとっては幸平が悩んでいる事の意味が分からなかった。

孫 邸景、日本国内の華僑で頂点に立つ男。程よい緊張の中、名古屋を過ぎた辺りでジョアキンは眠りについた。

事務所がやけに薄暗い事に劉 解奉は異変を感じた。奥に入っていると見慣れない男が足を組んで座っていた。

「そこはボスの席のはずだがお前は誰かな？」薄暗くてよく顔が見えない。「久しぶりだというのに冷たい事言う男ねえ。」その声を聞いた時に解奉の背筋は凍りついた。(段 海斗) 声を聞いた瞬間にその名前が出てきた。

「何しに日本へ来た？」「ボスに呼ばれたのよ。」「お前が呼ばれるという事はこの世に生きてはいけけない者が存在するという事

「だな？」 「随分とお洒落な喋り方をするようになったじゃないの、解奉。そう、この大阪に生きていてはいけない人間が3人居るわ。」 「その1人が俺だと言う事かな？」 海斗の手元にある銃が解奉を捉えていた。「この暗がりがあんたの目にも慣れてきたのね。残念だわ、あんたの弟は仲がいいから一度お断りしたのよ？」 「嘘つけ。お前が断る訳ないだろう？ お前に敵、味方は関係ない。ただお前のその変態ぶりが発揮できればボスにだって牙をむくんだろうな。」 「酷い事言うのね、解奉。解平とは仲がいいから出来るだけ苦しめないであの世に送ってあげようと思ったんだけど・・・」

解奉はとっさに左へ飛んだ。左奥にあるデスクの影に隠れたかった為である。飛んだ直後に右足に衝撃が奔った。「くっ」デスクの影に隠れ、右足に触るとベタツとした物が溢れている。「私の動体視力は異常だから舐めないでね。」声の主は元の位置から動いていないようだ。解奉は自分に銃が無いのに気付いていた。刑事と会っていた為にそんな物は所持できない。いつもなら車か部屋に置いてあるのだが、解奉の借りているアパートはここから数キロ離れている。例え隣にあつたところでこの状況では意味はないが。

「解奉、取引をしない？」 「それは俺にとって得になる取引なのかな？」 「あんた次第よ。今死ぬか、取引に応じるか。」 「応じよう。」 考えている余地は無かった。「あんたが私のおもちゃになるだけの事だけどね、死んだという事にして。」 「ボスを裏切る行為にならないか？ 俺を生かすのは。」 「私があんたみたいな男前が大好きなのは知っているわよね？ 魅力的よ。あんたを好きに出来るのは。」 「ボスの命令より勝るのか？」 「ニヤリと海斗は笑った。」

「分かった、応じよう。命は助けてくれるんだな？」 「ええ、そりやもつ。」 気付くと海斗は傍にいた。「傷を見てあげるからズボンを脱ぎなさい。」 「えっ、いやそりゃ・・・」 「取引という意味は

分かっているわよね？ただ助けられたんじゃないのよ、あんたは。」
「あ、ああ。」思い出したかのように解奉はズボンを脱いだ。右足の太ももから出血している。「可愛そうに。」自分で撃っておきながら海斗は包帯を巻いてやった。「幸い弾は貫通しているわ。もちろん狙ったんだけどね。こうしておけば出血は止まるから死ぬ事はないわね。ちよつとそこに横になりなさい。」言われたとおりに解奉はソファで横になった。変態に従うのが怖いのだが刃向かうと2発目が被弾するのは分かりきっていた。

傷の辺りを優しく撫で回すと海斗の指は解奉の股間へ伸びていった。解奉は目を閉じた。どうしようもないのである。解奉の物をさすつて遊んでいる海斗がパンツを脱がした。そうしてさすられている内に屈辱にも解奉の物は大きくなっていった。「おやおや、あんたも満更じゃないのね。嬉しいわ。」直後に物を口に含まれた。その瞬間、解奉の中で何かが切れた。

海斗の頭を右手で掴んで物から離そうとした。解奉の物に海斗が噛み付いた。

「ぎゃあー！」解奉が叫びながら髪の毛を掴み必死に離そうとするが海斗は離れない。そのまま海斗は食いちぎるようにして口から離れた。物の一部が噛み千切られている。ドクドクと血が流れていた。「うっ……てめえ、殺してやる。」そう、そうやって私に対して憎悪の目で見て頂戴。興奮するから。「ぺっと噛み千切った皮の一部を海斗は吐き出した。

解奉は獣の目をして海斗に近づいた。地を這いながらではあるが必死に海斗の右足を掴んだ。そのまま右足に噛み付こうとした。頭に衝撃が来た。そこで意識は途絶えた。

「もう、せつかくお楽しみはこれからなのに抵抗するんだから。それに噛み付かれたりするの私の趣味じゃないの。相性が悪かったみたいね、私達。」解奉の頭から発砲した後の煙が渦巻いていた。解奉を見ながら海斗は微笑んでいた。

「あゝあ、こんなんじゃない……。」海斗はそのまま事務所の外へ出て行った。

「すみません、店の従業員全てに連絡を取ったのですが誰も出なくて……。」重苦しい雰囲気の中で姫華は口を開いた。

「うん、姫華……オレンジジュースはあるかな？ ビタミンを最近摂っていない。」「あ、はい。確か冷蔵庫にあったと思います。」そう言っただけ姫華は奥へ小走りで消えていった。王が上着を脱ぎ劉解平の方へ視線をやると、解平は立ち上がりその上着を受け取りクローゼットへ持って行くこととした。途中で席の方へ降り返ると「黄さん、上着どうしますか？」と問うと黙って上着を脱いだ。それを受け取るうと劉は黄の傍まで戻ってくると次は李に同じ質問をした。李は断った。

「どうした、李？ 暖房が効いているのに暑くないのか？」王が聞くと、「いえ、最近風邪気味でして……お気遣いありがとうございます。」「もし……上着を脱ぐのが命令だと言ったら？」「……どういう事でしょうか？」「言った通りだよ。私は皆に習って脱げと言っておるのだ。」少し間を空けると李は右手を内ポケットに伸ばした。それと同時に黄が李に銃を向けた。

「何だ？ 黄。私にそんな物を向けて。」「脱ぐのに内ポケットの銃

は必要ないでしょう。」「私はボスのボディガードだ。上着を離しても銃は離さない。」「王がニコリと笑いながら「ここは大丈夫だ。李、外には私の手の者が数十名は徘徊させてある。安心して上着ごと劉に渡しなさい。」「劉が李の上着を無理矢理脱がせた。李が劉を睨んだが無表情のままクローゼットへ向った。

オレンジジュースを持った姫華は3着の上着を持った劉に向って「そんな事は私が出ますのでどうぞお渡しください。」「と片手を出した。一言「断る。」「と呟き無視するかのように歩いていった。「姫華、そんな事よりこちらに座りなさい。早くオレンジをくれ。」「明らかに動揺していた姫華は慌てて王の横に座った。その反対隣に座っていた幸平は豪華な店内を見渡していた。同時に李と姫華の動揺ぶりも見逃さなかった。

「オレンジジュース1つにえらく手間取っていたな?」「あつ、いえ……冷蔵庫に無かったものですから、冷やすのに時間がかかって……すみません……」「いや、責めているわけじゃないよ。気にしなくて良い。」「李が怪訝そうな表情をしながら「ボス、私が何か気に食わない事をしたのでしょうか?」「と尋ねるとそれを無視するかのよう「そういうえば先程、従業員に連絡が通じないと言っておったが私がそうさせた。」「意外そうな表情を李と姫華がすると「つまりその、今日は出勤しなくて良いと私が伝えておいた。従業員全てに旅行させてるんだ。旅行と言っても1日帰りの格安温泉旅行だかな?今頃は有馬で満喫しているだろうな。」「……何故……急にそんな……」姫華はうろたえた。

「率直に言おう。私は裏切り者を許すつもりはない。例え長年私の右腕として働いてきた李、私の愛人をしてきた……いや、愛人のふりをしてきた姫華。お前ら2人を私は許さない。」「私がどのよくな裏切り行為を……」「李、私は潔くない人間は嫌いなのを

知っているな。お前、俺を舐めているのか？俺を誰だと思っている？」王が自分に対して俺と使うのは相当怒っている時だ。それを李も姫華も理解している。「あの・・・私が何を・・・」姫華が訴えるような表情をしながら王の方へ顔を向けると王の裏拳が姫華の鼻を捉えた。両手で姫華は自分の鼻を押さえると指の間から血が流れ出た。

「姫華、俺を舐めない方がいい。潔くない人間に対しては容赦しない、例え女だろうとな。」王が幸平に視線をやるとさすがに幸平は一般の大学生だ。普段の平和な生活からは考えられない光景に怯えが見えていた。それを察したか王は「堤君、君は言われた通りに今ここに例のものを出して欲しい。」そう言うと幸平はシヨルダーバッグの中からテープレコーダーを取り出した。

それを幸平は黙って再生させた。

(・・・ガン！・・・) 何やら騒がしい音がしている。屋内のようだ。

「堤君、説明を頼む。」王が言うと幸平は黙って頷き「これは先日僕が川西のボーリング場で録音した物です。」そう言うと李と姫華の表情が明らかに変わった。

女性の北京語が聞こえてくる。

(恩師を裏切った気持ちを聞かせて欲しいの。)(なあ、姫華。ずっと王の愛人をやってきたお前から裏切ったなんて言われるのは心外だ。)

ここで幸平はテープレコーダーを止めた。「李さんと汪さんの横の

レーンに僕は居ました。間違ひありません。」「ありがとう、堤君。とても有益な情報だったよ。」王は満面の笑顔で幸平を労った。

李は必死で思い出していた。

(さつきから大きな声で騒がしい奴等だ。)(ま、彼らの方が正しいボウリングの楽しみ方をしてるわね。黙々とやったって面白くも何ともないもの。)!?(あいつ等か!)

王は全てを見透かしたかのように李に視線を向けると「諦めがついたかな?動かぬ証拠がここにある。信じていたナンバー2に愛人まで奪われるとはな。俺も耄碌したのかな?黄。どう思う?」問われた黄は黙って李の髪を力いっぱい掴みながら言った。「何でも申してください。ボスのご希望通りにこの男を始末します。」髪を捕まれながら李は「この期に及んでこう言う事を言うのもなんだがボス、あんたは丸くなり過ぎた。俺はただ暴れたかっただけだ。日本に来てからのあんたはヤクザや孫 邸景にはペコペコしてすっかり腑抜けになつていたじゃないか!」ニコニコしながら王は黙って聞いている。

「俺があんと夢見ていたのは日本の裏社会の頂点に立ち、その力を持つて大陸に堂々と凱旋帰国する事だったんだ!その何処が悪い?」「では何故俺にそう言わなかった?ま、言ってみた所で俺が変わる事は無かつただろうが、お前はヤクザや孫の本当の怖さを知らない。お前だけではなく、楊のファミリーもな。ただ無鉄砲なだけではいずれ潰されるだけだ。虫けらがどう突っ張つてもゾウには勝てん。」「そんな事言つてたらいつまで経つても今のままじゃないか!うっ!」李の腹に鉛の玉がめり込んでいた。銃を構えながら王は、「言いたいことはそれだけか?俺をはめるならもつと巧妙にやるんだつたな。楊のような雑魚に言いくるめられて姫華を己の物

にしてさぞ満足だったろう？一時の間でもいい夢が見れたかな？」

姫華が席を立つと出口へ向って走り出した。直後に劉が背中を捉えて発砲していた。静かに床に倒れた。その光景はスローモーションのように見えた。有り得ない光景に幸平はただただ怯えていた。床に倒れた王が姫華の元に歩み寄ると姫華は訴えるように王の顔を見上げた。

「・・・命だけは助けて下さい・・・」 「悪いがそれは出来ん裏切り行為を一度でも許してしまうと組織は成り立たんだ。せめて苦しまずに死になさい。」 姫華の体を仰向けにしてから心臓めがけてもう一発撃った。悲しそうな目をしたままで姫華は息絶えた。そつと王は目を閉じてやった。

李が苦しそうに姫華の死体に這って近寄ってきた。それを王は黙って見ていた。

「おお・・・あんだ・・・よく躊躇いもなく殺せるな・・・愛人だったんだろう？」 「躊躇っていても姫華が苦しむじゃないか。それに私を裏切った。お前は苦しんで死ぬ。」 「俺が死んだ所で楊や趙、それに恐ろしい殺人マシンが楊の所に居るんだ。あんたはどの道死ぬよ。」 「死んだらそれまで。恐らく解奉も今頃は海斗の餌食になっているだろうな。」 「あの化け物を日本へ呼んだのか・・・大変な事になるぞ・・・」 「かもな。」 弟である解平はうつむいていた。例え出来損ないの兄とは言え、兄弟が化け物の餌食になっているのである。その化け物が自分の親友であれば尚更辛い。それを察したか黄は解平の肩に手をやった。

王が口を開く。「李よ。何故、私を裏切った。姫華が欲しかったの

か？」「確かに姫華は俺の憧れだったし、それを独占していたあなたに嫉妬した事もあったが、けどそんな事じゃないんだ。この国に来てからのあなたに食わなかったんだ。大嫌いな日本人にペコペコしやがって、孫 邸景の野郎も大嫌いだった。香港野郎が、大陸の人間を馬鹿しやがって・・・その野郎に頭さげてるあなたが嫌いだったんだ。」「青臭いな、李。ギラギラしていても潰されるだけだ。這い上げれるチャンスを持たなければ虫は虫のまま踏み潰されるんだ。」「そのチャンスはいつ来るんだ？そんな事言ってみてびびってるだけじゃないか！」

「これから死に行くお前に教えてやろう。楊の一味を潰せば大阪の華僑は私の手中になる。もちろん孫の監視下でだが・・・私と孫の利害は一致していた。お前が楊に寝返ったのは意外だったし残念な事だ。全てのチャンスは楊を潰してから生まれるはずだった。お前には我慢が出来なかったんだな。」

「数十年前 北京」

「お前の両親を殺めた私を恨んでいるか？」「いえ！ろくでなしの親父と売春で生計を立てていたお袋が悪かったです。」「親父はともかくお前の母親はせめてお前だけでも立派に育てようと己の身を売ったんだ。母親にそういう事は言ってはならん。私の事を父だと思え。まあ父にしては若いから威厳はないかも知れんが・・・」
「苦い顔で若き日の王は笑った。」

「ボス。五路駅のほうでチンピラがシマを荒らしています！」「付いてこい、雷光。」

「すげえ、8人いたチンピラを一瞬でやっちまった・ボスは北京
でいや、大陸で一番強いんじゃないですか!？」「この国には実に
10億以上の人間が存在する。私が一番な訳ないだろう。」

「おい、雷光。お前最近様子がおかしいな。普段は休日に出掛ける
なんてなかったのに、いや、責めている訳じゃない。お前も若者だ。
いくつになつた?」「16です。」「そうか、恋でもしたか?」「
!？」「分かりやすい顔だ。いいか、俺のようになりたかつたら心
を顔に出してはいかん。クールでいろよ……。」

「ボス……俺……彼女が出来たんです。」「ほう。」「王は歓喜
の表情に包まれた。」「今度私にも紹介しなさい。ご飯でも食べに行
こうじゃないか。」

「雷光、あれから随分と経つがいつお前の彼女を紹介してくれるん
だ?息子の初の恋人だ。考えただけでもワクワクするじゃないか。」
「……あれは……別れました。俺とは所詮身分が違うんです。
」「身分とは?」「令嬢の娘なんです。俺なんかは遊びであつて本
命の彼氏が別に居たんです……」李の目から一筋の涙が零れた。
「それで?お前は彼女にちゃんと聞いたのか?」「……いえ、そ
んな……俺にもプライドがあります!」「でも惚れているんだろ
?惚れているからこそ感情的になるんだ。彼女の本音をはつきりさ
せようじゃないか。さ、行こう。私は車で待っているから。」

「あのねえ……私には大学生の彼氏が居るのよ。貴方、車持って

る？お金も、服も……全てにおいて彼の足元にも及ばないのよ。もう声をかけないで……。こんな所を彼に見られたら誤解されちゃうから……。」「……じゃ、何故俺に声をかけてきた？」李は震えていた。「酔つてたのよ！勘違いしないで！素面だったらあんなとは口も聞きたくないわよ！」「このアマ！」「胸倉を掴むと同時に横から長身の男に止められた。

「女に手を出すとは獣か、君は？」身なりの良い、知的な雰囲気を持った男が腕を掴んできた。力も強い。「彼女は僕の婚約者なんだ。君のような乞食に纏わりつかれると非常に迷惑だ。」「その売春婦が婚約者だつて？笑わせてくれるなあ……。」「王がいつの間にか後ろに立っていた。「ちよつと、おじさん！売春婦呼ばわりされて黙つてられないわ。私の父は銀行の頭取よ。彼は自営されてるお父様の跡取よ。ただで済むと思つて居るの？」「男は李の腕を離すと王に向つてにやけた。

「おっさん、あんたもそれなりの身なりをしているようだがこの街で無事で居たかつたら滅多な事は言わない方がいい。」「言い終わると同時に王の拳が男の鼻に命中した。

「うがぁ！！」男が鼻を押さえると右足の脛をつま先で蹴った。男が倒れると王は李の方へ顔をやり「おい、こいつ蹴っていいぞ。」「李は満面の笑顔でうづくまっている男の顔面を蹴り倒した。「止めなさいよ！お父さんに言いつけてやるから！！」泣きながら女が訴えると女の両頬を片手で掴み、「よく喋るんだなあ。舌を取つてしまおうか？お嬢ちゃん。」「王が笑いながら問うと、涙を流しながら女は首を横に振った。

「今後、俺の息子を侮辱したらお前は海南島の売春宿にでも送つてやる。彼氏の方はそうだな、北朝鮮の辺境の地にでも送つてやろう

かな？ところでお前の父親の銀行はどこだつて？俺のメインバンクにしてやるう。」

「すみません・・・僕の為にあんな事・・・」「雷光、俺もいい歳なのにガキみたいに暴れてしまった。俺もまだまだだな。」「いえ・・・何というか・・・嬉しかったです。俺もボスのようにカツコ良くなりたいです。」「ニコリと王は笑っただけだった。

「汪 姫華の店は今日限りで閉店となる。もうここに集る事はないだろう。従業員には数か月分の給料を渡して辞めて貰う。黄、陳、劉。お前たちは李と劉の兄貴が居なくなってさらに大変になるだろうが頑張ってもらわなくてはいかん。」「3人が頷いた。」「幸平君、一般人の君の前で大変見苦しいものをお見せした。しかし、誰にも言わんでくれよ。ただの裏切り者を始末しただけだから。」「コクリと幸平は頷いたが裏切り者とは言えこうも簡単に仲間だったり愛人だった人間を躊躇なく殺せるのだろうか？王という人間の底が全く幸平には見えなかった。

「ボス、2人の死体は奥で例の様にバラバラにしておきます。掃除も3人でやっておきますのでボスは先に休んでいてください。」「黄が言うと王は軽く頷き幸平を連れ店を出た。

「幸平君、悪いが電車で帰れるかな？私は少し1人になりたいんだ。」「分かりました。この事はジョアキンの方には報告してもいいですか？」「構わない、君も彼も私の仲間だ。」「ありがとうござい

ます。「礼を述べてから幸平は王と別れた。「仲間か……裏切らない限りは仲間だ」という事やな……何か怖いな……」

汪 姫華と李、劉 解奉の死は裏社会ではすぐに広まった。だが、この件で警察が動く事は無かった。

第28章 リバーサイド

横浜に着いてから1泊して翌日の昼頃、孫 邸景の屋敷へ向った。

閑静な住宅街の中にその屋敷は存在したが門から入り口までに徒歩で数分は要する。ジョアキンの体の倍はありそうな玄關のドアは訪れる者を圧倒させる。玄關には徐 明法が迎えてくれた。

「急に呼び出してすまなかつた。長老が是非ともお前と会いたいよ
うでな。それにしても趙の愛人の件、上手くやったじゃないか。長
老も褒めていたぞ。」「ええ、相棒に恵まれたのと相手が馬鹿だつ
た事に尽きます。」「

一番奥にある広間へ通されると60代かと思われる初老の男性が立
ち上がり、そして笑った。立派なテーブルの席に着くように指示さ
れたのでジョアキンはそれに従った。テーブルや椅子を始め壁に掛
かっている絵や小物に至るまでセンスの良い広間だった。この館に
ある物全てを金に換算するといくらになるのか考えていた。それを
見透かしたように笑いながら孫は口を開いた。

「この屋敷は気に入ってもらえたかな?」「あ、はい!素晴らしい
建物ですね。」「今回の神戸の件はご苦労だったね。本来ならうち
の人間がやらなければいけない所だったんだが・・・これを機会
に趙というチンピラを誘き寄せる事が出来るだろう。」「まだ行方
は掴めないのでしょうか?」「恐らく中国へ戻っているな。奴らの
テリトリーである上海が一番可能性が濃厚だ。しばらくは帰ってく
る気はないのだろうね。警察も動いているだろうし。」「それなん
ですが・・・どうやら大阪府警はこの件の捜査に関しては消極的な
のです。恐らく王氏の影響かと思われれます。」「

ニコリと笑うと孫のこめかみの部分に数本のシワが浮かび上がった。この部分にシワが目立つ人間は相当回数、人生において笑顔を作ってきたのだろう。その笑顔が本当かそうじゃないとしても。この笑顔を見るとジョアキンは何も知らない人間なら人の良いおじいちゃんという印象を孫 邸景に対して受けた。ただし日本国内の華僑の頂点であり、香港の三武会最高権力者だという事実はジョアキンの緊張を和らげることは無い。

「王君は大阪では絶大な権力を誇る。もちろん最初は中国人のみの社会に限っていたが、最近では地元日本人とも商売で密接になりつつあるようだし、華僑の揉め事は全て彼が管理していた為にヤクザや警察からの信頼も厚いようだ。対して楊のグループは一言で言えばチンピラの集団。つまり暴力団だと言う事だ。弱気を助けて強気を挫く任侠道のヤクザなら民間人からも人気が出るかも知れんが、ただの暴力団だと社会の中ではお荷物でしかない。」なるほど、それで大阪府警も楊の組織には目をつけていたという事ですね？以前から。「うむ。ただ、1人の刑事を除いてな。」ああ、聞きましたよ。名前は山岸という男。今回のスポーツクラブの事件を担当する刑事ですがしつこいようですね。」

「山岸 春。サソリと呼ばれる大阪府警の中でも異色の刑事だ。」
袁 仁羽が孫の脇から口を挟んだ。知らない人間が見れば俳優かと思われような端正なマスクをしていた。3人の幹部の中のリーダー格であり孫から絶大な信頼を得ている。

「大阪の刑事の事まで知っておられるのですか？」「我々は日本国内におけるあらゆるジャンルの些細な情報まで管理している。だからこそ華僑の頂点に君臨する事が出来るのだ。ま、中国人社会のみに限るのだがな。その刑事は関西の同胞達からよく耳にするが厄介

な男らしいな。喰らいついたら離さない。余程の事になれば消してやろうかと思うのだが外国で刑事を殺すのは頭の悪い人間がする事だからな。」ジヨアキンは三武会のネットワークの広さを理解した。自分やガブリエル達で展開しているマカッコとは比べ物にならない巨大な組織である。

「そうそう、国内でもそうだが楊に少しでも関わりのある人間達に張 美玲の死を伝えておいた。遅かれ早かれ楊達の耳に届くだろう。楊は用心深い男だが趙は愛人が殺されたという事で黙ってられないだろうな。犯人は私の手の者が一番怪しいという事にしておいた。」
「では少なくとも趙が横浜に現れる可能性は・・・」「高いだろうな。」

― 大阪 淀川 ―

「近隣の住人が散歩中に発見したようです。その時には頭、胴体から手足に至るまでバラバラだったみたいです。」「死体は2人やつたな?」蠍と呼ばれるその刑事は若い警察官に確認した。

「はい。男女、顔の方は比較的綺麗な状態で確認できました。恐らくは東アジア系の外国人と思われます。」「身元を確認できる物は当然無かったんやな?」「はっ。」「鑑識の方から俺に被害者の写真を回すように言っといてくれ。」「はっ!」

第1発見者の男が淀川沿いを散歩中にダンボールが浮いているのを確認した。ダンボール上部が開いていて岸からでも容易にバラバラの死体だと言うことが分かったらしい。

（確証は無いがスポーツジムでの銃撃戦と何か繋がりが有りそうかな。）

キャスターを1本吸ってから男は現場から離れていった。

1 上海 公園

昼の2時過ぎ、休日の為か家族連れが多かった。ベンチに腰掛けた2人の男達は無邪気に遊ぶ子供たちを眺めていた。

「こちらに戻ってきてから10日になるが日本へ戻らなければならぬという気持ち少しずつ薄れてきそうだ。」「それも悪くはありません。今戻れば孔雀や三武会、警察など楊様の身が危ないでしょうし。」「そうは言っても生まれてから敵に背を向けた事はない。」「身を隠すのも逃げではありません。楊様には趙さん、周、それに我々上海の組織が付いております。」「

サッカーボールが楊の足元に転がってきたのでそのまま立ち上がり蹴って返してやった。

「なあ、林よ。日本から信じられないような噂を聞いてな。ガセなら良いが情報の発信元は俺もかなり信頼している。まず間違いないはずだ。」「ほう、どのような情報でしょうか?」「趙の愛人がバラバラ死体で発見されたようだ。しかもツバメの死体も添えてな。」「本当ですか?」「趙にとっては2重にシヨックだろう。愛人の死と、そして裏切り。」「信用出来る情報でしょうか?」「俺が日本に来てからずっと使い続けていた情報屋の話だ。」「趙さんにはこの話はされましたか?」「まだだ。しかし今伝えれば奴は日本へ飛

ぶだろうな。それは危険な事だ。」「手負いの虎が大阪に放たれるような物ですな。しかし隠していても何れは伝わるでしょう。ツバメの話は除いて話されてはどうでしょう？もちろん時期を見てですが。」「ああ、そうしよう。ただ1つ気になるのは今回の犯人が孫の一味だという可能性がある事だ。これは完全に信用してもいいかは分からんがな。」「もしそうなら厄介な事です。」「遅かれ早かれ奴には引導を渡さなければいかんのだが・・・まだ敵は巨大過ぎるな。」「

― 横浜 桜木町 ―

馬車道の喫茶店でカルロスと夕方に待ち合わせた。相変わらず退屈を持って余していて早く暴れたがっていた。

「暇なのは分かった。だがもう少しだ、カルロス。趙の愛人を捕獲したと言っただろう？その愛人とツバメは李が始末した。王の指示でな。その李も王の愛人も劉も裏切り者は全て消えた。」「ついに動き出したって感じだな。」「カルロスが目を少し大きくした。

「愛人の死の噂はすぐ趙の耳にも届くだろう。奴の性格ならすぐに大阪へ戻ってくるはずだ。派手な事になるだろうな。そのどさくさに紛れて俺達が趙を消せばいい。焦ることはない。1人ずつ確実にあの世へ送ってやろう。」「カルロスの体が震えだした。」「ああ・・・早く殺りたい・・・。」「カルロスは女を抱いたりいい物食べたり、そんな事よりも殺しの方が興奮するんだな？」「昔からそうだ。こんなに楽しい事はない。そもそも、俺なんていつ死んでもおかしくなかったんだ。今まで無茶な事の連続だった。今回だって相手は上海の一流の殺し屋だ。命の保証はない。それが俺を興奮させる。」「

可愛らしいウエイトレスがお変わりのコーヒーを注いでくれた。それを少し口に含んでから煙草に火を点けた。

「カルロス、王のファミリーに段 海斗という殺し屋が加わった。恐らくお前と同じ殺しに快感を覚えるタイプだ。もつともあつちの気があつてな？それだけが違う。そいつに先を越されないようにな」
「もし抜け駆けしやがったらそいつも殺せばいい。」
「敵には回したくない男だぞ。ある意味、俺は死んだブルノより怖い。それと楊のグループにも厄介な殺し屋が居るらしい。趙以外にだ。」
「いいねえ。役者が次々に揃つたつて感じだな。それより武器の調達はどうなつてる？」
「王が全て用意してくれる。関東なら三武会が面倒も見ってくれるらしい。それよりセバスチオンはどうしてる？」
「静岡まで仲間と会うと言つてそれっきりだ。昨日の話だが。」
「ガブリエルの所に行つてるんだろ。まだカルロスには紹介してないがブルノの後を継いだマカッコの2代目のリーダーだ。」
「ブルノとどちらが強い？」
「ガブリエルは本来武闘派ではないが頭が切れる男だ。ファミリーの存続も奴が居て成り立っている。」
「カルロスはガブリエルの話には特に興味を示さなかつたようだ。どうやら彼のポイントは目が大きくなるか否かで多少分かるようだ。」

小1時間ほどカルロスと話し合つて俺は静岡に戻つた。

早く麗子に会いたかつた。血生臭い生活から唯一解放される場所だ。

第29章 大切な事

砂漠で水を欲している旅人の如く麗子の体を求めた。1回、2回、それは止まる事無く本能で彼女を抱いた。4回目が終わった頃には彼女は死体のようになっていた。本当に死んだのかと思ったほどだ。

「勇が何でそんなにタフなのか分からない。ろくに寝ても居ないのにこんなに私を責めるんだもん。」無垢な笑顔に俺はまた抱きたい衝動を駆り立てられたが煙草に火を点ける事によってそれを抑えた。

考えてみればブルノが死んでから安息という時間が無かったかに見える。唯一彼女と居る時だけが全ての嫌な事から紛らす事が出来た。ブラジル時代に数人の女と関係は持ったが2度抱きたいとは思わなかった。俺が日本人だからか？恐らくそんな事ではない。惚れてなかったんだろう。麗子と付き合うようになってから自分がこれまで異性に対して沸かなかった感情が芽生えていることに気付いた。「それだけ忙しいんだったら仕事の方は順調なのかしら？」「ああ、まあまあだな。」

（王を裏切った人間が3人この世から消えた。確かに順調だな。このまますんなり楊のグループが倒れるとは思わないが）

「久しぶりに会ったのにこんな事言ったら失礼かなと思うんだけど、勇の顔が少し変わったの。」「へえ……どんな風に？」「久しぶりだから思うのかも知れないけど……少し前より難しい顔をしてる。」「難しい？どんな顔だよ、難しいって。」「不意に笑ってしまった。」

「そうそう、笑ってる顔なんか大好きよ。けど笑う回数が少なくな

つたみたい。仕事、大変なんでしょう？嫌な事とかあった？」

（ブルノが死んだ事。すっかりチャイニーズマフィアに染まってしまった事。お前となかなか会えなくなった事。）

「特に無いな。寝る時間が少なくなったからどうしても眉間にシワが寄ってしまうのかな？言われるまで気付かなかった。もっと寝るようにするよ。」

無理に笑顔を作った。

「無理に笑顔なんか作らなくてもいいよ。」麗子が笑った。

「疲れてるだけだよ、心配しなくていい。ちょっとシャワーを浴びてくる。」俺は心を覗かれてる感じがして逃げるようにシャワールームへ移動した。

麗子は後ろから首を数回横に振っていた。

麗子の出勤時間と同時に俺も外へ出た。家で休んでもいいと言ってくれたがガブリエル達と会わなければいけないかった。

ガブリエルのマンションに着いたのは夜の10時を回った頃である。

「よう、久しぶりだな。少し痩せたんじゃないか？」「気のせいだろ。それより今は1人で住んでるんじゃないのか？人の気配がするんだが。」以前は俺とブルノが転がり込んでいたこの家も2人が居なくなつてガブリエル1人のはずだった。

「女が出来たとかなら万々歳なんだがな……その……厄介な奴が転がり込んできてな……」「……チアゴか？」すぐに奴の名前が出てきた。これは予想していた事だが実際になると厄介な事だ。

「ああ……ブルノの死を聞いて指示無しで来ちまった。待てとは言っておいたんだが。」「ブルノを慕ってたからな。無理もない。で、あいつは何処に？」「それが……来ていきなりブルノを殺ったチャイニーズは何処だと凄むもんだからよ、上海のグループで今国外へ逃亡してると教えただが……」「ガブリエルの表情は暗くなっていた。

「……なるほど。だいたい分かった。それで今あいつは？」「今朝、大阪へ向かった。」「は？」俺は訳が分からなかった。「なんでも……ブルノの死んだ場所を見に行くのと……」「俺はうんざりしながら聞いた。「それと？」「蠍に会いに行くと。」「蠍？」

（蠍？ 大豪邸……高級家具……男達……美男子・袁 仁 羽？）

「山岸 春。サソリと呼ばれる大阪府警の中でも異色の刑事だ。」

「あつ……そいつはスポーツジムの事件を担当している刑事だ。」「ほう、お前よく知ってるな。そうだ、止めるべきだった。だけどあいつは俺の事なんて最初から眼中に無い。やつの基準は強いかわいかの2択だからな。」「俺でも止めれなかったと思う。だけど不

味かったな・・・マカツコの存在を初めて日本の警察に知られる訳だからな。」「あいつは完全にサンパウロ時代のブルノ・・・もしかしたらそれより危なくなつてやがった・・・恐らく相当数の死者が大阪で出る可能性は高いな・・・」

「それほど馬鹿じゃないだろう、あいつでも。」俺は笑つたがガブリエルの表情は暗かつた。

「まあ、こんなところで暗くなつても仕方ないから俺、明日大阪に戻るよ。大阪に戻る前に山本さんや自分の居た店にも顔を出してみるよ。そう言えば・・・俺・・・名古屋で店長やつてんだぜ？ すっかり忘れてた！！」本当に俺は忘れてた。静岡で・・・名古屋で・・・マカツコの連中・・・麗子！・・・親友の死に逆上して俺は今まで・・・ほんのこの瞬間まで見失つてた。俺はチャイニーズの子飼いなにかじゃない。自分の知らない中国マフィア達の世界を見てきて、短い間だつたが濃く、そして華僑のトップにまで会つたのである。チャゴの事を聞いて全てが蘇つてきた。

「はっはっはっはっ！！そうだ！お前は自分の店をどんだけほつたらかしてんだ！！」ガブリエルも思い出したかのように笑い出した。

「チャゴは俺に任せろ。奴は大事な俺等の家族だ。」「ベレーザ。」俺等は握手をかわして酒を乾杯した。

ガブリエルの家を出たのは夜中の1時。あいつは泊まっていけと勧めてきたが店を思い出すと俺は時間を無駄にしたくなかつた。麗子にその件を早速伝えると思いのほか彼女はそれを喜んだ。

「ほらほらほら！勇が帰ってきた！！」「はっ？」公衆電話の受話器に向かつて問いかけた。「店長やってた時の勇はカッコよかったなあ！」「おいおい・・・俺の現場見に来たことないじゃないか。」笑いながら聞いた。「あの時の勇はよく笑ってた。ほら、この電話の会話で何回笑った？」「そんなもん・・・数えた事ないけど・・・」ずっと笑ってたのを自分が1番分かったから驚きを隠せなかった。確かに最近は笑う事なんて全然無かった。

しょうがない。一般市民には関係の無い裏社会に居るわけだから心も荒む。俺の見覚えのある人間が6人も死んでいるのである。ブルノ、李、劉 解奉、汪 姫華。それに自分自身もこれから上海のマフィア達を消そうとしてる。北京や香港の連中と組んで。異常な世界に身を置いている俺は笑顔を忘れていた。

「まあまあ、今日の昼過ぎまでたっぷり可愛がってもらったことだし？いいわよ。早く大阪行って助けてきてあげて。友達を。」「ああ。早く仕事を片付けてくる。」「死なないで。」「何で？」「いいの、隠さないで。危険なことやってるんでしよう？分かる。言わなくても大変なんだって。だから、死なないでね。」「俺はビビリだから心配するな。すぐ帰る。」「うん。」

電話を切ってから涙が出た。深呼吸してからタクシーを拾った。

金松の事務所に夜半、一人で尋ねるなど以前の俺には出来なかった事だ。日本最大のヤクザ団体に所属している組だから怖くて行きたくなかった。最近では危ない中国マフィアの世界に身を置いているものだから余裕だった。

「よく帰ってきたな！勇。精悍な顔になったじゃないか。」山本は

俺を暖かく迎えてくれた。それだけに青木の視線が怖かった。基本、俺が山本に気に入られると青木は目の敵にしてくる。ピュアだから性質が悪い。

「おやつさんにも挨拶しろ。」青木が睨みながら言った。

60代後半かと思われるが豊富な白髪を持っている金松 康三に挨拶した。「お久しぶりです。組長は覚えていらっしやるか分かりませんが、一度だけお会いさせて貰いました。稲田 勇です。」「お！覚えてるぞ。お前ブラジル人だら？日本人にしか見えんからな。」「いや・・・母親はブラジル人ですよ。」俺は日本に来て6割、いや7割近くの日本人は俺が日本人だと言っても最初は信じない。母親はポルトガル系だった為にそっちの血も強い。顔にも色濃く出ている。

ただ日本語がネイティブと変わらない為に話せば信じてもらえる。ただ、外国人丸出しの顔の俺にそういう言葉をかけてくれる金松が嫌いではなかった。

30分ほど談笑してから店を覗いてくる事を伝えた。事務所を出る間に金松が話し掛けてきた。「お前なあ、上海の連中を殺るのはいいが日本に居ないんだろが。」「ええ。ただし趙という楊の専属ボディガードの愛人を消しましたのですぐに戻ってくるでしょう。犯人は三武会の人間だと流していますので横浜に来る可能性が高いでしょう。」「助けが欲しかったらいつでも言え。楊の組織だけは大阪だけじゃない。東海地方でもちよくちよくシマが荒らされているらしい。奴を消したい連中は星の数ほど居るからな。」

タクシーで名古屋に向った。到着したのはもう午前3時半を過ぎていた。ベネジヨは朝方まで営業している。風営法という（正式略称

は風適法）理不尽な法律により深夜の酒を出したりする営業を禁ずるとういう厄介な法律だ。ただしこれにはグレーゾーンがある。こちらから出すのではなく客が勝手に注文したとか、席にスタッフがつかなくなったりすればという話である。中途半端なグレーゾーンがブラジルで生まれ育った俺には理解出来ない。

店に入ると平日の為か少しボックス席に空きが見えたものの中々の盛況振りだった。俺の顔を見るなり三浦が駆け寄って来た。

「勇さん！帰ってたんですか？言ってくれたら迎えに行つたのに！」
「悪いな、喜一。急に帰る事になったもんだからな。それにすぐ大阪に戻らないといけないし。今日はお前や店の皆に会いに来ただけだよ。順調にいつてそうじゃないか。」
「勇さんが抜けてから地獄でしたよ。やっと店の女の子達やウェイターも仕事に慣れてきましたけどどね？まあ、それはそれで慣れたらさばりますから。だから今も大変なんですよね。勇さんからモビシつと言ってやってください。」
「突然お前に店をバトンタッチしたもんだから悪いと思ってる。でもお前は本当に良くやってくれるよ。入りたての頃から飲み込みが良かったし、何より仕事に対する姿勢が他の奴とは段違いだったからな。」
「そう言うとな三浦は満更でもない顔をして俺に空いてたボックス席に座るように促した。」

三浦に甘えた俺はジャックダニエルをショットで3杯持つてくるように頼んだ。すぐにテーブルには3杯のショットが並べられた。「喜一、ロザンジェラを呼べ。乾杯するぞ。」
「あ、はい！でも彼女は3番テーブルで接客中なんですが・・・」
「俺が呼ぼう。」
3番テーブルに向うといかにもスケベそうな40代くらいの日本人男性がロザンジェラの太ももをさすっていた。

「お客様、すみません。私はここのオーナーをやっております、稲

田と申します。」「ああ！ジョアキン！帰ってきたのね！」俺の顔を見るなりロザンジェラは歡喜の顔で迎えてくれた。ロザンジェラを口説いていた最中の客はいかにも不潔そうな顔をして俺に睨みつけてきた。「何だ？俺に何か用か？」「彼女はこの店の女の子のリーダーでして今から店長と私と彼女の3人で乾杯をしたいのです。少しだけ彼女をお借り出来ないでしょうか？」「何だと？」「いえ、その間のお客様の時間は無料で延長させて頂きますしお酒もワンドリンク好きな物をサービスさせて頂きます。ほんの5分ほどです。」「まあそれならいいか。サービスしてくれるんなら文句も言えないな。」「

3人で席へ着いた。

「あの客、最近通いだしてくれたのはいいんだけど明らかに私を狙ってるのよ。気持ち悪い。脂ぎった顔が耐えられない時があるのよ！」「ロザンジェラは流暢なスペイン語でまくし立ててきた。「そう言うな、あれでも金を落としてくれるお客さんだ。それにお前の働きぶりはすごいらしいな？山本さんから聞いたぞ？」「ふふ。山本さんにボーナス貰ったのよ。あの人・・・すごく気前がいいのよ。」「山本さんの情婦にでもなったのかと思っただが別に興味は無かった。「ちよつとちよつと！俺も居るのにスペイン語で会話しないでくださいよ。訳わかんねえし！！。」「すまんすまん。じゃ、喜一も立派な店長でロザンジェラは店の稼ぎ頭。乾杯！」「ジャックを飲み干した俺は煙草に火を点けた。「酒と煙草の相性は何でこんなにいいんだ？」「何言ってるんすか、勇さん。」「三浦がゲラゲラ笑い出した。

「おい！オーナーさん。そろそろ彼女を返してくれよ！！」3番テーブルの客が大声で催促してきたのでロザンジェラを返した。

「ねえ、勇さん。なんか大阪でやばい事でもやってんすか？」急に三浦は真面目なトーンに変わった。「何でだ？」「いやね、青木さんって居るでしょ？あの山本さんの右腕の。」「ああ、青木さんな。」「あの人が前に集金来た時に勇さんの事言ってたんですよね。」「どうせ悪口だろ？」苦笑しながら言った。「ええ、俺あの人はあんまり好きじゃないんですよね。大きい声では言えませんがこちらの飲み屋でも評判悪いみたいですよ。」「武闘派だからな。頭で考えることが出来ないんだ。それで、俺の事なんて言ってた？」

「どうせあいつは大阪で死ぬって。店の大阪進出に何で命落とすんだよって思いましたけどね。」「俺は働きすぎる癖があるから過労死するって意味だろ。」「いやいや、あいつは死神に取り付かれてるって・・・そのうちチャイニーズとの抗争で餌食になるって。」「ほう。」最初から青木は馬鹿だとは思ってたが素人の三浦に中国人との一件をペラペラ喋る事に俺は少し嫌悪感を感じた。そこまで馬鹿だとは思わなかった。相当俺のことが嫌いらしい。「金松組と提携してる北京の組織が居るんだが、そこと対立してる上海のグループがあつて俺は直接関係無いんだが、青木は俺がその流れ弾にでも当たって死ねばいいと思ってるんだろう。俺のことが嫌いらしいからな。」

「前から不思議だつたんすけどそこまで嫌われるような事しました？勇さん、仕事も真面目だし山本さんのお気に入りじゃないすか。」「だからこそなんだよ。あいつはきつとホモなんだ。それで気に入られてる俺のことが気に入らないと。」三浦は大声で笑った。「ホモか、こりゃいいや！」「アホ！声がでかいんだよ。聞かれたら殺されるぞ？俺もお前も。」「いけねえ。じゃ、この辺で俺は仕事に戻ります。他のスタッフにもまだまだ覚えてもらわないといけないう事が山ほどあるんです。勇さんはゆっくりしてってくださいね。」

「ありがとつ。適当に俺も行くよ。あ、それとこれな。」札束を三浦に渡した。

「え？こんなに？」「1万ずつ女の子達にボーナスだ。お前は5万ほどそこからとつとけ。足りるだろ？」「あ、ありがとつございませす！」「少ないがその内もっとやるよ。」笑いながら俺は店を出た。店を出た頃には空が明るんできてるような気がした。だが始発までにはもう少し時間がありそうだったので公衆電話から麗子の家に電話した。もう寝ているのか留守番電話になったので一言「愛してる」と残して電話を切った。

名古屋駅に向うと駅はまだ活動しておらず始発の新幹線が出るまでベンチに横たわった。先程のジャックダニエルが効いてきたみたいだ。酒はそこまで強い方ではない。

(チアゴ・・・無茶だけはするなよ。)始発までの時間、何故か俺はサンパウロ時代にブルノとチアゴの3人で海に行った時の事を思い出していた。

第30章 ヴァンペッタ

- 大阪 -

大阪市北区にある某スポーツジム。最近ここでマフィア同士の発砲事件があったが、何も無かったかのように営業している。

チアゴはガブリエルから教えてもらったブルノを慕うラテン系コミュニティの人間達に事件の詳細を聞いた。ブルノが北京マフィアの構成員をやっていた事。そこと敵対していた上海マフィア達を仕留めようとして返り討ちにされた事。ブルノのメンバーの1人が生き残り関東に雲隠れしている事。

何れにせよ雲隠れしているカルロスという男とも会わなければいけない。まずは現場を見たかった。自分が憧れた男がいと簡単にこの世から居なくなってしまったのである。最愛の兄を無くしてからブルノが自分の兄代わりだった。

コミュニティ内に居るレオナルドというブラジル人が協力してくれた。なにせ日本語は分からない、地理も文化も習慣もこの国の事は全く分からないのである。レオナルドは日本に4年は住んでいるベテランだった。ブラジル時代からも日本語を勉強していたからほぼネイティブ並に喋れる。見た目も小奇麗でブロンドの癖毛に端正なマスクをした若者だった。

チアゴとレオナルドはスポーツジム内に入ると受付に見学を申し出た。トレーニングルームやプールなどを案内されたが興味は無かった。問題のロッカールームを通りシャワールームへと入った。レオナルドがポルトガル語でブルノの倒れた現場を指差した。レオナル

ドは案内してくれたスタッフに適当に見て回ってから帰る事を告げて下がらせた。

チアゴはブルノが死んだ場所を睨み続けた。

「レオナルド、上海のポケドモは行方が分からないままか？」「ああ、けどジョアキンという人が日本国内の華僑を仕切るトップに会いに行ってるらしいから何か掴めるかもな。」「ああ、あの人はブルノさんの相棒だったから・・・あの人はいつ帰ってくるんだ？」「さあ？でも向ったのは何日か前だからもう戻ってくると思う。」「何処に戻る？」「家はミナミの雑居ビルの中らしい。それが、北京の連中に会えば教えてくれるんじゃないか？中国語は分からないが日本語なら俺が通訳してもいいし。」「悪いな、今の所俺はお前に頼るしかないからな。頼む。」「気にするな。このコミュニテイもブルノあつての物だったんだ。知らない国で不安なラテン人達の憩いの場をブルノは作ってくれた。やつの為なら何だって協力するさ。」

その後、2人は大阪府警の刑事で蠍と呼ばれる男と会う予定になっていた。この事件を追っている担当の刑事は彼だけであり、レオナルドがコンタクトを取るとすぐにでも会ってくれる事になった。あまり警察とは係わり合いになりたくはなかったが、腐っても警察だから自分達が知らない情報も掴んでいるかも知れないのでチアゴは会う覚悟を決めた。

- 上海虹橋空港 -

「今朝の中国東方航空、成田行きの際に乗ったんだな？」「そのようです。東方航空の職員に確かめさせました。」「俺はあいつには

まだ教えてないんだがな。」「私もです、楊様。趙さんは独自にこの情報を掴んだのでしよう。」空港から出た楊と林は外に待たせていた車に乗り込んだ。

「しかし何故東京へ向かったんだ……」後部座席で楊が呟いた。

- 大阪 天王寺 -

天王寺駅から南へ数分下り、とある狭い筋を折れると1軒の古びたBARがあつた。最近では少なくなったアンティークなジュークBOXが印象に残る内装である。さほど広くはないがシックな色使いの壁と床。訪れた者は何か懐かしい気分になんかさせてくれる雰囲気がある。

「わざわざこんなところまで来てもらって悪かつたな。」目つきの鋭い中年の男がウィスキーグラスを持ちながら言った。

蠍と呼ばれるこの刑事に近づいたのは情報が欲しい為である。チアゴは上海の連中さえ消せばサンパウロへ戻るつもりだった。日本はブラジルからは想像も出来ないような治安の良さであった。島国である事、富の配分が先進国の中でも安定している事、人々のモラルが高い事。正直チアゴは自分を止められる人間がこの国には居ないとさえ思っていた。まだ若いという理由もあるがサンパウロの警察でさえ迂闊に彼には手を出せないのである。

レオナルドがチアゴを紹介した。山岸が今回の事件を捜査していく内にブルノのコミュニティの存在まで辿り着いた。そこで日本語の達者なレオナルドが山岸の応対をしたという訳である。その為に互いに連絡が取れるようになっていたので、チアゴの刑事に会いた

いという要望に応えられた。名前は偽名を使い、チアゴをヴァンペッタという名前で紹介した。チアゴは早速スポーツジムでの事件の犯人について尋ねた。

「中国人マフィアの抗争やろうな。死んだ男達は君たちの友人、ブルノ君やったな？それとペルー人のレイモンド。彼等の背後にあるのは北京系マフィアが見え隠れしとる。おそらく王の組織だろう。決定的な証拠が無い為に容疑者扱い出来へんのだ。」

レオナルドはこの刑事がブルノの背後まで見抜いている事に衝撃を感じた。レオナルドはブルノのコミュニティの中でも日本の滞在年数が長く、日本語にも精通しており関西のコミュニティでは顔と呼べる存在だった。

「それと逃亡しとる犯人側やけどな、北京と対立しとる上海系マフィア。十中八九、楊再公の組織やろう。」
「楊再公？」
レオナルドの通訳を介してチアゴが尋ねた。

「楊は上海系マフィアの頂点に立つ男や。台湾、香港、北京の連中よりも後から関西に進出してきたんやが……まあこれが仁義もへつたくれもない男でな。ま、後から入ってきた奴等からすればルール通りにやってては天下は取れんという事やろうが……奴には警察、日本のヤクザ、各国のマフィア連中も頭を悩ませとる。」
「何故、犯人が楊だと断定出来たのですか？」
レオナルドが尋ねた。

「わしはこう見えても長年関西の裏社会を見て来た訳やから各組織の関係は頭に入っとる。北京と対立している相手は今関西では楊率いる上海の連中だけや。奴等が大阪から姿を消したのも確認出来た。」
「チアゴはそれを聞くとレオナルドに通訳させた。」
「上海は分かっただが何故ブルノの背後が北京の連中だと何故分かった？」
山岸が答

える。

「君はブルノの幼馴染って言ったな？何ちゃらペッタ君やったかな？悪いな、頭はさほど良くないほうでな・・・」山岸は苦笑しながら言った。「彼の名前はヴァンペッタです。刑事さん、ブルノは彼の家族同然だったみたいです。」レオナルドが答える。チアゴは警戒した目で刑事の答えを待った。

「彼の所持品からは何も身元が割れなかった。君等のコミュニティはラテン人の集りやと聞いとるが誰一人としてブルノ君の素性、つまり出身、家族から全て本当の事を知る者が居ないと言ってたな？」
「はい。」「別に疑つとる訳やない。いくら他所の国で不安な者同士で集る集団とは言え、その規模はかなり大きいと聞くから知らんのは無理も無い。しかしコミュニティのリーダー的存在の彼を知らんとは。それにもう1人のレイモンド君もペルー人だという事しか分からない。おかしいと思わんか、レオナルド君。」
「僕たちは何も嘘はついていません。ブルノは自分の過去や家族の事はほとんど口に出しませんでした。レイモンドの部屋は刑事さんもご覧になったでしょう？」
「わかつとる。しかしレイモンド君の部屋からはIDなる物は出てこなかった。」

山岸はこの目の前に居る2人のブラジル人を完全には信用していなかった。ただ事件にも行き詰まり、署内からも事件から手を引くように施されている。この事件の裏は警察の上部からもタブーになっているらしい。どんな愚かな人間や勇敢な人間もこの都心のスポーツジムで起きた発砲事件の真相には触れてはならない空気を感じていた。

実はこの数年で日本の銃による死者数が急増化していた。政府の表向きに公表している死者の数字と真相とは全く異なっていた。実質

の数字よりも水増しならぬ水減らしをしていたのである。それだけ深刻な数字であった。この事実を知る者は一握りである。メディア関係者達でさえ99パーセントの人間は知らないだろう。

ただその内訳がヤクザ、外国人マフィア達による抗争によるもので、国からすれば減っても困らない人間達がほとんどであった。故に一般人の感覚からすると平和そのものに映っていただろう。

しかし山岸はわざわざレオナルドの方からコンタクトを取ってきた事に驚いた。やましい事があれば外国人の立場で日本の刑事とコンタクトを取ろうと思うか？ 僅かな情報でも欲しかった山岸はレオナルドとチアゴに会おうと思った。渡りに船であった。

「レイモンドに関してはペルーから留学してきたとしか本当に知らないんです。」レオナルドが懇願するように言った。

山岸はこの2人の外国人被害者達を追う事から捜査を始めた。もう1人の日本人被害者は完全な流れ弾であったと断定した。ブルノの方はどう調べても素性がはっきりしなかった。今でもコミュニケーションから聞いたブルノという名前のみしか分からない。レイモンドは住んでいた自宅を割り出せた。東大阪にあるワンルूमマンションに住んでいた。部屋からは特にこれといった物が出てこなかった。

数日後に大阪市の大学から連絡がありレイモンドがこの大学に通う留学生だという事が発覚した。全国放送のニュースでブルノとレイモンドの顔が映った際に、生徒の数人がレイモンドの顔を確認して学校側に伝えた。そこから山岸は大学内での彼の事を聞き込みしたが、サークルにも入らず、ゼミや同じ外国人同士である生徒達からも有益な情報は聞けなかった。孤立していた様である。学校にもあまり顔を出さなかった為に全国放送のニュースを観て気付いた人間

は一部であった。

学校側もペルーからの留学生だという以外は特に情報がなかった。当然身内はペルーの親戚であり学費の支払いもそこから出ている。すぐにペルーの警察に問い合わせてもらっている。ただ余りにも時間がかかっている。もしかしたら署の方が俺に情報が届く前に遮断させている可能性もある。それだけヤバイ事件なのだ。だがいくら署の方が情報を隠していたとしても向こうの警察には伝えたから、身内の方からコンタクトを取って来るだろう。そうなれば日本の警察も隠し切れない。

「2人とも・・・そういえば何も飲む物がなかったな・・・気が利かんで悪かった。それに、君達の事は疑ってないよ。何か飲んだらええ。」山岸は2人に酒を勧めた。レオナルドは遠慮なくビールを頼み、チアゴは用心深く水だけ貰った。

- 横浜 伊勢佐木長者町 -

細い目に垂れ気味の目。それほど高くもない鼻に薄い唇。恵まれた容姿とは言い難く、カジユアルな服を着ていれば誰が見ても一般の東洋人にしか見えなかった。

徐 明法はそんな自分の凡庸な容姿が嫌いではなかった。もっとも若い頃は同僚の袁 仁羽などに嫉妬したものだ。なにせ映画俳優と言っても差し支えがないマスクをしていて大変なお洒落通でもある。徐は今後の裏社会において今までのように強面が通用するような時代は終わったと思っている。今からの時代には袁のような美男子も必要だし、自分のような一般人に恐怖感を与えないような人間も大

切だと思っている。

徐は自分の役割をよく理解していた。金の臭いを嗅ぎつける嗅覚が異常に発達していた。その才覚が認められて香港最大の裏社会組織、三武会の幹部にまで登りつめた。

古びた定食屋が徐のお気に入りランチスポットであった。昔から気取った場所や華やかな物には興味がない。見た目より内容である。ここの定食は650円というリーズナブルな値段に対して、大盛りご飯、豚汁、漬物、から揚げ、野菜と豊富で味も量も悪くない。向かいの席には組織専属の情報屋である李 祥英が昼飯を頬張っていた。

「趙 双堅が上海を発つたようだな。」食後のお茶をすすりながら徐は言った。「はい、上海に送っていた同胞からの伝言です。間違いありません。」どこから見ても気の弱そうな中年にしか見えない李が答えた。

「つまりお前がばら撒いた偽情報が正しく趙に伝わった訳だな。」偽情報などとは・・・奴の愛人が死んだのは本当ですし、もつとも・・・手を下したのが香港三武会だというのはフィクションですがね・・・」「ニヤリとしながら李も茶をすすった。「趙は1人で来るかな?」「私は会ったことはありませんが噂に聞いた話で判断するなら、1人で突っ込んでくるタイプでしょうね。切れると見境がなくなるらしいですから。」「そういう奴は楽に消せる。上海のグループの中でも奴の評価が高かったのが気に入らなかつたんだ。それなら王の組織に居た李 雷光の方が凄みを感じたがね。会ったことも数回ある。」「李 雷光は死にました。そして趙、何れは楊も居なくなるでしょう。三武会がますます繁栄していくでしょうな。」「徐が会計を済ませると2人は外に出た。」

山岸が2本目のキャスターを消そうとしていた。

「ほな、だいたいこれでお互いの情報は交換出来たと言う感じやな。」
「すみません、山岸さん。こちらはたいした情報を与える事が出来ませんで。」
「構わん。君達が今後も捜査に協力してくれるだけで助かる。あ、そうや。1つだけ聞きたい。この東洋人2人を見たことはあるか？」
山岸は2枚の写真をレオナルドとチアゴに渡した。

当然チアゴは日本へ来たばかりで知る由もない。が、レオナルドは男の方の写真は分からなかったが女がミナミでラウンジを経営していた汪 姫華だということが分かった。彼女もミナミ界隈の外国人達には顔が広がった。レオナルドは1度だけブルノに店へ連れて行ってもらった事があった。

「いえ、東洋人みたいですが分かりません。」
真顔でレオナルドは答え、チアゴの方へ視線をやると彼も頷いた。「ほうか、まあこの2人は中国人でな。ミナミでラウンジを経営する女だと言う事が分かった。男の方はまだ身元が分からんが時間の問題やろ。」
「この2人がどうかしたんですか？」
「先日、淀川で死体として発見された。手足がバラバラの状態でな。」
「恐ろしいですね・・・」
「レオナルドは恐怖に引きつった顔をしながら言った。「どうも今回の事件とこの死体が関係あるように思えてな。」
「刑事のカンってやつですか？」
「この女は裏社会にも顔が広がったらしい。特に北京の連中を鼻屑にしていたらしいからな。何か臭う。」
山岸の細い目

がさらに細くなった。

「どうも。今日のご馳走様でした。」レオナルドが礼をするとチアゴも釣られてチヨコンと頭を下ろした。それを見た山岸が笑い、「ええんや。それより黒人の君、ヴァンペッタ君。君は格闘技か何かやってるのか？」それをレオナルドがチアゴに伝えると、空手を少しと答えた。

「ほう、空手か。ブラジルは日系人も多いからな。いや、特に理由はないんやが・・・えらい強そうやったからな。工作上、色んな荒くれ者達を見てきたから人の強さには敏感でな。」そう言ってから刑事は帰って行った。

- 横浜 中華街 -

平日ではあるが中華街を行き交う人間の数は多かった。狼が一匹混じっていた。

その男の目には復讐の色が宿っていた。

第31章 殺し屋たち

- 金松組 -

珍しく金松が険しい顔をしていた。普段は仏と呼ばれるほど性格は温厚であり、下の人間への面倒見も良く他所の組からも評判は良かった。

山本が金松の部屋に入ってきた。事務所には現在この2人以外に誰も居ない。

組の若い者は全員駅前の韓国クラブへ出払っている。この日は山本の舎弟、青木の誕生日であり金松、山本もすぐに向かうはずだった。横浜市内にある山内組系列の徳田組は金松組と友好関係にあり、初代組長の徳田一郎とは戦後、ドヤ街からの付き合いである。その徳田組内の若頭を含む4名の組員が何者かに殺された。

現場は横浜中華街からすぐの横浜公園内である。死体は全員分の首が胴体から離れていた。

「おめあ、今回の件をどう考えとる？」金松が険しい表情で口を開いた。「やり口から見て中国人でしょうか。日本のヤクザが白昼堂々とこのような派手な殺し方はまずやらないでしょう。」山本が答える。この年から暴力団対策法なる法律が出来る。通称、暴対法である。任侠の時代とは違い、近年ではヤクザに対する取締りが一層厳しくなった。この時勢で横浜中華街からすぐの場所でヤクザが派手な行動を取るわけがない。

金松の親友、徳田一郎は仏の金松に対し、鬼の異名を持っている。

戦後のドサクサでアジア系外国人が日本の各地で暴れまわった際に、当時は警察の力も弱くヤクザが鎮圧に一役買った。徳田はそんなヤクザの1人だった。ここだけの話、2桁の外国人をあの世へ送っている。そんな血気盛んな徳田であるから今回の事件ではカンカンに怒っているらしい。

「俺あ、奴とは付き合いが長いでよ、今回の件で派手に踊る可能性がある。暴対法なんて出来ちまったもんだから俺らあヤクザはよ、子猫みたいに大人しくしてなくちゃいかん。だが、親友の為なら話しは別だら。お前、青木連れて徳田を助けてくれや。連絡はしておく。」「分かりました。」このやり取りで山本はすぐに事務所を出た。親の敵は自分の敵。山本は金松のような古いタイプの極道を崇拜していた。

青木は誕生日という事もあり、韓国クラブでは異常なハッスルを見せていた。ジョアキンからすれば山本一筋のホモ野郎にしか見えないのだが、この男も組の下の人間からは慕われていた。何より喧嘩では金松組の特攻隊長である。山本の呼び出し電話が店に入ると、青木はウイスキーボトルを空けたばかりとは思えぬ機敏な動作で店をすぐ出た。若い者たちも付いていくとごねたが上手く抑えた。

- 孫 邸景の館 -

横浜の高級住宅街の一角に聳え立つこの屋敷は近所でも有名な豪邸である。三武会の構成員を始め、コック、家政婦に至るまでこの屋敷で働く人間は50人を超す。巨大な扉のある玄関に入ると、ちょっとした4つ星ホテルのフロントかと錯覚してしまうほどの、広大なスペースが目飛び込んでくる。

真っ直ぐ最奥の部屋へ行くとジョアキンが訪れた大広間である。玄

関から向かって正面左方向に2階へと続く巨大な階段がある。この階段を上りきった所に袁 仁羽と徐 明法が話し込んでいた。

「明方、お前の流した情報にやっと喰らいついたようだな？」上海の九龍界一の殺し屋、趙 双堅が来日した。もちろん張 美玲の悲報を聞いたからである。犯人は香港の人間だという事を自然に趙の耳に入るように李 祥英が取り計らった。昨日の昼頃に横浜公園で徳田組のヤクザ4人が死んだという。復讐に燃えた暗殺者がこの街に居る。ヤクザはどういう理由で趙とぶつかったかは分からないが、運が悪かったとしか言い様が無かった。

「仁羽、この賭けは俺の勝ちだな。俺の口座は知ってるな？月末までに頼むぞ。」下品な笑みを浮かべながら言った。「しかし、いくら単細胞でもこんな単純な餌でおびき寄せれるとは思わなかった。」甘い顔をしたこの青年は少々悔しそうな表情をしていた。そして次の賭けが同時に始まっていた。

誰が趙 双堅 を仕留めるか？

広間には孫 邸景の姿は無く、2階の右奥にある寝室でチャイナドレスを着た若い中国人女性にオイルマッサージをさせていた。部屋隅のソファに邸 紫燕が座っている。スキンヘッドの頭とクルーザー級の体格を持っている上に、野獣というイメージがぴったりの顔をしているから、あまり他人は近寄らない。孫の3人の腹心の中でも1番身近に居るのがこの邸 紫燕である。

孫の彼への信頼は高く、確かに忠誠という意味では三武会一かも知れない。たまに邸自身が孫の体をマッサージする事もある。

「何歳になつても若い娘と肌は重ねていたいものよの、邸。」少し微笑しただけで邸は答えない。「上海のチンピラが横浜に降り立ったようだが、果たしてうちの誰が奴を仕留めるのかな？明方と仁羽の2人は賭けをしているようだが、お前は参加しとらんのか？紫燕。」このような賭けに関しては孫は文句1つ言わなかった。彼が1番ギャンブルを好んでいたからだ。

「賭けはやりません。」一言、邸は言っただけだ。元々無口な方だがそれだけに不気味さを持っている。実際に肉弾戦になれば組織で邸と張り合える者は何人も居ない。「賭けもやらん、煙草も酒も女も何もやらん。お前の楽しみとは何だ？」「酒はたまにやります。私はただ長老の傍で仕えさせてもらつてるのが1番幸せです。」「普通の者がこれを言えばお世辞としても嫌味に聞こえる。邸は寡黙で忠実だった。この言葉は邸が言うことで説得力はあるのだが、孫はもう少し欲を出して欲しいと思つていた。

邸がソファから立ち上がると出口の方へ向かった。途中、孫の方へ振り返り「ゴミ掃除をします。」と言い放ち部屋を出て行った。

孫は女に自分の性器の部分をマッサージさせた。そこからそれを銜えさせた。この歳になつても精力が衰える事は無かった。（誰が趙を仕留めるか・・・）右手で女の髪の毛を掴みながら舐めさせた。その内、孫の顔は絶頂の表情に達していた。

- 大阪府警 -

山岸のデスク上は書類と新聞紙で成り立っている。しかし不思議な

事に得たい情報が記載されている書類を瞬時にして見つけてしまう。他人からすれば散らかっているが、本人にするとベストな配置らしい。

山岸は足をダラツと伸ばしながら銜え煙草で新聞紙を睨みつけていた。もちろん横浜公園の事件だ。署内は海外から某国の外務大臣が大阪へ来ていた為、従来の3倍の人数をパトロールに出して中はガラガラだった。

「うーん。」唸りながら記事を読むのに熱中していると小松が話しかけてきた。「おう、横浜の事件を見とるんやろ？えぐいでなあ。夕方頃、まだ人通りもまばらにある時間帯にも関わらず、4人のヤクザの首が飛んだって……」同期で入ったが小松は高学歴のエンジニアだった為には今では府警の部長である。上司の身分だが山岸が対等に喋り掛けてくることには拘らなかった。

「目撃者が10人以上は居てるって……なあ？それで犯人は逃走中。神奈川県警は殺人鬼1人を捕まえることも出来んのか……」と思ったが、平和な日本でそんな事する奴は居ないと思い込んでたんやなあ。シヨックなのはこれが大阪でも同じ結果になってたと思う。警察はまだまだ平和ボケしてるなあ。「山岸が小松を睨みつけるように言った。「おいおい、俺に言うなや。」「さて……この事件と俺の追ってる事件は繋がるかな？」「アホか……て言いたいとこやけど最近淀川で中国系男女の水死体があつたみたいやな？何が起こつても不思議じゃないな。」新聞紙を机に置くと山岸は「バラバラになってからの死体やけどな。ダンボールに入って……」

「物騒やお。わしらがガキの頃なんかそら鍵開けっ放しにしてても安全やったのになあ。」「それはお前の住んでたところが田舎やったからや。俺のそこはもうちょっと物騒やったけどのお。」「山岸

時間あるんやったら横浜行ってこいや。「ほう、珍しいな。俺の希望と一致するのは10年に1回あるかないかやのに。」山岸の目が光った。「今回の事件は中国人絡みや。ここ一連の事件と繋がる可能性が高い。行って来てくれ。」

- 大阪 王 義承の事務所 -

王の事務所内で3人の男が王と向かい合っていた。ジョアキン、チアゴ、レオナルドである。昨日の晩にレオナルドからの連絡でチアゴと再会出来た。サンパウロ時代から比べると随分と体格が大きくなっていった。顔も精悍になっていた。

先日の横浜公園での事件は趙 双堅によるものだ。事務所内に居る人間全てが一致した。徐 明法の使っている情報屋が蒔いた餌に趙が喰らいついたのだ。

椅子に座りながら王は口を開いた。「まずはジョアキン。いや、日系人だから勇と呼んだほうがいいかな？」王は心なしに機嫌が良かった。「いえ、どちらでも構いません。ブルノと呼んできたのならジョアキンと呼んでください。国籍はブラジルですし。」それを聞いて王は微笑みながら頷いた。

チアゴの方に顔を向けた。「君は最近来日したチアゴ君だな？ブルノの弟分の・・・さすがに強そうだ。」レオナルドが通訳するとチアゴはちょこんとお辞儀をした。レオナルドは生まれて初めて自分がマフィアのアジトに居ることに興奮に近いものを感じていた。

「どうした？キョロキョロして・・・ここがそんなに珍しいか？」
運転手の陳がレオナルドに話し掛けた。劉 解奉が死んで弟の解平が王のボディガードに就いた。陳は王の専属運転手になっている。

「い、いえ・・・何でもありません。」不慣れなレオナルドを見て陳は得意気な表情をしていた。ジョアキンは見慣れない男が1人居る事に気付いた。

陳、劉、黄、この3人は以前にも会っているが、色白な美男子が王の机の横に立っていた。「ボス、このハンサムな3人組は仲間ですか？」美男子が口を開いた。「おうおう、紹介しよう。以前うちに居たブルノの親友、ジョアキン、その後輩のチアゴ、そして通訳のレオナルドだ。ジョアキン、彼は段 海斗。北京からの助っ人だ。腕は立つから覚えておいてくれ。」「はい。」海斗は舐めますように3人を見渡した。

レオナルドの方へ視線が止まると、「あんたが一番好みね。可愛い顔をしているわ。」中国語が分からないレオナルドはあたふたしていた。ポルトガル語でジョアキンが訳してやった。実はジョアキンは語学の才能があり、日本語、ポルトガル語、スペイン語の他、英語、イタリア語、中国語も日常会話は困らない程度に分かる。通訳を聞いたレオナルドは血の気が引いた顔になっていた。

「そのこのあんた。中国語が理解出来るの？」「ああ、少しだけだが。」そのやり取りを見た王が意外そうな顔をして、「何だ、ジョアキン。中国語が出来るなんて知らなかったぞ？」「隠していた訳ではないんですが、日本語の方が得意でしたし本当に少しくらいしか分からないんですよ。大学で少しだけ勉強しました。」王は中国語が喋れるスキルを持つ彼に感心したのではなく、喋れるのにあえて喋

らなかつた用心深さを高く買った。

「ねえ、あんた。その色男に恋人が居るのか聞いて頂戴。」「自分で聞けよ。」「ジョアキンはこの化粧をした海斗があまり好きではなかつた。腕が立つのは分かるが上海の連中を叩く場面に来て、間の抜けた、しかも自分の欲望の為の言動、行動が気にいらなかつた。」
「言うじゃない。私は仲間でも気に入らない人間は容赦しないわ。」
「それで？」俺はこの男とまともにやり合える自信は無かつたが、王に対してだけは服従している事を見抜いていたので怯まずに返した。

「海斗、この男に手を出してはならん。お前の次なる獲物は趙 双 堅。上海の組織では一番厄介な敵だぞ。」
「命の奪い合いはこの世で一番スリリングを感じます。趙は李よりも厄介ですか？」
海斗が実際に手を下したのは劉 解奉だったがこの場に弟が居た為に口にしなかつた。弟は仲が良かったからである。

「李ほど頭は回らんがその分、無茶はするぞ。今回の横浜での事件も人通りのある時間帯で4人のヤクザを殺した訳だしな。」
それを聞くと海斗は目を閉じて嬉しそうな笑みを浮かべた。

「王さん、趙を消すのは我々の悲願です。その為にチアゴはここまで来たんです。」
「ジョアキンは日本語に変えて話した。レオナルドが理解する為である。彼はチアゴに通訳しなければいけない。」
「分かっている。ただ万全を期したい。海斗は北京一の殺し屋だ。」
「俺はサンパウロ一の殺し屋だ。」
「チアゴがレオナルドの通訳を受けて答えた。」
「何だつて？」
「王がチアゴに優しそうな表情で聞きなおした。」
「彼は何て言ったんだ？」
「今度はレオナルドの方へ顔をやっした。」
「いい、いえ。ただ自分はサンパウロで腕利きだと。その男には負けないと言っています。」
「王が満足そうな表情をして、」
「そう

だ。君と海斗が居れば趙は終わったも同然だ。うまく協力してくれ。ただ言葉が分からないと難しいだろうから、君等3人はそのままチームを組んでくれ。海斗も日本語が分からないから……」と言いつつ陳の方へ顔をやると、「お断りします！」即座に陳は断った。

劉や黄は隅のほうで苦笑していた。「おやおや、あたしのガイドが嫌だっというのかい？この子豚ちゃんは？」海斗は陳のはみ出た腹の肉をギョツとつねった。「うがぁ！」笑いながら王は陳に頼むとだけ言った。海斗がジョアキンの方へ顔をやると「あんた達と私のどちらが優秀か競争ね？」「ここに居るチアゴはお前以上の殺し屋だ。それに……」「それに？」興味深そうに海斗が笑いながら尋ねた。「香港の三武会は知ってるな？3人の殺し屋が同時に動くらしい。競争だつてよ。3人の内の1人、徐明法からの伝言だから間違いない。お前の出番はないかもな？」「ほう、今回は徐や袁まで動くのか。」「王が意外そうな顔をした。

3人の幹部達は役割分担がはっきりしている。徐は情報等の管理や交渉役、袁は人事における統括者、邸が暗殺者兼、孫のボディガードであった。

「ねえ、ジョアキンとか言ったわね？あまり私の事を舐めないで欲しいの。そこに居る色男に体を舐められるのは大歓迎なんだけど……お前みたいな雑魚に舐められるのは勘弁ならないもんでね……」海斗の顔が一瞬鬼のよう表情に見えた。2人のやり取りをレオナルドからの通訳を聞いて察したチアゴは、海斗の前に立ちはだかると睨みつけてオカマ野郎と呟いた。

「ねえ、こいつは私に何て言ったの？」ジョアキンに尋ねたがそれを無視して王の方へ礼をすると部屋を出て行こうとした。チアゴ、レオナルドが後に続いた。後方から海斗が呟くのが聞こえた。「私

を無視した代償は覚悟しておいてね。」

-
上海虹橋空港
-

高そうな真っ白なジャケットを羽織った楊 再公と利口そうな色白の少年がゲートを潜ろうとしていた。見送るのは林 世季である。

「どうか、お気をつけて。今の日本は上海人にとっては地獄のような土地ですから。」「心配するな。横浜には行かん。それに周が付いている。」「伊丹空港行きの便に2人の男は搭乗していった。」

第32章 上海包囲網 前編

徳田一郎は30人以上の組員を3人一組に分けて横浜中を徘徊させた。例の事件以来、報復の行動に出る事は神奈川県警に読まれている為、全て私服に着替えさせ10チームに分散させた。

戦後の日本はどこも混乱を極めていた。長年アメリカと戦い疲弊していた日本人はただ今日を生きる為に必死だった。そのドサクサに紛れてアジア系外国人が暴れまわった。強姦、強盗、傷害、詐欺などが街中を横行していた。それは横浜も例外では無かった。日本が2度と刃向かわないようにする為にアメリカがアジア系外国人を煽らせたとの説もある。ベトナム戦争などのようなゲリラ戦はともかく、真つ向からアメリカに刃向かったのは旧日本軍だけであつたらう。その猛犬に鎖を繋ぐのは自然なことだったのかも知れない。

それはともかく暴れまわる外国人を警察は取り押さえられないでいた。人員の不足、武器の不足などが原因であろうが代わりに鎮圧に一役買ったのが、当時の任侠と言われるヤクザ達であつた。この頃のヤクザは戦争帰りの強者も居れば、元公務員のエリートが居たりと現在暴力団と呼ばれる集団とはまた違った。現在のヤクザは生活をしていく為に営利目的に走る。これは民間人でも同じだろう。当時のヤクザは弱気を助け強気を挫くという思想がまだ濃厚にあつた。

その数多くの鎮圧に向つたヤクザの中の1人が徳田一郎である。

山下町にあるジャズバーは徳田のお気に入り場所であつた。嬉しい時、悲しい時、何かある度にこの店へ足を運んだ。

若頭補佐の稲葉が緊張の表情で徳田と向かい合つていた。「稲葉あ、

頭が殺られたら補佐のお前が当然次の頭になるんだけどもよ。ただ
繰り越して頭になるってんじや芸がねえわな。」「はい。ターゲッ
トのチャイニーズは必ず落とし前をつけます。」「趙に殺された元若
頭、戸塚は叩き上げヤクザの象徴とも言われる徳田の後継者であつ
た。徳田から気に入られるだけあり、喧嘩は自分が率先して突っ込
んでいった。

「使った道具が青竜刀で中国語らしき言葉で叫んでいたんだよなあ。
目撃者が多すぎるくらいだから間違いないな。金松から聞いたが上
海の趙という野郎らしい。」「そこまで分かつてるんですか？」「
おうよ、本家から金松んとこに情報が来たらしい。趙って野郎の組
織は大阪だよ。」「それじゃ、大阪に帰っちゃまった可能性がある
んじや・・・。」「三武会はお前も知ってるよな？」「はい、香港の
大組織ですね。」「あそこの老師とは付き合いがあつてな。何でも
神戸で趙の野郎と一悶着あつたらしい。それでこれを期に目障りで
あつた上海組織を一気に潰す算段なんだろうな。」「

徳田のテーブル席に赤ワインが運ばれてきた。徳田と稲葉のワイン
グラスに注がれる。「おめえ、このワイン知ってるか？」稲葉は必
死にボトルと睨めっこしていた。「チャテウ・・・ああ！読めね
え！」「カツカツカツカツ」徳田は独特の笑い方をする。

「これはよ、シャトーマルゴーって言うってワインの女王と呼ばれて
いる。メドック地区で生産されててな、年間30万から35万本く
らいしか作られてないんだ。あのアーネストヘミングウェイもこ
れを好んでいたらしい。」「はあ・・・もう俺には何がなんだか・
・・・」「駄目だなあ、お前は。戸塚もこれくらいは知ってたぞ。ま
あ俺が教え込んだんだけどよ。」「戸塚の名前を出して徳田はワイン
を少し口に含み少しうつつむいた。稲葉は徳田の目から涙が一筋零れ
るのを見逃さなかった。」「・・・馬鹿野郎が・・・親より先に

死ぬ奴がいるかよ……」「おやつさん、俺が命をかけてでも趙つていうチャイニーズを消します。」「日本の極道の面子がかかっている。趙のターゲットは三武会だろう。どさくさに紛れてでもタマとつてこい。」「徳田の顔はもう元通りになっていた。

午後6時。空が暗くなってきた頃に邸 紫燕は寿町を歩いていた。横浜各地に散らばらせた情報屋の1人が趙らしき人物をこの辺りで見かけたらしい。

スキンヘッドに大きな体。その眼光は普通の人間では直視する事は出来ない。ただこの寿町はいわゆるドヤ街でありお尋ね者も少なからず紛れていたりする。大陸から来た中国人なら日本語が分からない為に中華街や歌舞伎町辺りに流れる可能性は高い。だが趙は日本生活が長い。何処にでも居る可能性はある。馬鹿ではない限り目立たない服装に着替えているだろうし、邸はこの周辺一帯をくまなく探していた。護衛はつけない主義だ。

徐や袁などは頭は切れるが肉弾戦になれば自分に分がある。毎日トレーニングを欠かした事はない。それも全て孫長老を守る為である。邸が幼い頃に住んでいた村は川の洪水で半分ほど壊滅した。家族を失った邸は路頭に迷い盗賊紛いの行為をして生計を立てていた。13歳の頃に盗賊団のリーダーになっていた。盗賊団のほとんどは少年達で構成されていた。

本人達は上手く稼いでいたつもりだったが一定期間、地元の警察は盗賊段の全貌を知るために泳がせていた。そして遂に全員捕らえられることになるだが、邸は腕を掴んできた警官の喉元に喰らいついて皮膚を噛み千切った。絶叫する警官の悲鳴を背中で聞きながら逃亡した。逃亡していく内に香港に流れ着いた訳だ。自分の生まれ育

った村とは違い、香港は華やかだった。イギリスの植民地にされていただけあって、町全体がお洒落で先進国の臭いがした。

ここでも邸は盗賊行為をしようと金の持ってそうな集団を見つけ、集団の中の一着金持ちそうな男の鞆をひったくった。後は必死に走った。2キロほど路地を上手く利用して逃げ切ったと思ったが、集団の中の1人が先回りしていた。さすがに地元の間人だったのか路地には詳しくあったみたいだ。だが子供とは言え邸は大人顔負けの体格をしていたので、1人くらい容易に殺せると思った。

その男はジャケットの内ポケットから銃を取り出すと、躊躇無く鄭に向って発砲した。反射的に背中を向けて体を屈めた。が、左肩に命中したらしく血が出てきだした。そのまま走った。走る度に肩の痛みが大きくなってきた。夢中で走っていると知らぬ間に地面に倒れていた。出血が酷くなってきた。発砲した男が近づいてくると鞆を奪い返され腹に蹴りを入れられた。

そのまま知らないところに連れて行かれた。多くの黒服の大人達が自分を笑いながら見ている。中央に居た自分を撃った男が問い掛けしてきた。

「歳は？」「13。」その場にいた大人達が皆驚いた表情をしていた。質問してきた男のみが冷静な顔をして「体の割りには若いんだな。それにしても俺を狙うなんて度胸があるじゃないか？え？地元の間人ではなさそうだ。何処から来た？」「福建省の田舎から・・・」
「あの辺りは血の気の多い奴がたくさんいるからな。それで香港へは何しに来た？お前1人が生きていくには大変な場所だぞ。」
「警察に追われている。仲間は全員捕まった。」
「チャンスをやろう。俺は香港で最も力を持っていると言っている。お前の今日の所業を許し、肩の傷を治し、今後の生活も面倒見てやろう。その代わり、

俺の盾になる覚悟があればの話だ。」

この日から邸は孫の盾として生きることとなる。徐や袁などはもつと後に組織に加わる。寿町を徘徊していく内に雑居ビルの一角から悲鳴が聞こえた。すぐに悲鳴の元へ向うと叫んでいた女の足元に血だらけの男がうずくまっていた。

「どうした？」日本語で尋ねると女は恐怖で顔が引きつっている。

男は苦しそうだ。「誰にやられた？」男に尋ねると「化け物……」

「そう言つて男は動かなくなった。「お前はこいつの知り合いか？」女に尋ねると女は動かなくなった男にしがみ付き泣き喚いた。

「化け物はどこだ？」叫ぶように女に聞くと上へと続く階段を指差したまま何も喋らなかった。

階段を上がっていくと6階へと続く階段の途中で、簡単な間仕切りの扉があった。押すと容易に扉は開き階段の頂上地点にもう1つの扉があった。それは既に開いていた。

邸は屋上に着くと隣のビルの屋上で青竜刀らしき物を持っている男を発見した。隣のビルまで軽いジャンプで飛び移れる幅なのを確認すると小走りで飛び越えた。青竜刀の男が振り向くと邸の方を睨みつけた。グレー色のアンダーシャツと黒のベストには返り血が付着していた。

「下の階で人を斬つたのはお前だな？趙 双堅？」「誰だ？お前は……」いいながら両手で

青竜刀を掴むと邸の方へ走りながら袈裟斬りに斬りつけてきた。邸が右にかわずと趙はバックハンドの体勢で横から斬りつけるがこれも邸は難なく後ろへ引いて避ける。引きながら邸は内ポケットにあ

る銃を取り出し趙にめがけて構えると、趙はまず斬りつけてきてから後ろに振り返り一目散に元の隣のビルに向かって走り出した。趙へ向かって発砲するも巧く当たらない。趙が不規則な動きをしながら見事に銃から逃れている。それも逃げながらであるから相当な運動神経だった。邸も続いて追いながら第2発目を発砲した。

今度は斜め前方向に向かって頭から飛びこみ、右手で受身を取りまた立ち上がり走り出した。趙は開いている扉へ入ると階段を駆け降りた。どちらかと言うと邸はあまり走るのは速くない。必死で追いかけたが道路に着く頃には10メートルほどに差をつけられていた。まさか道路で発砲するのはまずい。そのまま追いかけた。

趙はビルの階段の途中で青竜刀を捨てていた。全力で走った。とにかく後ろから追ってくる男から逃げ切らないといけない。腕は相当立つ。それに銃相手では確実に勝てない。こんなピンチは今までに死ぬほどあった。大陸時代、敵のマフィア達と抗争した頃の事を思えば今逃げているこの状況は楽に回避できる。趙は石川町の方へ向かっていた。

もう既に趙までの距離は20メートル以上離れている。これ以上離れると見失う可能性が高かった。亀の橋を渡り地藏坂の方向へ趙は真っ直ぐ走った。恐ろしいまでの体力だった。足も速い。時刻は夕方6時過ぎである。近辺の女子高の生徒達や住人達の姿が多く、必死で走る趙と大柄のスキンヘッド男が追いかけている情景は目立った。皆が2人の追走劇を見守っていた。

さらに駆けて行くとマンション街に趙は逃げ込んだ。すでに姿は見えなくなっている。途中で息が切れて止まってしまった。顔は汗だらけである。悔しい。一撃も負わせれずに逃がしてしまった。この数年、いや10年近く獲物を逃した事などなかった。自分は華僑の

帝王を守るボディガードなのだ。相手が上海の腕利きのヒットマン
とは言え、邸のプライドはズタズタであった。

山本と青木は新横浜付近のビジネスホテルで宿をとり、翌朝すぐに
タクシーを呼んでから徳田組がある鶴見方面へと向かった。

山本はあまり目立たないがシックで落ち着いたスーツを着ていたが、
青木の方は上下と靴までもが真っ白に固めており目立って仕方がな
かった。しかしながら誕生日パーティの最中からここへ直接来た為
に気の毒だと思った山本もあまり怒らなかった。徳田もそんな事
でへそを曲げるような小者ではないしむしろそんな時に駆けつけてく
れた青木に感謝するような性格だった。

「兄貴、徳田組を襲った野朗は本当に一人でやったんですか？相手
は戸塚さんを含む4人でしょう？もし話が本当なら不謹慎ですがそ
の野朗をすごいと思いますね。」ロックスターのような格好をした
青木がタクシー後部座席で山本に問い掛ける。

「俺もおやつさんの手前、何も言えなかったが同感だ。戸塚が殺ら
れたと聞いた時は耳を疑ったよ。」青木とは目も合わさずに外の景
色を見ながら言った。

「殺し方から見て大陸の奴っばいですね。このご時世、日本のヤク
ザは法に縛られて子犬のように大人しくしてなきゃいけねえ。その
点、あいつらは手加減なんてもんは知らないですもんね。国に帰れ
ばまず日本の警察は介入出来ない。」いつもより青木は多弁だった。
考えてみれば青木にとっては初の出張経験だ。遠足に行く気分にな
いのかも知れない。パーティ帰りだから無理もない。それにずっと

暴力を抑えつつづけてきたストレスを一気に今回の件で吐き出そうとしているのかも知れないと山本は思った。

事務所に到着すると徳田と稲葉は2人を応接室に案内した。

「今回は突然こんな事になっちまってお宅の所に迷惑をかける事になった。この通り申し訳ない。」徳田は2人に頭を下げた。それを見た山本が少し驚き顔を上げるように頼んだ。「こっちは戸塚の下に居た稲葉という男で戸塚の跡を継いでもらう事になったから何でもこいつに聞いてくれ。」稲葉は軽く会釈した。

「君が青木君だな。何でも君の誕生日の最中だったみたいで本当に悪いことをした。」「うちの親の親友が困っているのですからどうぞ気にしないで下さい。必ず敵は取ります。」山本は青木が意外に丁寧な口調で喋っている事に驚いた。「いや、有り難い。おい！寿司取れや！」徳田は近くに居た若い衆に出前を取らせた。

少し間が空いてから稲葉が喋りだした。「今回のターゲットは上海の組織である九龍界です。その殺し屋、趙 双堅です。名前くらいはご存知じゃないですか？」「それはもう・・・関西で暴れまわっている連中ですね、九龍界と言えば。」山本は奴らを敵に回して青木と2人で大丈夫なのか少し心配になった。死ぬのはさほど怖くはないが残される妹が不憫だった。そんな事も知らずに青木は少し興奮した顔をして、「趙ですか。任せてください。極道になってからやっと大物とやり合えるなんて・・・最高のプレゼントですよ。徳田組長、稲葉さん。」「青木の目は野望に燃えていた。そんな青木を見て山本は守りに入ろうとしていた自身を恥じた。

「寿司食ってから今の状況や配置させてあるうちの組員達の場所などを説明させて頂きます。それまではどうぞくつろいでください。」「

芸術的とも言えるオールバックが印象的な稲葉はそう言つとニコリと笑つた。

セバスチオンとカルロスをチアゴとレオナルドに紹介した。場所は桜木町の近くにあるコーヒーショップだった。ジョアキンは何故か他人のカルロスと会つとホツとしたような気持ちになる。ブラジル人は基本的に陽気だ。ジョアキンは日本の血が濃いのもあるが性格的には内向的だった。カルロスのような寡黙な人間の方が馬が合う。

5人のラテン人がポルトガル語で喋るもんだから店内の他の客はチラチラ見てきた。まだまだこの時代は横浜のような国際都市でもブラジル人は珍しい方であつた。名古屋、静岡辺りなら話は別だが。

「やっとだな。退屈で死にそうだった。もう読書はしばらくはご免だ。」カルロスが呟くと続いてセバスチオンが武器を手に入れたことを報告してきた。レオナルドのみが拒否してきたがチアゴは満足そうだった。ジョアキンのポケベルが鳴り出し見知らぬ番号が入っていたので店の公衆電話からかけてみた。市外局番は大阪だったので陳あたりだと思つたが意外にも幸平だった。

「よう、久しぶりだな。どうしてた?」「普通の大学生活から刺激のあるチャイニーズマフィアの世界を覗いてるから興奮してるよ。ちなみにこの番号は俺のアパートの部屋やから覚えといてくれ。」
「ああ、分かつた。それで何か掴んだか?」「王さんからお前が上海の趙を捕らえに行つてるつてのは聞いたんやけど、どうもその親玉がこつちに戻ってきてるらしい。」「楊つて奴か?」「うん。コミュニケーションの連中の1人が伊丹でそれらしい奴を目撃したつて。若い男1人だけ連れてたらしい。」「こつちはこれから趙の追走劇が

始る。お前は堅気なんだから危ない真似はするなよ。何か分かったらまた連絡してくれ。」電話を切るとチアゴがセバスチオンと銃について語っていた。

「やはり軽いのがいいな。」「お前は体格がいいんだからでかいの持てよ。」「駄目だ。経験上、威力が多少落ちても軽量の物がいい。」「コルトのアナコンダが手に入ったんだが、あれは大きいしな。」「悪くはないが俺の好みじゃない。」「リボルバー式は嫌か?」「それは拘らない。ただあれはあまり評判は良くないな。」レオナルドは話についていけず退屈そうだった。カルロスはよく喋る2人に任せてアイスコーヒーのストローをぐるぐる回していた。

「ベレッタでいいだろう。あれなら扱いやすいし何丁か余ってたはずだ。」カルロスがチアゴに言った。いい加減このやり取りに痺れを切らしのだろう。「それならいい。ベレッタは俺も使い慣れている。」セバスチオンもホツとした表情をした。

「さて、これからどうするんだ?武器を手に入れてカルロスを匿う役目は果たしたぜ。」「ああ、感謝するよ。お前はよくやってくれた。獲物の方は徐が何かしら情報をよこしてくれるはずだ。」「どうかな?徐に昨日聞いたんだが、あいつら趙に賞金かけてゲームをしてるみたいだからな。獲物の情報なんて流さないだろう。」「実は昨日、三武会の邸が趙とやり合ったらしい。場所は寿町。」「何?」全員が一齐に俺の方へ視線を向けてきた。

「雑居ビルの屋上でやりあったみたいだが上手く逃げられたらしい。下の階でチンピラが1人死んだみたいだ。殺つたのは趙だろう。警察のマークがどんどん厳しくなっていくからそれだけが心配だ。捕えられたらこっちから手出しが出来なくなるからな。」「今は何処に?」チアゴが聞いてきた。「石川町で見失ってから分からんらし

い。地元の徳田組も総動員で動いているらしいしライバルは多いぞ。」「チアゴは忌々しそうな顔をしながら、「それに・・・王のところのオカマ野朗も居る。」「あいつはやべえぞ！俺を見る目が気持ち悪いっつらもう・・・。」「レオナルドが興奮して喋った。

段 海斗。この数ヶ月で色んな怪物を見てきた。しかしレオナルドの言う通り、あいつはやばい。何か本能のようなものが叫んでるような気がする。俺たちはとにかく武器を確保する為にセバスチヨンの部屋へ向った。

- 京浜東北線 -

2人の男が空いている車両の座席に横並びで座っていた。

「蒲田の駅で目撃されたのは確かなんだな？」ベージュの綿パンに薄手のトレーナーを着た男は言った。「はい。邸様から逃げ切りましたが、私の同業者の者がしつかりとマークしていたので間違いはありません。」「お前を長く雇っていて正解だった。九龍界の趙を仕留めたとなると、しくじった邸の顔は丸潰れ。袁との賭けにも勝てて俺の出世は保障されたようなものだな、李。」「徐と同様、李もスーパーの日用品売り場で揃うような衣服を纏い笑みで返した。

昨日、寿町で邸と趙がやり合った。結局逃げられて行方をくらました。だが李が見張りを数人つけていた。逃げた先が蒲田らしく先程、駅西口でそれらしき男を発見したとの情報が入った。徐はやつとチャンスが回ってきたと思った。思えば孫の信頼を一番受けている邸、容姿端麗で三武会では孫を除けば最高幹部である袁。よく3人同列に語られるがどうしても自分が一番見劣りした。いくら金儲けして

も孫には認められているものの、下の人間は全て邸や袁を尊敬していた。

まず自分の性格が陰湿だというのも分かっていた。金を儲けようと思えば下の人間から嫌われるくらいでない駄目だという自負がある。今でもそれは正しいと思うし、袁などは外向きの顔を良くしてだけで何も組織に利益をもたらしていない。邸もただのボディガードだ。喧嘩は出来ても頭が宜しくない。

「蒲田」車内アナウンスが聞こえ、2人はホームへ降りた。「西口だな?」「はい。」そのまま西口方面へと歩いていくと李の同業者と思われる男が1人近づいてきた。「徐様ですね。私は李と同業の丁でございます。西蒲田公園で趙を発見致しました。」「1人か?」「はい。上着だけは返り血もあり黒のシャツに着替えておりますが武器も持たずに手ぶらです。狙うなら今かと。」「ご苦労だった。後日お前の口座にボーナスを振り込んでおく。」「ありがとうございます。」

徐達が公園に入ると人だかりが出来ていた。その中に2人が入っていくと、40代主婦がひつたくりにあつたらしい。近くの交番に居た警官が主婦に質問している。何でもアジア系の外国人らしき人間の仕業らしい。すぐにそれが趙だと分かると、さらに西へ、神社の方向へ逃げたとの話を人だかりからキャッチした。

気付くと徐は神社の方向へ駆けていた。李も後を追う。

(くそっ!もう少しで捕えることが出来たのに。金に困ってひつたくりだと?上海の殺し屋が聞いて呆れる・・・)

神社方面へは他の警察官達も先に追跡していた。先に警察に捕まる

事にでもなればこのゲームは終了である。

趙は全速力で駆けていた。昨日から駆けっぱなしである。金が尽きたのでこそ泥のような行為を働いた。美玲の敵を取る為なら泥をすすってでも生き延びる。しかし流れてきた情報の中で美玲が別の男を抱えていた事が解せない。自分を意図的に怒らせる為に流したデマかとも思ったが、死体は男と一緒に川の上で見つかったのは事実らしい。やり場のない怒りを香港の連中にぶつけるしかなかった。

黙って楊の元を離れた。自分に対しては呆れているだろう。それでも構わなかった。ろくでなしの自分を唯一愛してくれたのが美玲だった。例えば他に男が居たのだとしても、もうその男も美玲もこの世には居なかった。昨日向かい合った男は恐らく香港の邸だろう。昔に楊老師から聞いた事がある。特徴もぴったりだ。あんな風貌の男他に居るはずがない。歌舞伎町には上海の同胞がいる。何でも自分を捕まえる為のゲームが香港連中の中で開催されているらしい。徳田組の連中が横浜中で検問を敷いているとも言っていた。自分1人の為に光栄だとも趙は思った。

蓮沼の駅にどうにか辿りついた。追っていた警察はどうにか撒いたみたいだ。足には昔から自信があった。しかし近辺の警察官にはもしかしたら連絡が伝わっているかもしれない。公共の駅を使うのはリスクがあると感じた趙は駅前でタクシーを拾った。ここから新宿までは距離があるが先程頂いた財布の金で充分間に合うはずだ。余った金で明日くらいまでは凌げそうだった。

新宿に着く頃には午後3時頃になっていた。コマ劇場を越えて区役所通りに向う手前の小さな筋に入る。薄汚い雑居ビルの2階に同胞の店はある。中国人向けのビデオレンタル屋として表向きは営業し

ている。自分のような東京に不慣れな同胞が頼る場所でもあった。

合鍵を作っていたのでドアを開け店に入ると電気が全て消えていた。この主は外出する時にも電気をつけっ放しにする癖があるのに、珍しいと思いつつ電気をつけて奥の小部屋にある冷蔵庫を開けた。中から烏龍茶を取り出しペットボトルのまま口に含んだ。喉が渴いて仕方なかったが体力がみなぎってきた。急にトイレに行きたくなつたのでトイレのドアを開けると、同胞である鄭が冷たくなって死んでいた。まだ死んでから時間が経っていない。何かで首を締められた跡があつた。

胸騒ぎがした趙はすぐに部屋を出ようとした。部屋に入ったときには気付かなかつたが、陳列されたいくつかのビデオを収納する棚の影から人が出てきた。口元をニヤリとしながらこちらを見ている。見た事のない顔だがこの男が鄭を殺したのだろう。端正な顔をしているが見るからにひねくれてそんな表情をしている。

「あなたのお友達がなかなか口を割らないもんでね、勢い余って殺しちゃった。」女のよ様な口調のその男はウインクをしながら舌を出した。「誰だ?」「あなたは知らないだろうけど北京ではちよつとは知られた殺し屋なのよね。段 海斗って言うの。」「それで?俺が誰だか分かつてるのか?」「趙ちゃんでしょ?女の為に上海から飛んできたつてね?羨ましいわ。その女が。あたしもそこまで愛されてみたいわよ。」

トイレ内に居る自分と北京のオカマまでの距離は5メートルほど。奴は腕を組みながら笑ってこつちを見てる。出入り口付近に奴が居る為に強行突破するか、奴を殺さなければいけない。少し間を空けてから趙が喋った。

「俺を殺しに来てる人間に言うのもなんだが・・・お前は話の分かる殺し屋だと思っただが・・・どうだ？」「いかにも。」海斗の口元が緩んでいる。「小便がしたいんだ。殺し合いの前は興奮していても小便がしたくなる。」「死ぬ前に綺麗になりたい訳ね？分かるわ。他に出したい物があるんなら私が手伝ってあげるけど？」卑猥な笑みで趙を見てきた。「いや、小便だけでいい。」「条件があるわ。」海斗の目が光った。「それは？」「死体の上から小便をする事。後ろから見てるから。」「そ・・・それは・・・」「嫌ならいいの。今すぐ殺してやるから。」少し考えた仕草をして趙は了承した。死んだ同胞の上から小便をするのは辛い。

海斗はジロジロ後ろから見ている。

（何だこいつは？北京の李以外にこんな化け物がいやがったのか。誤算だ。香港の連中はある程度は下調べしていた。昨日会った邸紫燕。一瞬やり合ったただだったがすごい男だった。徐は大した事ない。金儲けしか頭がない奴だ。袁も強いが俺ほどでは無い。今、後ろに居る男は今まで会った事もないような殺気を放ってる。このままだと殺られる。）

「美味しそうなお尻をしてるわねえ。長い小便だ事。」

（くっ・・・変態野郎が。この小便が終わった時にはお前の最後だ、オカマ野郎。）趙の小便が途切れようとしていた。途切れてから流し、トイレトペーパーを収納する棚にベレッタを一丁隠していた。流してからすぐにそれを手に取った。手に取ったはずだった。

「これを探してるのかしら？」嫌な予感がしながら恐る恐る後ろを振り返った。

趙がこの世で最後に目にしたものは1人のオカマが笑いながら自分に発砲していた。趙の眉間を綺麗に撃ち抜いた海斗は出入り口の方へ向いた。

「デブ！入ってらっしやい。終わったわよ。」不満そうな顔をしながら陳が入ってきた。「デブって言うな。俺にはちゃんと陳 成候という名が・・・」「うるさい、デブ。仕事は終わったわよ、帰りましょ。早くシャワーを浴びたいわ。」そう言うと海斗は通路へ出て行った。

陳はトイレの中を覗いた。（俺ら組織が散々手を焼いた趙をあのカマは一瞬で・・・）「デブ！ちんたらしてんじゃないよ！」慌てて陳も通路の方へ走った。

第33章 上海包囲網 後編

- 新宿 歌舞伎町 -

山岸 春は歌舞伎町の現場で煙草をふかしながら考え事をしていた。関西で猛威を振るっていた上海グループ九龍界、趙 双堅がビデオレンタル屋にて殺害されていた。オーナーと思われる男も首を絞められた跡が残った状態で死んでいた。

「山岸警部。現場での喫煙は控えてもらいますか？」警視庁の真田警部が声をかけてきた。「コーヒーの空き缶に吸殻を捨てるから気にせんとしてくれ、真田君。」「そうはいきません。大阪府警では蠍と呼ばれていても東京は我々の管轄ですから指示に従ってもらいます。小松警視の指示であなたの捜査を許可していますが、本音を言うと迷惑なんです。スタンドプレーをする人間はチームに加わってもらいたくはありませんから。」こういう物の言い方が山岸は嫌いだった。小松は口うるさいが人情はある。この男の心はきつと氷で凍てついているに違いない。エリートはだから嫌いだった。

「とにかく・・・邪魔だけはしないでくださいよ。」そう言って自分の部下達の所へ帰っていった。何か細かく指示を出しているようだ。

何を言われようが小松から警視庁へ自分が東京で捜査の参加をする事を取り計らってもらっていた。今回の被害者である中国人は大阪で拠点を持つマフィアである。自分の協力も必ず必要になってくるだろう。それが真田には気に食わないのであろう。あいつが疎ましく思っているのは自分にとっては多少愉快でもある。

こうなつてくると趙の親玉である楊の行方を追わなければいけない。うまくいけば九龍界を壊滅出来る。大阪にすでに戻っているとの噂もあるが真相はまだ分からない。山岸は歌舞伎町の古ぼけた民宿で滞在していた。歌舞伎町は探せばいくらでも安い宿はある。警視庁の寮を使つても良いとの事だったが窮屈で嫌だ。東京の人間は苦手だ。こちらで捜査の参加をする条件として小松に毎日1回連絡を入れなければならなかった。しかしそれは向こうの情報も知りたかつたので気にはならなかった。

- 現場 ビデオレンタルショップ -

一通り鑑識の捜査も終了したようで真田は現場であるトイレを覗いていた。

被害者である中国人2人が殺しあつた可能性は極めて少ない。トイレの出入り口付近で死んでいた趙と言う男の死因は銃によるものである。中で死んでいた鄭と言うオーナーは何かで首を絞められた跡があつた。何故か鄭の衣服にはアンモニアが検出されていた。調べると趙の物だつた。指紋らしきものは見つからない。大方の予想は上海組織と敵対する中国人マフィアによって殺されたというものである。真田もその線が1番高いと思つている。死体の様子から見て大差は無いがオーナーの方が先に死んでいる。今、真田の指示で大量の警察官たちが歌舞伎町内の中国人達に聞き込みをしている。オーナーの鄭と言う男は東京に慣れない上海系の中国人達の面倒をよく見ていたらしい。今のところ分かっているのはそれだけだ。

「真田警部。」鑑識の男と話していた若い刑事が話しかけてきた。「犯人は単独か複数かは分かりませんが相当の訓練をうけた人間だと思いません。オーナーである鄭は功夫の使い手であり、山岸警部に

よるともう1人の趙は大阪の九龍界という中国人マフィアの殺し屋だそうです。」「山岸警部の言う事は適当に流しておけ。」「はっ、しかし・・・山岸警部は大阪府警の人間ですし、趙という殺し屋やその組織の事も詳しいはずですが。」「そんな事は大阪府警に直接聞いて調べればいい。とにかくあの男はチームの和を乱す可能性が高い。相手にするだけ無駄だ。」「真田はまだ30を超えたくらいの年齢である。山岸は自分よりも年上になるがエリートの自負が強かった為にどうしても認められない。叩き上げはどれだけ頑張っても自分の地位を超える事は出来ない。

(それにしても衣服に趙という男の小便が付いていたのが解せない。2人が争った可能性も少なくないな。鄭を殺してその後に自分自身が犯人に殺された・・・何かしっくり来ないな。)

真田は自分のメモ帳に何やら書き込むと現場を離れた。

- 大阪 ミナミ 周防町 -

いつものBARで王は酒を飲んでいた。あまり人目につかないこのBARを長年愛用していた。マスターの幸田は王が具体的にどんな仕事をしているのか知らなかった。そんな事はどうでもいい。自分の店を贖戻にしてくれる王に好感を持っていた。ややこしい事は言わないし金の払いも良い。以前にチンピラが踏み倒して飲み逃げをした。無銭飲食はけしからんと王は後日そのチンピラを痛めつけて、自分に会計を払うように言ってくれた。

普段、王は多弁ではない。黙々と好きな酒を楽しんでいる。しかし今日はやけに機嫌が良さそうなのだ。「幸田さん。今日はうちの会

社の若い者が大きい仕事をしてね、酒が美味いんだよ。ビーフジャーキーをくれるかな?」「はい。」「そう言つて幸田は黙々と動く。

それから2人の男達が店に入ってきた。黄と劉である。

「お疲れ様です。」「北京語で黄が言つと王の隣に座り劉もそれに倣つて黄の隣の席に着いた。「海斗が大きい仕事をしたらしいな。」

「ええ、陳曰くあつけなく終わったようです。」「どんな強い男でも死ぬ時は案外そんなものかな?盛者必衰の如く……楊や私にも言えることだが。」「楊の行方は未だに掴めておりません。」「劉が初めて口を開いた。このやり取りは北京語で話されている為に幸田には伝わっていない。

「楊もこのままでは終わらないだろう、日本国内の華僑では私が唯一認めた男だからな。」「孫長老はどうでしょう?」「黄が尋ねると王は少し口元が綻びウィスキーを喉に運んだ。「長老か……確かに日本国内の華僑で最大の権威と権力を持っているが、どうも守りに入つてゐる気がしてならん。私も10年20年経つて耄碌するとあなるのかな?ま、あの人は人材に恵まれている。特に、邸という男はなかなか見所がある。そうだな、黄。お前とよく似ている。」「黄は自分の名前が出たので多少その男に興味を持ったが、そんな事を話している場合ではなかったのを思い出した。

「王老師。今回海斗が趙を殺した事により被害を被つた徳田組を始めとして、その徳田組に加勢しようとした金松組、趙抹殺に賞金を賭けていた徐と袁の顔は丸潰れの様子です。」「愉快的事ではないか。」「しかし……」「孫長老が何か言っているのか?」「長老は海斗に是非会いたいと興味すら持っているのですが……徳田組の組長が怒り狂つてゐるとの事です。」「お酒を飲み干すと幸田にもう一杯頼み王は目を閉じた。

「徳田か。日本のヤクザには最近では珍しくなった古いタイプの男だ。嫌いではないな。」「獲物を横取りされたので組の面子を気にしているでしょう。」「だからヤクザはマフィアには勝てない。面子とかプライドとか・・・くだらん。殺った者勝ちだ。それに趙が消えても楊の組織は丸々残っているんだ。」「は、しかし・・・」
「黄さん。」劉が話しに入ってきた。元々、黄や劉は無口である。それだけに仲が良かった。「こう言っただけは失礼ですが、徳田程度にびびる必要はないと思います。もちろん黄さんはうちと山内組との亀裂を心配しているのでしょうか？しかしながらこの国で力をつけていけば何れはぶつかる相手なんですよ。もうそんな時期に来ているのではないですか？」

珍しく多弁な劉を見て王は微笑んだ。

「お前は山内の恐ろしさを分かっていない、劉。だが、お前の今言った事は正しい。」王はよくぞ言ってくれたと劉を褒めたかった。しかし黄のような組織を本当の意味で心配する人間も必要なのだ。この2人はいいコンビだと思った。それに海斗と陳も実はいいコンビだと思った。海斗とまともに話せるのは自分を除いてここに居る劉、あとは陳くらいのものである。生前、李でも海斗の事は忌み嫌っていたし話そうともしなかった。劉兄や、黄にしても海斗を意識的に避けていた。

「ところで・・・海斗達はまだ戻らんのか？」「陳とホテルをチェクアウトしてから行方を消したようです。陳はこちらには戻らずに東京中を探しているようですが。ま、見つけるのは不可能に近いでしょうが。奴が暴れてニュースにでもなれば居場所は分かるんですが・・・」「放っておいていい。陳だけ戻らせる。」「しかし奴から目を離すと何を仕出かすか分かりません。」「何を仕出かすと

言うんだ？この機会に邪魔な者は全て奴に消してもらえばいい。誰があいつを止められるんだ？」「王老師を除いて誰も居ません。」王はこの際に香港や山内組の連中も一気に潰してしまえばいいと考えているのだろうか？黄はそう感じた。

- 孫 邸景の館 -

孫の館、1階の奥に位置する応接間に身なりの良い美男子が巨大なテーブルを挟んで孫と向かい合っていた。その美男子は昨日の晩、歌舞伎町で三武会幹部、徐 明法と出会った。趙 双堅という獲物を横取りしたのがこのナヨナヨした男だとはどうしても信じられなかった。だが、話しているうちに今度は気味が悪くなるほど殺人に対して快感を覚えるタイプなんだと分かってきた。段 海斗という名前で各地に情報屋を散らばらせていた甲斐もあり、歌舞伎町周辺で徘徊していた海斗をたやすく発見出来たのだ。

趙が殺害された時刻に1人の情報屋がビデオレンタル屋から2人の男が出てくるのを発見している。正確には2人の男の背中を見ていた。出くわせば殺されるのは目に見えてたからである。情報屋はビデオショップの2件隣のテナントに潜んでいた。この店が上海系列の人間を世話したり匿ったりしているのは以前から掴んでいた。そこに徐が店の2件隣にダミーのスナックを作らせた。実際は上海の人間達のマークのみに使っていた。オーナーの鄭とも情報屋は顔馴染になっておいた。2人の男の背中を確認すると相棒に部屋をチェックするように頼み、自分自身は2人の後を追った。

1人は小太りの男。もう1人はスラックとした美男子である。歌舞伎町中の情報屋達を合わせると20人は超える。もちろん香港の息が

かかった情報屋達ばかりである。この歌舞伎町は90年代に入ると巨大なチャイナタウンと化した。富を求めて大陸から様々な勢力が進出してきた。現在この街で最大勢力を誇っているのが日本のヤクザを除けば香港三武会。次いで台湾系列の神蛇。上海九龍界。そして北京の孔雀である。孔雀はどちらかと言えば関西方面に強く、特に神戸の中華街を拠点とする。リーダーである王は大阪で地盤をじわじわと拡大させていた。この香港の情報屋達の全ての知識を集集させて2人の男が北京の王のグループに属しているところまで割り出した。

徐は自分の獲物（出世）を奪った人間がホモセクシャルで同盟中の孔雀の者だと知り、迂闊に手は出せない事に苛立ちを感じた。ただ、彼と接触した時にはそんな感情を微塵にも感じさせなかった。それとこのホモセクシャルの男が只者ではない事も感じ取ったし、逆にこの男を利用した方がいいと判断した。相棒の陳は大阪へ戻った事を海斗は素直に言った。そして自分は暴れ足りないという事も正直に言った。海斗もどうせなら趙のような大物とやりたい。大阪では親玉である楊が帰ってきているらしいが、詳細は分からずどうせなら人の多い東京に残った方が面白いと思った。

徐は海斗に孫長老と会う事を薦めた。海斗は快く承諾した。

「あの狂犬をいとも簡単に仕留めた君の腕は素晴らしいな。」孫がまず切り出した。「お褒めに預かりまして光栄です。ですがあの男は油断し過ぎていました。」不敵な笑みを浮かべながら海斗が答えた。孫の両脇には邸と袁が立っていたが明らかに2人とも不機嫌であった。邸は自分が仕留めることが出来なかった獲物をいとも簡単にやってのけた男が眼前に居る事。袁はゲームを潰された事に腹が立っていた。この点、徐は少し違った。自ら海斗をこの場に連れて

来た事もあつてゲームを潰された件で多少の憤慨はあつたものの、この男を上手く利用した方が組織にとつても利になると思つた。その徐の考えを孫は見抜いていた。段 海斗をこの場に連れてきた徐に対して満足であつた。

「徐から聞いたが孔雀の王の下に仕えているらしいな。裏切り者に変わつて死んだとは言え、李君に君と素晴らしい人材を抱えて王が羨ましいよ。」それを聞いた両脇の2人は屈辱さえ感じていた。「ところで相棒の陳君が帰阪したようだが何故君はこつちに留まつたのかな?」「徐氏からは何も聞いていませんか? 私は常に強い人間を求めています。そうですね・・・孫長老は女を抱く事が好きでしょうか?」少し怪訝そうな表情をしたがすぐに孫はニコリと笑つた。「それは男なら当然の事だろう、段君。君は違つても言うのかな?」実は徐から海斗がホモセクシャルである事を聞いていたが全く知らない振りをした。

「普通の男であればそうでしょう。美味しいものを食べて高い服を着て、そして極上の女を抱く事は男にとつては夢でしょう。しかし私は生まれつき同性にしか興味が沸きません。そう、孫長老の左隣に居る殿方などは私の好みの男性ですね。」袁を見ながら厭らしい笑みを浮かべた。孫が袁の方へ顔を向けると明らかに袁の表情が怒気に包まれていた。それを心の中で徐は笑つていた。

「段君、彼は袁 仁羽と言つてな。今回目障りな上海の殺し屋を仕留めてくれた事、私は大満足だ。しかしながら両脇に居る2人は趙を消すのに躍起になっていたのだ。あまり刺激的な発言は控えてくれたまえよ。私でも止めることは出来ないかもしれない。」「そうですか。それは失礼致しました。ですが、とてもチャーミングな顔をしていましたので・・・褒めたつもりなのですが・・・」「おい。」ここで袁が口を挟んだ。「お前、ここは同盟中とは言え香港のテリ

トリーだ。あまりふざけた事を抜かしていたら命の保障は出来んぞ。」「そのドスの聞いた声を初めて聞かせてくれたわね？袁さんだつたかしら？ゾクゾクするわ。うちの組織に以前いた劉 解奉という男が居ただけどね。これがまた男前なのよ。でも貴方はもつとチャーマングよ。ま、その男前は私が殺しちゃったんだけどね？裏切り者だから仕方無いわよね？」ウインクをしながら袁に言った。

袁が内ポケットに手をやると同時に邸が制止した。「離せ！このオカマを趙の傍に送ってやる！」しかし邸の力は強くて解くことが出来ない。「袁！うるたえるな！」孫が大声を出すのは珍しい。「邸袁を部屋の外に連れて行け。お前も一緒に付いているのだ。」それを聞くと邸は袁の肩に手を置き、出口の方へ顎をやった。先頭を邸が歩き出すと少し間を開けて海斗を睨みつけながら歩き出した。その間、海斗はずっと袁の方を微笑みながら見つめていた。

「段君、あまり彼等を挑発しないでもらいたい。」「すみませんでした。」「さて、君をここに呼んだ理由はある仕事を受け持つてもらいたいのだ。」「私は王老師の下で働いています。まずは・・・」「それは心配に及ばない。王へは私のほうから既に連絡してある。後で確認してもらって構わん。」「徐が説明した。」

「報酬は弾むし君にとつても悪い話ではないはずだ。」「覗いませよう。」「要点から言うとな我々は長い年月をかけて日本国内における華僑の頂点に立つたと言っても過言ではない。今後は日本人も視野に入れた市場を手にしたい。」「そうになると、日本のヤクザを敵に回すという事でしょうか？」「さすがに飲み込みが早い。山内組の存在は知っているかな？」「ええ、日本最大の極道組織だと。詳しくは存じませんが。」「横浜の老舗の極道組織、徳田組の組員4名が趙に殺された。その中には若頭も含まれていた。横浜中に検問を敷いたらしいが君が消してしまつた事で組長が憤慨しているらし

い。君がスリルを求めるなら徳田組長に君の存在を伝えたら面白い事になるとは思わないか？もちろん我々にとつても日本のヤクザが1人でも多く消えてくれた方が仕事がやりやすくなるしな。」

「やりましょう。」海斗の眼は喜色に包まれていた。

- 徳田組 -

4人の男達がテーブルを挟んで2人ずつ向かい合っていた。山本と青木、徳田と稲葉である。組を総動員して趙 双堅を仕留めるはずだったが、いとも簡単に獲物を奪われてしまった。犯人は趙が属していた上海系列、九龍界と対立している北京マフィア孔雀の人間らしい。そして事もあるうか東京に潜伏しているらしい。この情報源は横浜の孫 邸景から伝えられた。徳田は孫とは10年以上の付き合いになる。華僑の情報のほとんどはこの男が把握しているだろうから信憑性はあった。

「あんた等を無理言つて引つ張つてきたのに申し訳ねえ・・・金松の顔まで潰しちまった。ま、あれはいい男だからあんた等の事は気にしないでくれて言ってくれたが・・・俺の気がすまねえ。」徳田はこの数日ろくに寝ていなかった。悔しくて眠れなかったのだ。横に座る稲葉も気まずい雰囲気に肩を落としている。自分が徳田組の若い人間を取り仕切る立場にあったのだ。新若頭としては初の仕事である。それをあっさり北京の殺し屋に潰されたのである。その怒りは尋常ではなかった。

山本も青木もそんな2人を見て気の毒になつてはいても責めるつもりなど全く無かった。「親分さん、本当に我々は助つ人として来ただけですから・・・いい休養になつたと思えばなんて事はありま

せん。ただ悔しいのは北京の殺し屋が王さんの組織の人間だと言うことですね。」「そこです。我々も手が出せないんですよ。孔雀とはいわば友好団体ですから同盟している組織の人間を叩くのは……それに敵対している組織の殺し屋を消したのは孔雀としても大義名分があるでしょうし……」「稲葉がやり場のない怒りを抑えながら山本に言った。

「そこでだ。」「徳田が少し間を置いて語り出した。」「俺は1つ大きな決断をしようと思う。」「3人が一斉に徳田の方へ顔をやった。」「金松の所は北京の連中とも付き合いが深いだろう。」「ええ。」「山本が答える。」「俺らはまあ……王って奴と直接会った事もねえし、それに神戸の本部からしても孔雀ってのは神戸や大阪の限られた地域を取り仕切ってるに過ぎないんだろう?」

「はあ……」「山本は嫌な予感がしていた。」「俺は王の組織とやり合おうと思う。このままじゃ下の人間は納まりがつかねえだろうしここに居る稲葉が1番悔しいはずだ。なあ!稲葉!」「はい!それじゃおやつさん!」「おう。その北京のボケのタマ、とってこいや!」「慌てた山本が「ちよつと待つてください!それじゃ我々は孔雀の人間を裏切る形になります。」「だから、あんた等は関係ねえ。このまま静岡に戻ればよ、なあにも聞いてなかった事にすりゃいい。」「そんな……困ります。うちのおやつさんに何て言えば……」「俺が言っておくよ。たとえ断られてもそんな時は仕方ねえ。浜っ子の意地を見せてやらあ。」「

こうなつては山本も止められなかった。徳田の性格は金松からよく聞いている。昔はGHQの米兵まで相手にしていたらしいから相当な男だったのだろう。山本は立ち上がった。「青木、帰るぞ。」「え……あ、はい!」「青木も釣られて立ち上がる。」「徳田組長、我々はこの件に関しては何も聞いていません。ただしうちの親父には話

を通してもらいます。それは約束してください。それから今後、うちとこの徳田組が敵対するような事になっても我々は徳田組長と稲葉さんを支持します。なあ！青木。」「いや、ていうか俺も参加したいんですけど。」「ありがとうよ山本。青木君、あんたの気持ちは嬉しかったよ。来年の誕生日には豪華なプレゼントをやるからな。気持ちだけ貰っておくよ。」

2人はその足で横浜を出た。

- 大阪 新今宮 -

早朝からは無数の日雇い労働者が集い、その日の仕事を奪いあう。仕事が多れて暴れだす輩も少なくない。近代日本からは想像もつかないような昭和の日本がここにはある。全国の日雇い労働者がこの街に集まってくる。通天閣、スマートボール、串かつ屋、映画で出てくるようなステレオタイプの任侠ヤクザがこの街を闊歩している。も違和感はない。

新宿や大阪ミナミが多国籍の街ならこの新今宮という場所は無国籍の街である。ここではゲイが集う場所、路上でシャブを売る者、偽ブランド品店を堂々と営業したり、人間の欲望の全てがこの街に集結していると言っても過言ではない。この街には見得やプライドなどのような物は通用しない。逆に言えばどんな境遇の人間でも受け入れる度量がある街でもある。日本国内では珍しい大規模な暴動が起こり得る場所であるから、西成警察などは他所の警察署とは違い要塞と化している。

萩之茶屋の一角にある安宿には素性の判らない者が多数存在する。楊 再公と周 燕祥の2人もここに潜伏していた。この辺りはどのような怪しい素性の人間でも目立つという事はない。楊も周も目立たない簡単なカジュアル服を身に着けていた。

「ここに流れ着いて数日になるが日本というより中国を思い出すな。周。」美少年はその問いにただ頷いただけである。「多少不憫な思いをさせるが趙が殺られた今は各勢力が私の命を狙っているだろう。大阪中の九龍界の人間はこれよりゲリラ戦へと入る。追い詰められたら方法はそれしかない。」大阪に拠点を構える九龍界は実に300人ほどの構成員が存在する。もちろん表向きは留学生がほとんどである。留学生を装って日本に入国するパターンがほとんどだが、本当に留学目的で来た学生もこちらに来てから組織に入る者も少なくない。趙殺害の報告を受け、出来るだけ組織の人間はバラバラに散らばるように指示した。チャンスがあれば孔雀や三武会といったメンバーは出来るだけ消すようにも指示してある。

軍隊経験のあるメンバーはリーダーとして扱う。人を殺すのを屁とも思わない人間たちが手負いの状態で日本国内に散らばっていた。相手が孔雀のみならゲリラを仕掛けるまでもなく渡り合えただろう。だが三武会が出てきたとなるとそうはいかない。関西、特に神戸だけで末端の人間を含めると2000人からのメンバーが居る。上海同様、留学生などが大半を占める。この時期から数年後には福建省などの組織が台頭するようになるが、この時期はその辺りの省出身の人間達は三武会に属している事が多かった。敵が多すぎる為に香港勢に少し遅れをとっていた台湾系列の神蛇の幹部連中に同盟を持ちかけていた。香港勢が台頭する前は神蛇が日本国内の華僑のトップ勢力であった。しかしバブルがはじけ大不況のトンネルに入り始めていた頃から、台湾へ帰国していくメンバーが山ほど出るように

なつた。

神蛇としては今の状況で三武会を相手にするのは避けていた。「神蛇がうちと共同戦線を組むのを拒むとなると・・・戦況は良くないな。」状況が良くないにも関わらず楊の顔はどこか余裕すら感じさせた。周は自分の寢床であぐらをかきながら通常よりも太いナイフを丹念に研いでいた。彼はあまり喋る事はない。自分に暗殺術のイロハを伝授してくれた趙が殺された。復讐というよりも趙という殺し屋を葬った男に興味が湧いた。歌舞伎町に放つてあつた情報屋によると孔雀の段 海斗という男らしい。ホモだが彼が消した人間の数は相当数に及ぶらしい。

楊の携帯電話が鳴り出した。この頃の携帯電話はサイズが大きく、機能も単純で通話料も割高であつた。車に繋げるタイプの携帯電話が主流だつた時代だ。だが科学の進歩は素晴らしく特に日本はこういつた精密機械の技術は世界有数、いや最高峰だつた。電話に出ると楊は最低限の返事しかせず心なしか暗い表情になつていた。周は楊のその表情からまた同胞が何処かで死んだのだらうと思つた。「・・・ああ、お前も充分に気をつけるんだ。ああ、ん？本当か？」いきなり声のトーンが上がると受話器を持ったまま楊は周に顔を向けた。「分かつた。すぐに向わせる。」電話を切ると楊は周に説明を始めた。

「いいか。また仲間が数人東京でやられたらしい。場所は新大久保。相手は誰だと思つ？段 海斗だ。奴は東京に残つて殺戮ゲームを開始したようだ。妙な事に日本のヤクザにまで手をかけているらしい。正確には横浜の徳田組がそいつ1人を狙い打ちにしているらしいが・・・ま、ヤクザに勝算はないと思う。」「老師は地の利を生かせるヤクザ達より、たつた1人の段が有利だと思われませんか？」まだ声変わりをしたばかりの初々しい声で周は問い掛けた。「ヤクザは

暴対法で銃を持っている人間が少ない。それにな、段にはヤクザ達と対抗する為に大きな武器を持っているんだ。この武器には我々の仲間達も多くやられている。「武器とは?」「女装だ。女よりも綺麗な顔をしているらしい。それに痩せ型でな、化粧をして変装すれば女にしか見えないらしい。ふふ、怖いな。」周の口元が少しだけ綻んだ。

「では段を消しに東京へ向えばいいのですね。老師はどうなさいますか?」「私はここに居る事にしよう。お前に携帯電話を渡しておく。随時連絡するから歌舞伎町の崔という男を頼れ。今から地図を書いてやろう。10万ほど渡しておくから好きに使え。崔があとは何とかしてくれるだろう、私から連絡をしておく。」周は地図と金を受け取るとすぐに東京へと向った。

- 平塚市 ルツカスのアパート -

俺がアパートに着くとルツカス、セバスチヨン、カルロスが談話していた。呑気なもんだ。

「よう、で、奴等の行方は分かったのか?」セバスチヨンがビープジャーキーを頬張りながら間抜け面で聞いてきた。「ああ、大阪へ戻ったらしい。趙が死んでターゲットが楊1人に絞られたからな。」チアゴとレオナルドは趙の死を知るとすぐに大阪へ戻った。犯人が段 海斗だと分かっていたが奴は一応仲間だという事になっている。チアゴなんかは奴を殺すと息巻いていたが、楊を殺せばチアゴは海斗なんかよりもお手柄になる。

チアゴも最初はブルノの敵を討つ事が目的で来日したものの、今で

はプロの中国マフィアを相手にして興奮気味らしい。生まれつきそういうタイプなんだろう。と言えばこの場に居るカルロスなんかも同じタイプだ。少し年齢を重ねているだけあって落ち着きはあるが牙を剥けば恐ろしい男なんだろうと思う。

「それよりジョアキン、面白い情報を聞いたんだけどな。」「セバスチオン、食いながら喋るな。で、どんな情報だ?」「段 海斗が東京に残ったのは知ってるな?」「ああ。」「あの野郎、横浜の徳田組に狙われているらしいぜ。なんせ獲物を奪ったんだからな。ヤクザの面子はズタズタってとこだ。」「確かに徳田組は4人の組員を失っている。内1人は若頭だ。何としても落とし前をつけときたいところだろう。」

「せっかく武器も揃ってこれからだという時に段って野郎もつまらない事をしてくれたよな。」「その段って奴はできるのか?」カルロスが銃の手入れをしながら呟いた。「ああ、王の事務所で見たが一流の殺人鬼ってとこだ。」「どちらかと言うと俺はそいつとやり合いたいな。趙って奴を簡単に殺したんだろ?」「チアゴもそう言うってたよ。あいつは実際に本人を見てるしな。何かの拍子でバツタリなんて事になったら大変だな。」俺は苦笑いをした。

時刻は夕方の方の5時前だった。

「なあ、ジョアキン。俺らもチアゴを追って楊って奴を追った方がいいんじゃないのか?」カルロスもさすがに長い間おとなしくしてたのでストレスが溜まっているのだろう。「うん、実は大阪に幸平という連れが居るんだが、そいつの話だと楊の新しい殺し屋がこっちに向かったそうだな。どうやら楊の一味は西成付近に潜伏しているらしい。」「あそこらへんなら潜伏するのにもってこいだもんな。その幸平って奴は情報屋かなんかやってるのか?日本人だよな?」

「ああ、阪大に通うエリートだ。だがブルノと仲が良かったから俺に協力してくれてるんだ。王にも可愛がってもらってるみたいだが、あまり深入りさせないように注意はしてる。」

「王はもちろん楊つて奴がその西成つてとこに居る事が分かってい
るんだろう？何故潰しにかからないんだろう？」セバスチオンが鋭
い指摘をしてきた。「今、連日のマフィア抗争で日本の警察は必死
だ。事を起こすのは賢くない。それに、上海の九龍界は追い詰めら
れて手負いの獣になってる。下手するとやられるのは王のところだ。
」カルロスが笑った。「分かるよ、俺は。俺もブルノとレイモンド
がやられてからは手負いのような物だったからな。そういう状況の
時は人間は強くなる。」俺は明日に三武会の徐と会う事になって
る。色々と情報可得られそうだしな。セバスチオンはガブリエルと
連絡をとって何か掴んだか聞いておいてくれ。カルロス、もう今の
状況じゃお前は雲隠れしなくても良さそうだ。俺と一緒に横浜へ行
くか？」「嬉しいね。退屈で死にそうなの日々が続いたんだ。行くよ。」

- 静岡 金松組 -

「無駄足になってしまつて悪かつたよ、徳田から謝りの電話があ
つた。えらく気にしてたぞ。」金松が山本と青木の帰還を歓迎した。
「はあ、俺たちは別に構わないんですが・・・」「分かってる。徳
田組は王の所と構えるみたいだな。今の時代のヤクザじゃそんな発
想にはならんだろうな。1に、金。2、3があつて次に面子くらい
か。あいつは昔から不器用な男だからな。」「うちも加勢しましよ
うや。」「何も考えていない青木が叫んだがそれをあやす様に金松は
うちと王の組織の関係を説明してやった。」

金松は徳田と王の組織がぶつかれば徳田の所に勝算がない事を分かっていた。分かっているにしても徳田を止める事は出来ない事も理解していた。

- 深夜1時 渋谷 道玄坂 -

流行発信地、若者の聖地であるこの街は本日も深夜であるとは言え若者で賑わっていた。ここに場違いなヤクザが2人、血相を抱えて渋谷駅の方向へ駆けていた。2人の後を追う1人の女性。追いかける女の上着には返り血と見られる跡が随所に付着していた。その2人の男達との差が徐々に縮まってきている。

ヤクザ達は駅の方へ辿り着けば人も多い。他の仲間たちが居るかもしれないし、警察も少なからず居るだろうと当てにしていたが、何故ヤクザである自分等が警察を当てにしなければいけない破目になったのであるのか。たった数分前に1人の女が近づいてきた。すぐに1人のヤクザが脳天を撃ち抜かれた。そこから死のゲームが開始された。3人1組で稲葉から趙の抹殺を命じられていた件で北京のオカマに手柄を奪われた。徳田は北京の孔雀と対立覚悟でオカマ抹殺を命じたのである。渋谷でそれらしき男を発見したとの情報が入った。情報源は徳田組専属の者であったが、三武会の徐に金で取り込まれていた。わざと渋谷におびき寄せたのである。

何故このような人目につく場所を選んだのか？段 海斗の希望であった。出来るだけ大勢ギャラリーが見てる前で殺したいというある種、変質者のな考えであった。事実、徐は最初反対した。孫がそれを許可した。孫曰く、その方が中国人マフィアの恐怖を一般市民及びヤクザに知らしめる事が出来るとの判断である。

逃げていたヤクザ達もまさか渋谷のだ真ん中で銃を発砲されるとは思ってもいなかった。渋谷のだ真ん中である。この辺りがヤクザの甘いところでもあり致命傷だっただろう。段に限らず中国人マフィアはいとも簡単に人の命を奪う。言葉を交わす前にズドンと刺したり撃つたりしてくる。人目などお構いなしだ。これが香港の三武会の人間であつたならここまで無茶はしなかつただろうが、やはり日本人とは命に対する価値観が違つていた。

駅の辺りに着いた男達は駅構内へと入つていく。逃げている2人のヤクザの内、左側に走つていた男が背中を撃ち抜かれた。周囲に居た一般人達は突然の出来事に音のした方へ目をやる。その内にざわめきが悲鳴へと変貌した。残つた1人の男は泣きながらその女に土下座した。

「勘弁してくれ……」女は土下座しているヤクザの男の傍に近づき、そして上から頭を踏みつけた。また悲鳴があがる。そうこうする内に数人の警察官が走つてきた。女はその集団に向かつて4発リズム良く発砲した。全ての警察官達が倒れる。急所は外し全員の肩が撃ち抜かれた。女は何事もなかつたかのように小走り、道玄坂方面へと引き返した。大量に集つた野次馬達はモーゼの十戒の如く女が通れるように道を作つていった。

渋谷中の警察官達が一斉に集まり出すのはこれより数分後である。その前に女は行方を消した。

野次馬の中から1人の少年が女の後を追つた。周 燕祥である。

第34章 少年

- 横浜 関内 -

徐 明法の得意にしているラウンジがある。20時頃に呼び出されたがカルロスがモタモタしてる内に21時前になってしまった。

「随分とゆつくりだったな。まあ、ママとゆつくり話が出来たから良しとするか。」徐はスケベそうな顔で店のママらしき女性と絡み合っていた。恐らく店の出資に関わっているか、相当な金をつぎ込んでいるに違いない。俺も他人のルックスにケチをつけられるほどではないが、それでも俺の事をいいと言ってくれる女が居ない訳じゃない。麗子を除いても。

徐は金が無ければ冴えない男だった。しかし奴には金の臭いを嗅ぎつける能力がある。それは今後の時代に最も重宝される能力かも知れなかった。

「すみませんでした。今日は1人紹介しておきたい男が居まして。」俺の横でカルロスが軽く頭を下げた。「カルロスです。俺の兄貴分のようなものでペルーから労働者として来日してます。」徐は全く興味のない素振りで、そうかと言わんばかりに女の方へ視線を戻した。俺はカルロスが怒りだすのではないかと危惧したが、意外にも涼しい顔をしていた。

それから徐は数十秒ほど女性といちゃつき、女性から俺達のことを指摘されてから思い出したかのように喋りだした。

「すまん、すまん。ここに来るのも久しぶりでついハッスルしてし

まった。それに面白く無い事も続いたし。」「それは段 海斗の事ですね?」「ああ。しかし馬鹿とハサミは使い様だな。ジョアキン」「こんな冴えない男に(実際は冴えている男なのだ)、ジョアキンと馴れ馴れしく呼ばれるのが腹立った。」「連日、奴が東京や近郊の街で暴れまくっている件ですね。何でも徳田組の組員が片っ端からやられているとか。」「さすがは情報が早いな。昨日も渋谷のど真ん中で2人の組員を射殺。1人の組員の後頭部が重症。警察官数人が肩に発砲されたという。恐ろしい男だな。俺は趙の野郎でも相当だと思っていたが、本当の化け物とはああいう奴なんだろうな。女装もしていたらしい。」「はあ、女装ですか。」「で?そつちの・・・すまん、もう一度名前を教えて貰えるか?」「カルロス。」「淡々とカルロスは自分自身で答えた。」「すまん、カルロス君。悪気はないんだが少し酔ったらしい。カルロス君だな。もう覺えた。」「ニコつとしながら話していたが、冷たい口調のカルロスに徐はムカツとしたらしい。

「ここ数日で徳田組は7、8人はやられたんじゃないのかな。こうなってくると本家の神戸に助っ人を頼む可能性が出てくるな。徳田自身は嫌がるだろうが組そのものを壊滅されかねない状況だからな。」「三武会その他の幹部の方々は大人しく段のゲームを黙っているんですか?」「それだ。」「徐は乗り気になったように椅子にもたれていた姿勢を直した。

「元々俺も含めてゲームをやっていたのは知ってるな?」「趙殺しのゲームですね。」「そうだ。邸は獲物は逃がすわ、袁は段に馬鹿にされるわで・・・もし路上で段と会えば殺し合い確実だな。」「徐さんも面白くないのでは?」「それには乗らんぞ。」「ニヤリとしながら言った。」「俺はな、あいつ等と違って現実主義なんだ。感情論で語って何になる?あいつを敵に回すよりもあいつを利用する方がいいとは思わないか?カルロス君もそう思うだろう?」「無表情のまま

まカルロスはいえ。俺ならその段つてオカマを消しますね。迷わず。今はいいでしょう、ヤクザを次々と消していつてくれるんだから。それからは？そいつは北京の殺し屋でしょう？そいつを生かしておくのは賢いとは思えませんね。」それほど上手くはない日本語だがカルロスは逃亡生活において前より上達していた。

「カルロス君、うちの邸なんかと同じタイプだな。俺は自分の身の丈を誰よりも分かってるつもりだ。正直言って段という男が怖い勝てる気がしないんだ。」俺はこういう見栄を一切張らない点が徐と言う男の怖さだと思った。こういう人間が最後まで生き残ったりするものだ。カルロスも多少は見直したようだ。「ま、でも確かに君の言った通り、近い将来奴は俺らに牙を剥くかも知れん。そうなればそうなたらで香港から選りすぐりの暗殺のエリート達を呼ぶ事になるだろうな。」

1時間ほどはそんな話しをしつつ、酒と食事を出されて中国人の女どもに質問攻めをくらった。「うああ、すごい筋肉ね。かっこいいわ。」カルロスについている女がしきりに腕を触っている。俺の横の女はしきりに俺のルックスを褒めてくる。悪い気はしなかったが営業トークはうんざりだった。時計を見ると23時を超えている事に気付き本題に入ろうとした。

「それで、今日はどんな用件で？」「今日はどうも冴えてないな。用件を言おう。楊再公の居場所を掴んだ。大阪の西成萩之茶屋に潜伏している。神戸の同胞の1人が居場所を掴んだ。」「何故、それを我々に教えるんですか？」「楊の組織の壊滅は、はっきり言って後回しでも良い。うちとしては徳田組及び日本のヤクザの力を削る方が重要なんだよ。」事実、孫邸景は横浜を拠点に関東一円でその勢力を拡大させていた。大阪で多少シマを荒らされていても三武会にとってはそれほど痛くはない。それより関東のヤクザを潰し

てこそ、組織の拡大は容易になる。王の組織にとっては厄介だろうが。

「後回しと言っても趙が死んだ今、楊はあらゆる手を使って報復してくるだろう。殺したのは段だが、追いつめられた九龍界の連中は軍隊経験を持つ人間を中心に全国に散っている。ゲリラ戦というわけだ。これは厄介だ。うちの人間も何人がやられているし、うちの長老はすぐに危険分子を始末しろとの事だが・・・俺も段の扱いだけで精一杯だな。」それならうってつけの奴が居ます。丁度、趙という獲物を段に横取りされたので楊を消すと言って大阪へ1人、黒い虎が向いました。「虎?」「ブラックタイガーという名の獣です。もしかすると段よりも恐ろしい男ですよ。身体能力が半端じゃないんです。」目の前の酒を飲み干すと徐はいきなり立ち上がった。

「面白い。そろそろ帰るぞ。その男がもし楊の始末を成功させれば、長老から何でも願いは思いのままだと伝えておいてくれ。」「分かりました。」それから俺等2人は店を出て駅に向いながら今日の事を話しあった。

「どうだった?徐は。」「最初は捻り殺してやろうと思ったが、さすがに香港の幹部様だ。頭は切れるようだな。それに楊の居場所が分かったのならチアゴの野朗に譲る事はねえ。俺はブルノやレイモンドが死んでからまともに眠れた日がないんだからな。」カルロスの眼には明らかに狂気の色が滲み出ていた。「趙が死んだとは言え、奴の護衛を周囲に置いてあるだろう。やるなら確実にやるぞ。それにはチアゴの協力も必要だ。」「そうかもな。でも楊を真っ先に狙うのは俺だ。それだけは約束してくれ。」カルロスの眼には涙が溢れていた。彼の言ったとおり、ブルノやレイモンドという男が死んでから逃亡の日々を過ごしてきた。狙われる恐怖、仲間が殺された

屈辱、様々な辛さに耐えてきてようやく敵の居場所を掴んだ。

セバスチオンに連絡だけ入れると俺ら2人は翌日大阪へ向った。

- 渋谷駅 現場 -

真田が数人の若い警察官に指示を出していた。山岸は相変わらず現地の警察とは絡まずに現場を第三者のように眺めていた。それを見た真田もいちいち突っ込まなかった。

「スレンダーのいい女がいきなりヤクザ1人を撃ち殺しやがった！もう1人の土下座している男の頭の上から足で踏みつけやがるし。」目撃者の1人が若い警官に興奮して喋っていた。なんせ渋谷のど真ん中である。目撃者は跡を絶たなかった。

容疑者はスレンダーの女で一致していた。数人の警察官の肩を瞬時にして撃ち抜いた。相当な腕である。山岸はその目撃者の証言から犯人像を想像していた。全ての目撃者談はスニーカーを履いていたという意見で一致する。当然1人の組員の頭を踏みつけたのだからヒールでは駄目だろうし、逃げる時にも厄介だ。大阪のマフィア抗争と必ず関連はあると思ったが証拠が少なすぎる。

「・・・さん・・・山岸さん！」降り返ると真田が苛ついた表情で山岸を睨んでいた。「ここでの情報は全て提供したはずです。鑑識の邪魔になりますのでどうぞ・・・」言い終わる前に山岸は子供みたいにカッ力するなど言いその場を立ち去った。後ろの方で真田が何やら怒鳴っていたみたいだが気にしなかった。しかし真田の機嫌が悪いのは無理もなかった。歌舞伎町の事件、今回の渋谷駅の件の他

に東京各地でヤクザが死んでいた。横浜の徳田組が中心になるが他でも東京の隅田会などの組員もやられているらしい。ヤクザ同士の抗争かとも思えたが、絵を描いているのは中国人マフィアだという確信が山岸にはあった。今の時期にヤクザ同士で揉めるメリットがない。

山岸は小松に報告の電話を一件入れると横浜へと向った。

- 神戸 三宮 北野地区 -

ジョアキン達が徐と飲んでいた夜、この三宮で王と陳は山内組の人間と話していた。

山内組は戦後、三国人と呼ばれる不良外国人達が日本で暴れているのを、警察の代わりに取り締まった元漁師出身の任侠集団である。その勢いは昭和の中期になり益々増していく事になる。そのナンバー4である甲斐 吾郎が6名ほどの厳つい組員を引き連れて王の向かいに座っていた。場所は神戸の一流クラブである。

「王さんね。横浜の徳田組がうちの傘下にあるってのは分かっているでしょ？」オールバックに全身ベルサーチのその男が切り出した。歳は40代半ば。実業家と言っても差し支えない容姿だが、その目には一般人とはかけ離れた迫力が備わっている。

「ええ、充分に承知しております。」「せやったら俺らの気分を逆撫でするような真似すんなや！」甲斐の連れていた内の若い組員が叫ぶ。店内の人間は一斉に注目した。別の組員が叫ぶ。「見世物ちやうぞ、こら！」居合わせた客や店員はすぐに視線をそらす。

「王さん。いくらお宅の組員の1人が暴走したと言っても責任はあなたにあるんですよ。理解してますか？」甲斐の口調は他の組員のそれとは違い穏やかなものであったが、その中には明らかに王に対する敵意が含まれていた。

「居場所の分からない人間をどう止めると？」1人の組員がテーブル上にある水の入ったグラスを持ち王の顔面に向けた。「おい、開き直ってるんか？チャンコロ？」甲斐もそれを止めようとはしない隣の陳が立ち出した。「何や、豚？お前も水が欲しいんかい？おう！」陳は明らかにびびっていたがボスが水をかけられた事に対して殺気立っていた。

「陳、座りなさい。こちらに非があるのだから。私は構わない。」王は冷静に陳を座らせた。「すみませんが、おしぼりを頂けますか？」王は店員にそう言うと言った店員が持ってきたおしぼりで顔を拭き始めた。

「徳田組の死者は1人や2人じゃありませんよ。犯人はお宅の段という男でしょう？あんたは奴を好きにして構わないというが、責任はあんたにあるんじゃないですか？」甲斐は以前からここ最近勢力を伸ばしつつあった中国人マフィアを気に入っていなかった。ここぞとばかりに鬱憤を晴らそうと王を執拗にいびり倒してやるうと思っていた。

「では、はっきりと申し上げます。彼（段 海斗）を東京に残らせヤクザ狩りの画を描いたのは別の人間です。」「ほう。」「甲斐は興味深そうに王の話聞いていた。「台湾の神蛇をご存知でしょうか？」「神蛇は数年前に神戸から撤退したはずだが？今から考えればバブルがはじめてすぐ帰った奴等は利口でしたな。」「関西からは撤退しましたが東京では依然としてその影響力は絶大です。あの三

武会でさえも迂闊に手が出せません。」「その話を信じたいが証拠がなければ話になりませんな。」「明らかに甲斐の目には疑いの色が強かった。

「台湾に段の親族が居ます。その中で神蛇の幹部が居ましてその伝手をもつて歌舞伎町でコンタクトを取ったみたいです。三武会の徐氏に問い合わせてもらっても構いません。」「ええ加減な事言うなよ？王さん。」「甲斐の口調が明らかに変わった。」「私は何も嘘をついていません。段の失態は私の責任でもありませんから、私がどのように責められても構いませんが、彼を現在コントロールしているのは間違いなく神蛇です。それに我々は九龍界との抗争中です。日本のヤクザを敵に回す余裕はありません。」「

確かにそうだった。甲斐も表向きは王に威嚇はしていたものの、どうしても孔雀が山内を敵に回すという大胆な行動を今の時期にやるとは思えなかった。威嚇していたのは彼が単に中国人マフィアの台頭が気に入らなかったただけである。それに日本の支配者はヤクザなんだという事を知らしめる意味でも高圧的な態度に出ている。

「いいでしょう、王さん。今日のところはこれでお引取り願いますよう。ですが、うちの情報網をあまり舐めないほうがいい。三武会の孫長老はうちの5代目（山内組の頂点）とは戦後からの仲ですからね。嘘だと分かったらあんたを含めて組織ごと潰しますよ。いいですね？」「分かりました。どうぞご確認ください。」「そう言つと王は立ち上がり陳を連れて店を出た。

「倉石、三武会の徐に連絡を取つて王の発言が本当か確かめろ。」「巨体を持つ組員は短く返事をする店を出た。」「ふん。中国マフィアがなんぼのもんじゃ。ママ！女をここに集める。」「甲斐が大声を出すと店中の女がボックス席に集ってきた。

帰りの車内で陳が悔しそうに呟いた。「ボス。ヤクザをぶつ殺しましょう。もう関係ないですよ。」「そうだ。その為に海斗が今暴れている。」「でも三武会はともかく神蛇とコンタクトを取られるとばれますよね。あんないい加減なこと言っていないんですか?」「王がニヤニヤしながら後部座席で煙草に火を点けた。

「陳。もうあそこの事務所は捨てたからな。」「え?」「運転しながらバックミラー越しに陳が王を見た。「もう戦争は始まっているんだよ、陳。今日やつらが俺を帰した時点で敗北している。黄と劉を始めたとする組員全てに事務所の撤退作業と次のアジトの移転作業を命じてある。」「そうですか! すっきりしましたよ。」「それにしても陳、俺が水をかけられた時に立ち上がったのはカッコ良かったぞ。」「やる時はやりますよ!」陳は満面の笑みを浮かべていた。「足は震えていたがな。」「そつと王は呟いた。

- 新宿 歌舞伎町 -

早朝のセントラルロードは夜とは真逆で人通りもまばらだ。昨日から気のせいかわかには誰かにつけられている気がする。海斗はそのままコマ劇場へと進んでいく。ここ数日のヤクザ狩り騒動で東京中の警察とヤクザがピリピリしているらしい。犯人の特徴は女性だと言う事で一致している。連日ワイドショーでも特集が組まれている。「世界一安全な大都会、東京。安全神話が崩れる日。」のような見出しでどこの局も忙しいらしい。犯罪評論家などはいい加減な評論ばかりしている。プロの犯罪心理学者なども酷い。何故なら自分は男だから

らだ。皆女が犯人だと断定している。

自分の正体を知る者は孔雀のメンバーを除けば三武会だけという事になる。ジヨアキン達も大阪へ戻ったと陳から報告を受けている。三武会は関東において実に広大なネットワーク網を所持している。新宿だけでも10箇所以上の事務所を構えている為に身を隠すのに困らない。自分が東京でヤクザ狩りを続けている限り、三武会の手厚い保護を受ける事が出来る。

警察は無能。一般市民の危機管理は皆無。政府に至ってはスパイ防止法案すら可決していない始末。まさに犯罪天国、日本である。海斗は自分が本気を出せば東京の全てのヤクザを始末出来るんじゃないだろうかと思ったりする。生まれてから恐怖を感じた事がない。あつたのかもしれないが思い出す事が出来ない。唯一、男として認めているのは王 義承くらいのものであった。自分がホモセクシャルなだけに男に対しての要求も高い。9割以上の世の男がナヨナヨしているように感じる。

昨日はコマ劇場を突き当たり左へ折れた。この歌舞伎町内でも三武会のアジトは数箇所ある。今日は右折してゴールデン街の方へ足を向けた。やはりおかしい。誰かがつけてくる気がする。区役所通りまで試しに駆けてみた。通りを左折して再び小走りで駆けた。

右脇のビルから黒ずくめの男達が4人出てきた。おそらく中国人だった。海斗はとっさに自分をつけてきていた人間の仲間だと判断した。風林会館まで一気に走った。背後から男達が追ってくる音が聞こえる。風林会館を右に折れると明治通りに向って今度は全速力で駆けた。左のわき道からさらに黒ずくめの集団が増えた。明らかに狙われている。駆けながらヤクザなのか敵対するマフィアなのか考えた。顔はどう見ても中国人のようだった。明治通りで出ると左折

して職安通りを目指して走った。体力には自信がある。大陸時代からよく追われていた。新宿7丁目の交差点に出る前に再び歌舞伎町内への脇道に入った。

綿パンにポロシャツを着た少年が1人、脇道に入ってから一つ目の十字路で立っていた。嫌な予感がしたが迷っている暇はなかった。後ろからは少なくとも10人近くの間人間が自分を追ってきている。少年はズボンのポケットから鋭利なナイフを取り出すと自分に向けて投げてきた。右へ飛ぶようにかわした。すぐに立ち上がり内ポケットから銃を取り出し少年に発砲した。少年は自動販売機の陰に隠れてそれをかわす。少年が隠れている隙に十字路を右折した。直後に左肩辺りに異変を感じた。すぐにナイフを突き刺さっているのが分かった。海斗は銃をポケットに入れてナイフを右手で抜き取った。痛みは感じたが同時に興奮のような感情が湧きあがってきた。

抜いたナイフを少年に向って投げた。少年は身を屈めながら向って左方向へかわした。その後ろからは大量の男達がこちらへ向って駆けてくる。集団に対して銃を2発撃った。一発目は戦闘のスキンヘッドの男の脳天を貫いた。2発目はその隣の男の心臓を貫いた。銃の腕は軍隊出身者にも負けない。2人が倒れた事により、その集団は軽い混乱を起こしていた。職安通りに出ると左折した。この通りは大通りの為に早朝とは言え、人通りも何人かは居る。左肩からは出血していたが、長袖の黒シャツを着ていた為に目立たない。

ナイフ使いの少年だけがまだ追ってくる。できるだけ人ごみに入ろうとした。いくらなんでもこの場所でナイフは投げないだろうと思っただが甘かった。少年は躊躇する事無く次のナイフを投げてきた。そのナイフが運悪く背広を着た中年男性の脇腹に刺さってしまった。騒ぎが大きくなり少年と後続の黒ずくめの男達は歌舞伎町内へと引

き返した。海斗も騒ぎの中心が刺さった中年男性とナイフを投げ
逃げた少年に集まり、幸いどさくさに紛れて新大久保の三武会の事
務所まで逃れることが出来た。

- 大阪 飛田新地 -

昔の遊郭の名残が日本国内の数箇所が存在していた。その1つが西
成区の飛田新地である。車が交互に2台ほどギリギリ通れる程の筋
に、無数の飲食店が道の両脇に並んでいた。

店頭では老婆がしきりに通行人を店内へと誘う。その奥には娼婦が
1番美しい状態で客から見えるように、厚い化粧とライトアップに
包まれた女性たちが微笑んでいる。

この日本独特の町並みに違和感のある3人の男達が闊歩していた。
チアゴ、レオナルド、劉 解平である。楊の組織を壊滅させる為
にチアゴは孔雀に助けを借りようと考えた。助けといっても敵の居場
所を確認するだけで後は自分でやると願い出た。ブルノの敵討ちが
最大の理由だったが、結局は海斗に獲物を奪われたことによる対抗
心から出たものだと言は見抜いていた。

チアゴ達には劉を同行させた。楊の周辺を見張っていたスパイ達の
情報で萩之茶屋にある安宿へ踏み込んだが既にもぬけの殻だった。
楊の一味は敵だらけの状態である為に戦闘員はゲリラ戦へと突入し
ていた。その戦闘員の中の2人を飛田新地でスパイの1人が見かけ
たと言った。

3人は青春通りと呼ばれる飛田新地のメイン沿いに立った。「店は
特定出来ているのか？」チアゴはレオナルドを通じて劉に尋ねた。

「あの街灯の手前にある良と書いてあるあの店だ。」「場所が分か

っているならすぐに踏み込もう。」チアゴは明らかに焦っていた。
「気持ちは分かるがこんな人目のある場所で暴れたら、警察や地元
のヤクザもウジャウジャ集ってくるぞ。それにこの地域には我々大
陸の人間とは違う、いわゆる残留孤児で結成した黒和会ってヤクザ
も存在する。ここが出てくると厄介だぞ。」

チアゴはいらついた表情で地面に唾を吐くと、「俺には関係ない。
怖ければ今帰ってもいいぞ。俺が1人で踏み込む。」「中には違う
客も居る可能性があるんだぞ。下手な事はしない方がいい。心配す
るな、既に2人のスパイが店を見張っている。ほら、自動販売機の
傍に居る男。あいつと店の裏にもう1人居る。何かあればすぐに合
図があるはずだ。」「それから20分ほどすると柄シャツを着た男2
人が店内から出てきた。自動販売機の傍に居たスパイが販売機に小
銭を入れた。

「よし、あいつ等だ。つけよう。」劉が先頭に立ち歩き出した。男
2人は大通りに出ると天王寺方面へと歩き出した。いつ仕掛けるん
だと言わんばかりにチアゴは劉へ視線をやった。レオナルドが訳す
るまでもなく、劉はそれに気付き「このまま天王寺駅に行かれると
人目につく。この辺りで消したい所だが楊の居場所も突き止めたい。
1人は最低生け捕りにしたい。」「レオナルドから通訳してもらった
チアゴはニヤリと笑いながら小走りで男2人に向かって駆けた。

黒のパーカーに黒のジーンズで身を包んだチアゴは薄暗い場所では
正に闇と同化していた。通訳であるレオナルドをその場に待機させ
て劉もチアゴの後を追った。いきなり背後から右側の男の首を掴み
チアゴはその男を持ち上げた。異変に気付いたもう1人の男がポケ
ットから何かを出そうとする前に劉がナイフで牽制していた。チア
ゴの腕の力がみるみる強くなっていく。やがてその男はぐったりと
して動かなくなった。劉は牽制していた男の股間を蹴り上げて、待

機させていた後ろのレオナルドに合図をやった。やがてレオナルドが劉の車に乗って横付けした。1人を後部座席に押しやり、チアゴを横につけた。そのまま孔雀の事務所へと連れて行った。

この事務所からは既に立ち退いていたが、次の借り手が見つからない為には現在は空き家である。応接間として使っていた部屋に捕えた男の両手を紐できつく縛り正座させた。

「お前は九龍界の人間だな？」劉が質問する。男は舌を出して笑った。次の瞬間にチアゴの蹴りが顔面に入っていた。男は床に倒れながらうめいていた。その男の傍にかがんで劉はもう一度同じ質問をした。うめいていただけで答えはしなかった。チアゴがもう一度痛めつけようとしたが劉が止めた。「こいつは生半可な拷問では口を割らない訓練を受けている。今から俺が特別な拷問で口を割らすから、そうだな。お前等は谷町9丁目の方へ向かえ。あの辺は楊のオフィスが元々あった場所だ。もしかしたら残党がうるちよろしてるかも知れん。陳に連絡を入れて谷町で待機させておくから合流する」といい。こっちの拷問が終わり次第に俺も合流する。」

納得したチアゴはすぐに谷町9丁目へと向かった。

- 東京 池袋 某バッティングセンター -

1人の少年が黙々とバットを振っていた。若いがなかなかのスイングである。その後方のベンチに数人の男達がそのスイングを見守っていた。

「くそ。あれだけ動員して結局逃げられたってか。九龍界の暗殺部隊が聞いて呆れるぜ。」段 海斗を逃したメンバーの数人がそれぞれ

れ愚痴をこぼしていた。「あの野郎、確かに周のナイフを肩に受けたはずだ。それでも逃げ切りやがった。あれが北京の殺し屋か。」

「三武会の事務所逃げ込んだらどう。確認出来るだけでも歌舞伎町に事務所が数箇所あったはずだ。」

「さすがに三武会の事務所内は治外法権だからな。悔しいな。」

「10人以上の戦闘員で1人の男を追った。結果は肩に負傷させただけで逃げられた。しかもこちらには2人の死者まで出してしまった。周のナイフが一般人に命中してしまった為に現地では大騒ぎになっていた。撃たれた2人の仲間はその場で見捨てた。恐らく上海の人間だと警察も掴むだろう。」

「周！いつまで遊んでるつもりだ。ここから新宿は近い。警察も俺らを嗅ぎまわっているはずだ。一度東京を出るぞ。」

無視しているのかただ聞こえていないのか少年は黙々と来る球を打ち返している。そのほとんどはジャストミートしていた。「聞いているのか！」

「打席のすぐ傍まで言って男が怒鳴ると、周は振り返りバットを定位置の所へ片付けた。」

フロアへ出てくると一言だけ周は呟いた。「すみません。もうちょっとバッティングやって行きたいので先に東京から出てください。」

後は僕1人でやりますので。「」

「どういことだ？確かにあの野郎に一矢報いたのはお前だけだが、1人であの化け物を始末出来ると思ってるのか？」

「思ってますよ。」

「にこりと周は笑った。」

「お前な、楊老師の側近だからって調子に乗ってるよと殺すぞ。」

「そう言いかけた男の首元にナイフが迫っていた。他の客たちはまだ気付いていない。」

「ねえ、今日で分かったんですが強い人間とやる時は足手まといの人間が居ると邪魔なんですよね。」

「首元にナイフを突きつけられながら男は言い返した。」

「お、俺たちがお前の足手まといだつて言うのか・・・」

「違うんですか？」

「ハッとするほどの美少年が悪魔のような笑みで聞き返した。」

残りの男達は誰も動けなかった。周のナイフの技があればこのバツティングセンター内の人間が束でかかっても勝てないだろう。周はナイフを首から離すとすぐに打席へ戻った。

- 東京 歌舞伎町 某ビル -

激流に飲まれていた。激しい流れの川の中でなす術もなく下流へと流されていった。流されている間に何度か岩に体が激突した。体の骨が何本か折れているんじゃないかと思ったが不思議に恐怖感は無かった。やがて川の流れが穏やかになり下流に着く頃には何処かで見たとような景色が広がった。やがて自分の足で歩けるほどの深さになり、1人の少年がこちらへ寄ってきた。何処かで見えた顔だ。そうだ、自分が昔川へ連れてきて性的行為をしようとした少年だ。

その少年の顔は何処か悲しげな表情をしており、可愛い顔をした顔はやがてドロドロと溶け出していった。海斗はそこで目が覚めた。体中に汗をかいていた。左肩には包帯が巻いてあり痛みを多少感じたが嫌な気分ではなかった。昨日出会った少年。ナイフ使いの少年。あの日、川へ連れて行った近所の年下の少年を思い出した。どこかで見たとあると思ったならあの子だったか。もちろん別人である。あの日を境に自分がホモセクシャルである事を家族に知られた。後悔はない。海斗は早くあの少年に会いたいと思った。

- 大阪 谷町9丁目 -

陳と合流したチアゴ達は以前に楊のオフィスがあったビルの真向かいに立っていた。「情報屋達の話ではそれらしき人間は確認してい

ないらしい。劉も何でこんな所へ俺を呼んだんだろう?」「陳さん、楊の組織の顔を俺たちは知りません。どうか協力してください。」「レオナルドが缶コーヒ―を陳に差し出した。」「お、気が利くねえ。ありがとよ。」「この男は基本的に食べ物や飲み物で機嫌が左右する事をレオナルドは学んだ。」

「サンパウロでやりあって来た奴等と比べると上海の殺し屋部隊なんて子犬同然だったな。」「チアゴが馬鹿にした表情でレオナルドへ語った。」「こいつ、今何て言ったんだ?」「コーヒ―をすすりながらレオナルドに尋ねた。」「あ、ああ。上海なんて大したことないつて。さつき劉さんと新今宮付近で2人のマフィアとやりあったんですよ。」「ああ、劉に聞いたよ。一人の首を掴んで持ち上げたんだつてな。そいつそのまま死んだんだろう?」「すげえ力だな。筋肉もすごそうだし。」「陳はケラケラ笑っていた。」「俺は待機してただけですがチアゴはすごいですよ。こいつなら上海の壊滅もそう難しくはないんじゃないですか。」「レオナルドが得意げに言うと陳がまた笑った。」

「うん、確かにこの筋肉男が居れば大抵の奴等は歯が立たないだろうな。だけど、楊の側近の美少年には用心した方がいい。東京で海斗が傷を負ったらしい。」「ええ?」「レオナルドは驚愕の表情をした。それを見てチアゴが尋ねて真相を聞くとニヤリと笑った。チアゴの笑った表情を見た陳がまたニヤケだした。」「お、お前も嬉しいか?そうだよな。味方つて言つてもよ、あんな化け物死んだ方が世のため、人の為だぜ。だから今日の俺の気分は最高つて訳だ。」「陳は明らかに海斗を嫌っていた。というより恐れていたという方が近いだろう。」

数分ほど談笑している矢先にレオナルドがいきなり倒れた。背中を撃たれている。発砲したのは向かいの道に立っていた男だった。ライフルを持っている。レオナルドは苦しそうに呼吸をしている。陳

が抱えると遂にに息をしなくなった。逆上したチアゴは手持ちのベレッタ銃でライフルの男に向かって発砲した。発砲しながらその男へ向かって走り出した。向こうの男もライフルで応戦してきたが通行車の陰に隠れてかわしながら徐々に男へ近づいていく。ライフルが命中した車は次々と急停止して大騒ぎになっていた。弾がやがてなくなるとライフルをその場に捨てビルとビルの間へ消えていった。チアゴは死ぬ気で追いかけた。そのビルの間を抜けると大通りになったが、迷わずチアゴは逃げる男の足をめがけて発砲した。そして命中した。倒れた男に馬乗りになり銃を頭に擦り付けた。

チアゴは簡単な日本語しか分からなかった。「楊、ドコ？」銃を突きつけられている男はチアゴの言葉が理解出来なかった。「楊、ドコ？」「楊老師か・・・神戸・・・の廃校になった小学校に隠れている・・・」後ろから陳が駆け寄ってきた。「おい！レオナルドが死んだ。警察も来るぞ！」「コイツ、ナニ、イッテル？」チアゴは必死に日本語を並べた。「ん？何！神戸の廃校の小学校ってどこにあるんだ？」「・・・うう・・・灘区にある小学校だ・・・」パトカーのサイレンが近づいてくる。「おい！逃げるぞ。」陳が立ち上がると周囲では野次馬が数十人にも膨れ上がっていた。無理も無い。チアゴは男の顔面に発砲した。そして駆け出した。

- 警視庁 -

真田の機嫌が悪い時は決まってボールペンの芯を出したり閉まったり繰り返していた。不機嫌の理由は上から捜査の打ち切りを迫られた事にある。唯一の例外、山岸を除き誰も話しかけようとはしなかった。

「妙な話やな。日本全国でマフィア、ヤクザの抗争が繰り広げられてるのに捜査を止めろってな。昨日、大阪でも上海系列のマフィアの死体が見つかったらしいぞ。」当たり前前の事を言われるのを最も嫌う真田だったが、今の状況下で上と揉めてまで捜査を続ける勇者は存在しなかった。そういう意味では山岸は唯一事件の真相を諦めていない刑事でもあった。

「高円寺の方でも北京系のマフィアが3人死んでるのが発見されます。歌舞伎町でも早朝から派手な銃撃戦があったとか。一般人にまで被害が広がっているんですよ。ゴミ同士の殺し合いだからと言って上は放置せよとの事ですが。」真田が山岸にここまで話すのは珍しい。それだけこの一連のマフィア抗争はタブーになっているのだろう。いつの間にかメディアもあまり取り上げなくなってきている。

「真田警部。わしは大阪に戻って九龍界の楊とコンタクトを取ってみようと思う。」「どうやって？北京や香港のマフィアたちが血眼になって探してるのを見つかっていないんですよ。」「て言ってもこの抗争を止める鍵は楊しかおらんやろ。大阪内のコネはわしも捨てたもんやないからな。ま、不本意やろうがわしに任せとけ。お前もせっかくの今の地位を捨てようとは思わんやろ?」「くっ・・・では、これを。」真田は一枚の名刺を渡してきた。

「・・・陸 奏明?中国人か?」「台湾人です。かつて80年代後半辺りに歌舞伎町で猛威を振るっていた神蛇の若き老師です。」「神蛇って言うたら不景気を機にほとんどのメンバーが帰国して組織はとつくの昔に解散してたんやなかったか?」「地下に潜っていただけです。ここ最近やつらの動きが激しくなつたので気になったんですが・・・上からストップをかけられてしまって。おそらくこの男は今回の抗争に重大な関連があります。勘ですが。」「旅行代

理店か。これがフロント企業になってるのかな？」「おそらく。私は一度しか会えませんでした。気がつけてくださいよ。下手すると大陸の人間より厄介ですよ。」

小松に連絡を入れてから山岸は帰阪した。

- 大阪 ミナミ -

双龍会館。ここに戻ってくるのは久しぶりだ。ずっと動き回っていたから電気も止められていた。ジョアキンは滞納していた水道光熱費を払い終えるとセバスチオンをアジトへと案内した。「いいところじゃないか。都会も近いし一人に住むには広いし。」「そうだな。たまに鼠も出るんだぜ。こんつなでつかいのな！」「ははは。で、チアゴの行方は掴めたか？」「それが王老師や陳にも連絡がつかない。どうなってるんだか・・・」

数時間後、テレビを見ながら久しぶりにゆっくりしていたところに俺のベルが鳴った。「ん？麗子かな？」「女か？」「ああ、長い間会ってないから怒ってるんだろう・・・おや？何処の番号だろう？」「電話してみるよ。」「ここには電話を置いていないんだ。下の公衆電話で電話してくるよ。ついでに何か飲み物でも買ってこようか？」「そうだな。コーラが飲みたいな。」「分かった、待っとけ。」「ベルに入った番号にかけると相手は陳だった。」「ジョアキンか？今、チアゴと一緒になんだがレオナルドが殺られた。相手は上海の人間だ。」「レオナルドが？で、今何処だ？」「ミナミのあるBARに居るんだが。お前は？」「丁度ミナミへ戻ってきたところだ。カルロスっていう俺の兄貴分も一緒だ。」「そうか、今からこっちへ来れな

いか？周防町と千年町の交差点付近にある辰巳ビルの3階だ。」「
分かった。2人で向かう。」「気をつけるよ。上海の奴等は躍起に
なって暴れまわっている。追い詰められている分、何でも有りだか
らよ。」「

カルロスを連れて陳から聞いたBARに行くと言と王と黄、劉それにチ
アゴが揃っていた。「よく来た、ジョアキン。陳に聞いたと思うが
レオナルドがやられた。詳しくはチアゴに聞いてくれ。我々は言葉
が通じないものでな。」「頷くと俺はチアゴの横に座った。マスター
は無表情でグラスを磨いている。

「何があつた？」「楊の以前に使っていたオフィスの前で待機して
いたんだ。そしたらいきなり背中を撃ち抜かれた。」「くそっ！」「
俺が何か分かると思って谷町へ行かせたんだ。俺のミスだ。」「劉
が申し訳なさそうな表情をしていた。「お前の責任ではない。それ
に重大な事も分かつたしな。楊の居場所だ。」「王が話の間に入つて
きた。「え？」「チアゴと陳がレオナルドを殺した男に吐かせたら
しい。劉も以前使っていた我々の事務所です1人拷問して吐かせたが、
結論から言うと奴は神戸の廃校になった小学校に居るみたいだ。護
衛の者は20人以上は居るらしい。」「それじゃ今からでも。」「
うむ。夜に動く。お前たちにも手伝ってもらわないといかん。うち
の戦闘部隊も数人ほど絞って学校付近を見張らせてある。」「

「王老師、申し遅れましたがここに居る男はカルロスと言って・・・
」「知ってるよ。久しぶりだな、おかえり。逃亡生活はどうだった
？」「はい。やっとブルノの敵を討てると思うと胸が熱くなります。
」「そうだった。カルロスは元々ブルノと組んで王の下に付いていた
んだ。だが直接顔見知りだとは知らなかった。」「あのスポーツ
ジムの件以来、相当のストレスを抱えていたと思うが今日でそれは

終わりだ。「はい。」カルロスは静かに頷いた。

「決行は深夜0時。劉と陳の運転で2台に別れて神戸へ向かう。向こうに待機させてある手下達と合流して一気に叩く。これで終わりにしよう。」

そう言うと王は俯いて目を閉じた。

最終章 激突

甲斐 吾郎が愛人のマンションでホットコーヒーを啜っていた。愛人の洋子はスーパーマーケットまで買い物に出掛けている。時刻は20時を過ぎようとしていた。

「お元気ですか！お元気ですか！」洋子の飼っている九官鳥がいつも通り叫びだした。おそらく天才バカボンのキャラの台詞から洋子が教えたのだらう。あまり生き物に対して特別な感情は湧かない。実家でも妻や娘が犬を可愛がっているが理解出来ない。餌を与えてくれるから媚びたりなついたりしてくるだけだ。人間と一緒に金があるから愛人が存在する。部下も、家族だっで一緒である。

世の中には支配する者とされる者の2者のみである。宗教なんてものも認めない。信仰という言葉は忠誠という言葉のアレンジしただけのものであり、お布施とはヤクザの世界で言えば上納金である。1人の人間を救いたいのなら利益無しでやってみるとはいつも思う。

またコーヒーを啜った。1つ腑に落ちない事が最近あった。王の言っていた台湾の裏組織、神蛇に段 海斗の親族が居るか聞いてみた。案の定、嘘であった。それどころか三武会や孔雀とは中立を守ってはいるが、いい関係ではないという。一方、三武会の徐に問い合わせるると王と同じ事を言う。要は王と徐が手を組んでいて俺を虚仮にしたようだ。ヤクザは舐められたら終わりである。あれから王との連絡は通じない。徐は三武会の幹部である。山内の全組織が総力をあげても手強い相手だらう。それを分かっているあの2人は俺を虚仮にした。

王に関しては組織ごと潰してやる事で面目は保たれる。徐という人間は今後ゆつくり始末する方法を考えればいい。徳田組は段 海斗により多数の犠牲者が出ている。あそこの組長は古すぎてあまり好きではなく仲も良くないが、今回の件に関しては正直気の毒だとは思う。

洋子が帰ってきた。「ごめんね、店が閉まる前だからレジが混んだんよ。すぐ夕食の支度するから。」甲斐は立ち上がるとズボンをおろした。「啞えろ。」そう言つと素直に洋子は甲斐の物を口に啞えて音を立てて吸い出した。金があれば女は何でも言う事を聞く。この女を愛人に行っている理由は金に従順な事と、体の相性。それだけである。

- 新宿 某ビル屋上 -

海斗は左肩の痛みを感じるたびにナイフの少年の顔を思い出した。初めて人を好きになったのが男であった。年下の近所の男の子であった。川に誘い、性的行為を強要した。あの時の少年と瓜二つだった。川に誘つた少年は自分より2歳ほど年下だったから、ナイフの少年は当然別人だろうが本当によく似ていた。強く、美しい。それは段 海斗が最もそられる条件であった。

屋上の扉が開くと1人の美少年が現れた。海斗は歓喜の表情でその少年の容姿や歩き方を眺めた。全てが絵になる少年だと思った。

「ごめんなさいね、こんな辺鄙な場所に呼び出して。好きな人とは誰にも邪魔されなくなかったの。」少年は海斗から5メートルほど

の所で立ち止まると、無表情のまま海斗の方を見つめていた。

海斗は少年の心がどこか壊れていると感じた。自分は異性に対する気持ちかたまたま同性に向っただけであったが、この少年は何か一言で言い表せない負のオーラが漂っていた。それがまたそその。周は海斗の傍に日本刀が二本立て掛けてある事を確認した。「これ、気になった？君とは銃なんてあつけない武器よりもこれで存分に闘いたいと思つたのよ。青竜刀の方が良かったかしら？それとも得意のナイフを使つてくれてもいいのよ？」「構いませんよ。その日本刀、一本ください。」「海斗はニコリと笑つて一本を手に取り柄の部分を向けて手渡した。周は日本刀を隅々まで眺めた。

「気に入つた？」「ええ。いい刀ですね。この国の鉄の技術は驚きです。紀元前では我が国には文明があつたのに、まだこの国は国家として形を成していませんでした。」「あら？中国史がお好きなのかしら？」「いえ、それほど。ただ、日本刀を作つたこの国の技術に驚いています。」「声もあの少年によく似ていると思つた。透き通るような美しい声だつた。

海斗は美しい物や者が大好きであつた。目の前に居る少年は文句無く美しい獲物であつた。立合つてみて初めて分かるが強い。もう少年だとは考えないようにした。肩の傷は癒えていないが殺しの経験から言つと丁度良いハンデだつた。

一歩切り込めば充分刀の届く間合いにまで近づいた。先に仕掛けたのは周だつた。フェイント気味に横から切ると海斗が余裕を持って紙一重でかわす。周は両手で刀を持ち直すと上段から振り下ろした。刀を横にして海斗が受け止めると両者後ろに飛び下がって刀を構え直す。

海斗はすぐに周の首元を狙って突いた。無表情で周は横にかわす。フエンシングのように海斗は突いてくる。リズム良く1合、2合と突いて来ると3合目に周がカウンター気味で突き返してきた。それを軽く刀で捌き海斗が袈裟斬りで返した。周はかわしたものの、右頬から軽く血が垂れてきた。周の顔が狂気の顔に変わってくる。

「殺し合いが楽しくて仕方ないという感じね。」「ええ、正直ここまで楽しめるとは思わなかったです。」「あたしとあなたは似たもの同士なのよ。少なくとも命のやり取りに興奮を覚えるという意味ではね。」海斗が軽くウインクすると周は歓喜の表情で斬りかかって来た。2合ほど剣を重ねると海斗が周のみぞおちに蹴りを正面から入れた。さほど苦痛ともせず周はその勢いで少し下がった。

- ミナミ -

麗子と久しぶりに電話で話した。勘のいい女だから詳しく話さなくても俺が今危険な世界に居る事を理解している。

「何て言ったんだ?」「だから・・・私は愛してる人が消えてなくなるのは嫌なのよ。だから別れて欲しいの。生きて帰ってきたら、もう一度私を口説いてね。」「長い間会えなかったのは悪いと思ってる。」「でも友達の為なんでしょ?それが勇のいいところだもんね。」「もし・・・いや必ず帰ってくる。その時は温泉にでも行く。花火もしてお前は浴衣を着て・・・」「温泉か・・・いいね。きつと・・・戻ってきてね。」「分かった。もう俺はお前の男じゃない。忘れる。また目の前にずうずうしく現れてやる。」「バイバイって言わないからね。」「ああ。」そのまま受話器を置いた。電話ボックスから出ると向かいのコンビニの窓にもたれかかっていた

カルロスがニコリと笑って近づいてきた。

「ラブラブトークは終わったのか？」「ああ、いい女だ。これで心置きなく楊を殺しに行ける。」「お前・・・いい顔つきになったよ。実はいざ殺し合いになっても足がすぐんで動けないんじゃないかと心配してたんだ。」「正直、俺はブルノとは違って臆病だ。でも・・・女の声を聞いたら恐怖が和らいだよ。」「恐怖というものを知ってるお前の方がブルノよりよっぽど強い。」深夜0時に大阪を出る。そして・・・廃校に籠っている楊達を叩く。

「どうした？陳。」西梅田にある新しい事務所で王が尋ねていた。陳が浮かぬ顔をしているからだ。「いえね、三武会から連絡があったんですけど段の奴が負傷した体で行方が分からないみたいなんです。」「手負いで狩りに出たと言うことはよっぽどの獲物だったのだろう。あいつに傷を負わすほどのな。」「しかしあんな化け物に勝てる奴居るんですかね？」「世の中にはこんな男がという人間が多く居るものだ。世界は広いぞ、陳。」「はい。それと現地の人間も用意は完了してるとの事です。後は我々が出発するだけです。」「今何時だ？」「22時を回った頃なので2時間ほどで出発です。」王は楊との決着に武者震いがした。

孫 邸景と邸 紫燕が向かい合って話していた。「段が負傷したらしいな。」「ええ、相手は上海の殺し屋部隊です。その中に少年が混じっていたとの事です。ちなみに段を負傷させたのはその少年です。」「ほう、末恐ろしい奴だな。」「大久保の事務所の人間が言っていました、その少年と出会ってからはヤクザ狩りは興味がなくなりましたね。」「もう少し暴れて欲しかったんだがな。」「それより、王の組織が本日の深夜、神戸に潜んでいる楊一味を叩

くとの事です。「遂にか。あの2人は因縁があるからな。ま、お互いが潰しあってくれば願ったり叶ったりだな。」「御意。」

海斗の剣が周を追い詰めていた。屋上のバツクネットを背にして半呼吸してから周は中段突きで海斗を突く。紙一重でかわすと海斗の剣が周の腹を貫いた。すぐに剣を引き抜いた。それと同時に周の右手から剣が落ちる。左手で足のすね部分からナイフを取り出し、うずくまりながら海斗の左足を刺した。

少し苦痛に歪んだ表情で刺さったナイフを海斗は左足から抜く。多少の出血をしていたが周の口元からはおびただしい量の血が溢れていた。それに比べれば軽傷である。周は正座の体勢でその命が尽きようとしていた。

海斗はかなり息が切れている事に気付いた。かつて自分とここまでやり合った人間は数えるほどしか居なかった。それも10代の少年である。海斗は周を見下ろし左足をひきずったまま、傍まで近寄った。

「もう喋る元気もないと思うけど、楽しかったわ。礼だけ言っておくわね。」「・・・楊様の期待に添える事が出来なかったのが心残りです・・・」「死ぬ間際までそんな律儀な事を言うの?」「あの人・・・だけだったんです・・・僕を認めてくれたのは・・・幼い頃に両親を亡くして・・・兄が居ますが長い間会っていません。笑う事も知らなくて、人とまともに会話すら出来なかった自分に光を与えてくれたのはあの人だけだったんです・・・」海斗は黙って周の話しを聞いていた。普通の男ではないと人は自分を避けてきたが、王だけ

は自分を認めてくれた。だからこの少年が言っている事は痛いほど理解できた。

「・・・もし・・・あの人が生きていたら・・・もし・・・あの人と会う事があれば伝えてください。周が感謝していたと。」「必ず伝えるわ。名前を聞かせて頂戴。周・・・何て言うの?」「燕祥・・・」「苦しいのが嫌ならとどめをさすけど、どうする?」「・・・」「周は既に絶命していた。その表情はあどけない少年の顔になっていた。自分をここまで追い詰めた男。

「周 燕祥か。私の人生で出会った男の中で最も華麗で強かった・・・」周の目を右手で閉じてやってからその場を後にした。

神蛇の陸 奏明。山岸は大阪へ戻る前に1度会っておきたかったが、刑事だと言う事で門前払いされた。ここ一連のマフィア抗争で入れ替わり警察が聞き込みに来るといふ。かつては歌舞伎町の頂点に立っていた組織である。フロント企業に替わったとは言え、公安はしっかりとマークしていた。

府警に着くなり小松が近づいてきた。なんでも昨日、山岸に面会を求める者が来たという。その来訪者の連絡先に電話するとつたない日本語が聞こえてきた。

「もし・・・もし。」「私は大阪府警の山岸と言います。私を尋ねてもらったのに外出してしまして申し訳ありません。お名前は・・・カリーナさんですね?」来訪者の記録簿を見ながら尋ねた。「はい・・・レオナルドの事です。」「ああ、彼の知り合いですか?」「彼女で

す。名刺を見て山岸さんを訪ねました。日本は2年目なのであまり日本語が上手くないです。」「いやいや、充分に伝わっていますよ。それで今日はどんな用事ですか？」日本語に精通しているレオナルドとは違い、山岸は意識的に関西弁を控えるようにした。母国ではおそらく標準語を学んできたであろうから。

「レオナルドが死にました・・・」「何！いつ？」「昨日の夜です。ライフルで撃たれました。」「誰に？」「分かりません。2人の男がレオナルドと一緒に居たみたいです。」「会って詳しく話しが聞きたいんだが・・・。」「はい。私のアパートは島之内の2丁目です。」「すぐ行くところ。」「時間は夜の19時になっていた。」

時は進んで深夜0時。2台の乗用車は神戸へと向っていた。先頭に陳の運転する車。同乗者は俺とチアゴ、カルロス。後ろには劉の運転する車に王と黄。遂に上海の奴らと決着をつける時がきた。思えばブルノの敵討ちで始った事だ。あいつがこんな世界に飛びこまなければ・・・いや、今考えても遅い。しかも奴が選んで進んだ道だ。どの道俺たちはサンパウロではお尋ね者だったんだ。

「まあ、平日だし飲酒検問もやってないとは思っけどな。トランク開けられたら一発でアウトだな。」「陳が深夜の高速を流しながら話す。トランクには数丁のライフルが入ってあった。」「マシンガンは用意できなかったのか？」「カルロスが不満の表情を浮かべる。」「贅沢いわんでくれ。毎年外国人マフィアへの警戒が強くなっている世の中で、これだけ集めるのも大変だったんだぞ。後はお前の腕次第だろうがよ。」「フン、腕次第か・・・それもそうだな。」「カルロスはその言葉が気に入ったらしく鼻で笑った。」

俺はまず麗子の事を考えていた。次にブルノ。後はガブリエル達、マカツコのメンバー達の顔が続々と浮かんできた。あいつら、今頃なにしてるんだらう？もしかしたら今日で今思い浮かべていた連中とは会えない可能性があった。つまり死である。不思議と恐怖がなかった。多分、兄貴の臭いがするカルロスと狂犬のようなチアゴが傍にいたからかもしれない。

やがて問題の廃校になった小学校の近くまで到着した。学校の窓からは死角になっている場所に駐車した。全員1度車外へ出てきた。王が短く全員に配置と逃げ道の説明を行なった。

チームは3つに分ける。王、黄、劉の他に構成員2名。俺、カルロス、陳、構成員3名。そしてチアゴの単独班である。単独班のアイデアは王が言い出した。1人の方が好きに出きるし、チアゴのような男はそっちのほうがいいだろうとの事だ。俺達が居なくなっただけのその後のサンパウロ時代では、リーダーという立場にありながら常に特攻隊長であった。他チームとの熾烈な抗争で生き残った。ただ学校の中は暗い上にチアゴからは味方と敵の区別がつかないの、まずチアゴに突っ込ませる。手当たり次第暴れてから屋上から懐中電灯を燈す。それを合図に残りの2班が正面と裏口から突っ込む。もし10分経ってから合図がなければやはり突っ込む。

すぐにチアゴは裏口から侵入を試みた。他の構成員達の調べにより楊の出入りは確認出来ていないが、九龍界の人間と思われる者達が校舎内に居るのを発見している。簡単な中の図面を先程見たのでチアゴは迷わず1階の用務員室へと向った。ここに組員達が根城にしているようだ。

用務員室の扉の向こうにかすかな明かりが見える。中からはテレビらしき音が聞こえてくる。校内には電気が通っていないはずなのに、

どのような方法で電気を通したかは分からないしチアゴは興味はなかった。目の前に居る敵を皆殺しにするのが目的である。

迷わずにドアを蹴った。一台の21インチ型ブラウン管テレビがむなしく映っていただけで誰も居なかった。同時にはめられた事を知った。すぐに廊下に出ると2人の男がマシンガンを乱射してきた。再びチアゴは部屋に入りそれをかわした。中に窓がありそれを開けると中庭に通じていた。後方から先程の2人が部屋に入ってくる。元の位置まで走って戻った。そこには集団の銃撃戦が始まっていた。ジョアキンやカルロス達が必死にライフルで応戦していた。

王達の班は何処にも見当たらない。敵は7人居た。ジョアキンとカルロスが車を盾にしながら応戦している。そこを7人の男達が乱射し続けている。全てマシンガンを装備していた為に圧倒的に押されていた。チアゴは迷わず7人の後方から一発ずつ丁寧な背中を撃つていった。2人が倒れると残りの者が振り返りマシンガンを乱射してきた。体を屈めて落ち着いて1人の男の顔面をライフルで吹き飛ばした。まだ弾数は4発残っている。丁度人数分だ。

チアゴに気をとられていた残りの4人の男達に向かってカルロスが果敢に車の陰から飛び出した。それに気付いた1人がカルロスに銃口を向ける。向けた時にはその男はカルロスの弾で後方に吹っ飛ばされていた。ジョアキンはパニックになっていた1人の構成員を狙って狙撃した。心臓を狙ったのに首元に当たった。だが仕留めたはずだ。最後の2人は校内に逃げるようにして入っていった。チアゴが追いかけてしようとしたがジョアキンが止めた。

「チアゴ、俺たちはどうやら王にはめられたみたいだ。」
「どういうことだ？」
「カルロスが肩に軽く負傷していたがどうやら全員無事だった。」
「お前が中に入ってから王はお前の合図を待たずに裏口へ

向かおうとした。それを尋ねると合図を待つまでもなくお前を信じていると言つてな。」「くそっ！ブルノモレイモンドも俺も結局はただの鉄砲玉だったということだ。奴等は身内（中国人）しか最初から眼中になかったって事だ。」「カルロスが興奮するように叫んだ。

直後にライフルの銃声が聞こえてきた。狙撃手は黄である。」「あの野郎。」「カルロスが怒りで震えてライフルを撃ち返した。黄は校門の陰に隠れてまた撃ち返して来た。カルロスがチアゴに目で合図をするとチアゴは軽く頷きそれと同時にカルロスが校門の陰まで駆けた。黄に向けてライフルを連発した。黄の右肩にヒットした瞬間にチアゴが顔を吹き飛ばした。

ジオアキンがカルロスの元に駆け寄るとカルロスは腹を撃たれていた。その場に両膝をついて倒れようとした所をチアゴが受け止めた。」「お前等・・・あの車に乗って逃げる。陳のアホが鍵を抜き忘れている・・・。」「お前も治療するんだ。」「俺はこれ以上仲間が死んでいくのを見たくはなかった。」「駄目だ。今まで好き放題やってきた罰だ。ここで俺は死ぬ。」「アホな事言つてんじゃねえよ、世話がかかる男だな。」「チアゴはカルロスは軽く担いで俺に運転するよう頼んできた。後部座席にカルロスを寝かせて俺とチアゴは乗りこんだ。車のボディがマシンガンで多少痛んでいるがエンジン等には損傷はなかったみたいだ。陳がアホで助かった。

車を出して少しすると後方から銃声が聞こえてきた。数人の男達が走りながら乱射してくる。サイドミラーごしに劉と陳が見えた。他は孔雀の構成員達である。さつきまで一緒に居た連中だ。チアゴは助手席の窓から一発撃つた。一人の足に命中して倒れた。

何故王が裏切ったのか？楊と裏密約でもあったのか？全く分からないまま高速に乗った。車のボディは損傷しているが幸い夜間であま

り目立たなかつた。生田川の入り口に入り大阪方面へと走らせた。
「何処に向かつてる？」チアゴが尋ねてきた。「名古屋だ。大阪は
やばい。俺達もマフィアから完全に指名手配されている。」

廃校の近隣住人達が数多くの銃声で警察に通報していた。警察達が
着いたのは深夜1時20分頃。大量のマフィアの死体がそこらに転
がっていた。恐らく王も楊も逃げたに違いない。あいつ等は地獄へ
落としてやると決めた。

「おい・・・ジョアキン。」「何だ？苦しいのか？」「いや・・・
西梅田に王の新しい事務所があつたはずだ。あそこなら奴等は戻つ
てくるんじゃないのか？今日はありえないだろうが・・・」「ああ、
そうだな。それよりお前の容体が良くなつてからの話だ。リベンジ
はそれからいい。」チアゴが助手席の窓から周辺の車を警戒して
いるのか外を睨みつけている。「チアゴ・・・お前弾は残ってるか？」
「あと2発つてとこだ。」「俺はこんな状態だ。俺の弾で補充しろ。
」「分かつた。」「ジョアキン・・・さっきは悪かつた。」「あ、
何がだ？」バックミラーでカルロスを見た。「いや、弱氣つてい
うか死ぬような事言つてよ・・・俺は・・・多分大丈夫だ。痛い事は
痛い痛いって事は生きてるって事だ。」「そうだ。お前は生き残
つた。奴等は俺たちを壊滅させようとした。証拠に1番手強いであ
ろうチアゴを1人にさせた。」

だがチアゴは戻ってきた。それが一つ目の誤算。二つ目の誤算はカ
ルロスの奮起である。向こうは軍隊上がりも含めて相当な精鋭を揃
えていた。それを1人の犠牲者も出さずに撃退する事が出来た。最
後にはこちらにも逃げたがこの3人で乗り切れたのはラッキーだった。
車はもうすぐ環状線に入ろうとしていた。

「こんな場所で我々が2人で居るのは意外な事だな。」話しを持ちかけてきたのはそちらですがね。」2人の男がベンチに横並びで顔も合わさず話しこんでいた。「結局は1人の犠牲者も出さずに生き残りましたね、奴らは。」楊 再公は敵ながら天晴れだと言わんばかりの表情だった。「あんたが始末したブルノという男を私は高く買っていた。」「そうでしょうとも。スポーツジムでも趙が居たから良かったものの、私1人だったなら駄目でしたな。しかし何故あの3人を裏切ろうと思ったんですか？」王は目を閉じて数秒間、沈黙を保った。

「あのジョアキンという男・・・。」「ああ、ブルノの親友だった男。」「あいつは危険だと思った。やつは英語、ポルトガル語、日本語、そして中国語まで操る秀才。」「ほう、それはすごい。」「それにあんたと私の利害が一致していたというのも大きい。それは充分に話しあつたはずだ。」「はい。三武会はうち（九龍界）を潰して次に邪魔になるのはおたく（孔雀）だと。」「しかし三武会は強大過ぎる。あの孫 邸景がジョアキンをいずれ自分の組織に取り込もうとしていた。うちを潰す時の為の大事な駒として。」「有り得る話しですな。それならば今のうちに我々と組んだ方が良いでしょう。賢明な判断でしたな。しかし、もっとその判断が早ければ趙や周も死なずに済んだ。」「周というのは趙に代わってあんたのボディガードを勤めていた少年でしたな。仕留めたのはうちの段 海斗。これは計算外です。」

「計算外では割が合わないほど周という男を失ったのは大きい。」

楊は憎しみを込めて王の方へ顔を向けた。「段 海斗を切るという条件であんたもこの同盟に賛成したんだ。それに私も黄という男を亡くしてしまった。」「あんたが段を始末すればこの同盟はさらに強いものになるでしょう。問題はあの逃げた3人がどう反撃してくるか。下手すれば三武会を敵に回すより厄介だと私は思います。」「手負いの獣か。特にあの黒人の男。チアゴだったかな。奴はまずい。私の直感だ。」「ええ、もう1人居ましたな？あの男は腹に被弾したはずですな。まあ、当分は動けないでしょう。もし助かったとしても。」「とにかく、我々孔雀は日本最大の極道組織、山内と華僑最大組織の三武会を敵に回した。我々の組織を集めてもせいぜい200人といったところか。」「

公園から数十メートル離れた道路に停車していた車に陳と劉が乗っていた。後ろには楊専属の運転手と新しいボディガードの男が待機している。

「よお、結局生き残ったのは俺たちだけになってしまったな。」「陳がジャンクフードを貪りながら話した。「そしてこの2人の中で生き残るのは案外お前だな。」「劉は冷静に呟いた。「何でだ？」「ゴキブリは生命力が高い。」「俺がゴキブリだと？」「褒めたんだがな。」「褒めの言葉になってねえよ！」「それより後ろに居る楊の新しいボディガードの男。どう思う？」「あの変な髪形した奴な。危なそうなのは分かるが趙の方が凄みを感じたな。」「まあ。だがあいつの目を見たか？あれは人間じゃない獣の顔だ。」「うちにはもつとすごい獣が居るじゃないか。」「海斗か。俺はあいつとは多少仲が良かったんだけどな。老師は奴を切るだろう。」「

「うちも九龍界と組むなんて数日前までは有り得なかったからな。周って小僧を殺したのも本当なら大金星なんだぞ。ま、俺はあの才

カマがどうなるかと知ったこつちやねえが。うちにとつて必要な戦力だもんな。」「お前も大人になったな。以前なら文句しか言っていなかったのに。」「俺とお前は2つしか変わらねえよ。それにな、今回の件。ジヨアキン達を敵に回したのは正直失敗だったと思ってるんだ。」「お前はジヨアキンと一緒に趙の女とツバメを拉致したんだよな。」「あいつはすごい男だぞ。ブルノにだって負けない。ただ、あいつは優しすぎるんだ。俺は嫌いじゃないぜ。」「それにチアゴとか言う黒人と負傷したカルロスか。黄さんを含めて6人もやられた。一人も足が使い物にならなくなった。向こうは怪我人が1人のみ。たつた3人でな。」「あのチアゴって奴がくたばつてれば2人もアウトだったろうな。」「相当の修羅場をくぐってきたみたいだな。だが俺たちも今後は極道と香港の組織を敵に回した。」「山内はともかく、三武会もうちが上海と組んだのは分かっているのかな?」「徐という奴が搦んでいると思う。」「

- 後続車 -

異常に目の釣りあがっているのが特徴な運転手が中国の歌謡曲をカセットテープで聴いていた。「ああ、大陸に帰りたいな。この曲を聴くといつもそんな気持ちにさせられます。」「助手席の男はそれに答えない。髪の毛の頂上部分と後ろ髪を除き綺麗に刈り上げている。1度見れば二度と忘れないような髪形だ。」「燕祥さんを始末した段海斗。私は会ったことありませんがどんな男でしょう?」「どんな男にせよ俺が始末する。周は俺の弟だからな。ただし、今の現状では王も奴を利用するだろう。対三武会と山内組に備えてな。」「周さんは音楽はお嫌いですか?」「昔、燕祥におふくろが子守唄を歌っていた。あいつは覚えてなかっただろうが俺はその時は9つだった。その歌以外は知らないし興味もない。」「

「では西梅田の事務所は捨てるんですな?」「仕方なからう。あの3人に場所も知られてるし、あんな目立つところに居ては山内組に狙ってくださいと言ってるようなものだ。あんたと組もうと思ったのも突発だったからな。」「お互い散って行動しましょう。これから抗争がさらに激しくなるでしょう。警察もさすがに一連のマフィア抗争により本格的に動いたようです。しばらくは平和になるでしょうが早く帰国した方がいいですな。」「神戸港にあんたのこの人間が迎えに来るらしいが。」「林 世季という表向きは実業家です。実質、九龍界の現場をまとめて仕切っている男です。帰国する際に引き合わせましょう。」「

「私が上海に行くとはな。」「北京とはまた違いますが料理も女も一流を揃えましょう。」「楽しみだ。それで段についてはもう少し利用したい。」「三武会で飼わせるのですね。良いと思います。」「既に連絡は済ませてある。あいつも東京でヤクザ狩りを続けたいらしいが、関西で山内狩りを命じた。ターゲットは甲斐 吾郎。」「山内きつての切れ者ですな。で、奴は何と?」「三武会をバツクに山内とやり合うのは満足そうだった。あいつは敵がでかければでかいほど燃える男だからな。」「周を仕留めたんだ。そうでしょうな。段は我々が組んだ事も知っているんですか?」「ああ、それを承知で三武会に潜らせた。奴にとっては殺しが円滑に行なう事が出来れば関係ないんだ。政治的なものは全く興味がない。」「恐ろしい男ですな。」「興味があるのは強さと美しさのみ。俺は厄介な男を部下にした。幸い、俺に忠誠を誓ってくれてはいるが・・・いつ牙を剥くか分からん。」「

楊はどのようにして王が段を手なずけたか興味があった。「そうそう、1つ伝言を忘れていた。段からなんだけどもね、楊さん。」「ほう、彼から?」「周の最後の伝言です。楊さんに伝えて欲しい。感謝していたと。」「しばらく楊は黙りこんだ。王が感じるに5分、もつと長く感じた。涙こそ流してはいなかったが、趙や周とは身内以上の絆があったのだろう。ただ俯いて楊は黙っていた。王は他人が死んで心から涙を流せるだろうか考えたが思いつかなかった。唯一居たとすれば死んだ李くらいのものか。その李も自分に牙を剥いた。その自分もジョアキン達や海斗まで裏切ろうとしている。信ずるのは己のみ。そう誓った。

- 静岡 -

ガブリエルは主だったメンバーを5人ほど自宅へ招集していた。全員ブルノ、ジョアキン達とも馴染みだったマカツコのメンバーである。「さつき吹田のサービスエリアから連絡があった。ひとまず全員無事でカルロスという男が負傷したらしい。医者の方は手配出来たか?」「おう。正規の医者ではまずいからな。免許はないが医学部に在籍している俺のダチを呼んだ。1時間ほどで到着するはずだ。」「そうか、コミュニテイのメンバーのレオナルドという男も殺された。これは上海襲撃の前にやられたんだが。どちらにせよマカツコは北京、上海の組織と抗争に入る。ジョアキン達を守るのは俺達だけだからな。」「チアゴが随分活躍したみたいだな。奴が来日してて良かったぜ。もしジョアキンがやられてたら奴の彼女がどんな顔するかと思うとな。」

麗子はガブリエルからの連絡を受けてガブリエル邸に向っていた。とにかく生きていた。ジョアキンは傷も負っていない。今回の事で懲りただろう。これからは自分がジョアキンを真つ当な人間へと導かなければならない。そう願ってガブリエルのマンションを指した。

- 名古屋 -

「兄貴。神戸での銃撃戦、どうやら勇が関わっていたようです。悪運が強いせいが無事です。」「そうか、良かった。どうやら孔雀が上海と手を組んだらしいな。神戸の甲斐から連絡が入った。」「で、うちはチャンコロ狩りをいつ開始するんですか？」青木の顔はワクワクするような子供の目になっていた。「徳田のおやつさんの所で暴れることが出来なかったからウズウズする気持ちは分かる。俺みたいに守りに入ってるよりお前の方がよっぽど極道だと思う。俺は今回の件でつくづくそう思ったよ。」

意外な山本の返事に青木は戸惑いを隠せなかった。「あ、あの・・・熱でもあるんですか？兄貴。」「殺すぞ。調子に乗るな。まあ、勇が手を貸して欲しいって言うんなら分かるがうちが総出で手を貸すって事になりや、かなり大事にはなる。それがなくても神戸の本部は臨戦状態に入っている。自分達の庭と言ってもいい神戸の住宅街で銃撃戦をやったんだ。それに王は山内を敵に回した。同時に三武会も。」「気でも狂ったんですかね？」「香港とも折り合いはあまり良くなかったんだろう。ただ俺が思うに勇は俺たちには頼んでこないと思つぜ。」「へ？」「借りを作りたくないんだろう、極道にな。」

「その3人は生き残ったと。さすがは私が見込んだ男ではあるな、ジョアキンだったな。」「ええ、大した男達です。孔雀の黄以下6名が死亡。1人が重症との事です。」邸が報告する。「そんなタマには見えなかったがそれほどの男か、あの日系ブラジル人は。」袁が意外な結果に驚いていた。徐がレストランに現れたのはそれから数分後である。「ジョアキンは静岡の友人宅でしばらく滞在する予定です。先程、連絡があり予想通り王の裏切りによるものらしいです。情報屋達の話と食い違う点はありませんでした。」孫は満足気に中華料理を口に入れた。「これで九龍界及び、孔雀も敵に回ったか。遅かれ早かれそういう事にはなったのだがな。王も大した判断だ。さすがは己で成り上がってきただけはある。おまえらも見習え。」「見習えというのは孫長老を裏切る事も視野に入れるという事ですか？有り得ません。」袁は恐縮した表情で言ったが、徐は真剣な表情をしていた。

「裏切れとは言わん。ただの組織の飼い犬は私に必要な。おまえ等ももつとしたたかに、もつと強くなれと言っているだけだ。それと段 海斗に関してはうちで面倒を見る事になった。」「は？やつは孔雀の一員ですよ。長老。」徐が驚きを隠せない表情をしている。「だから奴はまだ利用価値がある。何でも今度は山内組とやりたいと言っののだ。我々にも損はない。山内は孔雀と九龍界の壊滅に力を入れるだろう。段はその山内の後ろを突く算段だ。どうせ孔雀と九龍界の連中は大陸に1度帰るだろう。警察も、ヤクザも、ラテン人達もみんな奴等を狙ってる。」「ブルノという男が現れてから日本の裏社会の勢力図が大きく変わろうとしていますね。」徐はしみじみ呟いた。「三武会の地盤がこれで一層強くなる。山内には表向き出来るだけ協力体制で対応するように。そこに段を送り込めれば面白

い事になりそうだ。」

それぞれの欲望が交差していた。

- 大阪 郊外 -

バーガーショップに一組のカップルが痴話喧嘩をしていた。

「絶対浮気！」店内にその声は響き渡った。周囲の客たちはクスクスと笑っている。幸平は平静を装いながら歩に落ち着くよう施した。「じゃあ何で電話に出ないのよ！」「今日出たやん。」「しまったと幸平が気付いた時にはもう遅かった。彼女の声のトーンはさらに強いものとなった。」

「お客様、申し訳ございませんが他のお客様に迷惑がかかりますのでお静かにお願いします。」バイトの少女が注意に来る。「すみません、よく言って聞かしますので。」「あなたは彼氏が浮気してたら今の台詞を言えんの？」どうやらバイトの少女に予先を変えたようだ。少女は目が点になっていた。「あのなあ、浮気してるのを前提で話すの止めてくれるか？」「じゃあこの数週間の出来事を本音で白状しなさい。」

まいった。中国人マフィアや日系ブラジル人の話しをしたところで現実味がない。この状況で信用されるはずもないし、彼女を巻き込みたくない。

「近いうちに紹介するが勇という親友が居る。彼は留学生でミナミ

の外国人仲間から紹介してもらった。頭がいい奴でこいつと一緒に仕事をしたいなと思ってる。その相談で時間を費やした。「全く信用していない表情で歩はこちらを睨んでいた。

「何で電話に出なかつたんよ?」「家にあまり居なかつたんや。」
「嘘つき!」「大きい声を出すな。」「証拠を見せてよ。」「約束する。そいつをお前に会わせるから。」「歩が泣き出した。「何で浮気したんよ・・・何が不満なんよ・・・。」「・・・お前・・・人の話し聞いてへんやろ・・・。」「

- ガブリエル邸 -

カルロスの容態が悪化していた。闇医者も必死で対応するが道具が足りなさ過ぎた。出血してから時間も経ち過ぎていた。俺は必死でカルロスの手を握っていた。横に麗子も居る。ガブリエル達も緊張した表情になっている。

「やはり病院に移す事は出来ないか?俺ではどうにもならない。」「医者が訴えるがそれが出来ないからお前を呼んだという事をガブリエルが言った。

「あんたが麗子か・・・いい女だな。ジョアキン・・・大事にしてやれ。」「もう死ぬような事言ってるんじゃないぞ。」「ガブリエル・・・ジョアキンを頼む。頭はいいがまだまだ青臭い奴だからな。お前が必要だ。」「それはお前が生きている事が条件だ。諦めるな。」「カルロスの顔が明らかに青白くなっていた。麗子はずつと泣きながらカルロスを見守っている。」「何で・・・こんな事に

なってるの？何をしたの？勇……」「後でゆつくりと説明する。
なあ！何とかしてくれよ！」俺は医者に懇願したが医者は俯いたま
ま首を横に振った。

「いいんだ、ジオアキン。」カルロスの手が微妙に俺の手を握り返
してきた。「俺は……良かったと思うよ。好きに生きてきて外国
でこんないい友達が出来て。俺らしい最後だ。悲しむな。満足しな
がら、眠るようにしてあの世に逝けるんだ。こんな幸せな事はない
だろう……」「もう喋るな……頼む……頼む……」「カ
ルロス握る手が強くなった。「ブルノとレイモンドが呼んでる……
早くこっちに来てよ……俺も早く会いてえよ……待
つてるよ……」「おい！行くな！カルロス！！」「……あり……
……がとう……」「カルロスの俺の手を握り返す力が次第に弱く
なっていた。

麗子の泣き声が響いた。

結果、カルロスは死んだ。人の死なんてあつけないものだ。両親に
愛されて生まれてくる子供達は世界にどれだけ居るのだろう。愛は
全ての人間に平等だなどとはざく偽善者が居る。生きたくても生き
れなかった胎児や未熟児。理不尽に殺された人、事故、追い詰めら
れたの自殺。数え上げればキリがない。この国に来てから数多くの
友人が出来たし、多くの人間を失った。だからと言って母国に帰ろ
うとは思わない。指名手配の身であるし、麗子も居る。友人が居る。

そして、この世から消さなければいけない人間が居る。

真田は数年前のマフィア抗争がまだ終わっていない事を知った事を今回の事件で認識した。目の前に居るガイシャは上海「九龍界」の人間2人。ここ数年で福建省や四川省のチンピラが増えた。ベトナム、フィリピン、数え切れないほどのゴロツキがこの国に増えた。年々、治安が悪化しているのを肌で感じていた。

「犯人は敵対するマフィアが有力でしょうね。」新人の刑事が自信満々で真田に話してくる。親のコネで入ってきた新人刑事である。

「1つ言っておく。憶測を口にするな。被害者の身元を徹底的に洗え。本当に九龍界の人間なのか？北京系の奴らとの関係、歌舞伎町に台頭してきている新勢力の組織。全て洗え。」不満そうな表情で渋々ルーキーは返事して消えた。

年々、大嫌いな男と連絡を取るのが増えた。府警の山岸である。一連のマフィア抗争解決にはこの男の協力無しでは有り得ない。煙草に火を点けた。

「現場で煙草はお控えください。」鑑識の人間に注意されて初めて気付いた。

現場から数キロ離れた、とある食堂にシックなスーツを羽織った男女が居る。「幹 許方と明 兆貴。上海の幹部二人がフェードアウトと。」容姿端麗の女はノートに書かれた複数の名前から2人、ポールペンで消した。

「後何人だ？」 「7人。内、5人はすぐにでも準備は出来てるわ。」

女の持つノートが閉じられた。表紙にはピンク色で大きく横文字が綴られていた。

「macacco never die」

最終章 激突（後書き）

これでマカツコは終了です。今のところ続編を考えていますが、マカツコに関しては少し期間を空けたいと思っています。読んで頂いた方全てに感謝します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5024d/>

マカッコ

2010年10月9日22時08分発行